SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2001. 6. 22. No. 81
JOURNAL

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡８＜拡大版＞ 猿投山西南麓古窯址群― 愛知県 ― ……唐沢繕孝……1
佐久の横穴式石室－その理解に向けて－……冨沢一明……3
佐久の洞窟・岩陰遺跡……藤森英二……9

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡８〈拡大版〉

猿投山西南麓古窯址群

―愛知県―

唐沢繕孝

愛知県のほぼ中央、尾張と三河の境に、標高629ｍの猿投山がある。ここに産する風化花崗岩は良質な陶土を提供し得る。この猿投山の西南方に拡がる低丘陵地に、古墳時代から中世のはじめにかけて、1000基以上の築窯をみたのが一般に猿投古窯・猿投窯と呼ばれる古窯址群である。その範囲は、西は名古屋市東部の東山地区から東は西加茂郡三好町・豊田市、北は瀬戸市・尾張旭市から南は大府市・刈谷市にまたがり、20㌔四方の広大な地域に及んでいる。

かつては、俗称藤四郎窯とよばれる山茶碗や、小皿などの日用雑器類を焼成していた山茶碗窯の分布する地域として知られているだけだったが、昭和29年頃に地元の本多静雄氏や加藤唐九郎氏らが、この他に須恵器系の瓷器窯が存在することに注目し、愛知県・名古屋市・東京大学などの共同調査研究が始まった。これにより須恵器系の窯370基、須恵器窯から自生的に転化した山茶碗の窯800基が確認されるにいたり、猿投古窯は日本古代における窯業生産の中心的役割をはたした古窯であることがわかったのである。

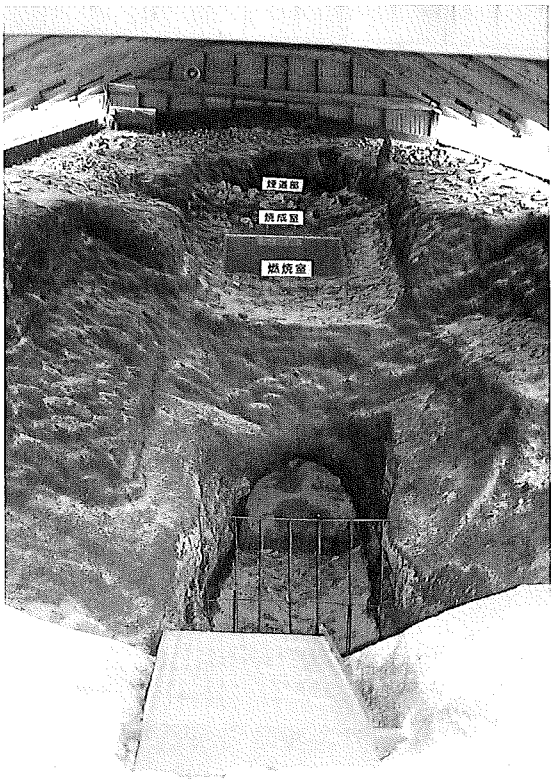
その歴史は、古墳時代の須恵器生産からはじまるものであるが、奈良時代末期に植物の灰を水に溶かして用いる灰釉陶器の生産が開始されてからは、その特徴が明確になる。現在知りえる、最も古い灰釉陶器を焼成した古窯址は、猿投古窯のうち、愛知郡東郷町春木の鳴海32号窯を標識とするものである。この窯式に属する猿投古窯の長頸瓶が平城宮跡の大膳職跡から、天平宝字（757～764）年代の木簡をともなって出土していることから、760年頃には既に灰釉陶器の生産が始まっていたことが分かる。またこの時期は製品の器種の組み合わせにおいても大きく変化を遂げた時期である。すなわち、それ以前にはみられなかった、水瓶・浄瓶などの金属器を模したと考えられる新しい器形が出現するほか、平瓶の上面に扁平な把手をつけるようになる。さらには、この窯期の終わりごろには灰釉椀が出現するほか、成形の上で新しい轆轤技法を採用するなど、前代に比べてかなり大きな転換が認められる。このような特徴や、灰白色のあたたかみのある緻密な土色、とぎすまされた轆轤のシャープなひきなどで、一見して他地域の製品と区別できる特徴を持つ製品が生まれていった。猿投古窯が古代の日本の中心的窯業地として発展するのは、この時期からのことであり、猿投古窯の灰釉陶器は「瓷器」として、中央の官衙・寺院などの上層階級に広く愛好されて、その生産を拡大する。

10世紀に入ると、甕やごく一部の雑器を除いて須恵器は消滅し、灰釉陶器の定着をみるにいたるが、この

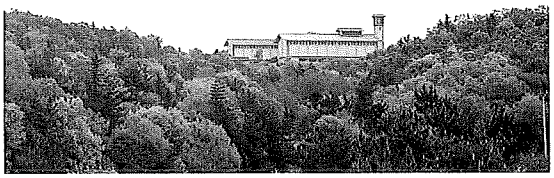
猿投古窯黒笹36号窯出土　灰釉多口瓶（８世紀末）

時期の猿投古窯は、すぐれた中国陶器の影響のもとに、平安時代における日本最高のやきものを作り出すのである。10世紀以降、律令体制の解体に伴って、公民層の階層分化がいちじるしくなり、田堵、名主といった新しい富農層が各地の農村に形成されてくるが、猿投古窯の灰釉陶器生産は、こうした新興階層の需要に応じて飛躍的に発展する。さらに9世紀以降の東国の開発や10世紀以降の荘園経済の発展にともなう交通の発達が、その販路をいちじるしく拡げ、供給範囲は畿内ばかりでなく、東山道を通じて東北南部にまで拡がっており、猿投古窯産の灰釉陶器に対する需要の大きかったことを思わせる。また、この時期には「尾張青瓷」として記録に残る、緑釉陶器の生産も始まる。緑釉陶器は、奈良時代初期に畿内を中心とする地域で愛用された、いわゆる奈良三彩の一つだが、これは割合短期間で終わり、猿投古窯の緑釉陶器は、この技術を継承しつつ、中国の青磁の模倣としてはじまる。前代の奈良三彩と同様、その多くは祭祀的な用途に供せられ、出土も祭祀遺跡や寺院祉に限られている。

やがて、これらの新しい陶器に対する欲求は、各階層に深く浸透し、猿投古窯の生産はこれらの需要に応じきれないものとなってくる。そのため、11世紀に入ると、灰釉陶器の生産可能な周辺地域に技術の伝播が行われ、各地での生産が開始される。それは伊勢北部の岡山古窯址群、遠江の浜北古窯址群にみられるが、



猿投古窯黒笹７号窯



愛知県陶磁資料館

灰釉陶器の生産地として特に重要な位置をしめてくる、多治見・土岐・恵那・中津川の東濃地域も含まれる。

10世紀後半から11世紀にかけて、猿投古窯は広範な需要に応じて量産化を進めつつあったが、それにともなって、轆轤の技術の低下をさけることは出来ず、胎土の粗悪化もまた当然の方向であった。やがて、12世紀になると、より一層の量産化を目的として焼成室の容積をいちじるしく増大した、いわゆる山茶碗窯（瓷器系陶器窯）へと転化していく。この山茶碗窯における製品は、椀・皿・すり鉢をセットとする日常の雑器であるが、器種の単一化によって、量産の点では前代のそれをはるかに凌駕するものであった。

猿投古窯では、平安時代末から鎌倉時代末までの百数十年間に800基に近い多数の山茶碗窯が築造されており、いかにこの種の陶器の需要が多いものであったかがわかる。この山茶碗窯への転化は、猿投古窯のみではなく尾北窯や渥美窯・さらには東濃・遠江などに拡散した灰釉陶器窯にもあいついで起こった。しかし、猿投古窯は山茶碗窯へ転化する中においても、前代までの技術の中心地としての伝統を消すことなく、中世窯への積極的な移行へ、先進的な役割をはたすのである。

古墳時代後期から鎌倉時代末期まで900年にわたって、各地の窯業生産に大きな影響を与え隆盛を誇った猿投古窯も、良質の陶土を豊富にもった瀬戸窯の施釉陶器の発展と、耐火度の低い大甕の量産に適した常滑窯の生産の拡大、とくに海上交通を利して東北から中国地方までの広大な販路を掌握した発展のまえに、その長い歴史を閉じたのである。

今回、愛知県陶磁資料館（愛知県瀬戸市南山口町234・Tel 0561－84－7474）様より、同館所蔵の重要文化財「灰釉多口瓶」のポストカードを佐久考古学会に提供していただきました。さらに、同館学芸員の神埼様より、資料の提供・ご指導をいただきました。記して、御礼とさせていただきます。また、唐沢の隣家で陶芸活動をなされている、松田庄市様、豊田市郷土資料館学芸員森秦通様からも、ご指導をいただきました。ありがとうございました。

佐久の横穴式石室

―その理解に向けて―

冨沢一明

1．はじめに

現在、佐久平に現存する古墳は約519基（註1）と言われ、それらの内の約90％が立地や形態より古墳時代後～終末期に属する古墳であろうと考えられている。そしてこれら古墳はいずれもその内部に「横穴式石室」と呼ばれる埋葬施設を内包する。この「横穴式石室」は4世紀後半代に朝鮮半島よりまず北九州に伝播し、その後6世紀初頭には東国まで広がる。「竪穴式石室」と並ぶ古墳埋葬の最も代表的な一形態である。

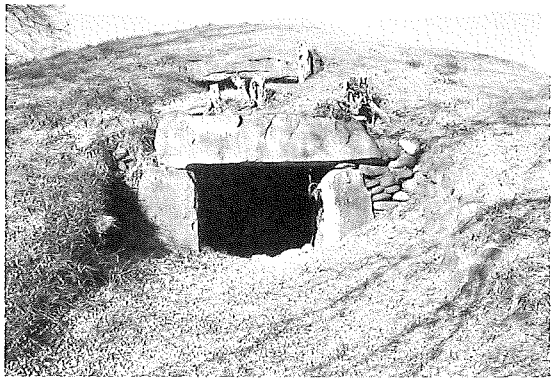
しかし、この「横穴式石室」は日本各地に伝播していく過程において、その伝播ルートや使用石材の制約等により各々の地域で変化し様々な形態が存在することが現在確認されている。最も代表的な例は畿内地方に分布し全国の横穴式石室の成立に影響を及ぼした「畿内型石室」や、和歌山県紀ノ川流域にのみ分布する「岩橋型石室」。特殊な例としては東海地方に例が見られる「木芯粘土室」といった木と粘土で造られた横穴式の墓室などの例がある。では、佐久平の横穴式石室にはどんな特徴があり、それからどんな事か解るのであろうか。今日までの調査事例をもとにその理解にむけ考察してみたい。また、その特徴をより鮮明なものとするために今回は上小エリアを含めた東信地域全体でその事を考えてみたい。なお、本一文は昨年に発表した小稿「信濃　千曲川流域の横穴式石室―東信地域を中心として―」を基に一部修正・加筆したものである。

2．形態分類

分類基準	平面形	玄門部	側壁積み方	奥壁積み方
項目・記号	両袖 A	立柱石有り i	小口積み 1	一石・二石 ア
	片袖 B	立柱石無し ii	腰石積み 2	多段 イ
	無袖 C			

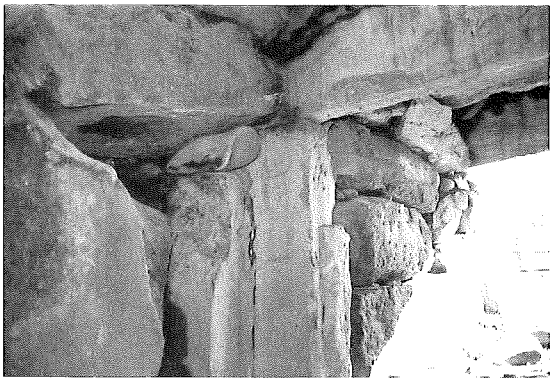
分類は上記の表の項目で行った。扱った資料は地域内において調査され、実測図が公表されている石室を基本的に取り上げた。総数は56基である。その結果は第1表に示した通りである。

ここで、分類の結果について各形態ごとの特徴・地域と各形態の関係・玄室規模と各形態の関係の3点について考えてみたい。まず各形態ごとの特徴として全

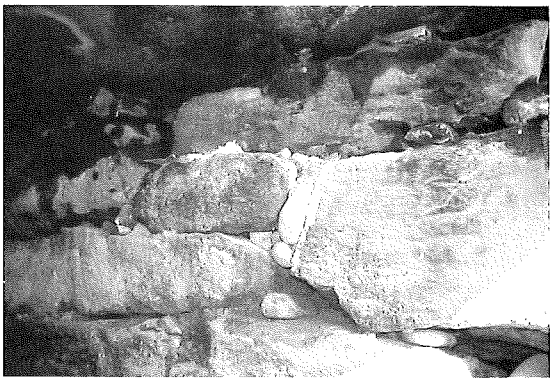


三河田大塚古墳正面

『佐久平最大規模を誇る横穴式石室をもつ三河田大塚古墳はその位置づけに苦慮する古墳のひとつである。現在までにも6世紀後半～7世紀第Ⅳ四半期までその構築時期については意見が分かれている。当古墳の特徴を挙げると、まず石室が巨石を使用している事。石室壁面に漆喰を施す。玄門部に立柱石と鴨居石を設ける。石室前には整った前庭部をもつ等である。これらの点から当古墳の築造は7世紀中葉以降と考えられるが、出土遺物は不明であり確証を得ない。今後は史跡整備の意味も含め当古墳の学術調査が望まれる。当地域における三河田古墳の存在意義は非常に大きい。』



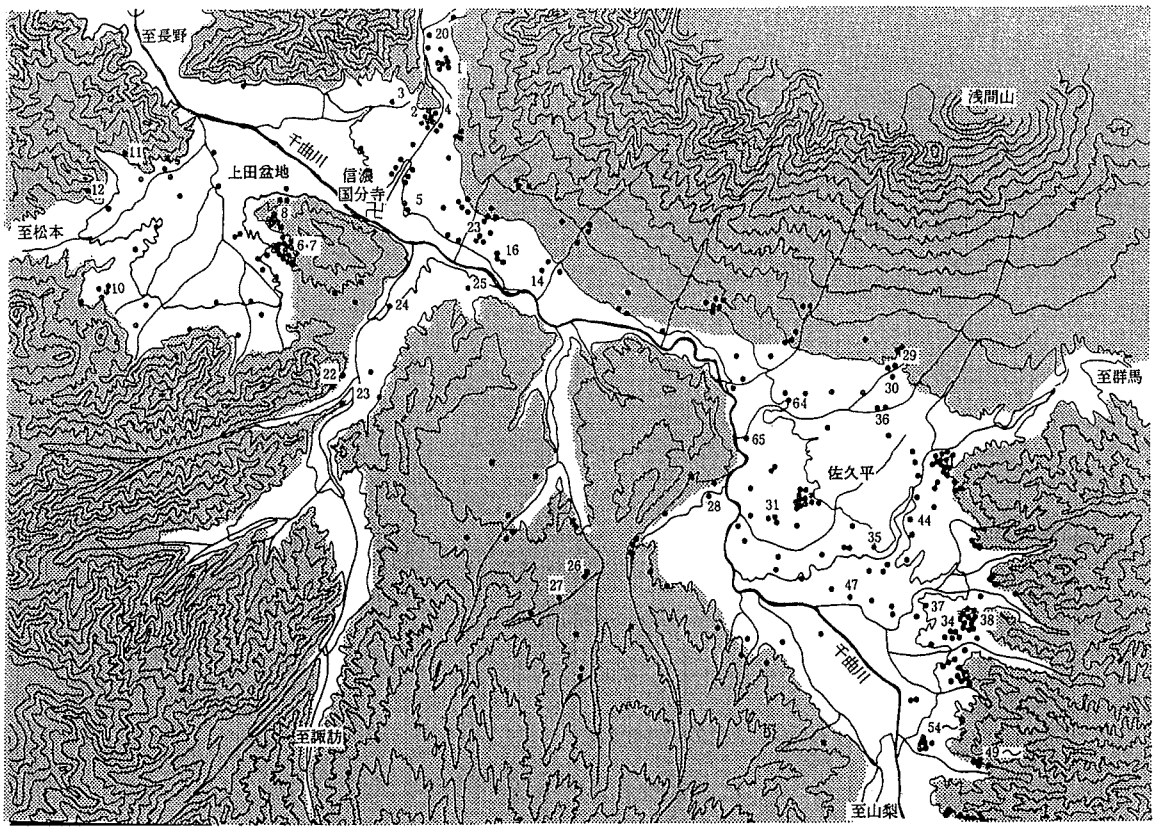
三河田古墳石室玄門部



三河田古墳石室内漆喰部分（白く見える所）

体の内、両袖タイプの石室は39基で全体の約70％を占める。また、玄門部に立柱石を立て、側壁の基底部に腰石的な積み方をする形態がその内全体の半数以上にも及ぶことが解る。また片袖タイプの石室は非常に少なく、分類できた石室の蛇塚古墳１号墳と他の要素が不明で表より漏れた五庵古墳・蛇塚２・３号墳も含めてもわずか４基にしかならない。無袖タイプの石室は16基存在するが、両袖タイプと異なり側壁積み方などの要素は一形態に偏らず全体に散らばる。だだ、各形態ごとに特徴がある。まず両袖タイプには奥壁積み方が多段積みする物が非常に少ないと言うことである。例としは僅かに東部町塚穴古墳と丸子町高塚古墳の２例のみである。次に無袖タイプの石室については玄門部の立柱石を敷設する物が僅かに１例のみと言うことである。ただ、唯一の類例である臼田町東御陵古墳は非常に小規模な古墳であり、且つまた近接する中御陵古墳・西御陵古墳・新海神社新発見古墳などはいずれも立柱石を持たない同タイプの古墳であることから再考の余地があるのかもしれない。とすると、当地域の無袖タイプの横穴式石室も他の地域と同様に玄門部に立柱石を持たない事となる。次に古墳分布と各形態の関係では、従来より両袖タイプの横穴式石室は佐久平に多いと言う指摘がなされたことがある。今回の集成においては上小地域15基（両袖タイプ　全体の38％）、佐久地域24基（同62％）の石室を数えた。一見すると確かに佐久地方の方が多いように見られる。しかし、当初の石室数56基の内、上小地域25基（全体の38％）であり、分類当初の石室数割合とほぼ一致する。よって両袖タイプの石室が佐久地域に多いということは一概にいえそうもない。ただ、次の項で述べるが玄室規模との兼ね合いも含めるとある程度両地域の特徴があるようである。無袖タイプの石室については７基が佐久地域、９基が上小地域とほぼ半数づつで地域的な偏りはなさそうである。しかし、佐久地域においては先にも述べたが臼田町の３例を除くと、無袖タイプの分布が地域の西側に偏る傾向にある。

最後に玄室規模と各形態については、基本的に両袖タイプの石室は小型のものが多く、無袖・片袖の石室については大型の玄室が多いという特徴がある。詳しく見てみると玄室長４ｍ・奥壁幅2.5ｍ以下の石室40基中31基（全体の77％）までが両袖タイプであり、尚かつ立柱石を持つ両袖タイプがその内30基を占める。これとは反対にそれ以上の玄室規模を持つ石室は16基あるが、両袖タイプ７基、無袖タイプ９基とそれぞれほぼ同数を示す。ただ、両袖タイプの石室の内立柱石を持つ石室は２基に止まる。このことは先に挙げた小規模石室の結果と同一傾向をとることを示し、当地域の横穴式石室で両袖タイプ立柱石を持つ形態の石室は小



東信地域古墳分布図

第Ⅰ表　横穴式石室形態分類表

番号	古墳名	石室タイプ				石室規模（m）			時期基準出土遺物	築造時期（　）内は記載文献
		平面形	玄門部	側壁	奥壁	玄室長	奥壁幅	玄室面積		
43	大星尻古墳	A	i	1	ア	2.2	1.2	2.64	須恵器	8Ｃ（報告書）
18	東部塚穴古墳	A	i	1	イ	4	2.9	11.60	唐尺	7Ｃ中葉（東部町史）
40	長峰第6号墳	A	i	2	ア	2.21	1.21	2.67	出土遺物	7Ｃ～8Ｃ前半（報告書）
2	塚田古墳	A	i	2	ア	2.13	1.36	2.90		
42	長峰第8号墳	A	i	2	ア	2.38	1.34	3.19		8Ｃ前半（佐久市志）
33	下大豆第2号墳	A	i	2	ア	2.3	1.4	3.22	高麗尺	7Ｃ中葉（報告書）
39	長峰第5号墳	A	i	2	ア	2.34	1.42	3.32		8Ｃ前半（佐久市志）
8	舟窪1号墳	A	i	2	ア	2.45	1.4	3.43	形態	7Ｃ中葉（上田小県誌）
9	舟窪2号墳	A	i	2	ア	2.2	1.6	3.52	形態	7Ｃ中葉（上田小県誌）
38	長峰第1号墳	A	i	2	ア	2.6	1.37	3.56	奥壁形態	7Ｃ後半（報告書）8Ｃ前半（佐久市志）
19	狐山	A	i	2	ア	2.5	1.5	3.75	宋尺	7Ｃ中葉（東部町史）
36	下前田原第2号墳	A	i	2	ア	3.05	1.28	3.90		
56	幸神第4号墳	A	i	2	ア	2.48	1.6	3.97		6～7Ｃ代（報告書）
14	伊勢原2号墳	A	i	2	ア	2.8	1.45	4.06	埴輪	7Ｃ前半（報告書）
60	外九間第2号墳	A	i	2	ア	2.2	1.9	4.18		
30	下原古墳	A	i	2	ア	2.5	1.7	4.25		
59	外九間第1号墳	A	i	2	ア	2.2	2	4.40		
48	五霊西第12号墳	A	i	2	ア	2.4	1.86	4.46	出土遺物・火葬骨	8Ｃ代（報告書）
55	幸神第2号墳	A	i	2	ア	2.64	1.7	4.49		7Ｃ代（報告書）
58	幸神第6号墳	A	i	2	ア	2.55	2.1	5.36		7Ｃ代（報告書）
41	長峰第7号墳	A	i	2	ア	2.84	1.94	5.51	構造型式	7Ｃ以降（報告書）
5	吉田原	A	i	2	ア	3.45	1.6	5.52		
35	東一本柳古墳	A	i	2	ア	3.3	1.8	5.94	馬具	7Ｃ中葉
54	幸神第1号墳	A	i	2	ア	3.05	1.95	5.95		6～7Ｃ代（報告書）
26	大塚第3号墳	A	i	2	ア	3.8	1.6	6.08	須恵器	7Ｃ第Ⅲ（報告書）
4	新屋第1号墳	A	i	2	ア	3.33	1.98	6.59		
29	めがね塚第1号墳	A	i	2	ア	3.43	2.1	7.20	須恵器	7Ｃ第Ⅲ（報告書）
20	広山寺	A	i	2	ア	3.3	2.25	7.43		
37	寄山古墳	A	i	2	ア	3.2	2.5	8.00	須恵器	7Ｃ第Ⅲ（報告書）
62	中原第1号墳	A	i	2	ア	3.45	2.35	8.11		
12	浦野塚	A	i	2	ア	3.65	2.46	8.98		
11	神宮寺	A	i	2	ア	4.4	2.2	9.68		7Ｃ後半（皇子塚報告書）
47	三河田大塚	A	i	2	ア	6	2.6	15.60	石室形態・漆喰・石加工	6Ｃ後半（佐久市志）7Ｃ第Ⅳ（岡林）
3	陣馬塚	A	ii	1	ア	3.8	1.6	6.08	出土遺物	6Ｃ末（報告書）
17	八幡社前	A	ii	1	ア	5.75	1.7	9.78	埴輪・宋尺	6Ｃ後半（東部町史）
65	耳取大塚	A	ii	1	ア	4.5	2.7	12.15		7Ｃ代（県史）
22	高塚古墳	A	ii	1	イ	4.8	2.8	13.44	石室形態	6Ｃ後半～7Ｃ前半（上田小県誌）
57	幸神第5号墳	A	ii	2	ア	1.2	1.35	1.62		
1	赤坂将軍塚	A	ii	2	ア	5	1.9	9.50		
44	蛇塚1号墳	B	ii	1	イ	1.6	2.8	4.48	出土遺物	6Ｃ末（報告書）
50	東御陵古墳	C	i	2	ア	2.3	1.1	2.53	鉄鏃	6Ｃ後半～7Ｃ前半（報告書）
23	長者穴古墳	C	ii	1	ア	3.4	1.3	4.42	石室形態	7Ｃ前半（上田小県誌）
15	蛇川原古墳	C	ii	1	ア	3.06	1.57	4.80	石室形態	7Ｃ中葉（東部町史）
64	加増第1号墳	C	ii	1	ア	3.1	1.95	6.05		
25	藤森塚	C	ii	1	ア	5.2	1.2	6.24	石室形態	6Ｃ後半（上田小県誌）
28	土合第1号墳	C	ii	1		5	1.6	8.00		6Ｃ後半～7Ｃ初(土屋)7Ｃ中葉～第Ⅲ(県報告書)
24	穴倉古墳	C	ii	1	ア	6.4	1.3	8.32	石室形態	6Ｃ末（上田小県誌）
10	皇子塚	C	ii	1	イ	4	2.02	8.08		7Ｃ後半（報告書）6Ｃ後半（岡林）
13	青木塚穴古墳	C	ii	1	イ	5.2	2.3	11.96		6Ｃ末（報告書）7Ｃ初（岡林）
6	塚穴原1号墳	C	ii	1	イ	7.2	2	14.40	須恵器	6Ｃ末～7Ｃ初（上田小県誌）
51	新海神社新発見	C	ii	2	ア	2.4	1.35	3.24	鉄鏃	6Ｃ後半～7Ｃ前半（報告書）
49	中御陵古墳	C	ii	2	ア	2.3	1.5	3.45	鉄鏃	6Ｃ後半～7Ｃ前半（報告書）
52	西御陵古墳	C	ii	2	ア	2.6	1.55	4.03	鉄鏃	6Ｃ後半～7Ｃ前半（報告書）
16	二子塚	C	ii	2	イ	4.15	1.7	7.06	埴輪	6Ｃ後半～7Ｃ初（報告書）
27	山の神第3号墳	C	ii	2	イ	4.42	2	8.84	須恵器	6Ｃ後半（報告書）
7	他田塚	C	ii	2	イ	6.3	1.65	10.40	須恵器	7Ｃ前半（報告書）6Ｃ後半（岡林）

規模な古墳に採用されているという結論が導き出せる。以上、石室について形態分類を行ったが当地域の特徴を整理すると、

①東信地域では両袖タイプで立柱石を敷設する横穴式石室が多い。

②両袖・無袖それぞれの形態の石室は地域内においては偏在しない。

③小規模な石室には両袖タイプで立柱石を敷設する石室が多く、無袖タイプの石室は地域内において大型の石室が多い。

これらの点が上げられると思う。次にこれらタイプが東信地域における横穴式石室の導入と展開にどのように関わっているのかを考えてみたい。

2．編　年

ここでは前項で示した横穴式石室の形態分類がどのように時間的な変遷と関係があるのかを考察したい。現在までに当地域において横穴式石室の変遷を示した論攷は数少ない。その中で土屋氏においては後期古墳を「佐久平中央部の単独墳が古く、山よりの斜面に造られた群集古墳は新しい」と言う変遷観が示されている。また宇賀神氏は群馬県側の横穴式石室の変遷要素を基本にし「佐久地域の横穴式石室は望月山の神3号墳を導入期とし、臼田町の五霊西古墳等を終末期の古墳」として位置づけた。また、古墳出土の遺物につい

ては各報告書によって概ねその時期が示され、その遺物をもって古墳築造の時期としている報文もある。よって今回は先学の成果を援用し、尚かつ古墳出土遺物によって時期の補足をしながら各石室の築造時期について考えてみたい。ただ、ここで述べるまでもなく横穴式石室はその構築段階より追葬を目的としている。よって我々が現段階で目にするのはその古墳が使用された最後の段階であって構築当時を必ずしも示してはいない。表にも記載したように何をもって古墳構築時期とするかにより、築造時期の評価も分かれている古墳が多く見られる。特に副葬品に関しては数次にもわたる追葬のため、第一次の埋葬に伴う副葬品だけを抽出することは非常に困難であることは誰もが認めるところである。

しかし、第1表に示したように、出土遺物からみた構築時期と、先に分類した石室形態には大まかな傾向があることが解る。先ず立柱石を立てる両袖タイプの石室は7世紀中葉から8世紀代までの築造が多く、尚かつ大型の石室は7世紀中葉を中心とした時期に築造が集中し、小型の石室は主に7世紀末から8世紀前半の築造が推定されている。次にこれとは対照的に両袖タイプでも立柱石を持たず側壁も小口積みをする形態の石室は6世紀後半～7世紀初頭を主体とする築造で地域内においては古相の石室であることが解る。片袖タイプの石室は数が少なく不確実な部分も多いが6世紀末から7世紀初頭の築造で地域内においては比較的古い導入期の石室であると推定できる。無袖タイプの石室については側壁の積み方に関わらず6世紀後半から7世紀前半の時期を示し、地域内の横穴式石室導入から展開までの時期を担っていた様子が伺える。

よって出土遺物の面からみた横穴式石室の構築時期と先に示し分類した地域内石室形態の関係から導き出された結論は、「東信地域内における横穴式石室の導入は6世紀後半に無袖タイプの石室が導入され、以後6世紀末～7世紀代に入り両袖タイプの石室も加わる。しかし7世紀中葉を境に石室形態は両袖で立柱石を持ち側壁も下段に腰石的積み方を行う形態の横穴式石室にほぼ統一される。以後は8世紀代に入るまでこの形態の石室が規模を小さくしながら群集し造られていく」というシナリオが描けるのではないだろうか。構築時期と石室形態の関係を変遷図にまとめてみたので参照されたい。

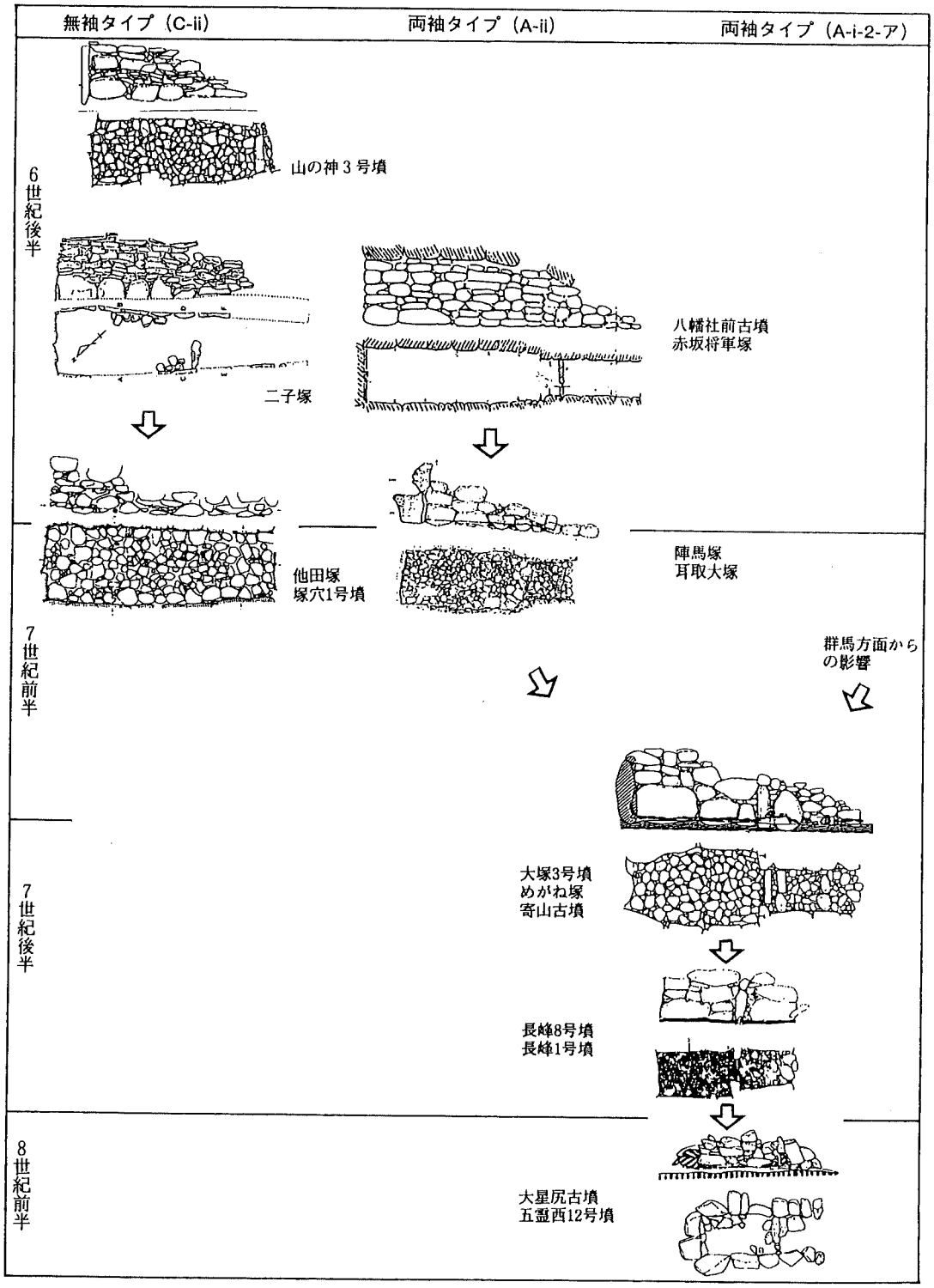
3．横穴式石室導入と展開の意義

では先に示した石室変遷が地域内において如何なる理由により起こり得たのか推論し、本稿のまとめと今後の課題としたい。

無袖タイプの石室が導入期の石室となるのは県内において北信も同様であり、また隣接群馬県においても時期は異なるが小規模古墳に無袖型石室が導入期の石室として受け入れられている。当地域も首長墓と位置づけられる二子塚古墳の主体部が不明なため首長墳の動向は解らないが、小型の古墳に関しては近隣地域と導入形態は同一歩調を採るようである。では、当地域にもたらされた無袖型石室の系譜は何処に求めるべきであろうか。東信地域は6世紀後半代の土器要素が北信地域との結びつきが強い。また、岡林氏も指摘しているが腰石的側壁の積み方を持つ無袖型石室は北信地域と非常に類似性があることから善光寺平方面からの伝播が有力と考えられる。そして、北信地域の無袖型石室は東海地方に系譜をもつとされている。ただ、先に示した腰石的側壁の無袖型石室の代表的な例である東部町の二子塚古墳や6世紀後半代の佐久平の古墳である北西の久保17号墳などには群馬方面の影響下に成立したと考えられる埴輪が樹立されており、古墳全体の築造要素として事は単純でなさそうである。

次に7世紀代に入り両袖型石室が導入される。いずれの古墳も地域的には規模の大きな単独墳であり、その時期の首長墳的色彩が強い。これら古墳の出土遺物の中に当地域では数少ない装飾太刀や金銅製馬具が少なからずあることがそれを裏付けていると思われる。これら石室はいわゆる畿内型石室と呼ばれるものに系譜を求められるように思う。ただ畿内型石室の定義が幾つかあるがそれらをすべて満たしている石室は無く、純粋な畿内型であるとは言い切れない。よっていずれかの地域に伝播した畿内型石室が地域的変容を受けた後、二次伝播と言う形で当地域に導入された可能性はある。7世紀中葉以降から始まるであろう律令的な地方支配に先立ち、畿内的影響が古墳に現れるのは非常に示唆的な事である。特にこの時期以降、東信地域では馬具の副葬が顕著となる。時代は異なるが古代律令期の勅使牧が5カ所も設置され、尚かつ信濃最大と言われた「望月の牧」も地域内に存在する事などを考えると、この時期から当地域の牧開発が本格的に始まった可能性があり、その開発は畿内型石室を二次伝播させた地域の人々が担ったとも考えられる。

最後に7世紀後半以降の様相については立柱石を持つ両袖型石室にほぼ統一される。この石室タイプの系譜を考えるには立柱石について理解をしなければならないと思う。この玄門部の形態は北部九州に広がった石室に含まれる要素であり、本来畿内型石室には敷設されないのが一般的である。東海地方においては遠江の半田山古墳群の例が6世紀後半、西三河においても豊田市高根3号墳・岡崎市天神山3・6号墳などの例で6世紀後半が初源と言われ、横穴式石室発展形態の一要素とし取り入れられ、形態変化をしながらも終末期まで継続する施設である。しかし、関東地方の群馬・



東信地域の横穴式石室変遷図（Ｉ：200）

栃木・埼玉においては、立柱石を敷設する石室がいずれも7世紀中葉以降になってからの事であり、東海以西とは石室の発展経緯が異なっている。これは5世紀後半に九州型の横穴式石室が伝播した地域としなかった地域の相違によるものであろうか。では、本題に戻り当地域の立柱石を敷設した石室の系譜についてであるが、従来からの見解は群馬県側からの影響と理解されている。群馬県においては7世紀中葉以降に構築される「裁石切組積石室」の構築より立柱石が本格的に導入されたと考えられており、とすると本地域の石室はこれら群馬県側の諸例に後続する事となろう。ただ、群馬県内も藤岡市周辺では模様積石室で有名な伊勢塚古墳や切石積の皇子塚古墳などに立柱石が設置され、時期はいずれも6世紀後半代の位置づけがなされている。このことから或いは玄門部の要素である立柱石も一元的に理解しては事実を誤認するおそれがり、当地方の立柱石をもつ両袖型石室の出現も一様に7世紀後半以降とするには疑問の残るところである。特に、変遷図でも示したように当地域内では7世紀前半代の様相がいまひとつ把握しきれない。この事は「時期決定」の曖昧さか、或いは群馬県側で指摘されているように、「7世紀第Ⅱ四半期の一時的な古墳築造停止」(註2)が当地域でも当てはまるのか今後の課題である。ただ、当地方の7世紀後半以降の横穴式石室が群馬県側からの影響を強く受けて成立・発展していくことは、当地域の土器要素に7世紀後半代のいわゆる関東の「有段口縁杯」や8世紀代に下るが群馬側の窯資料と考えられているリング状の摘みを持つ須恵器蓋などが少なからず流入してくることからも裏付けられよう。

以上みてきたように、「東信地域の横穴式石室は北信地域の影響のもとに成立した無袖型石室が導入期の石室と捉えられ、次に畿内型石室に類似した形態の石室導入により発展段階を迎える。そして、群馬方面からの影響で成立した立柱石をもつ両袖型石室は群集墳の小規模な古墳に取り入れられながら終末を迎える。」という大きく3つの画期が想定でき、それぞれに影響及ぼした地域が異なることが把握できた。今後はこれらの地域との関連が横穴式石室の形態だけではなく、古墳全体の構築要素、例えば外護列石・前庭部・埴輪・副葬品などの項目のなかでどのような関係にあるのか検討していく必要があろう。それらの結果によりいっそう当地域の横穴式石室変遷の背景が描き出せるのではないであろうか。

4．終わりに

佐久を中心に東信地域における横穴式石室の導入と展開について、形態分類と変遷観から導き出された結論をまとめてみたが、不理解・不勉強の為あまりにも雑泊なまとめとなってしまった。また結論らしきものも先学の研究成果の追認に終始した部分も多くある。ご教示・ご指導を賜りたい。ただ、今回の一文が地域内に普遍的に存在し、どちらかというと地味な存在である「横穴式石室」というものに、会員各位の興味が示され、文化財として保存への認識を改めて意識していただければ幸いである。

(註1) 南佐久郡誌(考古編)による集計結果より

(註2) 右島氏の「東国古墳時代の研究」の中での指摘

引用・参考文献

岡林孝作　1992「長野県北部における横穴式石室の編年と系譜」『史跡　森将軍塚古墳』更埴市教育委員会

白石太一郎　1988「伊那谷の横穴式石室(1)(2)」『信濃』第40巻第7・8号

土生田純之　1991『日本横穴式石室の系譜』学生社

右島和夫　1994『東国古墳時代の研究』学生社

土屋長久編著　1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』

宇賀神誠司　1997「佐久地方における横穴式石室の変遷」第9回佐久地方遺跡発掘調査報告会資料

花岡弘・西山克巳　1995「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点の概略として—」『東国土器研究』第4号

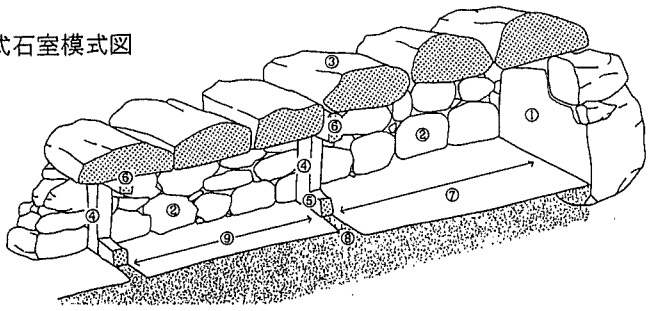
塩入秀敏　1995「第5編　古墳時代」『上田小県誌』第6巻歴史篇上(1)考古

羽毛田卓也　1995「第4章第2節3　後期と終末期の古墳」『佐久市志』歴史編(1)原始古代

拙　稿　2000「信濃千曲川流域における横穴式石室の導入と展開—東信地域を中心として—」『専修考古学』第8号

各報告書は紙面の関係上割愛させていただいた。ご容赦願いたい。

横穴式石室模式図



1. 奥壁
2. 側壁
3. 天井石
4. 袖石(立柱石)
5. 仕切石
6. 鴨居石
7. 玄室
8. 玄門部
9. 羨道部

「古墳辞典」より一部改変

1　二冊の報告書

昨年来、千曲川流域の岩陰・洞窟遺跡の調査報告書が、相次いで刊行された。『鳥羽山洞窟』と『湯倉洞窟』の2冊である。双方ともいわずと知れた遺跡であるが、共に1960～70年代になされた調査がもとになり、その後の地道な整理作業や研究によって刊行されたもので、学史的にも貴重な報告書といえる。

鳥羽山洞窟は、小県郡丸子町の依田川流域に位置する。調査では縄文時代後晩期の敷石住居址も確認され、その他縄文各期の土器片も散見されているが、報告書の中では「古墳時代葬所の素描と研究」とその副題にあるように、古墳時代の特殊な墓制に焦点が当てられている。いわば洞窟の使用状況に論の力点があり、当遺跡に埋葬された人々の素性にまで論が及んでいる。

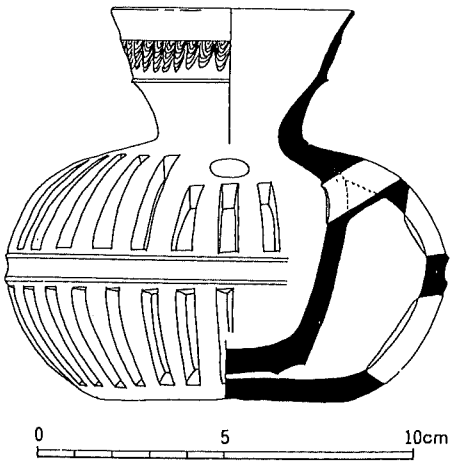
一方の湯倉洞窟は上高井郡高山村にあり、破風岳の火口跡に出来た洞窟である。報告書では縄文時代草創期にはじまり同早期、前期、中期、後期、晩期、弥生時代前期、中期、後期、古墳、奈良、平安、中世、近現代と各時代の遺物が掲載されているが、それを紹介するのみでなく、「山住み」というキーワードを軸に、各時期の生活誌を視点に入れた記述がなされている。

このように両著とも、単に遺物遺構を記載するのみではなく、「洞窟」という特殊な地形に残された遺跡を、立地や出土品などから、地域史の中でどう位置付け、それを歴史的に如何に解釈するかという課題に、積極的に挑戦している。

2　佐久地方の現状

では佐久地方では、どのくらいの数の岩陰・洞窟遺跡が調査がされ、どのような位置付けがされてきたのであろうか。

洞窟遺跡の研究史を振り返るとき、1967年の『日本の洞穴遺跡』が大変参考になる。1962年から3カ年で日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会により、日本各地の洞窟遺跡が調査され、その成果をまとめたものであるが、それまでの研究史等も掲載され、当時の洞窟遺跡調査の到達点を示している。まずはこの本を紐解いてみよう。



第1図　鳥羽山洞窟出土　二重壺。初期の須恵器であり朝鮮半島系の技術によるとされる。このような特殊な遺物が山中の洞窟に出土した不思議を思う。

このなかの全国「洞穴遺跡地名表」には長野県の遺跡として佐久地方の4つの洞窟・岩陰遺跡があがっている。

このうち、現佐久市香坂の天狗洞穴遺跡については土器や土偶、曲玉、刀子、人骨等が出土とされているが、これについては、この日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会の委員長を務めている八幡一郎が1934年の『北佐久郡の考古學的調査』のなかで「果たしてすべてが此處から出たか否かに就いては既に先人（筆者注：大野延太郎 1905）も疑って居る。―中略―全然否定し去ることも出来ぬが、発見されたのが余程以前のことであって今は其詳細を確かめること困難である。」とやや否定的な意見を述べている。ちなみに同じく八幡による1928年の『南佐久郡の考古學的調査』でも、洞窟・岩陰遺跡についての記述は特に見られないようである。

それはともかく、確実な例としては臼田町田口の芦内岩陰遺跡の調査が紹介されている。ここでは既に1952年に遺物が採取されていたようであるが、樋口昇一・藤沢平治らが本格的な調査を行った1964年ころは、長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の調査による草創期遺物への関心と、長崎県福井洞穴や新潟県小瀬ヶ沢洞穴遺跡の成果とが重なり、県内の洞窟・岩陰遺跡再検討の流れがあった時期である。ここでは草創期の遺物が確認されることはなかったが、過去の調査も含めて縄文前期、弥生後期の土器、そして土師器などの遺物が確認され、時代ごとの主生業などを考え合わせ「洞穴や岩陰遺跡の研究が縄文草創期の究明以外にも解決すべき点が多い」という見解を示している（樋口・藤沢 1965）。

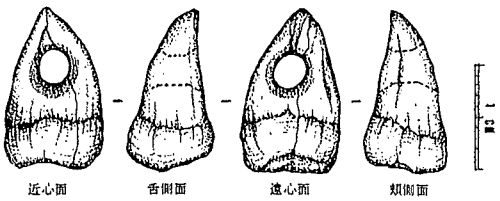
また同じく臼田町十二新田の大岩穴洞穴も掲載され

ており、その後の『臼田町詳細分布調査報告書』でも土師器の出土が記載されているが、調査の有無は確認出来なかった。

さらにちょうどこのころ調査の進んでいた北相木村栃原岩陰遺跡ももちろん紹介されている。1965年に信州大学が中心となり調査を始め、以後断続的に1978年まで発掘が行われた。この遺跡については正式な報告書は刊行されていないものの、多くの関連論文等が発表されており、約5.6mの遺物包含層の中から、縄文時代草創期末～早期を中心に数多くの土器、石器、骨角器、獣骨、そして12体に及ぶ人骨が確認されている。これらの遺物の多くは北相木村考古博物館に展示収蔵されている。

『日本の洞穴遺跡』から読みとれるものは以上であるが、当時長野県教育委員会の神村も1968年からの分布調査を回想し「相木川には洞穴が多い。栃原洞穴は信州大学が調査して素晴らしい成果をあげている。この洞穴は左右に長く未調査部分も多いので、より確実な層位での調査が期待された（筆者注：後述する天狗岩岩陰に相当)。最近発見されたという南相木村のいおり沢洞穴をみる。谷地水田を見下ろす南側にあって、片屋根がつけられ農作業の休み場となっていた。高校生が調査したというので、高校によって見させてもらうと、前・中期土器片と、決玦耳飾、骨や貝などあって、発掘調査をしてみたいなと思った。」と述べている（神村 2001)。

これ以降では1971年に佐久市月明沢遺跡の調査が行われ、小松・西沢が報告を行っている（西沢・小松 1978)。遺物の発見は1965年に遡るが、弥生前期の土器片と抜歯のされたものを含む多数の人骨が出土しており、再葬墓の可能性が指摘されている。また珍しい人歯牙加工品が出土している（第２図)。



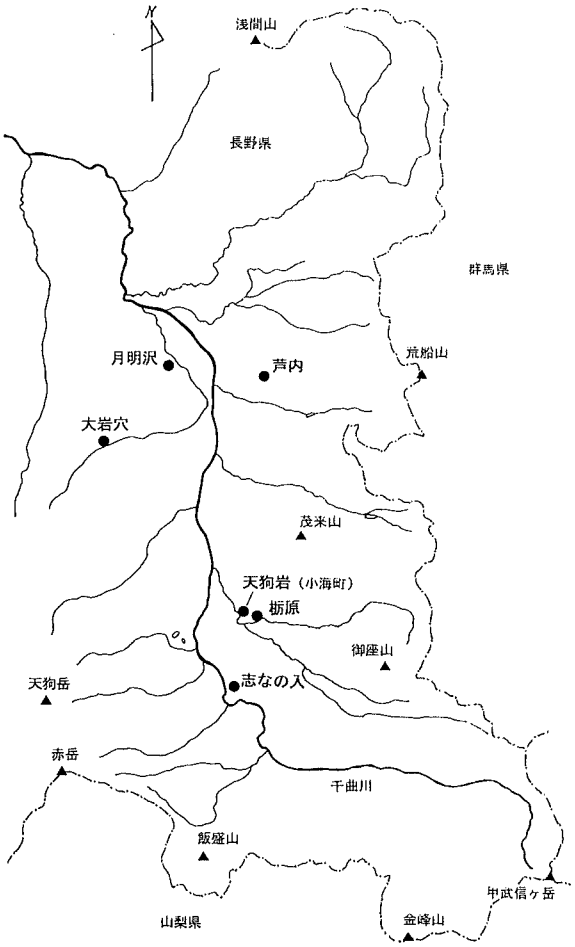
第２図　月明沢遺跡出土　人歯牙加工品

さらに南牧村海ノ口では、1971年の工事の際に発見された志なの入洞穴遺跡が翌年に調査され、縄文時代早期から前期の遺物が出土。報告書では同時期に調査の進行中だった栃原岩陰遺跡と対比し「各期にわたる長期間の定住的な様相を残す居住址ではなく、短期間、間歇的に利用された小住居址である」と推定している。また人骨も出土している（小松・西沢 1974)。

そして一時調査の途絶えていた栃原岩陰遺跡でも1983年に、これまでの調査地点より東側で発掘調査が行われた。ここでは層位的発掘が試みられ、報告書も刊行されている(大参1984)。またこれ以前に調査をした栃原岩陰遺跡西南部と東に延びる栃原岩陰遺跡東北部（天狗岩岩陰）との関連性を調べることを目的に含めていたが、結果的に両者を結びつける結論に至っている（大参、佐々木 1986)。時代的にもこれまで確認されていなかった縄文前期、中期、古代、中世の遺物が出土している。

他にも各市町村の分布調査などでいくつかの洞窟・岩陰遺跡で遺物の確認等がされているが、発掘調査(試掘調査）の有無も含めて、今後その内容を確認していきたい。

これ以後しばらく佐久地方での洞窟・岩陰遺跡の調査は途絶えるが、1995年有志の調査団により、栃原岩陰遺跡から約１km下流の小海町塩の平に位置する天狗岩洞穴遺跡で発掘調査が行われている。ここでは平安時代の遺物の他、弥生時代後期の文化層から、土器片、加工痕のあるシカ角、骨鏃などが確認され、調査団で



第３図　本文中の主な佐久地域の遺跡位置図（１：500,000)

は、当時の動物解体サイトという見解も出している。さらに調査が進めば、他の時期の遺物も期待出来そうだと、調査団では感触をつかんでいる（天狗岩陰調査団 1999)。

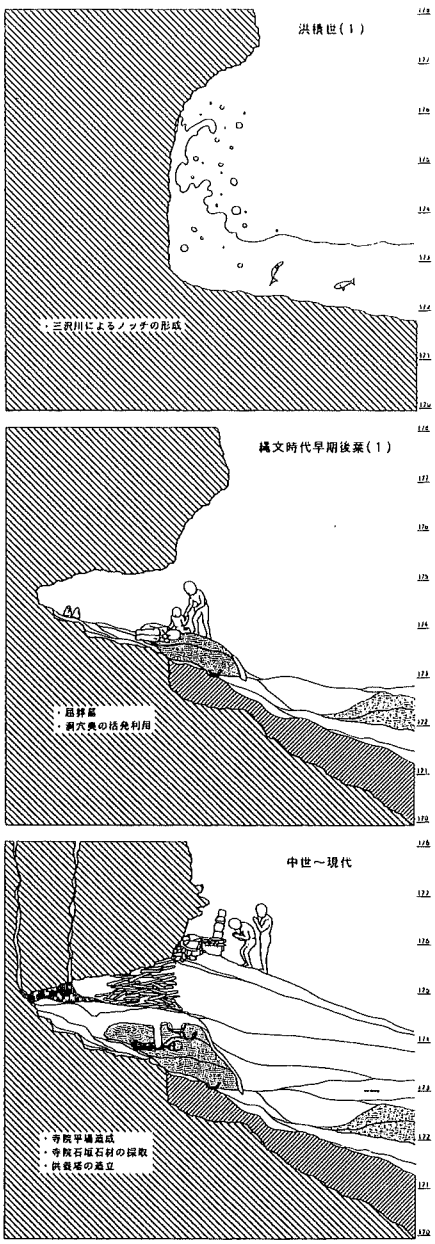
さらに栃原岩陰遺跡では1999年に、遺跡の保存整備事業に先立つかたちで、これまでの調査地点からさらに東側の天狗岩岩陰地点でトレンチ調査を行った。小規模な試掘にもかかわらず、縄文時代早期・前期・中期、弥生時代中から後期、古代、中世、近世の遺物が確認されている。また時期は不明確ながら、獣骨の出土も多い（藤森 1999)。この試掘調査に関しては平成13年度で報告書を刊行する予定である。

3　岩陰遺跡の調査研究に望まれること

このように佐久地方では普段目にする洞窟・岩陰の数に対して、遺跡としての調査数は多いというわけではない。しかしこの中には、今後も調査の継続の期待出来る遺跡もあり、さらに単に一つの洞窟を掘ったということでは捉えきれない、同じ流域での遺跡間あるいはオープンサイトとの関係など比較材料の増加している今日では、新たな解釈の可能な遺跡もある。それらや自分自身の経験を踏まえ、洞窟・岩陰遺跡の調査研究に必要なことを思いつくままに書いてみたい。

洞窟・岩陰遺跡では、ある時代の遺物遺構が単独で出土することは少なく、かなり幅のある時代の遺物を見ることが多い。この様なことから、遺物の編年研究についても有益な場合が多々あるのであるが、そのためにも調査者は、日頃から長期に及ぶ時代の遺物に触れておく必要がある。また骨をはじめとし、貝塚のない長野県では珍しい有機質遺物の出土も多く見られ、そのことで洞窟・岩陰遺跡が取り上げられることは多い。当然それらに対する知識なども必要となってくる。それには単に骨を見分けるのみでなく、人による加工跡の検出、動植物の生態に関する知識等も含まれよう。また、洞窟・岩陰の成因や、その後の堆積などの変遷過程などもあわせて考えれば、関連する地質学の見識も不可欠であろう。もちろんこれらは重要な事であり、研究上の貴重な資料となり得るが、単に各分野のエキスパートがそれぞれについての意見を述べるのみでなく、調査者の側から各分野へ、主体性のある積極的なアプローチが必要不可欠である。

考古学サイドから考えるべきは、一つは洞窟・岩陰の変遷とあわせた人間活動の復元である。刻々と変化する洞窟・岩陰の移り変わりを、発掘データから再現するのは容易ではないが、そこから導き出される人間の諸活動は、洞窟・岩陰遺跡調査の重要なテーマとなろう。近年では埼玉県の例などでも、参考にすべき報告がなされている（第4図・黒坂1999)。また、もう一つ重要なのは、洞窟・岩陰という特殊な条件での人間活動を如何に歴史的に解釈するかという点である。何故、洞窟である必要があったのか。如何にしてそこでの活動が生じたのか。どんなに山奥であれ、そこに確かな人の痕跡がある以上、誰かが通り利用したはずである。それは巨大な集落を築いた人々とも、巨大な塚に葬られた人物とも関係はないかも知れないが、それこそが私達の歴史の一部である。冒頭に紹介した2冊の報告書は、当にそのような視点での記述が、読む者



第4図　埼玉県妙音寺洞穴の変遷図。埼玉県秩父郡皆野町の妙音寺洞穴では、前庭部を含めた調査時の細かな記録を基に、時代ごとの遺跡の変遷を再現し、分かり易い図で示している（報告書ではこのような図が12枚並べられている)。

を引きつけるのではないだろうか。確かに類推に過ぎない点もあるかも知れないが、それは数多くの洞窟・岩陰遺跡を有する佐久に住む我々が解明できる点が多いと信じる。

そんな研究姿勢があっても良いように思う。

以上忙しさにかまけて、充分な下調べのないまま綴ってしまった。抜けや事実誤認もあろうかと思う。今後ご教授いただきたいが、それでも佐久における洞窟遺跡調査研究の今後を少しでもイメージしていただければ幸いである。

佐久には未調査あるいは未登録の洞窟・岩陰遺跡は無数にあると言える。もう一度、自分たちの足下を見直してみたい。

最後になりましたが、文献の収集や調査の様子を伺うなど、以下の方々にお世話になりました。謹んでお礼を申し上げます（敬称略）。
井出正義・小口英一郎・堤　隆・樋口昇一・藤沢平治・吉田　望

引用参考文献

大野延太郎 1905「信州旅行調査報告」『東京人類学雑誌』20巻第227号
八幡一郎 1928『南佐久郡の考古學的調査』
八幡一郎 1934『北佐久郡の考古學的調査』
樋口昇一・藤沢平治 1965「長野県南佐久郡臼田町芦内岩陰遺跡調査外報」『信濃』18－11
日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会 1967『日本の洞穴遺跡』
小松　虔・西沢寿晃他 1974『志なの入遺跡』
小松　虔・西沢寿晃 1978「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」『長野県考古学会誌』31号
西沢寿晃 1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(2)主要遺跡（北・東信）
大参義一編 1984『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書　―昭和58年度―』長野県北相木村教育委員会
大参義一・佐々木明 1986「栃原岩陰遺跡の考古学的概観」『信州大学人文学部　人類学科論集』第20号
黒坂禎二 1999『妙音寺/妙音時洞穴』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第209集
天狗岩洞穴発掘調査団 1999「天狗岩洞穴の発掘調査」―弥生時代の洞穴利用―『佐久考古通信』No.75
藤森英二 1999「栃原岩陰遺跡東北部天狗岩岩陰の調査」『佐久考古通信』No.77
関　孝一・永峯光一編 2000『鳥羽山洞窟の調査』
神村　透 2001「佐久との出会い」『佐久考古通信』No.80
永峯光一監修 2001『湯倉洞窟』

★★★原稿募集のお知らせ★★★

佐久考古学会の機関誌である『佐久考古通信』では、皆様からの原稿を随時募集しております。論考はもちろん、身近な調査の紹介から、考古学に関する随筆など、筆のおもむくままにお書き下さい。また、こんなことを記事にして欲しいというご意見もお待ちしています。

連絡先　佐久考古通信編集担当　堤　隆・藤森英二

♪　編集後記　♪

佐久に移り住んで5年が経過しました。せっかく山の中に住んでいるのだからと、釣りや山菜取りをしています。しかし、どんなに深い沢に入っても、必ずゴミが捨ててあるのが現状です。私の勤務する相木川の辺もひどいもので、釣り道具の包装、コンビニの弁当、ビールの空き缶などなど。ご丁寧に「ゴミは持ち帰りましょう」という立て札の付いた封鎖済みの焼却炉に置いていく始末です。極一部の人間の悪行と信じたいですが、ああいうことをした人が、都会に帰って「俺はアウトドア派さ」なんて言っているのを思うと、虫ずが走ります（勝手な想像ですが）。　（藤森）

佐久考古通信　No.81

発行所　佐久考古学会
〒385-0056　長野県佐久市桜井632-10
林　幸彦　方
郵便振替　00570-9-2842
☎0267（63）1963

発行者　藤沢平治
編集者　藤森英二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2001.10.1. No. 82

★ 目　次 ★

シリーズ　日本の遺跡・世界の遺跡９　世界遺産　アユタヤ —タイ— …… 1
打製石斧研究の着眼点……池谷勝典…… 2
弥生土器を観察する —原体とその動かし方から— ……馬場伸一郎…… 6
絡条体圧痕文（塚田式）土器片の原体分析 —復元による縄文原体の考察— ……西本正憲…… 9
河内晋平先生のご逝去を悼んで……堤　隆……12

シリーズ　日本の遺跡・世界の遺跡９

世界遺産

アユタヤ

—タ　イ—

栄華をきわめたかつての王都アユタヤは、タイのバンコクから北へ72㎞の位置にある。日本でいうなら、さしずめ鎌倉といった古都となろうか。アユタヤは四方を河川で囲われ、まるで堀の巡った天然の要塞の感を呈している。

アユタヤに王朝が開かれたのは、1351年のことであり、以来30人以上の統治者が400年にもおよぶ栄華の歴史を築いてきた。しかし、その歴史も、ビルマ軍の攻撃によって1767年に幕を降ろした。

現在のアユタヤには、かつての寺院・宮殿・仏像などが数多く残され、1991年に世界遺産に登録された。

その寺院のひとつワット・プラシー・サンペートの境内には赤褐色のレンガ積みの仏塔（＝チェディ）が

ワット・プラシー・サンペートの仏塔（トウモロコシ型）

ワット・プラシー・サンペートの仏塔（円錐形）

たちならび、菩提樹の根本に取り残された仏頭が、長い歴史を語っている。この寺院でほぼ原型を留めているのが、セイロン様式の三つのチェディで、ここには15世紀頃の、３人の王の遺骨が納められていると言いわれる。また、ビルマ軍によって無残にも首の切取られた仏像もたくさん残されている。

当時シャムといわれたタイのアユタヤには山田長政が暮らし、往時の人口が2000～3000人はあったといわれる日本人町も形成された。

菩提樹に包まれた仏頭

打製石斧研究の着眼点

池谷勝典

1　はじめに

打製石斧という名前（器種名）を付けられた石器は、縄文時代前期あたりから弥生時代にかけて見られる石器である。ところがその石器の実体については、今ひとつはっきりしていないのが研究の実状ではないだろうか。今までの研究では、主に形態分類がおこなわれ短冊形、バチ形、分銅形に分けられる。その用途については土掘り具であろうとして片づけられ、それ以上の研究の進展はみられないようである。本稿では、打製石斧研究の閉塞状況を打開するための研究の着眼点をいくつか挙げてみたいと思う。幸いにも、御代田町にある縄文中期の大集落遺跡である川原田遺跡出土の打製石斧を実見する機会を得ることができた。それらの打製石斧をとりあげて説明していきたいと思う。

今回とりあげる資料は、５点である。その５点について今まであまり注目されていない属性である作り方と使い方に着目して説明していきたい。

2　分析資料について

資料１（第１図１・Ｊ－４号住居址出土）

石材は、安山岩である。比較的薄い扁平な素材剥片を用いて、主に両側辺をハードハンマーの直接打撃で整形している。左側辺（ここでは、実測図の正面図を基準として左右表裏を区別する）の加工は、非常にわずかで鋭い側辺を軽く潰しているようである。おそらく素材剥片の側辺をそのまま利用しているためであろう。右側辺は、左側辺とは違って大きな剥離面がみられ、まず背面側に打面となる剥離面を作り、次にその打面から主要剥離面側に剥離を施して側辺を整形している。主要剥離面側に見られる剥離面の特徴は、剥離の末端がヒンジあるいはステップ状になっていることである。これは、ハンマーが与えた力の方向が石器の内部に向いていたことを示している。このことから右側辺を整形する際に石器をどの程度傾け、ハンマーをどのように側面にあてていたのかある程度推測することが可能である。

使用痕については、刃部に顕著な摩耗がみられる。特徴的なのは、裏面側がより摩耗の程度が激しいことである。刃こぼれについては、表面側に顕著に見られ、大小様々な剥離面がみられる。この使用痕剥離の特徴は打点が明瞭ではなくステップ状の末端を呈していることである。これは、刃部が対象物に対してほぼ垂直方向から接触していたことを示している。また、刃部はほぼ直刃であるが石器の対称軸に対してやや右斜め上方向に傾斜している。これは、使用によって刃部の右側がより対象物に接触していたことを示している。このことは、刃部右側により大きな使用痕剥離が見られることからも指摘することができる（第１図資料１、写真４）。

以上のような使用痕の特徴を考えるとこの打製石斧は横斧的な装着をされていた可能性が高いと考えられる。本資料については、裏面側の刃部で摩耗が顕著な部分に高倍率で観察を試みたが、顕著な使用痕光沢は観察されなかった。

資料２（第１図・Ｊ－12号住居址出土）

石材は、緻密ではない頁岩である。素材剥片は、背面が自然面で覆われるもので、主要剥離面側も摂理で平坦に割れている。両側辺はハードハンマーの直接打撃で整形されている。右側辺の加工は、資料１と同じくハンマーが与えた力の方向が石器の内部に向かっているために剥離面の末端がステップ状になっている。

使用痕については刃部に摩耗がみられ、特に表面側に顕著である。これは、表面側がより対象物と接触していたことを示している。線状痕は、刃部に対してほぼ直交するかやや左斜め方向に傾くのが特徴である。刃部左側の欠損部は、使用による刃こぼれと考えられ、本来の刃部は直刃であったと推測される。

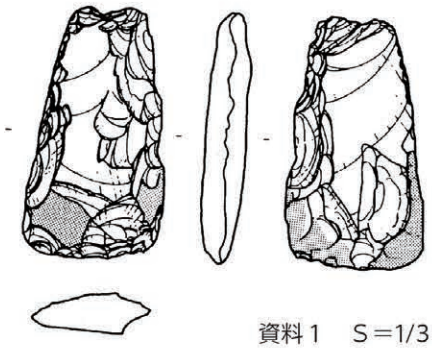
以上のことから、この打製石斧は資料１と同じ作り方で同じ横斧的な装着をされて使用されたものと考えられる。

資料３（第１図・Ｊ－11号住居址出土）

石材は頁岩で、比較的薄い扁平な素材剥片を用いている。両側辺はハードハンマーの直接打撃で整形されている。側辺に見られる剥離面は、それほど大きな規模の剥離面ではなく、剥離面の末端がステップ状になっている。これは、資料１、２と同じハンマーの動作で作られた剥離面と考えられる。

使用痕については、刃部に摩耗がみられ、表裏面でその摩耗の程度と分布にあまり差がないというのが特徴的である。線状痕は刃部に対してほぼ直交するものである。また、刃部形態が凸刃であり、資料1，2とは違う点である。

以上のような刃部形態の違い、使用痕の特徴から、資料１、２とは異なる石器である可能性が高い。ただ、刃部摩耗の様子から同じような対象物に使用されたこ

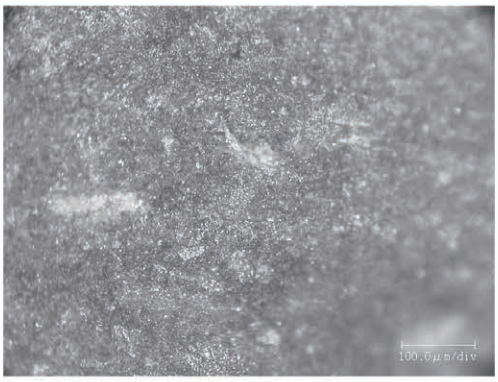


資料１　Ｓ＝1/3

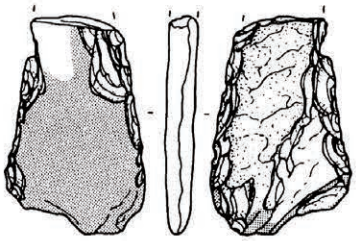
１　表面側刃部拡大（資料１）

２　左側（資料１）

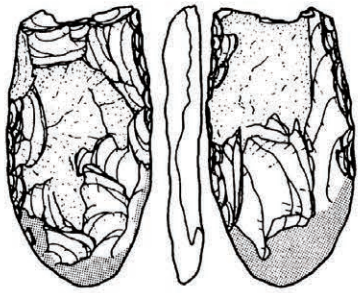
３　右側（資料１）



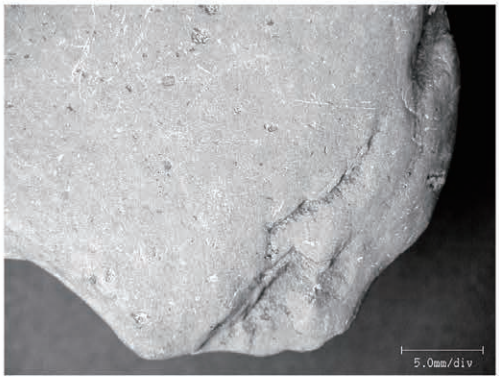
４　裏面側刃部拡大（Ｘ450）（資料１）



資料２　Ｓ＝1/3



資料３　Ｓ＝1/3



１　表面側刃部拡大（資料２）

１　表面側刃部拡大（資料３）

第１図　川原田遺跡の打製石斧

とは間違いないであろう。おそらくその違いは、着柄方法の違いを反映していると考えられる。表裏で摩耗の程度に差がないこと、線状痕が刃部にほぼ直交すること、刃部が凸刃であることから対象物にほぼ垂直方向に石器が用いられていたことが推測され、そのような用い方をするには、棒状の柄の先端に石器が平行につけられる掘棒的な装着をする方法が考えられる。

資料４（第２図・Ｊ－７号住居址出土）

石材は、緻密ではない頁岩である。素材剥片は、背面側に自然面を残すものでやや厚みのある剥片を用いている。側辺の加工は、両側辺に面を形成するような顕著な刃潰し加工が施されている。このような刃潰し加工は、側辺に対してほぼ垂直方向からハードハンマーを叩きつけることでなされる。注目すべきは、左側辺の刃潰し加工が刃部よりに施されており、右側辺とは刃潰し加工の範囲が違うという点である。刃部形態はゆるやかな弧を描く円刃である。

使用痕については、刃部に顕著な摩耗が見られ、表裏で摩耗の程度、分布に差がないこと、左側面にも顕著な摩耗があり、その摩耗は右側面の摩耗よりも分布範囲が広いことが特徴的である。これは、左側面が対象物とより接触していたことを示している。線状痕は、刃部にほぼ直交するようであるが明瞭ではない。

以上のことから、この石器は素材の厚み、側辺の加工において資料１～３とは異なる石器であると考えられ、使用痕についても左側面の摩耗範囲が広いこと、表裏面で摩耗の程度に差がないことが注目される。このことから推定される装着方法は、刃部が柄に対して平行に装着される縦斧的な装着が考えられる。

資料５（第２図・Ｊ－４号住居址）

石材は、安山岩である。素材剥片はやや厚みのある横長剥片を用いている。側辺の加工は、資料４と同じく刃潰し加工がみられる。刃部は裏面側が大きく破損しているが、破損面にも摩耗が見られることから破損後も使用されていたようである。刃部形態は資料４と同じく円刃である。

使用痕については、表面側に顕著な摩耗がみられる。裏面側は破損によって摩耗部が欠落してしまったと考えられる。資料４と同じく左側面の摩耗が顕著である。線状痕は刃部にほぼ直交するものである。以上のことからこの石器は、資料４と同じく縦斧的な装着が考えられる。

３　まとめ

以上、５点の資料について見てきたが、３種類の打製石斧があることがわかってきた。以下、その特徴についてまとめてみたい。

１類（資料１、２）・扁平な素材剥片を用いて、両側辺をハードハンマーの直接打撃で整形する。刃部形態は、ほぼ直刃である。使用痕は、表裏面で摩耗の程度と分布に違いがあり、刃こぼれもどちらかの面に偏る傾向があり、刃部の左右どちらかがよく刃こぼれを起こしている。装着方法は、横斧的なものと推定される。

２類（資料３）・素材の用い方、側辺の加工は１類と同じであるが、刃部形態が凸刃である。使用痕は、表裏面で摩耗の程度、分布に差がない。装着方法は、棒状の柄の先端に石器が平行につけられる掘棒的なものと推定される。

３類（資料４、５）・素材に厚みがあり、側辺を刃潰し加工する。刃部は、ゆるやかな弧状の円刃である。使用痕は、表裏面で摩耗の程度、分布に差がなく、どちらかの側面がより顕著に摩耗している。装着方法は、縦斧的な装着が推定される。

このように石器の作り方の作法（どういう素材を用いて、どういうハンマーを用いて、どういう身振りで作るのか）と使い方の作法（どういう使用痕がどの部位にどの程度みられるか）をみていくことによってより詳細に石器の分類が可能になり、当時の石器製作者と使用者の意図が見えてくるのではないかと考えられる。今回の分類に妥当性があるかどうかは分析数を増やし検討していかなければならない。

謝辞

本稿は、御代田町教育委員会堤隆氏のご配慮により執筆できました。また、日頃から角張淳一氏には石器の見方から考古学全般についてのご指導をいただいています。両氏に記して感謝いたします。

参考文献

阿子島香　1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー　56　ニューサイエンス社

梶原　洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究―ポリッシュを中心とした機能推定の試み―」『考古学雑誌』67－１

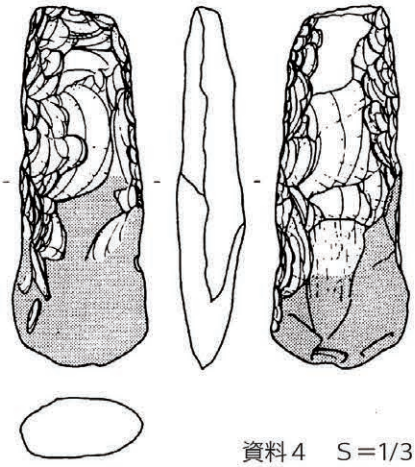
池谷勝典　2000「打製石斧研究序論－氷遺跡出土の打製石斧について－」『東京考古』18　東京考古談話会

角張淳一　1999「附編１　下野谷遺跡第７次調査出土の打製石斧の製作技法について」『下野谷遺跡』保谷市遺跡調査報告第２集

角張淳一　2000「続・石器研究についての感想」『東京考古』18　東京考古談話会

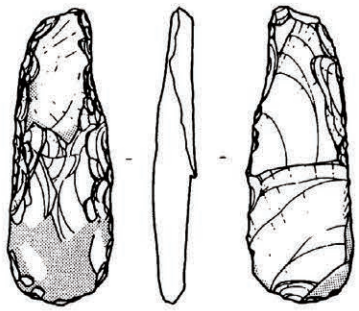
鈴木次郎　1983「打製石斧」『縄文文化の研究』7　雄山閣

御代田町教育委員会　1997『川原田遺跡－縄文編－』

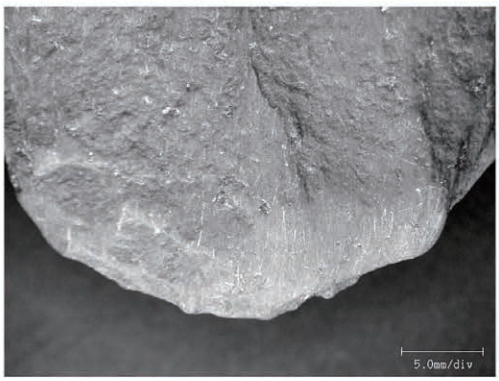


資料４　Ｓ＝1/3

1　裏面側刃部拡大（資料４）



資料５　Ｓ＝1/3



4　表面側刃部拡大（資料５）

2　左側
（資料４）

3　右側
（資料４）

5　左側
（資料５）

6　右側
（資料５）

第２図　川原田遺跡の打製石斧

弥生土器を観察する

―原体とその動かし方から―

馬場伸一郎

1　土器を観察して

土器を観察するとき、まずどの部分を見るだろうか。器形か、文様か、それとも土器を製作する際に削ったり、整えたりする整形痕か。土器の研究が始まり、それぞれの地域で土器研究が進むにつれ、観点も増えてきている。

さて筆者は最近、原体とその動かし方が時間差と地域差を理解する上で有効なものではないかと感じている。例を挙げてみよう。松本市の境窪遺跡は弥生中期中葉の遺跡で、南関東の中里式や、北関東の池上式に併行する遺跡である。この遺跡の特に甕の条痕に注目すると、条痕文の原体が３種類あり、それぞれに原体の動かし方が異なるようであることを把握しつつある。条痕の原体を右手にもち、その右手をどのように動かすかで、描かれる文様も違ってくることは、経験的に理解できる。力をぐっと入れて引いた文様（「引く」動かし方）、そして始めに原体を粘土に強く入れたあと、さっと力を抜いて掻くかのように引いた文様（「掻く」動かし方）など、一つ一つの文様にそれぞれ特有の原体とその動かし方がある。

この度、浅科村の原遺跡から出土した箱清水式の甕や壷を実見する機会を得た（写真１・２）。その時、甕に施文された箱清水式の「櫛描文」が境窪遺跡の「条痕文」や、栗林式の甕の「櫛描文」とよばれる施文と何がどのようにちがうのか明らかにしたくなったのである。「櫛描文」や「条痕文」は確かに用語として定着しているものの、実際土器を見れば同じ「条痕文」でも条痕の単位が違ったり、原体の動かし方が違う。また栗林式の「櫛描文」の原体の素材は中期中葉の境窪遺跡の「条痕文」の原体の素材ととても似ている。このような「違う」・「同じ」・「似ている」をデータとして記述できないか、本稿で考えてみたい。

2　原体の種類と原体の動かし方を復元する

まず始めに、原体の種類と原体の動かし方を復元してみよう。これを復元すると、土器と土器の文様の比較が正確にできるようになる。そもそも一般に言われる○○文と呼ばれるものは形象的・印象的なもので、文様をデータとして正確に記述するには不十分である。故に、原体の種類と原体の動かし方を復元する必要がある。おそらく縄文以外には原体の違いを正確に記述する手段は今のところ持っていないだろう。

原体の種類とは、縄文・櫛歯状工具・簾状工具（注1）・二枚貝などのことで、われわれが一般的にコミュニケーションの用語として用いる原体名を使用する。なお、従来から記述の用語として使用される条痕は、二枚貝を原体とするものと小枝を粗雑に束ねた原体の双方の文様を含んでいる。文様のデータを正確に記述するためにも、原体は正確に復元する必要がある。

また同じ原体でも、原体の本数や原体の幅が狭かったり広かったりすることがよくある。原体の本数、原体幅の広狭も属性として加える。

そして原体の動かし方とは、原体を持ったときの右手（右ききの場合）の動かし方である。今後、右手の動かし方の属性は復元を試みることで増えることがあると思うが、今のところ右手の動かし方の属性は、引く・掻く・上下（上下に動かす）・押す・押し引きの５つを用意しておきたい。施文の方向についても分かれば記述する。

3　文様の記述―原体の種類／原体の動かし方―

以上のような視点で文様を記述してみよう。その際、ある程度記述を記号化することで表現を簡単にしたい。先にも述べたが、文様を記述するために原体の種類と原体の動かし方を明らかにする。まず／（スラッシュ）の左側に原体の種類とその単位、および一単位あたりの幅（㎜）、右側に原体の動かし方を記述し、記号化する。なお、この方法で文様を記号化していくと、同

写真１　原遺跡Ｙ－１号住居址出土土器

写真２　原遺跡Ｙ－２号住居址出土土器

じ「直線文」と呼ばれる文様が、実は［簾状工具５本－２／引く］、だったり、もしくは［簾状工具３本－２／引く］、であったなど、異なる原体を使用していることを記述できる。このように、いままで一色端にされていた文様の記述を、整理して正確に記述することができる上に、土器のもつ属性をより正確に伝えることが可能である。

では、この方法で浅科村原遺跡出土の箱清水式の甕を観察し、文様を記述してみよう。

4　実際の資料の観察

●図１資料　浅科村　原遺跡　Ｙ－１住居跡出土
　№５　甕

時期：箱清水式後半

写真３：胴部に施文された波状文である。

写真４：写真３の部分拡大写真である。６本単位の簾状工具が原体で、一本あたりの幅が1.5㎜である。小刻に右手を動かして波状文を施文している。また波状文が器面表面から深く施文されている。これは器面表面がさほど乾燥していない時に施文を行ったためである。

写真５：頸部に施文された簾状文である。６本単位の簾状工具が原体で、一本あたりの幅が1.5㎜である。波状文と同じ原体が用いられていると考えられる。

文様を記号化すると以下のようになる。

（波状文）簾状工具６本－1.5／上下

（簾状文）簾状工具６本－1.5／押し引き

●図２資料　浅科村　原遺跡　Ｙ－２住居跡出土
　№５　甕

時期：箱清水式後半

写真６：胴部の施された波状文である。図１の波状文と比較すると、上下の振幅がより大きくなっている。経験的に図１の波状文の右手の動かし方とは違うと理解する。振幅の大きい波状文、振幅の小さい波状文は個体差としてよく見受けられるからである。そのうえ、施文が浅い。器面表面がやや乾燥している段階に施文を行ったためと考えられる。

写真７：写真６の部分拡大写真である。６本単位の簾状工具が原体で、一本あたりの幅が１㎜である。

写真８：頸部にほどこされた簾状文である。６本単位の簾状工具が原体で、一本あたりの幅が１㎜である。波状文と同じ原体が用いられていると考えられる。

文様を記号化すると以下のようになる。

（波状文）　簾状工具６本－１／上下（振幅大）

（簾状文）　簾状工具６本－１／押し引き

5　まとめ―今後の展望も含めて―

以上のように、原遺跡から出土した箱清水式の甕の文様を記述した。原遺跡から出土した二つの甕の文様を比較すると、原体の一本あたりの幅については誤差の範囲に含めることが可能かもしれないが、波状文で、図２資料の簾状工具を上下にそれも振幅を大きくする動かし方は、図１資料の原体の動かし方とは異なる。右手に持った原体の動かし方が違うというのは、土器製作者が施文をする際の身振りの違いなので注目すべきことである。これが時間差・地域差を示すものなのか、それとも製作地の違いを示しているのか、資料をさらに分析することで今後明らかにしていきたい。

さらに、二つの甕の施文の深さの違いにも注目したい。土器の乾燥のどの段階で施文を行うかを明らかにすることは土器の製作技術に関わる極めて重要なことである。土器の乾燥があまり進んでいない場合、口縁部を伏せた状態で施文すると土器そのものが崩れる可能性が強いため、やはり底部を下にして施文する方法が考えられる。土器が乾燥している場合は底部を下にして施文することも可能となる。このように施文の深さについても属性化することで土器の作り方がより明らかとなる。この部分については実験も必要なため今回は充分に分析できなかったが、施文のタイミングを記述する「器面の状態」についても今後属性の対象としていきたい。

今後の弥生土器の観察には文様を正確に記述することが必要である。文様を比較した時、原体と原体の動かし方が異なれば、それは違う文様である。それを一色端に括ってしまい、同じ文様にしてしまっている現状に問題がある。本稿では文様の記述方法として、原体の種類と原体の動かし方を提唱した。これを記述することで土器の作り手の作法により接近できると考える。

資料の見学では、御代田町教育委員会の堤隆氏に大変お世話になりました。また角張淳一氏よりはご助言を頂きました。お礼申し上げます。

注

１）簾状工具とは徳永哲秀氏により明らかにされた原体である（徳永1995）。１本１本の小枝を簾状に編んだこの原体は、箱清水式の甕の波状文・直線文・簾状文に用いられている。施文された文様の断面は円弧状である。カエデ類などの小枝などが素材に想定されている。

参考文献

徳永哲秀　1995「箱清水式土器の櫛描文の施文具および施文法について」『長野県考古学会誌』75

徳永哲秀　1996「松原遺跡の櫛描文土器」『長野県埋蔵文化財センター紀要』５

鳥居　亮　2001『原遺跡』浅科村文化財調査報告13集

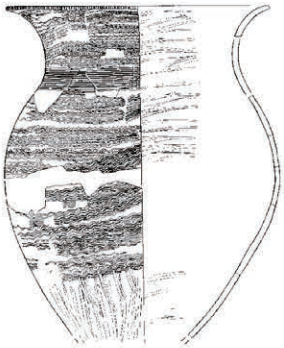


図１　Ｙ－１号住居址出土土器実測図（Ｓ＝1/8）

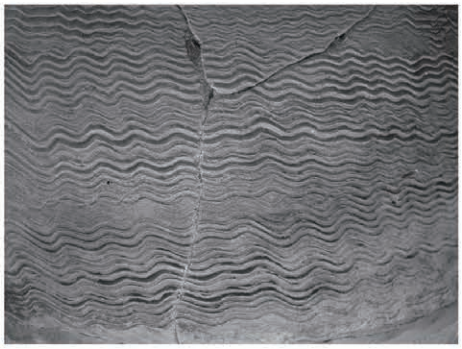


写真３　図１の土器の細部写真

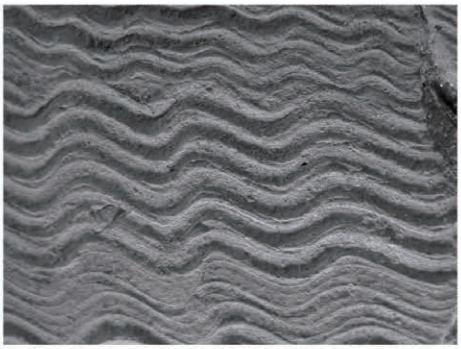


写真４　図１の土器の細部写真

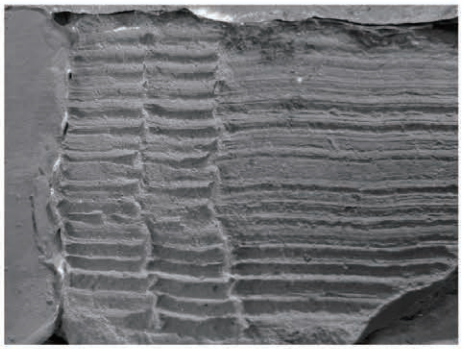


写真５　図１の土器の細部写真

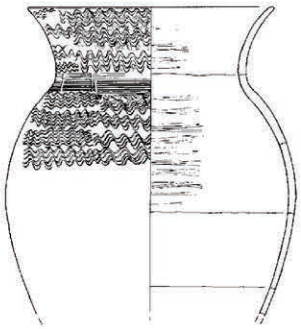


図２　Ｙ－２号住居址出土土器実測図（Ｓ＝1/8）

写真６　図２の土器の細部写真

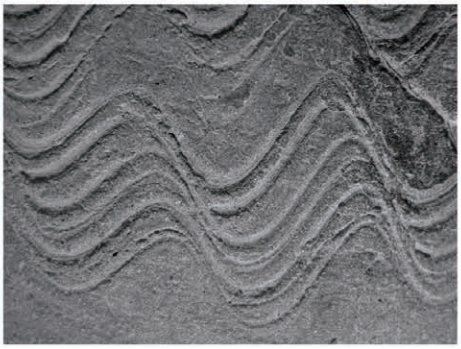


写真７　図２の土器の細部写真

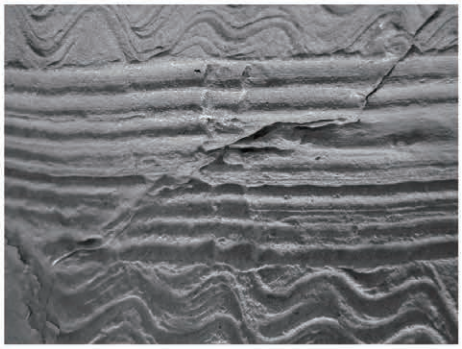


写真８　図２の土器の細部写真

絡条体圧痕文土器片の原体分析

―復元による縄文原体の考察―

西本正憲

1　はじめに

中部高地の縄文早期最終末とされる土器群に、縄文地文を伴う絡条体圧痕文土器がある。今回、この土器片の施文観察によって、ある共通点が確認できた。本論は、御代田町塚田遺跡出土土器片15点、同町川原田遺跡出土土器片30点の絡条体圧痕文土器片中の、マイクロスコープ観察と、その絡条体原体の工具を復元分析したことにより得られたものである。

2　分析資料　―塚田遺跡TUY-2 84（資料１）

絡条体圧痕文土器の破片で、口縁部に近い部分と思われる（写真１）。胎土は粗い繊維を含んだ繊維土器で、白色の微粒子、直径１㎜程度の赤または灰色の砂粒を若干含み、また、８～９㎜の大きな白色の砂粒が１つ混入している。土器の色は、表面、断面とも黒色だが、内表面だけが暗い黄褐色をしている。器面厚みは、0.9㎝から1.3㎝。器面の凹凸が大きいが、おそらく成型時の押さえの痕であろう。破片の大きさは縦横６㎝程度。

3　資料１の施文工具について

Ａ：地文とその原体

地紋にＬＲ単節縄文が３時方向？（土器片自体のはっきりした天地不明）に施されている。施文されている縄文の節の縦横幅は、縦２～4.5㎜、横２～３㎜。この場合の節の大きさの差は、施文時に縄文にかけられた力の加減の差と、当原体が同じ箇所に２～３回回転押捺されているのでその重なりによる。施文を元にこの原体を復元した。原体の直径は５㎜前後。

Ｂ：絡条体の原体

ＬＲ地文の上に、絡条体が８㎜ほど等間隔をあけ、３条平行して押圧施文されている。それを軸にして、両側に同じ絡条体押圧が斜めに数本平行にされて、矢羽状になっていると思われるが、残存が少ないため判然としない。絡条体圧痕の幅は３～５㎜。施文される器面の状態、押圧の力の差により若干の差がある。原体の長さは約3.5㎝。

この絡条体圧痕をよく観察してみると、巻かれている縄に節があるのが観察できる（写真２）。こちらの原体の直径は１㎜以下で、焼成での収縮があるにしても、非常に細い１段縄である。節の傾きをみると、この原体の撚りはＲであることがわかる。軸から解いた状態だとかなり長い縄と思われる。（同等の長さの原体を復元制作するのに、幅２～３㎜の紙紐で、約1.5mの長さを必要とした。）

この絡条体原体は比較的直線に施文されているが、押圧時の力の差が、施文の深さの違いとなって表出しており、同工具の軸となる部分は、比較的柔らかく柔軟性を持った素材ということがわかる。同種の中には曲げられてアーチ状の押圧施文をされているものもあり、工具の軸の性質を如実に表している。

この軸素材は、他の土器片で直接土器に施文されている部分をみると、縄ではないらしい。（写真４）もっと滑らかで凹凸のない素材のようであるが、現時点で確定はできない。しかし、素材の直径は、圧痕の幅から、また素材の性質は、その施文のされ方、状況からある程度推測することができる。軸に柔軟性がありつつ、また軸に耐えうるものとして、今回は縄を使用した。

この土器片の絡条体原体は、前述したが幅３㎜～５㎜で、ちょうど地文に使われていた原体の太さが適当な太さに該当した。この地文に使用したＬＲにＲを巻き付けて復元した。（写真５、写真６）

これで粘土板に施文したところ、実際の土器片とほぼ同一の大きさ、形態の施文を復元することができた。（写真３）

4　同種の塚田、川原田遺跡土器片の観察、比較

Ａ：地文の縄文原体

絡条体圧痕が施文されている破片を選別し、その地文を分類した。確認できたもので、ＬＲ施文が13点（うち川原田遺跡が９点）、ＲＬが８点（川原田遺跡６点）、Ｌ？１点と、地文にＬＲ、ＲＬの両方が使われていることが確認できる。が、全体に地文が摩滅しているものが多く、地文の種類が確認できないものが多数あり、現時点で正確な数量、割合などははっきりしない。節または１条の幅は２㎜から６㎜と多様な太さの原体が使われているが、幅４㎜前後のものが多い。

Ｂ：絡条体巻き付け縄の原体

絡条体に巻き付けている縄の圧痕を分析、分類した。総数は川原田遺跡の破片30点、塚田遺跡の破片15点の合計45点で、圧痕がはっきりわかる個体を特定の撚りに分類し、明瞭でないものについては０段条または摩滅に分類した。結果を下記すると、

川原田遺跡

ａ・直径１㎜以下のＲ原体　　９点（写真7，8）
ｂ・直径１㎜程度のＲ原体　　３点
ｃ・直径２㎜程度のＲ　　１点
ｄ・直径１㎜以下の０段条または摩滅　　３点
ｅ・直径１㎜程度の０段条または摩滅　　９点
ｆ・直径２㎜程度の０段条または摩滅　　５点

塚田遺跡

ｇ・直径１㎜以下のＲ原体　　４点
ｈ・直径１㎜以下の０段条または摩滅　　１点
ｉ・直径１㎜強の０段条または摩滅　　６点
ｊ・直径２㎜程度の０段条または摩滅　　２点
ｋ・軸圧痕と思われる圧痕　　２点

これを見ると、特に直径１㎜以下の原体は、「Ｒ」と、「０段または摩滅」の割合が、13：４と、かなりＲの割合が多いことがわかる。また、「０段または摩滅」については、胎土中の繊維痕が重なり、元は節がありそれが摩滅したものか、０段条のものか判然としないものを指し、はっきりとした条の種類を指し示すものではないことを追記しておく。しかし、その中でＬと断定できる原体は、１点も確認することができなかった。

巻き付け縄の太さは、今回の遺物では直径１㎜以下、１㎜程度の縄が29点と多く、直径１㎜強で７点、直径２㎜程度が７点と、全体としては直径１㎜前後の縄がメインであることを示している。また、直径１㎜強、２㎜程度の縄の中には、条間ははっきりして摩滅度も少なく見えるが、中に節が確認できないものもあり、０段条の可能性もあるが確定はできない。直径１㎜程度の縄の場合は、０段条だと撚りが安定せず、張力も弱く切れやすいと思われることから、１段は撚りを加えていると思われる。

5　結論　ある特定原体の共有の可能性

以上の塚田、川原田両遺跡から出土した絡条体圧痕文土器片の分析結果から、施文についての要点を抜き出してみると、

①地文に使われる縄文原体はＲＬとＬＲの両方が使われており、原体の太さも幅がある。
②絡条体の巻き付け縄は、直径１㎜前後のものがその他のものと比べ、35：10と優位である。
③絡条体の巻き付け縄の撚りは、特に１㎜前後のものに顕著だが、Ｒが圧倒的に多く、Ｌに関しては確定できるものが１つもなかった。

上の３つの結果から、どのようなことがいえるのだろうか。まず、①では、土器の地文施文に使われる縄は、太さの多様性、撚り方向がＲＬ、ＬＲと両方使われていることなどから、撚り方向の規制はない、または緩いことがわかる。しかし③では、Ｌが一つも確認できないことから、撚り方向の規制が強く働いていることがわかる。この偏り方から、どのようなことが考えられるか。

考えられるのは、①の地文に使われる縄は、土器を制作する際に、制作者が自ら縄を撚って原体を作るということである。そのときに、個人差による撚り方向、身近にある材料の差などの諸条件により、撚り、太さともに幅のある原体になったのではないかと推測できる。

対して、③の１㎜前後の絡条体巻き付け縄は、強い制作規制が働いている、または規格品といったほうがわかりやすいだろうか、土器施文のために個人で撚るものではなく、多用途に使われる一般的な道具としての縄ということで常に制作され、ストックされているようなものを使用していた、という可能性がある。

興味深いのは、塚田、川原田という異なる遺跡において絡条体巻き付け縄に共通点があるということで、１㎜前後のＲ縄という道具がこの地域のオーソドックスとして存在したと考えられる点にある。このことは、土器がそうであるように、縄というものも、主体、客体的な扱いを受けている一つの道具と考えられるということである。確定はできないが、流通品としての縄ということも有り得るのではないだろうか。さらに対象地域の広域化、点数などを重ねて検討していくことにより、より確かな結論が出るのではないかと考える。

謝辞

本論作成にあたり、御代田町教育委員会の堤隆氏のご厚意により、塚田遺跡、川原田遺跡出土の絡条体圧痕文土器片を実見する機会を頂けたこと、改めて御礼申し上げます。

参考文献

小林達雄編　1989『縄文土器大観』１　小学館
御代田町教育委員会　1994『塚田遺跡』
山内清男　1996『日本先史土器の縄紋』示人社
中沢道彦　1997－Ａ「Ⅲ-５　縄文早期の土器」『川原田遺跡－縄文編－』御代田町教育委員会
中沢道彦　1997－Ｂ「Ⅴ-１　縄文時代早期末「勝棚Ｂ式」の設定と「プレ塚田式」の理解に向けて」『川原田遺跡－縄文編－』御代田町教育委員会
綿田弘実　2000「長野県の縄文早期末葉土器群」『早期後半の再検討』縄文セミナーの会
関根慎二　2000「群馬県における早期後半の土器」『早期後半の再検討』縄文セミナーの会
小熊博史　2000「新潟県における絡条体圧痕文土器の様相」『早期後半の再検討』縄文セミナーの会
金子直之　2000「早期後葉土器群における広域編年の可能性について」『早期後半の再検討』縄文セミナーの会

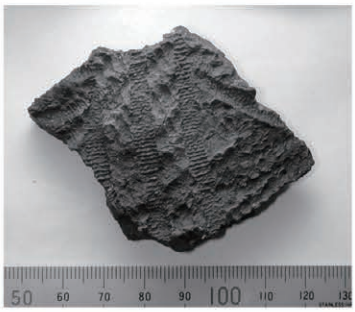


写真１　塚田遺跡土器片
（資料１）

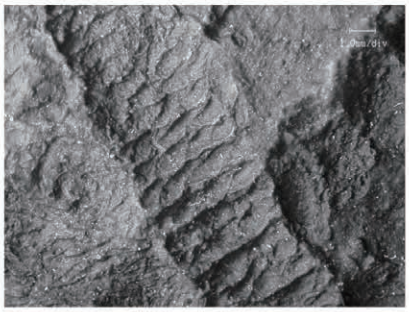


写真２　資料１の絡条体圧痕部拡大画像
軸巻き付け原体Ｒが観察できる。

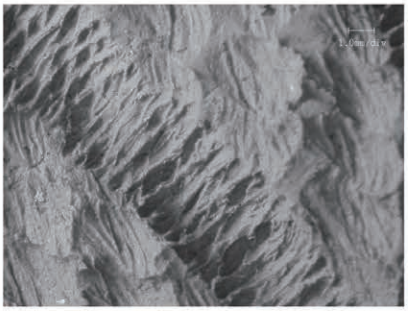


写真３　資料１－写真２の施文復元

写真４　軸圧痕の残る土器片
（資料２）

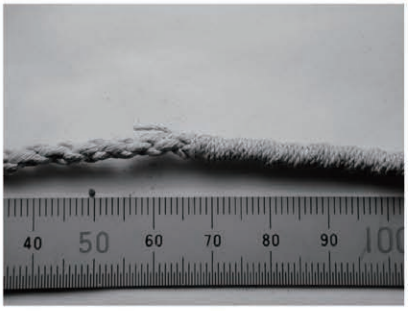


写真５　資料１の原体復元
軸縄に径0.8㎜程度のＲ巻付

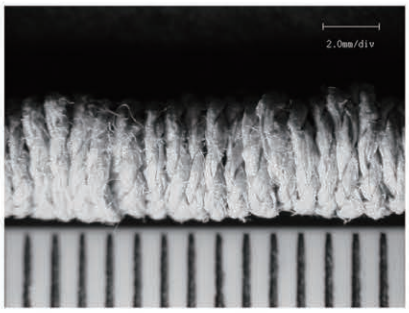


写真６　資料１復元原体５の拡大画像
１目盛は１㎜

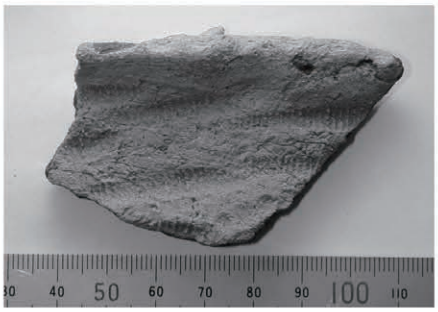


写真７　川原田遺跡土器片（資料３）

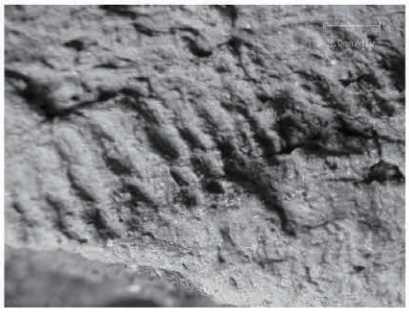


写真８　資料３の絡条体圧痕部拡大画像
写真２と同様のＲが使用されている。

河内晋平先生のご逝去を悼んで

堤　隆

本年７月、前信州大学教育学部教授河内晋平先生が小海町の自宅にてご逝去された。66歳というあまりに早い旅立ちであった。この６月末、信大教育学部で河内先生のご指導を受けた従兄弟の披露宴の席で先生にお会いして、久しぶりに親しくお話をする機会をもった矢先の訃報であった。信じられない思いのまま、告別式に参列したが、式には先生と研究交流のあった水沢教子さんや川崎保さんらの姿もあった。

「松原湖をつくった888年の八ケ岳大崩壊」の研究でもよく知られるように、地質学がご専門の先生は八ケ岳周辺地域を主な研究フィールドとされ、「蓼科山地域の地質」（河内1974）「八ガ岳地域の地質」（河内1977）などを著した。

1998年５月、歴史学的には賛否両論がみられた八ケ岳大崩壊の年代を特定するため、年輪年代学の光谷拓実先生（奈文研）を招聘して河内先生や川崎保さんらの調査が松原湖周辺でなされた。その折り、私は先生には初めてお目にかかることができ、以来様々なご教示をいただくことができた。とくに和田峠や麦草峠の地質について豊富な研究成果をお持ちの先生からは、小海町のご自宅までお尋ねして、黒曜石の生成のあり方について有益なご教示を受けることができた。

信州大学および北海道大学での長い教職生活を終え、2000年４月にいただいた先生の退官の挨拶状には、「今後は八ケ岳山麓で、採集した標本の整理と野菜づくりでもしたいと考え、ささやかな住居を構えました。場所は松原湖をつくった887年の天狗岳－稲子岳の崩壊壁を正面に見据える、標高1305mの高原の一画です」と記してあった。

今後の標本の整理と野菜づくりとは、先生らしい謙遜さが含まれているが、むしろ八ケ岳の麓で自由な研究生活を謳歌することを思い描かれていたに違いない。また、光谷先生の年輪年代の測定値が887年（仁和三年）と出され、河内先生の説を裏付けるその結果について早速研究報告を行いたいと、この６月にお会いした際に強く語られていたことが印象深い。それを思うにつけ、あまりにも早い河内先生の旅立ちに、無念さと悲しみがこみ上げてくる。しかし、今はただ八ケ岳を見ながら永い眠りにつかれているであろう先生の、ご冥福をお祈りするほかないのかもしれない。合掌。

松原湖の成因を語る河内晋平先生（中央）

年輪年代用材のサンプリング（右から川崎・光谷・河内先生）

♪　編集後記　♪

世界貿易センタービル破壊のテロ映像が眼から焼きついて離れない。多くの人が映画でもみているような錯覚にとらわれたが、現実の出来事なのだ。

ビンラディンをかくまうとされるタリバンが行った世界遺産バーミヤンの石仏破壊には、ほんとうに悲しみと怒りを禁じえなかった。しかし、今回アフガンに報復攻撃を仕掛ける米国が、かつて実行したイラクの空爆でも、多数の遺跡が破壊されたと聞く。

いったいいつまでこんなことが続くのか。21世紀に入った途端、未来が闇に包まれたかのような暗澹たる気持ちにおそわれる。（つつみ）

佐久考古通信　№82

発行所　佐久考古学会
〒385-0056　長野県佐久市桜井632-10
林　幸彦　方
郵便振替　00570-9-2842
0267（63）1963

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2002.2.6. No. 83

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡10 真脇遺跡 ―石川県― …… 1
加増古墳出土の渦巻文装飾付鉄片……桐原 健……2
後家山遺跡調査速報 平成13年度発掘調査から……冨沢一明……4
中部高地と関東の弥生社会 その1 ―箱清水と樽―……小山岳夫……6
平成13年度埋蔵文化財パトロール報告 南牧・川上村編 …… 9
日本海の私見……藤森英二……10
佐久考古学会講演会「縄文の心 弥生の心」～春成秀爾先生をお迎えして……12

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡10

真脇遺跡

―石川県―

能登半島の北東、入り組んだ海岸線にいくつもの入り江が続く。訪れた８月中旬の日は、曇り空のものの、穏やかな水平線がはるか南東に延びていた。縄文時代の著名な遺跡である石川県鳳至郡能都町の真脇遺跡は、このような小さな湾に面した場所にある。1982～３年の用水路のつけかえ工事のための調査から、息を呑むような発見が続いた。縄文時代の前期から晩期終末までの遺構遺物が、沖積低地の中で動植物質の遺物を含みながら、層位的に確認されているのである。

この遺跡でまず思い浮かぶのは大量のイルカ（主にカマイルカ・マイルカ）の骨の出土であろう。縄文前期から中期初頭を中心に、第一頸椎から数えたその総数は285頭に及んでいる。実際にこの辺りでは昭和の初めまでイルカの追い込み漁が行われていたそうであり、その写真も遺されている。イルカ・クジラの類以外でもマグロなどの魚類や陸棲、海棲の哺乳類の骨も出土しており彼らの生業の一端を覗かせる。また大量の土器はこの地域の編年にも欠かすこと出来ないものであり、石器、編物縄物、木製品などの生活用具も注目に値する。しかしこれ以外にも巨大なクリの木を用いた環状木柱列、土偶や土面など、縄文時代の精神世界を垣間見る史料があふれるほど出土している。これらは遺跡に隣接する真脇遺跡縄文館に展示してあり、写真や図面では伝わりがたい迫力が感じられる。なかでも長さ2.5mの加工のある木柱は圧倒的であった。

現在遺跡の周辺に温泉宿泊施設などを含んだ大規模な真脇遺跡公園が造られている。また遺跡は国の史跡、遺物も一部が重要文化財に指定され、現在も発掘調査が進行中である。これからもわれわれを驚かしてくれる発見が続いていくだろう。

（協力・能都町教育委員会）

手前の低地が真脇遺跡。遠方は真脇の入り江。

公園内に復元された木柱列。

加増古墳出土の渦巻文装飾付鉄片

桐原　健

平成８年に下高井郡木島平村の根塚遺跡で加耶式鉄剣が発見された[1]が、その折のこと、以前に類例を見たような気分が生じた。

第Ⅰ次の『信濃』２－６に栗岩英治氏が紹介している丸山史料中の挿図[2]がそれで、先端に相対する渦巻を付した鉄片が画かれており、渦巻は外側から内に向かって巻かれている（第１図Ｃ）。図の出拠は『北佐久北大井加増古墳出土品図録』とあって、栗岩氏は残片長一寸三分と記し、図の傍らに「北佐久、北大井、加増出土、蕨手剣柄頭」というキャプションを付けている。

丸山史料とは丸山清俊翁（1821～1897）宅に遺されていた文書典籍で昭和６年に栗岩氏が整理分類を行っている。32年に翁の曽孫に当たる丸山作楽氏が長野県立図書館に寄贈、図書館は目録を作成し丸山文庫として平成６年より公開している。目録を見ると「古器・金石」の項に『佐久郡加増村古器考』１冊が載っている。

表紙を含めて15枚の小冊子で、表紙を捲ると「信濃国佐久郡加増村取出古器考證」とあり、改行してすぐに個々の遺物についての考證が始まっている。記載されている古器は古墳出土品なので古墳名・所在地・発掘年月日・古墳の構造・遺物の配置などなどを知りたいところだが、それについては全然言及していない。考證者は翁自身と思われるも署名はなく、執筆年時もわからない。

江戸後期から始まる日本考古学が古器旧物のみを対象とし、遺跡・遺構に無関心なことはわかっているが、古墳名くらいは記しておいて欲しかった。

考證は４頁（２枚）でその後に遺物の白描図４頁（２枚）と同上に色を着けた６頁（６枚）があり、最後に古墳出土遺物とは関係のない加増稲荷社殿・兜・金滅金大神酒徳利の３葉が色をのせて付いている。

丸山翁が国史編纂掛として明治11年より17年まで長野県の史誌編纂に当たられていることと冊子の標題から明治14年に県に提出された『加増村誌』[3]に当たってみた。「古跡」の項に「塚」があって、「村内に七〇余基あり。三方巨石にて畳上げ一枚二枚石をもつて覆う。穴大なるは横二間、奥行き三間、高さ一間二尺。小なるは横一間一尺、奥行き一間四尺、高さ一間一尺。その内より曲玉・管玉・環・武具・馬具・太刀の類を出す。中には高貴の人の墳墓と覚しきものありて大凡大宝の頃の物にもあるべきかと鑑定人の云し由」との説明がついている。

『長野県町村誌・東信編』の口絵[3]に加増村古塚出土の玉類と鉄鏃の図があるが、これは『加増村古器考』中の１葉と全く同じものなので、県に提出した村誌には着色された６葉すべてが添付されていたと見てよい。又、村誌「加増稲荷社」の項には「本村大塚にあり、兜一領、金滅金大神酒徳利一対を明治四年に納める」の記事があり、これは『古器考』末尾３葉の図と対応できるので、『古器考』記載の遺物は明治14年以前に発掘された古墳に係るもので、その古墳は加増稲荷社の境内に存在したものとの推察が成り立つ。

『北佐久郡の考古学的調査』[4]には小諸町加増稲荷境内所在古墳の石室実測図が載っている（第２図）。これが問題にしている古墳なのかもしれない。無袖の横穴式石室で規模は全長3.94、奥壁幅1.14、羨口幅0.69、高さは1.43から1.55mと小さい。

ところで、明治26年に小平小平治氏が人類学会雑誌に佐久郡下の古墳を紹介している[5]。「加増の内なる塚原の塚に大小二基あり」として、小なる塚から勾玉２・管玉１・丸玉10・小玉10・鏃15・金環７・鐙２・轡２・直刀２・小刀２・その外馬具金具数点が出土している旨を報じている。この副葬品の品目と点数は『古器考』記載の遺物図と大凡合致する。但し、加増村内に塚原なる字地はない。

昭和20年以降、長野県教育委員会は古墳の環境調査を実施し古墳台帳を作成した。31年に刊行された『信濃史料第１巻（信濃考古総覧）』の「古墳地名表」はこの台帳に基づいている[6]。北大井村のところで加増稲荷社のある大塚地籍には神社北方200mの408番地に大塚古墳、同じ422番地だが社殿東隣りに唐松１号墳、境内東南端に２号墳が築かれていて、２号墳は径10.3、高さ２mの円墳で石室はほぼ完存と記されている。台帳には石室の見取り図があって、形状は『北佐久郡の考古学的調査』記載の加増稲荷境内所在古墳石室実測図と同じである。発掘された年時、副葬品については不明とある。

唐松１号墳の墳丘規模がわかれば唐松２号墳と大小の対比ができるのだがそれは不可。しかし、２号墳の墳丘や石室の規模は小さな塚の部類に属する。地字名を塚原から大塚の加増稲荷社境内に変更すれば遺物を出土した小さな塚は唐松２号墳に比定できてつじつまは合う[7]。

『古器考』記載の遺物を列挙する。直刀３・鐔１・切

羽１・円頭柄頭２・鉄鏃15・轡２・鐙靼２・鐙１・辻金具５・鞍１・勾玉２・管玉１・丸玉11・小玉12・金環７で、これに渦巻文装飾のついた鉄片１がある。

直刀の長さは２尺９寸５分(89.5㎝)・１尺８寸(54.5㎝)・１尺２寸（36㎝）で、３口ともふくら切先、長刀以外は両関造り。円頭柄頭が２点画かれてはいるがどうも想像図らしい。隅切長方形の鐔と青く彩色された切羽があるので円頭や頭椎の柄頭が存した模様。鉄鏃には有茎圭頭式が多い。長さ７寸５分（22.5㎝）、８寸（24㎝）と茎の長いものが存するが棘はない。

馬具のうちで、造り付けの大形矩形立聞をもつ素環の轡が２組、鐙靼は１対、壷鐙の柄は斜めに付されて恰も中世の舌長鐙のように見える。鞍が１つ。辻金具には２種がある。鉢部が半球状で十字に４脚を出すものが３点。鋲は各脚に１箇。正方形をなす低平な鉢から十字形に４脚を出すものが２点。各脚には３つの鋲がかしめられている。

玉類の中で勾玉は桃色に塗られているので瑪瑙製。コの字形をなす。

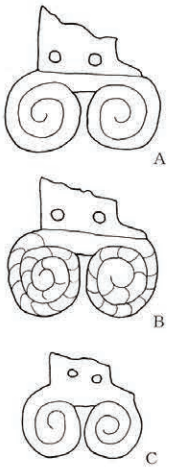
両関の直刀、圭頭の鉄鏃、素環の轡、舌の延びた壷鐙、鉢が偏平正方形の辻金具等など副葬品の大方は６世紀末から７世紀前半に集中しているが、石室の構造規模や鉢が半球形の辻金具の存在を勘案すれば古墳の築造時期は６世紀後半にまで遡らしてもよさそうである。

推察に推察を重ねての結果、冒頭に記した渦巻文装飾のある鉄片は７世紀前半まで使用されていた横穴式石室墳――唐松２号墳から出土したものと考えている。考證人は「柄首の旋紋は古物によく見及ぶもの、頭椎の剣頭也」と剣の柄頭に擬している。無論、頭椎柄頭ではあり得ず、「古物によく見及ぶ」という感慨は蕨手刀の柄頭を念頭に置いてのことだろう。剣の柄頭だとすると根塚鉄剣の渦巻の幅は4.2、柄部の幅は2.1㎝である。渦巻に接して２孔が穿たれている。弥生の銅剣・鉄剣の関部には２孔があるがこれに通ずるものなのか。白描図では渦巻だけだが（第１図Ａ）、着色した方の図では渦巻の上に刻み目がある（第１図Ｂ）。刻み目は京都府八幡市・ヒル塚古墳[8]の渦巻にも施されている。

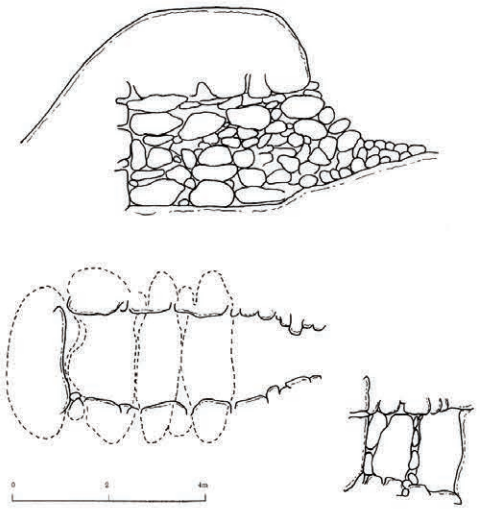
剣の柄頭以外では馬具の杏葉がある。相対する渦巻の幅は５㎝、その先に幅2.5、長さ３㎝の脚が延び、同処に３箇の鋲が打たれている。鋲の位置は脚の基部に２、先端に１で、脚の先端が欠け、鋲がすべて抜け落ちると『古器考』の図のようになる。可能性はどうやら杏葉側にありそうだ。

類例については宮下健司氏が福岡県小郡市三沢古墳群の17号墳、伝群馬県藤岡市神田出土の２点を提示されている[9]。

註１　木島平村教育委員会『根塚遺跡・大塚遺跡・平塚遺跡』1997
〃２　栗岩英治「古い図録で見た信濃出土？銅鐸其他」信濃Ⅰ２－６　1933
〃３　長野県『長野県町村誌・東信篇』1936
〃４　八幡一郎『北佐久郡の考古学的調査』1934
〃５　小平小平治「長野県下佐久郡古墳及諏訪郡石器時代遺物」東京人類学会雑誌９－91　1893
〃６　信濃史料刊行会『信濃史料』第１巻上　1956
小諸市教育委員会『小諸市誌・考古篇』1974
〃７　この比定作業については花岡弘氏の御教示に与るところが大きい。記して謝意を表する。
〃８　京都府八幡市教育委員会『ヒル塚古墳発掘調査概報』1990
〃９　宮下健司『木島平村根塚遺跡出土鉄剣の関連資料』1996



第１図　渦巻文装飾付鉄片


第２図　加増稲荷境内所在古墳石室実測図

後家山遺跡調査速報

平成13年度発掘調査から

冨沢一明

今回紹介する後家山遺跡は佐久市平賀に所在する。遺跡は内山川に沿って伸びた山麓が佐久平に最も飛び出た丘陵上に位置し、海抜は720m前後で、瀬戸・平賀側に開けた水田との比高差は約30mを測る。今回の遺跡発掘は佐久市の総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財の調査であり、全体の開発面積は21　、発掘調査期間は２ヶ年を予定している。開発対象地内には後家山遺跡の他に宮田遺跡・東久保遺跡等の所在が確認されており、関連工事の市道建設に伴い近接する東久保古墳群１号墳も本年調査が行われた。周辺の遺跡としては、西側の水田面に古墳時代後期の大集落が検出された樋村遺跡、谷田ひとつ越えた北東の丘陵には縄文時代中期の大集落である寄山遺跡などがある。

後家山遺跡の調査は本年８月より開始され来年まで続く予定である。現在までの調査面積は約１万㎡が調査され、確認された主な遺構としては弥生時代中期（栗林期）住居址４軒、同時代後期（箱清水期住居址）約40軒、環濠１本、土壙墓２基、平安時代住居址１軒、古墳（５世紀後半～６世紀前半）１基、溝状遺構２本等である。いまだ調査途中であるためこれら遺構の総数は来年の調査終了を待たねばならないが、今年度の調査内容から注目されるものをピックアップして速報としたい。

まず土壙墓が上げられる。現在までに２基の土壙墓が検出されているがこの内の１基から鉄釧とガラス小玉52点が出土した。土壙墓の形態は長方形で両側に小穴があり、所謂小口式の組み合わせ木棺と考えられる。規模は長軸1.9m・短軸80㎝で東西方向に長軸を持つ。鉄釧はこの土壙内中央部北よりから発見された。人骨の残存が確認できなかった為、埋葬頭位は不明であるが、ガラス小玉が土壙内東よりから纏まって出土していることから、小玉が胸飾りの一部と推定すると頭位は東であり、鉄釧も長野県内の多くの出土事例と同じ

遺跡を東から望む。調査区奥の高まりが後家山２号墳
写真手前の溝が環濠で向かって右側の丘陵北斜面につながる

く右腕の装着が考えられる。鉄釧はほぼ円形の形状を保っており、出土時の観察では８～９本の輪が確認できた。また形態が４本は円環で残りが螺旋状に残存している様子で、保存処理等を経なければ正確なことは言えないが、形状の異なる２種類の釧を同時に使用しているらしく、今後鉄釧の装着事例の好資料となる可能性がある。

次に環濠が上げられる。環濠は調査区西よりの丘陵が細くなる先端で確認された。丘陵南斜面が調査対象外となるため、環濠が丘陵全体を巡っているかは不明であるが、検出された部分は深い・浅いの違いはあるがとぎれる部分は無く全周していた。溝の規模は尾根部分で幅３m・深さ約１mを測る。溝で囲まれた範囲は東西約90m・南北約40mであった。

溝の形状は「U」字型で、底面は人が二人ぐらい並んで歩ける状態であった。この環濠の構築時期は溝覆土の下層黒色土から出土した栗林式土器から弥生中期後半と考えている。しかし、、溝の上層からは多量の弥生後期（箱清水式）の土器も出土し、弥生後期（箱清水式）の集落が営まれた頃は環濠がまだ窪んだ状態で後期の人々も何かしらの行為を行っていたことを予想させた。なお、環濠と住居址は中期・後期の時期を問わず重複が認められなかった。今回検出された環濠は弥生中期の構築と考えられ、とすると佐久平では初めての確認ということとなる[註1]。また、今まで環濠と考えられる溝が確認された西一里塚遺跡・戸坂遺跡などはいずれも環濠の一部分しか確認されておらず、その全容や溝に囲まれた集落の様子は不明であった。翻って今回の調査事例はほぼ環濠の全容や集落との関係が類推できる上、弥生中期の集落では珍しく丘陵上に立地するという点からも今後、佐久平の弥生中期集落を考えるにあたってこれもまた好資料となる可能性がある。

最後に古墳を取り上げたい。この古墳は調査前には未周知の古墳であり、今回の調査にあたり後家山２号墳と命名された。なお、後家山古墳は昭和49年に宅地造成のおり発掘調査がなされ、横穴式石室を持つ後期古墳であることか解っている。古墳は調査区西端の丘陵平坦面が消え尾根状となる最も先端に立地する。古墳全体の3/4程が調査されたが、この古墳上には巨大な樹木が６本成育しており調査は困難を極めた。しかし、それら樹木に守られた事が幸いして小規模な古墳にも関わらず高さ約１m程の墳丘が検出できた。

墳形は円墳で、規模は周溝を含めて直径12m程であった。主体部は墳丘の中央部に確認できた。形態は鉄平石と拳大の川原石を組み合わせた竪穴系の石室？で、規模は幅50㎝・長さ約２mを測る。棺床面には胡桃大の川原石を使用していた。ただ残念な事に主体部の西側の大部分が盗掘と樹木の根による改変を受けており正確な規模・構造の把握ができなかった。今後、類例を含めた検証でこの主体部の位置付けは確かなものになるであろう。

出土遺物は、盗掘を受けていたということもあり、主体部の中央壁際から欠損した鉄鏃が１本と周溝内より無蓋の須恵器高坏坏部破片１点、周溝内に転倒した状態で赤彩された短頸の土師器壺が１点出土したのみであった。これら出土遺物より類推すると古墳の築造時期は須恵器や土師器の特徴から現段階では５世紀後半～６世紀前半と考えられる。これらのことから後家山２号墳は今のところ不確実な部分もあるが、佐久地域では希な古墳時代中期の主体部の確認された古墳である。これもまた地域の古墳変遷を考えるにあたって好資料となる可能性がある。以上、後家山遺跡について３つの遺構を中心に紹介したが、調査途中であるため資料の位置付けは報告書をもって最終的な結論としたい。ただ来年の調査を待たずに現在までの調査成果をもってしても後家山遺跡が佐久平における弥生時代の代表的な遺跡のひとつとなることは確実であろう。これで今回は後家山遺跡の簡単な調査速報としたい。

なお最後になったが、11月10日の学会主催の遺跡見学会には悪天候の中、会員・地元の方々を中心に遠くは松本から駆けつけた方々もおり、40名以上の参加者を得られ開催された。林事務局長の挨拶の後、見学会は始まったが途中降り出した雨にも関わらず多くの参加者が最後まで熱心に説明に聞き入り、質問も多く飛び出していた。来年は好条件のもとで開催したいものである。

環濠を取り囲んでの説明。溝の大きさが解る

本文作成にあたっては佐久市教育委員会より遺跡写真掲載にご便宜を、また小山岳夫会員から調査時よりいろいとご教示を頂いた記して感謝申し上げる。

註１　西一本柳遺跡で中期の溝が確認されているが環濠となるかは現時点で不明

中部高地と関東の弥生社会
その１
―箱清水（はこしみず）と樽（たる）―

御代田町教育委員会
学芸員　小山岳夫

１　はじめに

日本列島の中央、長野県・群馬県では、弥生時代西暦１・２世紀を中心とする時期においてそれぞれに特徴をもった土器が作られた。

長野県の東北部千曲川流域で作られた土器は「箱清水式土器」、群馬県で作られた土器は「樽式土器」と呼ばれる。両者は同じ技法の文様（櫛描文（くしがきもん））が描かれるなどよく似ており兄弟関係にある半面で、形態は異なった特徴をもつ。本講義では同一の系統下にありながら異なった発達をして完成されたと考えられる箱清水と樽式土器とその他の文化的要素に焦点を当てて、弥生時代の中部高地：長野県と関東：群馬県（埼玉県北部を含む）の弥生社会を紹介する。

２　弥生時代の年代と日本列島の情勢

最近、ヒノキやスギなどの成長パターンを読み取って、年代を測定する年輪年代学の進歩により、弥生時代の実年代がはっきりしてきた。最新の研究成果では、ヒノキで紀元前912年、スギで紀元前1313年まで、実年代の測定が可能となっている。つまり、現代から弥生時代まではほぼ完全に年輪年代によって実年代を割り出すことが可能になってきたわけだ。

年輪年代学の成果を援用すると本講義で対象とする弥生時代中期は、紀元前１・２世紀、本題の後期は紀元１～３世紀前半を中心とした時期に該当することになる。 ←年表

紀元前１世紀頃、弥生時代中期の日本列島は『漢書』地理誌で「夫れ楽浪海中に倭人あり　分かれて百余国をなす……」と記されるように日本列島が大小いくつものクニに細かく分かれていたらしい。同じころの紀元前108年、中国大陸、朝鮮半島の情勢は前漢武帝が、朝鮮半島を攻め楽浪郡を置いた時代である。

また、紀元後１～３世紀前半、弥生時代後期に入ると、倭の奴の国王が後漢光武帝より「金印」を後57年にもらい、その後、後150年～190年頃には『魏志倭人伝』に「倭国乱れ、相攻伐すること歴年」と記載されているように、倭国大乱と呼ばれるクニ同志の抗争が列島内のあちらこちらであった。日本列島内が15世紀の戦国時代のような状態であったらしい。

その後、後220年、中国大陸では後漢が滅び、魏・呉・蜀が対立する三国鼎立時代、いわゆる「三国志」の舞台となった三国時代に入ると日本列島では卑弥呼が近隣諸国の王の要請で倭連合国家の女王となり、争いの絶えなかった倭国がやっと平静化するのである。

これら中国の歴史書の記述と符合するように弥生時代中期・後期において日本列島各地では地域ごとに異なった個性的な弥生土器が作られた。

弥生時代の特徴のひとつは諸国が分立していたことをあらわすように地域ごとに異なった個性的な土器が作られたことにある。信濃・長野県の「箱清水式」、上州・群馬県の「樽式」土器もその例外に漏れない。日本列島内でもひときわ異彩を放つ個性的な土器がつくられた背景をこれから探ってみることにする。

なお、「箱清水式」と「樽」式は同じ親から生まれたが、育つ地域が違ったために異なった特徴・顔つきを持つにいたった。これからその原因を探ることにする。まず、両者の親に当たる長野県北部出身で紀元前２世紀頃に誕生し、紀元前１世紀頃には現在の長野県・群馬県、埼玉県や山梨県の一部など海なし４県を席巻した「栗林式土器」について解説しておこう。

３　紀元前１世紀頃の長野県

―中期栗林式土器の誕生と長野県から群馬県さらには埼玉県・山梨県への農地開発―

長野県の北部の地域では弥生時代中期後半、紀元前２世紀頃に守旧派の縄目の文様と、新進の櫛描文を見事に融合させた「栗林式土器」が誕生した。

この「栗林式土器」をつくった人々こそが、現在の長野・群馬更には埼玉・山梨県の水田で稲を作る礎を築いた人々である。当初、「栗林式土器」をつくる人々は小勢力であったが、渡来系の人々の大量移住によって、やがて、大勢力を張ることになった。

この大勢力は、善光寺平、佐久盆地、松本盆地、諏訪盆地と徐々に南下しながら長野県東北部の主要盆地に大規模集落を構え、そこを拠点にして、一挙に長野県域の水田開拓を進めていったのである。

そして長野県域に飽き足らず、急峻な峠を越えて群馬県一帯や埼玉県北部、山梨県にまでその分布圏を伸ばしていった。こうして、長野県、群馬県や埼玉県北部、山梨県などの海なし４県にまたがる日本列島の中央に「栗林式土器」を伴った独自な稲作農耕文化が、花開いた。

群馬県の弥生時代中期後半の遺跡からは「竜見町式土器」と呼ばれる「栗林式土器」と瓜二つの土器が出土する。呼び方は長野県と群馬県で異なるが、両者はまったく同一の土器（型式）である。

4　西暦１～３世紀の長野県

―似て異なるものの出現（後期箱清水式土器と樽式土器、住居・墓の近似性、埼玉県へ至ると異なってくる理由）、稲作定着後の開拓状況―

紀元前１世紀に栗林式土器の進出に伴って定着の果たされた長野・群馬県を中心とした地域の稲作文化は、紀元後になると長野県、群馬県それぞれ地域で気候・風土に即して独自の発展を遂げた。土器も中期の栗林式土器と比べると劇的な変化を遂げていった。

紀元後１～２世紀の長野県の後期の弥生土器は善光寺平を中心として発達し、北は、飯山、中野、大町などの北信濃、南は上田盆地、佐久盆地などでも共通の土器がつくられた。これらの長野県の北東部で製作された土器が「箱清水式」と呼ばれる土器である。その大きな特徴は、日常で使用された土器であるにもかかわらず、真っ赤に彩られていることである。これはサビと同じ成分のベンガラ＝酸化第二鉄を半乾きの土器に塗りつけて焼き上げると生じる現象である。

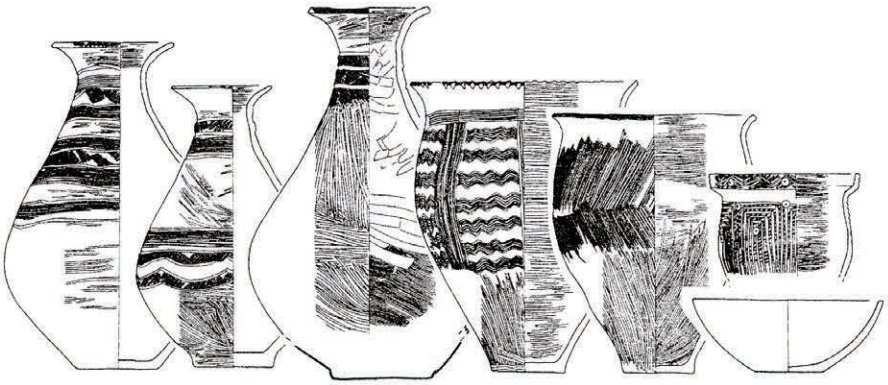
弥生時代は許より、日本列島の原始・古代を通じて、これだけ日常の器を赤く彩る土器が制作されたのは長野県の千曲川流域だけである。どうしてここまで赤く塗ったのか、それはいまだに解明されていない。が、鮮やかに土器を彩る良質なベンガラの供給地が近くにあったか生成技術を持った集団がいたに違いない。また、当時の宗教感覚については知る由もないが、千曲川の沿岸地域の沖積地に発達した稲作文化であったため洪水が多く、それに対する畏敬の念が赤い土器を制作するという行為に発展したのではないかとみる人もいる。

この他、「箱清水式土器」の特徴は、爪楊枝を簾のように連結した工具で描かれた櫛描文様によって土器の表面を飾ることである。前の代の「栗林式土器」は、縄文と櫛描文を併用していた。「箱清水式土器」は縄文を捨て去り、精神的にも縄文社会からの脱却を達成したことを表現した時代の土器なのである。

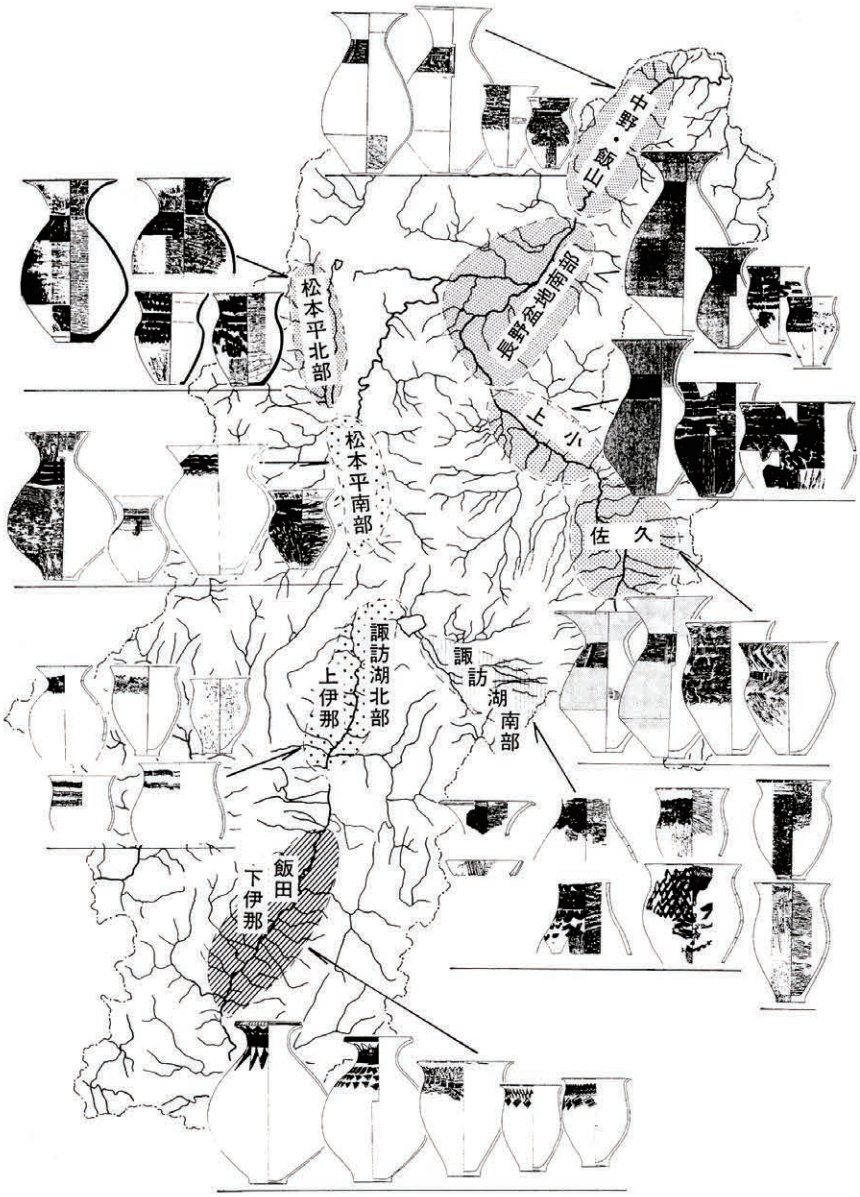
一方、群馬県では、「箱清水式」のように赤く塗らない「樽式」土器がつくられた。　　（次号に続く）

第１表　古代中国・朝鮮と日本の関係略史

年　代	中　国・朝　鮮		日　本（長野県中心）		
	中国王朝	主に日本に関係する出来事のピックアップ	時代	時期	
BC400～300			弥生時代	早前期	日本で弥生時代始まる
BC334		越王が楚に殺され、越人「濱於江南海上」			氷式土器の発展
		燕王喜　秦を避け遼東半島へ			
BC300～100		朝鮮で鉄器の使用始まる			
BC254	秦	秦六国を滅して中国統一		中期	長野市篠ノ井遺跡群の礫床墓
BC219		斉人徐福　数千人の童女をつれ逃亡			
BC202	前漢	劉邦皇帝に即位			
BC195		燕人衛満亡命し、朝鮮王箕準に降る			長野市松節遺跡の木棺墓
		衛氏朝鮮成立			
BC141		漢　武帝即位			栗林式土器の成立
BC108～107		漢、衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪・真蕃・臨屯・玄菟の四郡設置			
BC87		武帝崩御			栗林式土器文化の繁栄
BC82		漢、馬弩関と真蕃・臨屯の二郡を廃止			
BC57		新羅の始祖・赫居世が即位するという			BC52池上曽根遺跡の大型建物
BC18		百済の始祖・温祚、慰礼城に都を定めたという			百余国に分れ（『漢書』）
AD8	新	王莽、新開く		後期	吉田式土器成立
AD12		王莽、高句麗王を殺し、国号を下句麗とする			
AD57	後漢				倭奴国王、光武帝より金印賜る
					「箱清水式土器」成立
AD107					倭国王の帥升ら後漢に遣使
AD180頃					倭国大乱（『後漢書東夷伝』）その後卑弥呼を女王に共立
AD201		曹操、華北一帯を統一			
３世紀初頭					
AD220	三国	後漢滅亡、魏建国（220）蜀建国（221）呉建国（222）			卑弥呼、魏に難升米（なしめ）らを遣使（239）
AD238		魏、公孫氏を倒し、遼東郡、楽浪郡、帯方郡を回収			卑弥呼に魏から「親魏倭王」の金印届く（240）
AD242		高句麗、魏の攻撃により打撃をこうむる			倭が魏に遣使（243）
					卑弥呼が魏に狗奴国との交戦を告げる（247）
					卑弥呼が死去、宗女の台与が即位（248ごろ）
３世紀半ば～後半			古墳時代		奈良県箸墓古墳築造
AD265	西晋	魏が滅亡、司馬氏による西晋が興る			
AD266		倭の女王が西晋に遣使			



栗林式土器（「中間期」）の基本セット



箱清水式土器の分布

平成13年度埋蔵文化財パトロール報告

南牧・川上村編

埋蔵文化財保護委員

去る平成13年10月27日土曜日快晴、佐久合同庁舎に藤沢会長・Ｈ事務局長・Ｔ会員の三名が集合する。目的は平成13年度佐久地区埋蔵文化財パトロール。目的地は野辺山方面南牧村・川上村である。途中野辺山駅にて参加会員と合流する予定であった。

Ｔ会員「おはようございます。今日はよろしくお願いします。事務局長南牧村と川上村の遺跡分布地図持ってきてもらえましたよね。」

事務局長「忘れた。ま　なんとかなる。」

会長「俺、夕方落日に染まる紅葉の写真撮りに行くから。別行動。」

Ｔ会員（心の呟き）「あ～胃痛くなってきた。ともかく出発しよ。」

野辺山駅着。当日は土曜日行楽日和という事もあり駅前にぎやか。

事務局長「どこに遺跡あったけかな～。駅前のこんな看板じゃわかんねな。」

会長「そこら辺の観光案内所行って地図もらってこい。」

Ｔ会員（再び心の呟き）「今日は矢出川を見て帰ろう。」

そこへ南佐久郡在住のＮ会員登場。

事務局長「ご苦労様です。パトロール参加者第１号です。因みにＮさん地図」

Ｎ会員「そうなんですか。今日はよろしくお願いします。私南牧村の遺跡分布地図も持ってきました。」

Ｔ会員（またまた心の呟き）「救われた。」

いざ、４名で埋蔵文化財パトロールに出発。野辺山は全山紅葉まつさかり。

会長「石梨の木は２本あって西からのアングルがいいんだけれど、日が高いか。」

ここで埋蔵文化財パトロールについて説明したい。そもそも埋蔵文化財パトロールが何故行われるかと言うと、『埋蔵文化財パトロールカード』を記載する為である。ではこの『埋蔵文化財パトロールカード』とはいったい何か。このカードは年に１回、長野県教育委員会より長野県考古学会に、県下各地区の埋蔵文化財の状況を調査し報告するように委託した事業の一つで、県教育委員会はこのカードの内容をもとに各地域における埋蔵文化財行政の参考としている。この事業について佐久考古学会は県考古学会から佐久地区のとりまとめを依頼されており、県と地区の橋渡しを地区選出の県学会埋蔵文化財保護委員が行っている。またその活動に対しての報酬は今日佐久考古学会予算にとって少なからず一助となっている。近年の実積では佐久地区より年間70件前後のカード報告を行っている。

然るに、近年のカード報告にあたっては地区内市町村間により大きなばらつきが起こってきていた。確かに市町村間で存在する遺跡数の違いがあり、且つ又会員の在住地にも偏りがあることから純粋に比較は出来ないが、数年来全く報告が寄せられない町村に対して事務局側でどのような働きかけをするべきか模索されていた。そして、本年度の総会の折り、過去事務局より会員各位へのアピールが足りなかったと言う反省点から、『北佐久・南佐久を問わず地元在住の会員に声をかけ、みんなで地域の遺跡を巡ろう。』ということになり本日を迎えた。

天候にも恵まれ午前中は南牧村を巡り、最後に矢出川遺跡へと着いた。

事務局長「や～久しぶり。変わってないな～」

Ｎ会員「草の刈ってある部分が町で買い取った範囲で、国指定史跡の部分なんですよ。」

Ｔ会員（思わず声を出して）「ここがあの有名な矢出川消えたような看板が１枚ポツン」

手前が国指定部分すぐ脇では農家の重機が何かしらの作業をしていた。

会長「あー光った。何だマルチか。」

とにかく午前の部終了、昼食の後川上村へと向かう。

事務局長「川の向こうが蕨窪遺跡、この下側が馬場平遺跡。」

Ｔ会員「さすが川上出身、地図も見ないでよく分かりますね。」

事務局長「だから心配いらないって言っただろう。因みにあの畑は黒曜石が拾えて、その隣の畑は僕の初恋の人の家の畑で、当時は前を

通ると何だか恥ずかしくて、今も沸々とこみ上げるものが。あの川の橋のたもとでは(^O^)(^O^)(^O^)(^O^)」

Ｎ会員「(^_^)(^_^)(^_^)(^_^)(^_^)」

Ｔ会員「(?_?)(?_?)(?_?)(?_?)(?_?)」

そんなこんなで、一行は大深山遺跡に到着。遺跡は落葉松林の中に昔と変わらぬたたずまいを見せていた。ただ、遺跡より上部の山麓斜面には非常に美しいマレットゴルフ場が整備され縄文復元家屋の隣には休憩小屋と展望台らしき建物が併設されていた。帰り道に大深山遺跡よりの出土品が展示してある考古資料館に立ち寄ったがカギがかかっていた。

会長「このアングルしか撮る所ないな～。」

かくして、10月最後の土曜日は暮れていった。

以上、本年の第１回埋蔵文化財パトロールの状況？報告を致しました。今回のパトロールを通して遺跡を発掘調査する・しないというまずもっての問題にもまして、『保護・保存・活用』という昔から言い使われたことばではあるがその重要性を感じた１日でした。

次回は千曲川を少し下って小海・臼田近辺を考えております。案内が回りましたら地元在住の皆様よろしくお願いします。

大深山遺跡隣接で建物が建っていた。遺跡の範囲はどのようになっているのであろうか？

会長ご指導のもと撮られたアングル「手前重機と遠景ビニールハウスが効いている」との弁でした。

日本海の私見

藤森英二

「日本海の私見」などと大きな風呂敷を広げてしまったが、単に個人的な旅の風景を並べたに過ぎない。

私の中で海と言えば、岩場でカニや小魚を見つけることに熱中し、釣り好きの父に連れられ東京湾でキスやハゼなどを釣っていた記憶が強く、未だに海水浴場でもカップル達に不思議な目で見られながら魚を追っている。無限の生命を育む海という環境は、海なし県の埼玉に生まれ育ち、今また海のない長野県に住む者としては、もはや憧れに近い物がある。

しかし日本海というのは小学校低学年の頃一度佐渡に渡ったのみで、その後は成人するまで見ることもなかった。ところが大学生活も終わりに近付いてから、にわかにこの海との係わりが生まれてきた。まず、平成７年の３月、まだ春とは言えない時期、大学の調査で新潟県の最北端、山北町の上山遺跡の調査に参加した。埼玉から車で向かったため、途中日本海の荒波が造った巨岩の造形を、友人と二人声を挙げて眺めた。この遺跡から発見された巻貝形土製品は有名であるが、この時の調査は一週間ほどで、過去（昭和30～40年代）の調査トレンチや縄文晩期の土偶を見出すなどの成果を残している。同時に時折雪さえ舞う鉛色の空と、近くの海岸を抉るような荒波が深く印象に残った。そのすぐ後に、新潟に就職が決まった兄を乗せ、再び車で新潟に向かう。引っ越し先は新潟市内で、地図上では海も近いところだったが、この時は兄との別れで感傷的になっていたのか、逃げるように帰路に着いたのを覚えている。しかしその一年後、就職して佐久に移り住み、目の前を流れる相木川（千曲川上流域の支流）を独り見るとき、この流れがあの場所に行き着くのか、という実感が湧いたものであった。

その後は何かと日本海方面に縁がある。妻と見つけた新潟県のある海水浴場は、今でも私たちの取って置きの場所であるが、それはともかく、就職後格闘している佐久の縄文土器等を見ていくうちに、どうも日本海側とのつながりに注意しなければいけないと感ずる

ようになった。特に平成10年に調査を行った北相木村の坂上遺跡の整理作業を進める中でその感を強くした。まず縄文前期では、まだ日本海とはいかないまでも出土する土器は東北信、つまり千曲川水系でのまとまりが強いこと、中期や後期ではさらにすすみ北陸地方、言い換えると千曲川（信濃川）中下流域の（あるいはその影響を受けた）土器が佐久には多いことなどを再確認した。平成12年の夏に兄の勤める長岡市の新潟県立歴史博物館を訪れたとき、火炎土器で有名な馬高遺跡を見学し、その沢向こうが三十稲場遺跡と知って、言い難い感動を覚えた。坂上遺跡の土器を分析する中で、この遺跡名を冠した縄文後期の土器型式（南三十稲場式）を避けて通れなかったからである。

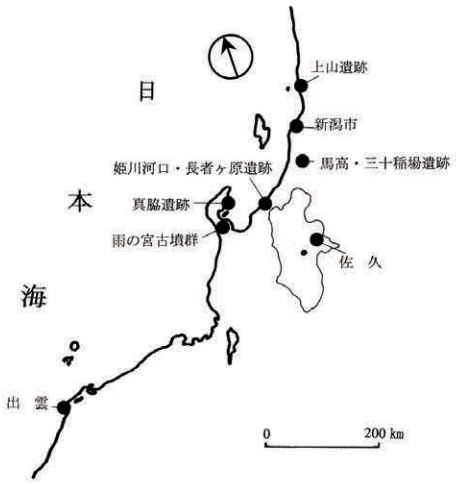
さらに本会会員の桐原健先生も執筆陣に加わっておられる『古代の日本　６中部』という本を再読したこともあり、私の興味は古代「越（古志）」と呼ばれた現在の新潟、富山、石川、福井各県の歴史に向かっていった。この本はやや古いとはいえ、歴史への好奇心をかき立ててくれる名著だと思う。私はこの地域が日本という国の歴史に与えてきた力を知る欲求にかられた。その後平成13年の夏に妻と車でこの地域を巡る機会を得た。直江津から姫川河口まで海岸線を走り、縄文時代の翡翠製品工房とも言うべき、糸魚川市長者ケ原遺跡をまず訪れた。ところでこの翡翠の発見、いや再発見にまつわる話は実に興味深い。大正から昭和初期、まだ考古学者や地質学者が国内産の翡翠原石を確認するよりも前。『古事記』に書かれた、出雲のヤチホコノカミ（オオクニヌシ）から求婚された越の国のヌナカワヒメという名前が「翡翠の勾玉の川の姫」という意味だととらえた一人の詩人が、姫川での翡翠確認の道を開いたというのだから驚きである。その後富山、石川両県の各地を回りながら能登半島にも足を伸ばした。妻は学生時代、鹿西町雨の宮古墳群の調査に参加したこともあり、流れる山並みを懐かしんでいた。この古墳群は、山地に挟まれ半島の西の日本海と東の七尾湾に望む、細長い邑知平野という場所を見下ろしている。機内政権とつながりのある能登国創造のころ、５世紀後半以後の所産だそうである。その後大量のイルカ骨の出土なので知られる縄文時代前期から晩期の能都町真脇遺跡などを訪ね、能登半島の北端に近い場所では大学の同級生で現在石川県の埋蔵文化財センターに勤める友人と再会。能登の地にも開発の波は確実に侵攻している事実を知らされた。

ところで日本海側の各地域が海上交通により結ばれていたことは、考古学上の成果からも明らかというべきであるが、とくに出雲と古志の交渉は、先の『古事記』の記事のみでなく、『出雲国風土記』にもいくつかの伝承がある。そして11月、今度は山陰地方を訪ねる機会に恵まれ、ついにヌナカワヒメに求婚を迫ったオオクニヌシの土地、出雲とその周辺を歩くことが出来た。しかし自由の利く旅ではなかったため、39個の銅鐸を見た加茂岩倉遺跡や多量の銅矛・銅剣・銅鐸が埋められていた神庭荒神谷遺跡、弥生後期に隆盛をみる独特の四隅突出形墳丘墳、そして弥生時代から特に古墳時代に盛んになる玉生産関連の遺跡を見られなかったのは心残りでいる。この道程で稲佐の浜を見た。戦いに破れ須和の海まで逃げてきた諏訪神社の主神タケミナカタが、天孫一族タケミカズチと争ったその場所だという。一気に信州に立ち戻る。これらをそく歴史上の事実の反映と見るのはあまりに早計だが、もしかしたら中央のみの視点では明らかに出来ない隠された歴史の真実を潜ませているのではないか、そんな想像が浮かんでくる。

思えば偶然にも、日本海に注ぐ大河の上流に住む自分が新潟の北端の遺跡から徐々に南下し、出雲の日御碕にまで到達したことになる。縄文、古代、現代と、時代によりその距離感や親睦度は異なるのだろうが、山国には無い海という環境に向ける好奇心は、もしかしたら同じだったのではと、つい想像しながら、また佐久という土地を見つめている。

主な引用参考文献

1970『古代の日本　６中部』大場磐雄・下出積與編　角川書店
1993『雨の宮古墳群　環境整備事業に係わる第一次発掘調査概報』　鹿西町教育委員会
1996『戦後50年古代史発掘総まくり』朝日グラフ別冊　朝日新聞社
1998『図説古代出雲と風土記世界』瀧音能之編　河合書房新社



本文中の主な地名など

佐久考古学会講演会「縄文の心 弥生の心」～春成秀爾先生をお迎えして

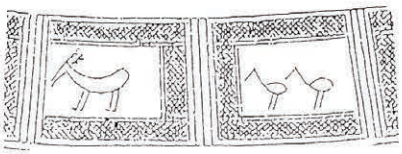
去る12月８日、佐久市中込の橋場公会堂において平成13年度の佐久考古学会講演会が行われました。国立歴史民俗博物館教授の春成秀爾先生をお招きし「縄文の心、弥生の心」という演題でお話をしていただきました。当日は厳しい寒さにもかかわらず、60名近くの方が先生のお話を聞きに訪れ、用意した会場は正に満員状態でした。この中には会員以外の方々も多く含まれていましたが、これも先生のご高名のなせる技であり、考古学の世界を多くの方に知って頂く上で、会としても喜ぶべきことであったと思います。

さて、春成先生は縄文・弥生時代を通して、実に様々な分野での研究が知られ、その業績はここで改めて述べるまでもありませんが、当日は弥生時代の土器や銅鐸の絵画的表現、また縄文時代の土器の文様やその変遷などから、彼らの心の風景に迫る話をしていただきました。あらためて、遺物を様々な角度から観ることの大切さを教えていただきました。

また先生は一昨年前に発覚した前期旧石器遺跡の捏造問題にも心を割いておられ、現在様々な活動に精力的に取り組まれていますが、それに関連して、日本考古学における捏造という行為についても話をされました。このような人の心の闇とも言える部分の問題にも、今後私たちは立ち入る勇気を持たなければいけないのではないか。そんな思いも起こさせていただいた気がしています。

この日の夜は先生を囲んでの親睦会（会の忘年会？）にも参加していただき、ここでも興味深いお話を披露していただきました。そして翌日は堤隆会員の案内で北相木村栃原岩陰遺跡や南牧村矢出川遺跡などを見学され、佐久の風景をご覧頂きました。

※尚、下に掲載した図は講演会資料から転写させていただきました。ただしコメントは編集（藤森）によります。



最後の銅鐸絵画（1900年前、静岡県悪々谷）

現れては消えていった銅鐸の上の絵画も、最後に残されたのはシカとトリだった。弥生時代、シカの狩猟はそれまでと比べ激減すると言われている。（弥生の心）

雌雄２匹のオオサンショウウオ
（4500年前、長野県狐沢）

オオサンショウウオ（清流に身を潜め、体長１ｍを超える個体も存在する）がモデルともとれる文様は、世代を超えて受け継がれている。水の主、水の精だろうか？（縄文の心）

♪　編集後記　♪

講演会にお出で頂いた春成先生が、遺物を観察されるときに描かれるスケッチを覗かせていただいた。ペンですらすらと描かれるのであるが、これがすでに実測図と言える程のものであった。先生のあらゆる考察も、細かな遺物の観察から生まれていることを実感した次第である。遺物をじっくり見もしないでものを言う傾向が強い自分としては、大いに反省させられた。捏造云々を見抜くとかいうことも重要かも知れないが、浮き足だたず、ただひたすらに真実を見る目を養わなければと、今更ながら痛感している。

（藤森）

佐久考古通信　№83

発行所　佐久考古学会
〒385-0056　長野県佐久市桜井632-10
林　幸彦方
郵便振替　00570-9-2842
0267（63）1963

発行者　藤沢平治
編集者　藤森英二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2002.6.29. No. 84

★ 目　次 ★

日本の遺産・世界の遺産11　麦草峠黒曜石露頭……1
考古逸品　4500年前の“あくび”……堤　隆……2
サメかサケか　―飯山市山ノ神遺跡出土魚形線刻画土器をめぐって―……中沢道彦……4
佐久考古学会のホームページ オープン！……7
中部高地と関東の弥生社会 その２　―長野の箱清水と群馬の樽―……小山岳夫……8
進む“浅間縄文ミュージアム”建設……12

シリーズ　日本の遺跡・世界の遺跡11

麦草峠黒曜石露頭

八千穂村の大石川流域に沿って国道299号線を上りつめると、標高2000mの麦草峠に出る。峠の手前、白駒池への山道の直前の道路際に、黒曜石の露頭が顔を出している。流紋岩体に縞状に黒曜石が入る断面が観察され、大きさは人の背丈ほどであろうか。河内晋平先生によれば、稲子岳溶岩流に由来するものであるという。

麦草峠の黒曜石原石は、すでに３万年前の後期旧石器時代初頭から開発されていたことが、産地同定の結果からわかっている。麦草峠から20km離れた川上村立石Ｂ遺跡や80km離れた野尻湖遺跡群、100数十kmの距離にある南関東の後期旧石器時代初頭の台形様石器に麦草峠の黒曜石が用いられている。

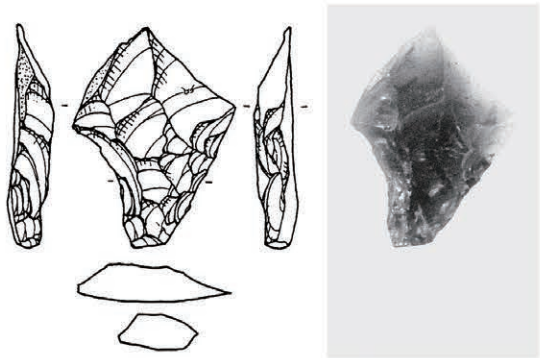
実際、麦草峠では旧石器が採集されており、氷河時代にこの2000mの峠に旧石器人が足を踏み入れた証拠が残されている。ここはいわば、日本でもっとも標高の高い旧石器遺跡ということになろう。

縄文時代においても、麦草峠の黒曜石原石が用いられたことがうかがえるが、星糞峠などにみるようなクレーター状の採掘坑は確認されていない。

信州の黒曜石産地には、和田峠産地群、八ケ岳山地群、浅間産地群の３ケ所がある。麦草峠は冷山・双子池などの地点とともに八ケ岳山地群に属している。

信州産の黒曜石の利用率は、周辺地域および関東などにおいて和田峠産地群のものが最も高く、気泡が縞状に混入し和田峠産に比べ質の落ちる八ケ岳山地群の利用はこれに準じる傾向がある。一方、浅間産地群の黒曜石は、１万数千年前に噴出した比較的新しいもので、噴出後もその粗悪さから石器として利用された例が確認されていない。

麦草峠黒曜石露頭



八ケ岳産の黒曜石を用いた台形様石器（2/3）
（川上村立石Ａ遺跡）

考古逸品

4500年前の

“釣手土器”と呼ばれるこの縄文土器は、2001年秋、御代田町史跡宮平遺跡から出土した。大きく“あくび”をしたような表情がなんともユニークで、ついた愛称が“あくびちゃん”

90%以上の良好な遺存率をみせ、佐久地方の中期縄文土器を代表する逸品である。

Data

釣手土器

- 時代：縄文時代中期
- 遺跡：宮平遺跡
- 所在：北佐久郡御代田町
- 機能：ランプ？？
- 高さ：28センチ
- 愛称：あくびちゃん

釣手土器は謎の多い土器である。その機能は主にランプとされるが、必ずしもそうとは言い切れない。この“あくびちゃん”も、土器の外面胴部周辺にベッタリと炭化物が付着しており、土器内部で火が灯されたというよりは、外部が直接的に火に掛けられたことがうかがえる。

その所有は住居１軒に１個といった状況ではなく、ムラに１個といった特別な所有物で、非日常性の高い土器といえそうだ。

綿田弘実氏によれば、釣手土器は中部高地に分布が集中し、長野県での出土事例は150例を数えるという。

この土器は、2003年御代田町にオープンする“浅間縄文ミュージアム”に展示される予定である。

撮影：小川忠博

“あくび”

御代田町教育委員会　堤　　隆

サメかサケか

―飯山市山ノ神遺跡出土 魚形線刻画土器をめぐって―

中沢道彦

昨平成13（2001）年８月、鳥取県白兎海岸周辺の日本海で人を襲う可能性があるとされるシュモクザメが多数回遊し、鳥取県内17の海水浴場の内11ヶ所が遊泳禁止になったサメ騒動があった。８月７日には体長２m前後のシュモクザメが27匹確認された。

古事記「神代」には著名な「因幡の白兎」の神話がある。因幡の白兎は隠岐島から因幡国気多の岬までを、騙した和邇（わに）の群れの列の上を渡り、和邇に赤裸にされた。今日でも中国地方ではサメを「わに」と呼び、和邇はサメと解釈するのが定説のようであるが、和邇はシュモクザメかと想像を逞しくさせてしまう出来事でもあった。ちなみに山陰から北陸、九州の一部ではシュモクザメをカセワニ、カセワンとも呼ぶようである。

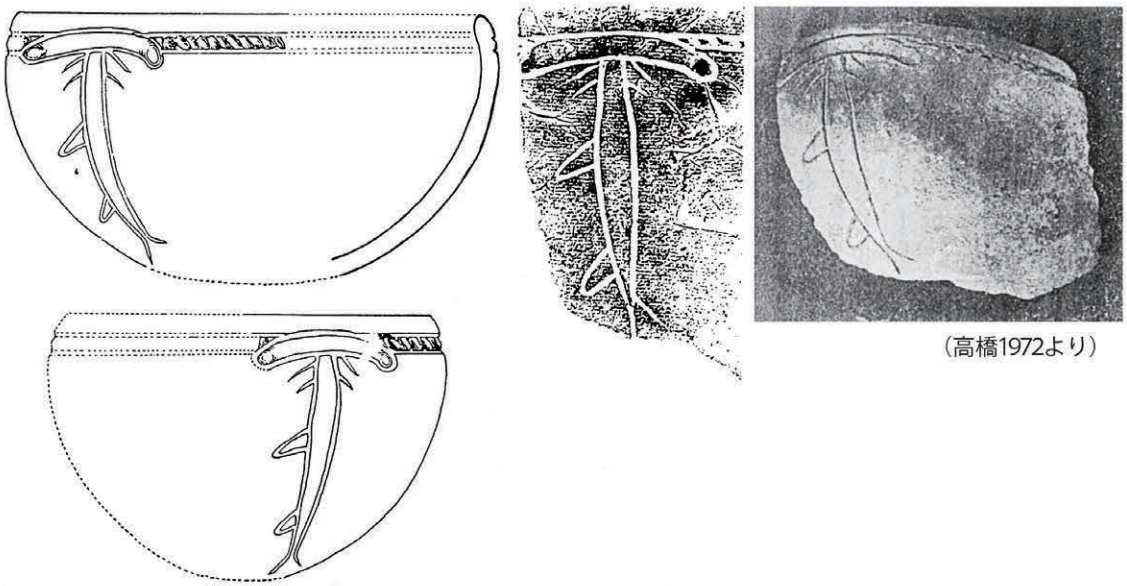
シュモクザメは頭がＴ字形なのが特徴で、成魚は３mになる。ネズミザメ目（Lamnida）、シュモクザメ科（Sphyrnidae）、シュモクザメ目（Sphyrna）、日本ではシロシュモクザメ（Sphyrna zygaena）、アカシュモクザメ（Sphyrna lewini）、ヒラシュモクザメの３種が生息する。

山陰のサメ騒ぎに触れ、筆者は前々から気にかけていたある資料に思いを巡らせた。それが長野県飯山市山ノ神遺跡出土の縄文時代晩期の魚形線刻画土器である。シュモクザメを描いたか、サケを描いたかで議論が分かれている代物だ。北信濃の地理的条件から最近ではサケ説が有力であるが、シュモクザメ説の可能性を再検討したい、それが本稿の目的である。

山ノ神遺跡は長野県飯山市静間字法華寺、飯山盆地の南端、千曲川に向かう田草川が形成した扇状地上に立地する。標高380m前後である。昭和47（1972）年、田草川扇状地一帯の土地改良工事に伴い、飯山市教育委員会により緊急発掘調査が行われた。調査では縄文時代晩期佐野Ⅰb式、佐野Ⅱ式期の川原石が不規則に集中する集石遺構が検出され、それを中心に約450個体分の土器片、土製耳飾８点、石器67点、石剣４点などが出土した。今回取り上げる資料もその集石遺構より出土し、資料の重要性を鑑みた高橋桂により、調査年にはいち早く『信濃』誌上で「魚形線刻画のある土器片」として報告されている（高橋1972）。

では高橋による絵画土器の所見を引用しよう。

「長径十二糎、短径九．三糎ほどの楕円形?形土器の約四分の一に当る部分である。線刻は、口縁部をめぐる刺突文帯を途切らせて描かれる撞木状の描写と、それにＴ字状につながる魚形の部分とがある。土器の焼成以前に箆上の器具を用い、かなり流暢な線を描出している。なお撞木状の描写はやや弯曲し、両端に隆起部がある。



（高橋1972より）

第１図　山ノ神遺跡魚形線刻画土器（Ｓ＝1/2）

魚形は、器体の側面に垂直に描かれる細長い紡錘形の体部、およびその側線がそれぞれ外方に屈曲して表現する尾、体部の左側にみられる二個の鰭状描写、そして、上端の両側に対称的に描かれる四本の髭状描写によって構成される。」

「土器の器胎は灰褐色に勝り、表面の一部には黒色の斑状部分がある。小石粒を比較的多く含み、表面は研磨されるが、内面の研磨はゆきとどいていない。薄手の作りで、刺突文帯の一部には赤色顔料の痕跡が認められる。」

筆者も昨年夏、本資料を実見する機会に恵まれ、高橋の観察の的確さを追認できた。ちなみに沈線の切り合いにから確認できた魚形線刻の順番は①撞木状の描写②細長い紡錘状の体部③鰭状、髭状表現となる。

本資料の年代的位置付けについては、「刺突文帯」が鍵となる。その出現は佐野Ⅰ式後半、盛行は佐野Ⅱ式、可能性としては佐野Ⅱ式となる可能性が高い。

さて本資料のモデルが問題となる。まず魚類なのは間違いない。高橋は断言はしないが、サケ説とシュモクザメ説を提示している。報告の時点において仮説として選択肢はでているといえよう。

最近ではサケ説が有力だ。宮下健司によると、昭和15（1940）年に飯山市西大滝ダムができる以前、千曲川流域の長野市若穂では、サケが平年7000～8000匹、豊漁年で１万匹を越す漁獲高があったという。また長野市教育委員会調査による長野市宮崎遺跡では第５、９トレンチで出土した鹿角製銛に着目し、その対象物をサケ、マスと推定する。近年までの千曲川のサケ、マス漁は銛に似たヤスや大きな四つ手網が用いられたという。ちなみに宮崎遺跡の報告書で確認すると、第５、９トレンチとも縄文時代晩期の土器が出土し、特に５トレンチでは晩期前半の資料が多量に出土したという。千曲川流域におけるサケ、マス論の展開において宮下が着目したのが山ノ神遺跡の問題の資料となる。宮下は本資料のモデルの候補のひとつを千曲川流域の魚類に求め、その場合は形態からサケの可能性を指摘した。また渡辺誠は本資料をサケとした上で、毎年冬に川に戻ってくるサケの姿から再生の概念を見出そうとした。

宮下の縄文時代における千曲川流域でのサケマス論は蓋然性が高く、今日その地域に住む筆者としても非常に魅力的である。今後、深耕すべき課題なのは間違いない。ただし、宮下自身も本資料のモデルをサケと断定している訳でなく、シュモクザメの可能性についても触れている。その他、散見される縄文時代の原始絵画に関する論稿でも本資料のモデルをサケとする例が多い。

勿論、冷静に内陸部の地理的条件を考えれば、本資料が淡水魚、そしてサケをモデルとする可能性が高いことは認める。ただ、一縷の望みながら海水魚の可能性もゼロとはいえまい。海は遠いか、近いかの問題ともなる。

サケ説の問題点を検討しよう。サケとした場合、「撞木状」の描写を如何に考えるかがその第１点目である。前述のとおり、撞木状の部分は魚形の部分より先に描かれている。それなりに意識された部分といえる。順当に考えればその捕獲に用いた道具と考えられるが、どうもいい候補がない。例えばヤナと考え、ヤナでサケを捕獲する描写とした場合、「撞木状の描写」とヤナがさほど似ていると思われず、またヤナ漁の対象としてサケは大きすぎて不自然ではないかと素朴な疑問が湧く。

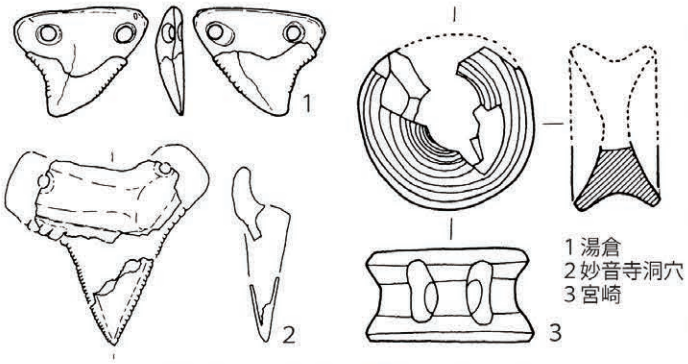
撞木状の部分の両端が隆起している点に着目すれば石棒、石剣と見れなくはない。しかし石棒や石剣を用いて、サケを捕獲できるのか。かつては東北出土の青龍刀形石器をサケ、マスの捕獲具とする説が提出されたこともある。石棒、石剣も捕獲具に用いられたことは否定しないが、その可能性は極めて低いのではないか。

問題点の第２点目として鰭の描写が挙げられる。本資料の鰭状の描写をサケの腹鰭、臀鰭としよう。千曲川でサケが獲れた頃、水面上に背鰭を出して遡上するサケをもって、漁労関係者はそれを認識したという。漁どる側からすると、サケの背鰭はそれなりに意味のあるものであったろう。とすれば、本資料をサケとした場合、腹鰭、臀鰭があって、背鰭の描写がないのはどうも不自然にも思われる。

それではシュモクザメ説についてはどうか。本資料に関して、シュモクザメ説が少数意見なのは海との距離による。

しかし、内陸部では長野県北相木村栃原岩陰遺跡では縄文時代早期初頭（草創期後半）表裏縄文土器群が出土するレベルからアオザメの歯、高山村湯倉洞窟では縄文時代早期の埋葬人骨に伴ったとされるメジロザメ類の歯を加工した垂飾品、秩父盆地北東部の埼玉県皆野町妙音寺洞穴では縄文時代早期の包含層からイタチザメの歯を加工した垂飾品が出土する。縄文時代日本海沿岸でのサメ文化論を展開する藤田富士夫によれば、サメの歯を装飾する風習は、強いもののシンボルを身に付けることで、見えざる力を得て、その威力で身を守ろうとしたものと考察する。藤田の論を前提とすれば、山側でも海に棲むサメの歯に一定の価値を認めることで海岸部からの交易品として受け入れている例ということになろうか。

前述の宮崎遺跡では第５号土壙墓の抜歯されたの頭骨の脇からサメの椎骨製の赤色塗彩された耳飾も出土している。樋泉岳二氏の御教示によると、その椎骨は



第２図　サメの歯・骨製品（Ｓ＝1/1）

サメの椎骨の特徴を有し、メジロザメ科の可能性が高い。海岸部から製品が搬入されたか、持ち込まれた素材が加工されたかは定かではないが、興味深い資料ではある。

また前述の湯倉洞窟では縄文時代草創期のＸ層からエイの椎骨、Ⅷ灰層からヒラメの尾椎骨、また海産貝類も出土する。エイやヒラメは干物として持ち込まれた可能性が高い。いずれにせよ、中部高地と海側とはそれなりに交流をもっているようだ。

本資料が縄文時代晩期後半佐野Ⅱ式に比定される可能性が高い点は既に述べた。佐野Ⅱ式は長野、山梨の中部高地、飛騨地方、上越地方に主体的に分布する。同一土器型式の作り手間でも日本海側の上越地方と中部高地側との交渉関係が予想できる。

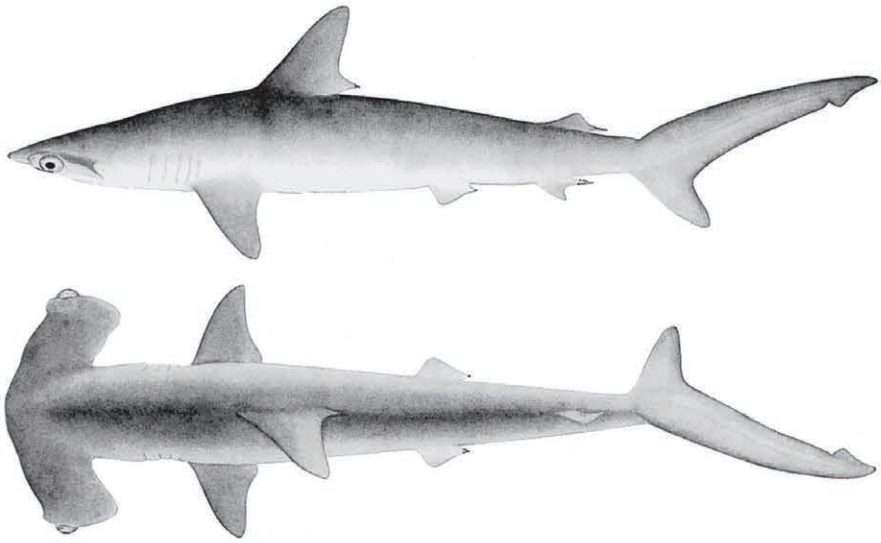
さて山ノ神遺跡の資料をシュモクザメと考えた場合、撞木状の描写をその頭部とすればよい。両端の隆起部は眼玉となる。撞木状近くの髭状の短沈線はサメ体部にある鰓孔（さいこう）の描写の誤りとはいえないか。ただサケ説と同様、背鰭がない点は気にかかる。体部片側のみの２つの鰭状の描写は腹鰭、臀鰭ということになろう。

ちなみに時代は異なるが、兵庫県出石町袴狭遺跡では古墳時代のものと推定されるシュモクザメが描かれた箱形木製品が出土する。そこには背鰭と腹鰭らしき表現が認められている。

ここでシュモクザメの分布域を再確認しよう。今日、日本に生息するシュモクザメはシロシュモクザメ、アカシュモクザメ、ヒラシュモクザメの３種。内、シロシュモクザメは北海道を含む日本各地、アカシュモクザメは関東地方以南、ヒラシュモクザメは九州、琉球列島に生息する。シロシュモクザメ、場合によればアカシュモクザメならば上越地方を中心とした日本海沿岸もその射程に入る。ただ、沿岸域に生息するアカシュモクザメに比べると、シロシュモクザメはより回遊性が高く、沖合域にも出現するという。ちなみに久田正弘氏のご教示によると北陸の能登半島でもシュモクザメの捕獲が確認できるという。

なお、筆者が確認できた縄文時代のシュモクザメの遺存体は長崎県上県町志多留貝塚出土例程度であり、また縄文時代中～晩期のサメの歯が138点も出土した富山県朝日町境Ａ遺跡での同定結果ではアオザメ科120点、ネズミザメ科15点、ネコザメ科15点、ホオジロザメ科２点の内訳となっており、シュモクザメはない。いない訳ではないのだから、個人的には今後の資料蓄積に期待を寄せている。

山ノ神遺跡例をシュモクザメとした場合、本資料は如何なる意味をもつと考えるべきか。シュモクザメの独特な容貌かつその獰猛性、そこに畏怖の対象、ひい



第３図　シロシュモクザメ（檜山・安田1971より）

ては信仰の意味合いを見出すことはできないか。先に紹介したサメの歯を装飾する風習にはその装着者がサメの威力を一体化できるとする解釈と同様に、山ノ神遺跡の魚形線刻画土器もサメの威力を意味合いにもたせたものとは考えられないか。または、サメの威力を評価しなくとも、シュモクザメの独特の容貌への畏怖とまたそれが棲む海への憧憬と考えるだけでも充分な意味合いを見出せるといえる。

以上願望の連鎖といわれればそれまでだが、仮説としてシュモクザメ説を補強する試みを提示してみたい。

主要参考文献

青木和明・矢口忠良他　1988 『宮崎遺跡』長野市教育委員会

阿部宗明編　1986 『決定版　生物図鑑　魚類』世界文化社

金子浩昌他　2001『湯倉洞窟』高山村教育委員会

佐原真・春成秀爾　1997 『原始絵画』 講談社

高橋桂　1972 「魚形線刻画のある土器片」『信濃』24－11　信濃史学会

長沼　孝　1984 「遺跡出土のサメの歯について」『考古学雑誌』70－1　日本考古学会

中坊徹次編　2000 『日本産 魚類検索 全種同定　第二版』 東海大学出版会

檜山義夫・安田富士郎　1971 『日本産魚類大図鑑』講談社

藤田淳　1998 「出石町袴狭遺跡出土の「箱形木製品」について」『考古学ジャーナル』432　ニュー・サイエンス社

藤田富士夫　1998 『縄文再発見』 大巧社

益田　一他　1984 『日本産魚類大図鑑』 東海大学出版会

宮下健司　1995 「サケ・マス漁と宮崎遺跡」『図説・北信濃の歴史　上』 郷土出版社

宮下健司他　2000 『長野市誌　第二巻　歴史編　原始・古代・中世』 長野市

矢野憲一　1979 『ものと人の文化史35　鮫』 法政大学出版局

渡辺　誠　1996 『よみがえる縄文人』学習研究社

佐久の原始・古代

佐久考古学会のホームページ　オープン！

2002年度７月から、佐久考古学会のホームページがオープン！します。イベントのお知らせや、楽しい内容が盛りだくさんです。ぜひ、見てね!!あわせて電子メールも開設されます。

★電子メール
sakukoko@mx2.avis.ne.jp
★ホームページ
http://w2.avis.ne.jp/~sakukoko

内　　容

★　佐久考古学会の活動

佐久考古学会の本年度の行事や、これまでの活動を紹介します。歴代の役員や、活動のようすも、懐かしい写真で紹介します。

★　最新！佐久考古ニュース

最新の佐久地方の発掘情報、佐久考古学会のイベントをお知らせします。

★　佐久の遺跡

旧石器から中世まで、佐久地方の代表的な遺跡を写真で紹介し、解説します。

★　佐久の遺物

旧石器から中世まで、佐久地方の代表的な遺物を写真で紹介し、解説します。

マンロー博士　イラスト：さかいひろこ

★　ミュージアムショップ

『佐久考古通信』バックナンバーや、『赤い土器を追う』などが購入できます。

★　掲示板

来訪者の自由な意見を述べるコーナーです。

中部高地と関東の弥生社会
その２
―長野の箱清水（はこしみず）と 群馬の樽（たる）―

御代田町教育委員会
学芸員　小山岳夫

５　紀元１～３世紀の群馬

紀元１～３世紀の群馬県では、「箱清水式」ほど赤く塗らない「樽式」土器がつくられた。赤く塗らない他に「箱清水式土器」との顕著な違いは、壷に見られる。まず、形が違う。器の口元の部分は「箱清水式土器」肉薄であるのに対し、群馬の「樽式」は二重に仕上げており、肉厚である。また、文様の構成も櫛描文を採用する点は共通するが、「箱清水式」ではもっぱら、煮沸き用の甕に用いられる簾状の文様と、波状の文様を「樽式」では壷の文様として当たり前に使っている。この他、埼玉県北部地域、神奈川県東部地域にも「箱清水式」「樽式」と同系等の土器が分布している。２世紀頃に中部高地に端を発する特有な弥生土器は関東の奥深くにまで進出していたのである。

中期の「栗林式土器」を基点として地域独自に発達し、変化を遂げてきた「箱清水式」と「樽式」であるが、両者の違いは時間を経るごとに著しくなっていった。同じ親の血を引いているためどことなく顔つきは似ているが、急峻な峠を隔てて環境（寒さもかなり違う）の違う地域で育ったことによって、全体的な雰囲気がかなり違う土器が両地域で仕上がったのである。

この他、発掘調査の成果から明らかになった「箱清水式」と「樽式」を取り巻くさまざまな文化的要素を比較して、その共通性と違いを整理してみよう。

写真１　箱清水式土器

写真２　樽式土器

６　集落が営まれたところ

「箱清水式」と「樽式」という土器の顔つきの違いはあるが、長野県と群馬県の弥生集落の立地は海抜が極端に違うことを除けば、良く似通っている。

ちなみに群馬県は高崎市（日高遺跡、新保遺跡）で100m前後、前橋市（清里庚申塚遺跡）で160m、渋川市（有馬遺跡）で170m、長野県よりの富岡市（中高瀬観音山遺跡、南蛇井増光寺遺跡）でも220～250mである。一方、長野県は、善光寺平で350m、上田市で500m、佐久市では海抜700mであり、佐久市域などはまさに当時の稲作の限界ラインぎりぎりに花開いた弥生文化である。

遺跡立地の共通性について

長野県佐久市後家山遺跡

丘陵上に立地し、海抜は710mで約70軒の後期　紀元２世紀の竪穴住居址が発見されている。ここでは少なくとも２時期＝50年くらいに渡る生活の営みが継続されたようである。また、この丘陵下の平地、海抜680mの地点の樋村遺跡からも弥生集落が発見されている。

群馬県富岡市中高瀬観音山遺跡

海抜250mの丘陵上にあり、弥生時代後期の100軒を超える竪穴住居が発見されている。ここでは、弥生時代後期紀元後２世紀を中心とする時期に、100年くらいの継続的な生活の営みがあったことが確認されてい

写真３　後家山遺跡

写真４　中高瀬観音山遺跡

る。

群馬県富岡市南蛇井増光寺遺跡

丘陵から30m下の平地に立地し、180軒を超える弥生時代後期後半２世紀を主体とする集落が発見されており、中高瀬観音山遺跡と同様に約100年くらいの継続的な集落の営みがあったことが確認されている。発掘地は遺跡のごく一部であるため、この数倍規模の当時としては破格の大規模集落が営まれていた可能性が高い。これら当時の大規模集落が時を同じくして丘陵と平地に存在していたのである。

後家山・中高瀬観音山遺跡の事例からわかるように長野・群馬県ともに生活に使う水の確保が容易でない急峻な丘陵上に好んで集落を営む傾向がある。こういった丘陵上の集落は、眺望が良く、外敵に攻められた際には容易に敵の動きが察知できるし、急峻な丘陵という自然の要害にあるため敵から攻められにくいなどの防御的条件が整っているため、戦争に備えた集落と見る人もいる。が、今のところ確証はない。戦争に備える以外にも、好んで丘陵上に集落を営む理由（米社会とはいえ、生産手段は狩猟・採集に依存する部分もかなりあったのではないか）があったに違いない。

弥生時代後期の２世紀を中心とする時期には、長野・群馬ともに好んで丘陵上に集落を営んだ半面で、樋村・南蛇井増光寺遺跡の事例からもわかるように平地にも当たり前に集落を営んでいる。丘陵上の集落と平地の集落の違いを示す完全な物的証拠は今のところ見つかっていない。ここではこういう事実があったと言うことを確認しておきたい。

７　家の形（竪穴住居の違い）

この弥生時代には、平地式、竪穴式、高床式の３種類の住まいがあったが、今回は竪穴住居にテーマを絞って説明をする。

弥生時代中期後半、紀元前１世紀を中心として日本列島中央の海なし４県、長野・群馬・埼玉・山梨県を席巻した「栗林式土器」を携えた人々の住まいの形は地域ごとに異なっていた。

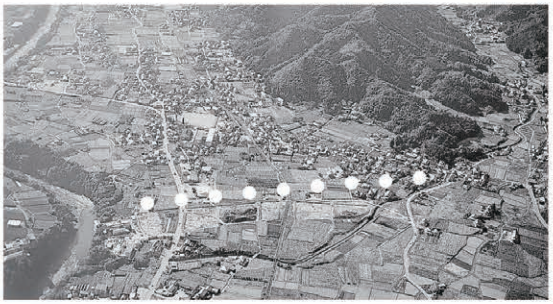


写真５　群馬県渋川市南蛇井増光寺遺跡（白点）

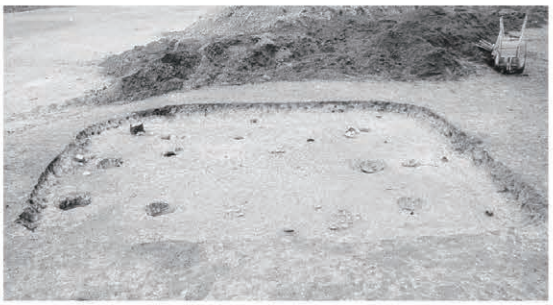


写真６　箱清水・樽期に普遍的な竪穴住居

例えば、飯山・中野・長野などの長野県北部地域は丸い平面形が多いのに対し、長野県東部地域の佐久、群馬県は方形、長方形などの四角い形が主流、長野県中部の松本などでは小判型が目立つ。中期後半、紀元前１世紀の段階では、同じ「栗林式土器」の傘下にありながら、地域ごとに家の形が違っていたのである。

これが、時を経て、弥生時代後期の紀元後２世紀を中心とする「箱清水式」「樽式」の時期になると、状況は一変する。長野・群馬県ではほとんどの地域で長方形基調の細長いつくりの家が建築されるようになるのである。

なぜ、ここまで現在のセキスイハイムなどのハウスメーカーがつくるような金太郎飴のようによく似た家をつくるようになったのか。その家のつくりが機能的にとても優れていたからなのか。それとも「箱清水・樽式」の時代に強い政治力が出現したために統一的な家を作るようになったのか。いまのところわからない。

なお、東京・神奈川などの竪穴住居は、長方形が少なく正方形に近いものが多い。壁も長野県のように直線的でなく、湾曲しているなど異なっている。写真７は東京都の山王三丁目遺跡の竪穴住居址群である。

８　墓のつくり方

弥生時代後期の東日本にあって長野県千曲川流域と、群馬県の墓は特異である。

弥生時代前期末、紀元前２世紀ころ近畿地方に端を発して「方形周溝墓」と呼ばれる墓の周囲を四角い溝で囲った低い塚をもつ墓が誕生する。方形周溝墓は一辺30mを超える大きなものから、一辺５～６m程度の

写真７　東京都山王三丁目の竪穴住居群

写真８　神奈川県歳勝土遺跡の方形周溝墓群

小さなものまでさまざまであるが有力者の家族墓と言われている。この墓は瞬く間に日本列島を席巻し、関東には紀元前１世紀の段階で進出する。また、同じ時期に日本海側の新潟県にも到達する。

しかし、長野県千曲川流域で、周溝墓が受容されるのは遅く、紀元後である。しかも、築かれた周溝墓は四角＝方形ではなく、形は整っていないが、円形に近い周溝墓であった。日本列島で、円形の周溝墓は少数派で、もっぱら築かれる地域は西日本の備前・播磨など現在の岡山県周辺と京都の海岸線沿いの丹後のクニである。長野県の周囲の状況は、東海・関東は方形周溝墓全盛時代、北陸も一部の地域で四隅突出墓がある他は方形周溝墓主流のようである。周囲が方形周溝墓全盛の状況下でなぜ、弥生時代後期の長野県千曲川流域に突発的に円形の周溝墓が登場したのか。

円形周溝墓は長野県千曲川流域「箱清水式土器」の分布域に留まらず、兄弟関係にある群馬県にまで到達した。しかし、「樽式土器」の分布域の人々は墓の形を、長野県側の一方から受け入れるだけではなく、関東からも受け入れた。このため、群馬県域の弥生時代後期の遺跡からは円形周溝墓と方形周溝墓が混在して発見されることがある。群馬県が関東の一員であることを裏付けるひとつの証左である。また、埼玉県北部にいたると「樽式土器」と同系列の土器が出土する遺跡でも方形周溝墓が採用されるなど関東色がいっそう強くなる。

写真９　長野市篠ノ井遺跡群の円形周溝墓群

８　金 属 器

弥生時代遺跡における金属器の出土は朝鮮半島の玄関口北部九州に偏るが、弥生時代後期＝紀元２世紀ころの長野・群馬県域でも関東・北陸などの周辺地域に比べると突出して多くの金属器が出土している。

鉄製品の代表的なものを掲げると群馬県有馬遺跡では朝鮮半島から持ち運ばれた東日本最長の鉄剣（全長57㎝）、長野県上田原遺跡では全国で10例目の鉄矛、長野県根塚遺跡では朝鮮半島南東部の伽耶地方からもたらされたとされる渦巻き装飾をもつ鉄剣のほか、螺旋上の鉄釧（腕輪）、鉄鏃などを含め、多数の鉄製武器が出土している。

銅製品は、長野県上平遺跡や群馬県高崎新保遺跡で、全国12遺跡しか出土例のない巴形銅器など東日本ではほとんど出土例のない九州系遺物が出土しているほか、銅釧（腕輪）も多量に出土している。

９　峠を隔てた交流の跡

写真10　佐久市周防畑Ｂ遺跡の円形周溝墓

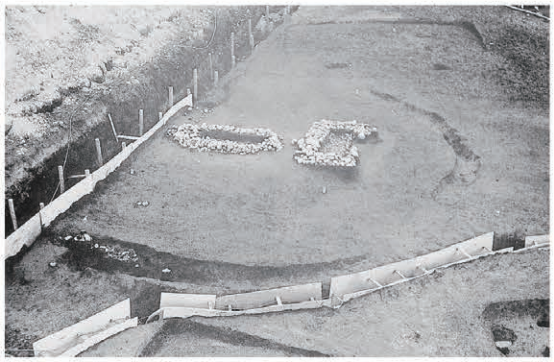


写真11　群馬県渋川市有馬遺跡の円形周溝墓

写真12　銅釧（当時のブレスレット）

―長野県佐久市周防畑Ｂ遺跡と
群馬県富岡市南蛇井増光寺遺跡にみる交流―

最近まで「栗林式土器」に源を発し、それぞれの地域で独自の発展を遂げた「箱清水式」と「樽式」は、急峻な峠を隔てて独立性を保ち、互いに交わりを持つことはないと考えられてきた。

ところが、数年前に群馬県富岡市南蛇井増光寺遺跡の弥生時代後期・２世紀の集落跡から出土した土器群は、長野県の中でも佐久地方の周防畑Ｂ遺跡の土器ときわめて良く似た特徴を備えていた。

このことから、「箱清水式」と「樽式」という土器様式の枠を超えて、長野県佐久地域と群馬県富岡市域の間で峠路を行き交う交流が行われていたことがわかったのである。

10　結　　語

弥生時代後期　紀元１～３世紀の間に、中部高地の長野県千曲川流域と北関東の群馬県域では同系等の特徴的な弥生土器、それぞれに「箱清水式」「樽式」と呼ばれる土器がつくられた。「箱清水式」「樽式」は紀元前２世紀に長野県・群馬県に稲作を定着させた「栗林式土器」が元になっており、それぞれの地域で変化して成立した土器であった。

「箱清水式」「樽式」の文化的要素は、非常に大きな標高差と気候差があるにもかかわらずかなり似通っていることがわかったと思う。共通性が強かったのは、

① 集落が営まれたところ
② 家の形
③ 墓の形
④ 東日本では突出して多い金属器の保有量

などであった。

ただし、群馬県の墓の作り方は、東京・神奈川などの南関東方面の形を取り入れた点が長野県とは若干異なる点であった。

以上、紀元１～３世紀の中部高地長野県東北部の千曲川流域、北関東の群馬県域においては魏志倭人伝に見られるような諸国分立状況にあった日本列島内に

写真13　佐久市周防畑Ｂ遺跡の弥生土器

写真14　南蛇井増光寺遺跡の弥生土器

あって、非常に特徴的で異彩を放つ弥生土器がつくられていたこと、また、土器ばかりでなく、家の形も変わっていたし、特に墓の形については円形を採用した点で極めて異端児的な存在のクニであったこと、金属器についても東日本では突出して量が多く、九州でしか出土しないような珍品を輸入する何か特殊事情がありそうなクニであったことを改めて強調して本稿を終わることにしたい。

なお、なぜ中部高地と北関東の弥生社会が東日本で突出して特殊な文化事象を示すクニになったのかについては、もう少し当時の中国大陸、朝鮮半島、また、日本列島各地の状況を勉強して改めて考えてみたい。

（本稿は、2001年12月４日専修大学の総合科目において、講義した内容をまとめたものである。講義の後、38人の学生諸君から私の講義に対してのレポートをいただいた。皆大筋では講義内容をはずさない的確な文章が書かれていた。講義中は食いつきが悪くて、聞いていないのではないかと心配したが杞憂であった。受験マシーンとして訓練を積んだ今の学生は、肝心要のことは聞き漏らさないことに関心させられた。20年前には、肝心なことを聞き漏らして単位を落とす大馬鹿者が大勢いたことを懐かしく思うのは私だけであろうか。）

引用転載文献

板橋区教育委員会　『山王三丁目遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　『有馬遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　『中高瀬観音山遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　『南蛇井増光寺遺跡』
佐久市教育委員会　『周防畑Ｂ遺跡』
長野市教育委員会　『篠ノ井遺跡群』

進む“浅間縄文ミュージアム”建設

御代田町では、急ピッチで博物館建設が進んでいる。その名は“浅間縄文ミュージアム”。縄文時代と浅間火山のテーマ博物館である。

博物館は、図書館・文化ホールなどとともに御代田町複合文化施設“エコールみよた”を構成する。場所は、御代田駅北西、メルシャン軽井沢美術館のとなりで、ミュージアム・ゾーンを形成する良好な立地である。

展示の７割を占める縄文文化は、１階のフロア全体におよび、くらし、精神文化、重文展示室の３部屋からなる。とくに重文展示室は、貴重な重要文化財である“焼町土器”を地震から守るため、県下の博物館施設では初の床免震機構が採用された。

この床免震機構は、阪神大震災クラスの地震がきても、例えば立てただけの角材が倒れないほどの優れた“揺れの制御”＝免震機能を有している。あわせてガス消化システム、24時間空調を完備し、万全な文化財展示管理をめざす。文化庁と東京文化財研究所の指導のもと、国宝級の借用資料も展示可能な、特別展示室としての機能を備えている。

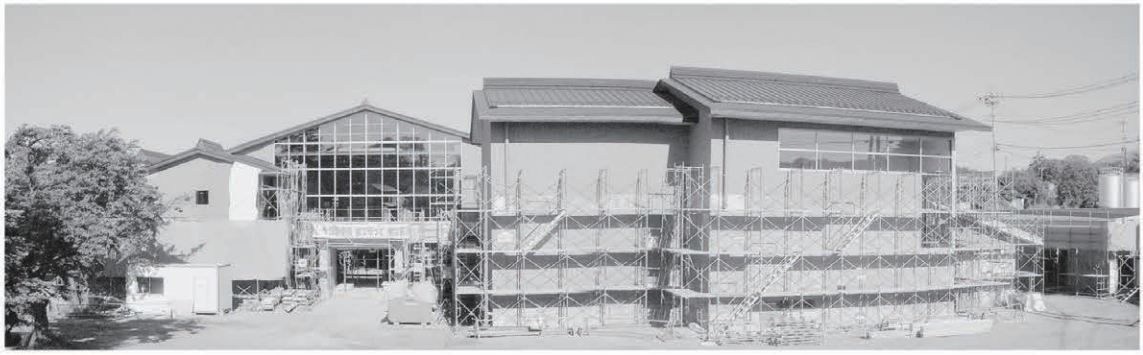
博物館　特別収蔵庫内部

２階は、浅間山の勇姿を直接観察し、その噴火史や亜高山帯高山植物など貴重な自然を知る展示室である。

建物はこの夏に完成し、館内の展示工事が秋からはじまる。博物館のオープンは来年４月である。

博物館は、ただ展示をみせるだけでなく、参加・体験型のチルドレンズ・ミュージアムもめざす。縄文土器作りや縄文ビーズなど“縄文キッズ”のためのドキドキ体験も準備している。

佐久考古学会のみなさんにも、大いに活用していただきたい施設である。



工事の進む浅間縄文ミュージアム本体（右側）とエントランス（中央）

♪　編集後記　♪

地域におけるボランティア活動など、社会奉仕への取り組みがさかんになってきている。ＮＰＯ法人の立ち上げなども始まってきた。

昨今、活動の低迷が危惧される佐久考古学会だが、地域を舞台に活動する以上、内部の活動だけでなく外にも眼を向け、中高年のための歴史教室や、こども考古学スクールなどのボランティア活動が問われる時期にさしかかっている。そうした新たな取り組みが会の活性化につながりはしまいか。考古資料も、莫大な予算をかけて発掘されながらも、住民に活用されず倉庫でホコリをかぶっているのは残念だ。　（つつみ）

佐久考古通信　№84

発行所　佐久考古学会
〒385-0056　長野県佐久市桜井632-10
林　幸彦　方
郵便振替　00570-9-2842
0267（63）1963

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2002.9.25. No. 85
JOURNAL

★ 目 次 ★

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡12 井戸尻遺跡群—長野県— ……1
考古逸品 2000年前の佐久小町……冨沢一明……2
会員訪問 土屋忠芳さん……聞き手 堤 隆……4
軽石でつくられた「埋甕」……桜井秀雄……6
新副会長・新事務局長あいさつ ……9
2002年度 佐久考古学会総会報告……事務局……10
堤隆会員 歴史学博士号取得！……事務局……11
佐久考古学会のホームページ紹介……事務局……11
訃報・佐原 眞先生ご逝去……小山岳夫……12

シリーズ 日本の遺跡・世界の遺跡12

井戸尻遺跡群

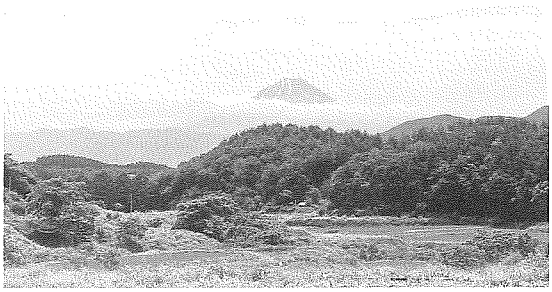
—長野県—

長野県内でも有名な縄文遺跡として、諏訪郡富士見町の井戸尻遺跡をあげる人は多い。八ヶ岳の南端、編笠岳の広大な裾野が釜無川の谷に落ち込む手前、標高約900m前後の地帯に井戸尻、藤内、曽利、唐渡宮などの遺跡が点在する。これらを総称して井戸尻遺跡群と呼ぶ。この遺跡群での最初の組織的な発掘は、1958年井戸尻地籍において地元の人々によって行われた（ただしこれ以前にも宮坂英弐の発掘などが知られる）。そしてその成果は1965年に出された報告書『井戸尻』にまとめられた。この書は編集者藤森栄一の史観ともいえる「縄文農耕論」を前面に打ち出し、当時から賛否はあったものの、縄文中期の土器編年や土器のセットの問題、そして遺物遺構から文化に迫ろうとする姿勢など、その後の研究に与えた影響は大きい。また、地元の有志が自らの土地の歴史を掘りおこすことで、地域に与えた感動も大きかったと聞く。

現在これらの出土遺物は、曽利遺跡に建つ井戸尻考古館で見ることが出来る。その質、量、そして土器一つ一つの迫力に思わず絶句する。土地改良により、周辺の景観が一部変わってしまったのが惜しまれるが、考古館の前に立てば右手に南アルプスの山々がそびえ立ち、前方には霊峰富士が望める。考古館東側に復元された竪穴住居址の裏では、八ヶ岳からしみ出す水が今もこんこんと湧いている。

近年でも公共事業などにより部分的な発掘は続いているが、今年（2002年）、藤内遺跡出土の土器が国の重要文化財に指定された。

（土器写真提供 富士見町教育委員会）



井戸尻考古館前から見た富士山。

重要文化財に指定された藤内遺跡32号住居址の縄文中期土器。

考古逸品

2000年前の

人面付き土器は全国でも出土例が稀少で、西一本柳遺跡出土品は顔の表現が特に写実的で貴重である。その容貌は渡来系弥生人を表現したとも考えられている。用途は、弥生前期に東日本に広がった再葬墓との関連の中で、土偶形容器が発展したと捉える説も有るが定かではない。いずれにしてもこの土器は、現代の私達にその生い立ちを今にも語りかけてくれそうな表情である。

晩秋の夕暮れ、西一本柳の村に一つの壺を携えた家族が訪れた。年老いた老婆と壮年の夫婦そして子供が３人、村はずれの空き家に入っていくのが遠くから見えた。「その家族は村長の招きで、遠く千曲川の下流にある大きな村から何日も歩いて来たらしい事。壺の中身は今年取れた籾で、村で作っている稲より多くの穂が実るらしい事」を大きな声で近所の母親達が喋っていた。

次の日の朝、村の子供達がその家を遠巻きにしていた。何でもその家族の一番上の娘の風貌が珍しいとのことであった。年の頃なら十五、六。細面の顔に筋の通った高い鼻と一重まぶたの涼しげな目、髪型は長い黒髪を巻き上げた不思議なかたちであった。今まで見かけないその姿に、西一本柳村だけでなく近隣の村々の男子達の憧れとなるのに、そう時間はかからなかった。

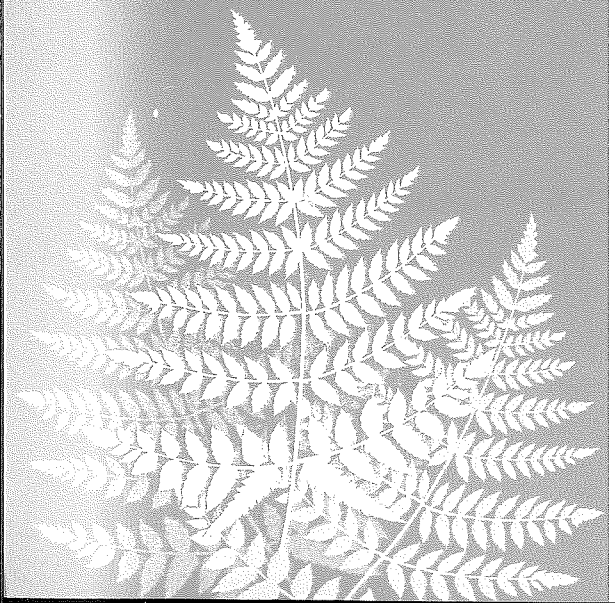
しかし、彼女の心を射止めたのは残念なことに村の青年ではなかった。それは物々交換に来ていた東の山を越えたところにある広い広い水田を持つ村の青年であった。

春、家族が持ち込んだ籾が水田に蒔かれる前に、娘は迎えにきた青年と峠を越えていった。その後ろ姿を見ながら、娘の祖母は「私の母もああして遠くから嫁に来た。遠い遠い西の方から、幾日も船に乗って大きな海も渡ったと聞かされた。あの娘は母の若い頃によく似ている。」

Data

人面付土器

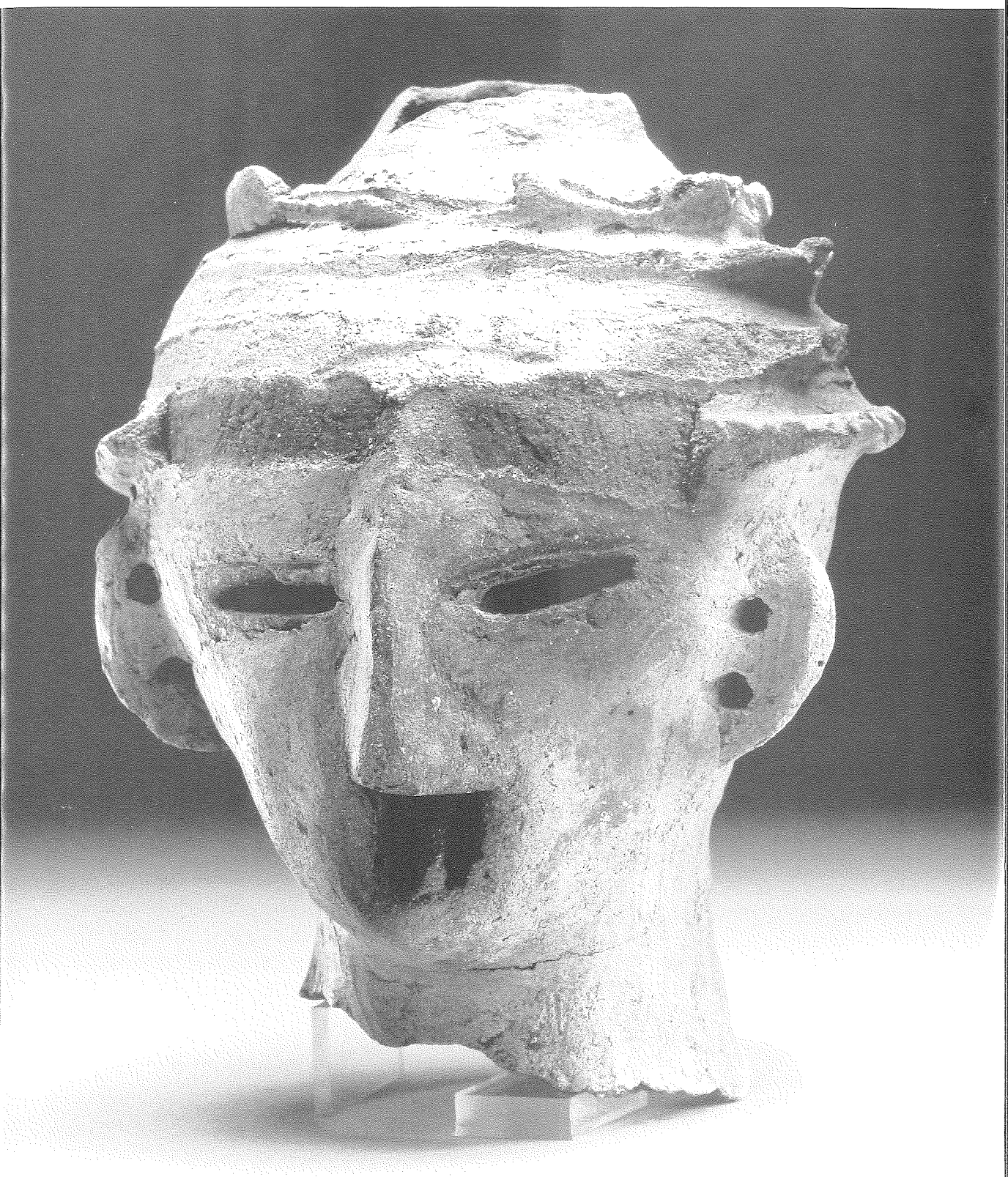
- 時　代：弥生時代中期後半
- 遺　跡：西一本柳遺跡Ⅰ
- 所在地：佐久市岩村田
- 機　能：？？
- 高　さ：12cm（残存値）
- 特　徴：写実的な顔・頬に赤彩・頭頂部に３cmの穴

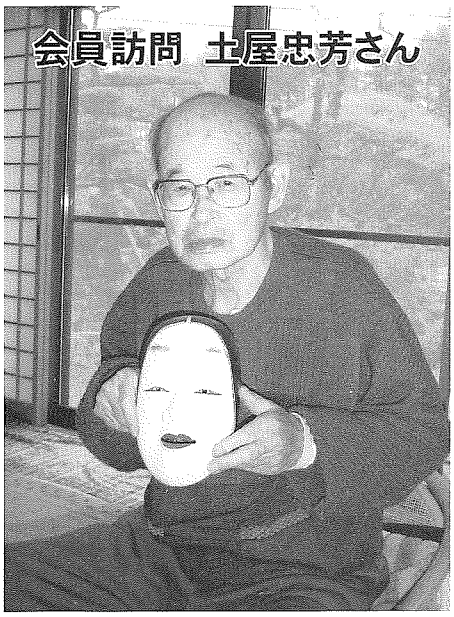


Archaeological Journal
佐久考古通信

佐久小町

佐久市教育委員会　冨沢一明





今回の会員訪問では、野辺山に暮らされる土屋忠芳さんを訪問しました。

土屋忠芳さんは、大正６年（1917）２月25日生まれ。今年で85歳になられました。

40年にわたり、野辺山高原の旧石器を採集されてきた土屋忠芳さん。このたび、南牧村にその全資料を寄贈されました。

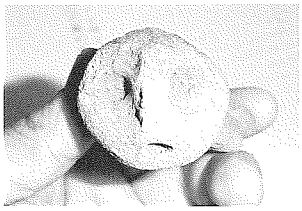
そんな土屋さんの野辺山での暮らしや、考古学とのかかわりなどのお話を聞いてみました。

――土屋さんが野辺山に入られたのはいつ頃ですか。

私は、17歳まで佐久市平賀で暮らし、昭和９年に南牧村板橋に入り、昭和29年から野辺山に来ました。現在は妻、息子夫婦とともに矢出川遺跡に近い野辺山駅西で暮らしています。

――考古学に興味をもたれたのは。

昭和29年の明治大学による矢出川遺跡の調査で、旧石器に目覚めました。最初に表面採集をしたのは、南牧の縄文遺跡、葭の頭遺跡ですね。ここでは、石鏃や石匙もたくさん拾っています。昭和36年（1961）４月27日には葭の頭で顔面把手を採集しました(写真)。この顔面把手は上智大学で美術を教えるジョセフ・ラブ教授がいたく気に入り、ほしいと懇願されましたね。



矢出川遺跡での表面採集も昭和35年頃からはじめました。ですから表採をはじめてかれこれ40年ということになりますね。

――どんな旧石器を採集されましたか。

そうですね。珍しいものとしては、昭和42年ころから拾い始めた平沢パイロット遺跡の長さ10cm以上もある水晶や黒曜石の原石でしょうか。旧石器人が原石を遺跡に保管していたのかもしれませんね。平沢では水晶製石器がきわめて多いです。矢出川では、細石刃や細石刃石核などを数多く採集しています。とくに水晶製の石器に興味を引かれたことから、中村龍雄先生とともに『水晶考古学』という本も出版しました。

――どんな遺跡を中心に回られましたか。

私は、矢出川や平沢パイロット遺跡を中心に踏査しました。これらの遺跡の石器は、数万点にもおよびます。川上村の柏垂遺跡には、東北大学でおこなわれた発掘調査にはいきましたが、採集にはいきませんでしたね。柏垂では由井一昭さんが熱心に採集されていて、雨の降ったあとにすぐいっても、もう畑には足跡がついていましたから。

――考古学以外にも多彩なご趣味をお持ちだとか。

昭和50年ころから、能面彫りをやってきて20年間近く彫り続けました。きっかけは東大野辺山天文台所長（当時）の平林先生に薦められたことによります。彫った数は50面くらいになりましたが、だいぶいろいろな人にあげてしまいました。能面を彫るのに一番いいのはヒノキ、楠木や桐でも彫ります。いちばん気に入っているのは小面の相生増ですね(写真)。野菜の出荷がなくなって、しんしんと雪の降る日にはただひたすら能面を彫りましたね。

文学書を読むことにも熱中しました。世界文学ではトルストイが好きです。チェーホフやシェークスピア、ゲーテなども読みましたね。戦争と平和、桜の園、リヤ王など代表的文学作品も読みました。

――ふるさと南牧村に40年にもおよぶ石器資料をご寄贈されるにあたって、どんな思いをお持ちですか。

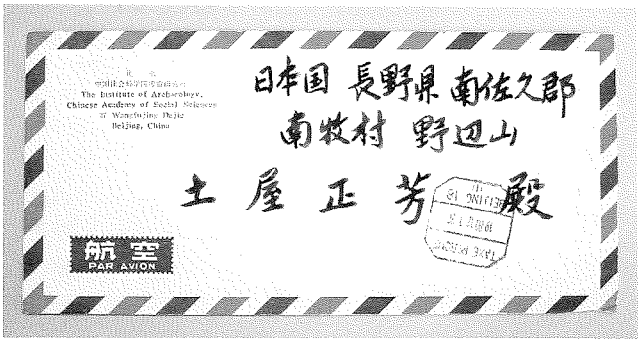
矢出川や平沢パイロット遺跡は２万年も前の南牧発祥の原点であり、貴重な国民的遺産です。ふるさとに資料が残り、展示されるのは大変うれしい限りです。

とくに学芸員をおかない南牧では、その管理が心配ですね。細石器は名前のとおり、爪の先ほどの小形の石器ですから、散逸してしまう可能性も大いにあります。台帳や写真・実測図を作成し、きちんとした保管方法で大切に管理していただきたいですね。

――今日はありがとうございました。

（聞き手　堤　　隆）

中国考古学者からの手紙



※正芳は忠芳の誤り

中国 北京
王府井大街27号

中国社会科学院考古研究所
THE INSTITUTE OF ARCHAEOLOGY
CHINESE ACADEMY OF SOCIAL SCIENCES

27 Wangfujing Dajie
Beijing, China

このたび明治大学の招待で訪日した時、貴殿が採集された矢出川遺跡の細石器28点を、杉原荘介教授を経て寄贈を受けました。

中国でも細石器文化の研究には力を入れはじめており、日本の研究と資料はたいへん参考になります。

ご寄贈いただいた石器は研究所に大切に保存し、研究上でも、また中日文化交流の上でも、おおいに役立てたいと思います。

ここに心から感謝の意を表します。

一九八〇年十二月一日

中国科学院古脊椎動物与古人類研究所 賈兰坡
中国社会科学院考古研究所 安志敏

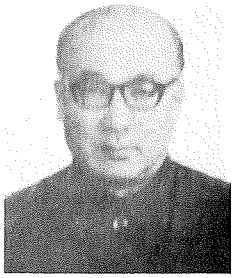
土屋正芳 殿

手紙は、1980年12月1日付けで、明治大学の招待で来日したとき杉原荘介教授の経て矢出川遺跡の細石器28点の寄贈を受けた。中国でも細石器文化の研究に力を入れており、研究所に大切に保管し、研究資料として役立てたい。大いに感謝する、と記されている。

最後に賈兰坡と安志敏の署名がある。日本語で記されているので、両先生の言葉を日本語に堪能な通訳者が代筆した可能性がある。

ここに紹介するのは、1980年、土屋忠芳さんが明治大学杉原荘介教授を通じて、中国社会科学院考古学研究所に矢出川遺跡の細石刃器28点を寄贈した際のお礼の手紙である。周口店の調査者で世界的な人類学者である賈兰坡先生や、同じく中国を代表する考古学者である安志敏先生の名前がみえる。日本を代表する細石器である矢出川遺跡の資料は、中国社会科学院に大切に保管されている。

賈兰坡（じゃらんぱ）先生
1908～2001年
河北省生まれ。周口店を発掘した世界的考古学者。『中国猿人』『中国的旧石器時代』などの著書がある。



安志敏（あんしびん）先生
1924年山東省生まれ。中国を代表する石器時代の考古学者。中国科学院考古学研究所所属

軽石でつくられた「埋甕」

桜井秀雄

1．はじめに

縄文時代中期～後期にかけて住居跡の出入口に土器を埋設する埋甕の存在が知られている。この埋甕の用途・機能については多くの先学により様々な論が展開されてきている。私はかつてその研究史をまとめたことがあるが（註1）、私見によればその用途・機能は大きく、①貯蔵容器説、②小児埋葬容器説、③胎盤収納容器説、④建築供犠容器説、⑤信仰関連施設説、⑥境界祭祀具説の６つに大別できると思われる。なかでも②と③の説を唱える論者が多いように見受けられるが、いずれもその決定的な確証は提示できないでいるのが現状であるといえよう。

ところで私が調査・整理作業に従事した郷土遺跡をはじめ浅間山南麓の三田原遺跡群・岩下遺跡、滝沢遺跡では土器の代わりに軽石を掘りくぼめて鉢状に加工したものを埋設している事例が認められている。これらは「軽石製石鉢」という用語で報告されているが（註2）、こうした事例は埋甕の用途・機能論に大きな問題提起を与えるものではないかという思いは報告書作成段階から抱いていたが、ここで改めてこの事例をとりあげてそのもつ意味を考えてみたい。

2．軽石製石鉢を「埋甕」に用いる事例

事例１　三田原遺跡群７号住居跡（小諸市平原）

後期初頭の称名寺式の柄鏡形敷石住居跡である。保存状態が良好で張出部に出入口施設をもつことで話題となった。主体部の主軸長・副軸長は4.22×4.50m、張出部の主軸長・副軸長は2.30×2.04m、全長は6.52mとなる。軽石製石鉢は対ピットと炉の間のピット内に埋設されていた。出土状況でみると一部分がやや離れた位置にあり、原位置をとどめてはいないが、接合することができ、本来はほぼ完形な状態で埋設されていたことが理解できる。法量は長さ52.2×幅39.4cm、厚さ13.0cm、重さ12,000ｇをはかり、凹みは数cmである。

事例２　三田原遺跡群18号住居跡（小諸市平原）

後期初頭の称名寺式の柄鏡形敷石住居跡である。主体部中央は市道が通過していたため、床の上面は削り取られていたが、主体部の主軸長・副軸長は4.55×4.88m、張出部は同じく2.78×2.03mであり、全長は7.33mとなる。ピット１の上面には巨大な敷石が置かれており、その南側には框石が、そしてその北側には軽石製石鉢が埋設されていた。法量は長さ42.2×幅30.8cm、厚さ22.0cm、重さ5,300ｇをはかり、凹みは十数cmである。なお、この軽石製石鉢の上端は床面よりも高い位置に設定してある。

事例３　岩下遺跡43号住居跡（小諸市八満）

中期末から後期初頭の柄鏡形敷石住居跡である。主体部西側は撹乱により破壊されているが、主体部の副軸長は3.7m前後と推定され、張出部の主軸長及び副軸長は1.89m×1.14mをはかる。軽石製石鉢は対ピットと炉の間に埋設されていた。これは部分的に若干欠損しているが、法量は長さ36.6×幅29.0cm、厚さ12.2cm、重さ2,975ｇをはかり、凹みは10cm弱である。

事例４　郷土遺跡３号住居跡（小諸市甲）

南東部は撹乱による破壊を受け、また南側部分は壁が消失しているため、明確なプランはつかめないが、東西方向約4.3m、南北方向約６ｍ程度の後期初頭称名寺式の柄鏡形敷石住居跡であると想定される。主体部と張出部の連結部にあたる場所にピット12があるが、この北側に軽石製石鉢が埋設されている。法量は長さ34.5×幅31cm、厚さ19cm、重さ5,200ｇをはかり、凹みは約15cmである。

事例５　郷土遺跡124号住居跡（小諸市甲）

多数の土坑、屋外埋甕との重複と南側壁の消失のため、平面プランは明確ではないが、全長約7.2m程度の後期初頭称名寺式の柄鏡形敷石住居跡になるものと想定される。軽石製石鉢は張出部と思われる位置に埋設してあったが、非常にもろくとりあげることはできなかったが、法量は長さ約65×幅50cm程、厚さ約50cmをはかり、凹みは約10cm程である。

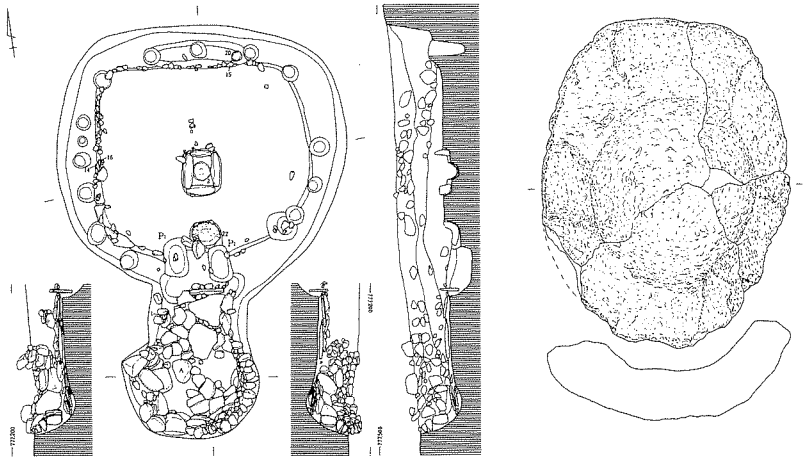
事例６　滝沢遺跡Ｊ－９号住居址（御代田町塩野）

後期初頭の称名寺式の敷石住居跡であるが、撹乱が著しく、住居形態や敷石の配置等の旧状は正確に把握できない。南東の敷石内には軽石製石鉢が正位ではめ込まれていた。法量は長さ29.8×幅27.5cm、厚さ15.0cm、重さ3,332.6ｇをはかり、凹みは約８cmである。

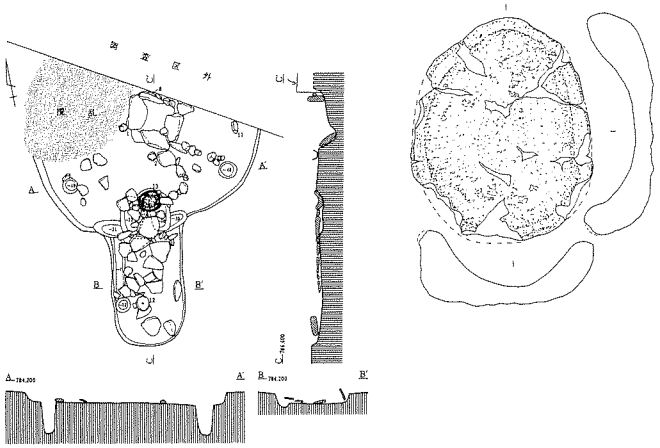
3．軽石製石鉢「埋甕」の提起すること

以上の６事例は軽石製石鉢を「埋甕」の代用品として用いているものと理解するべきであろう。このことは軽石製石鉢の出土位置のありかたからも首是できよう。またいずれの軽石製石鉢も凹みが一方向のみにしか認められていないのは、土器を模倣していることを示しているのではなかろうか。

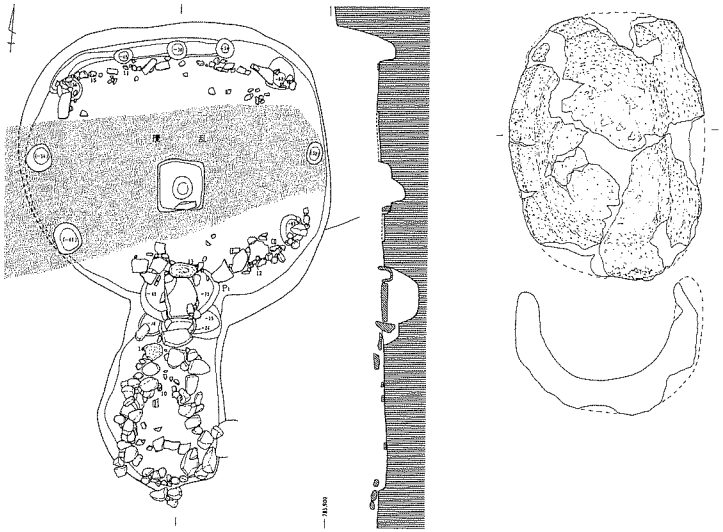
さて、これら６事例から浮かび上がってくる特徴としてまず指摘できるのはいずれも敷石住居跡であるということである。しかも事例６を除いては他はみな柄鏡形敷石住居跡である。また時期についても後期初頭の称名寺式期に限られていることがわかる。こうした



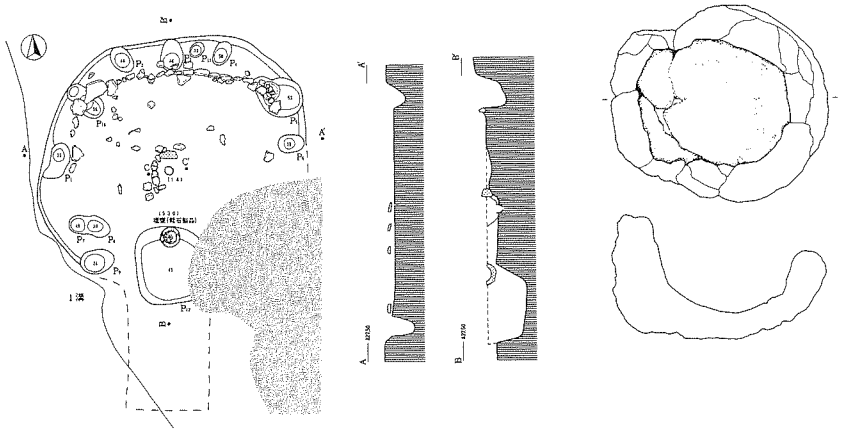
事例１（三田原遺跡群　７号住）



事例３（岩下遺跡　43号住）



事例２（三田原遺跡群　18号住）



事例４（郷土遺跡　３号住）

縮尺はすべて住居跡は1/120、軽石製石鉢は1/12

第１図　事例１～４

時期の限定は、おそらくは敷石住居跡と深い関連性があるためではないかと現段階では想定している。

ではこのような「埋甕」として用いられた軽石製石鉢の存在は、埋甕の用途・機能論に対してどのような知見を提示するであろうか。現段階の私見を述べてみたい。「埋甕」として用いられた軽石製石鉢の凹みは数cm～最大でも十数cmにすぎない。さらに透過性の著しい軽石を用いていることからすれば、前述した現在最も有力な説である②小児埋葬容器説や③胎盤収納容器説は少なくとも、この軽石製石鉢を用いた「埋甕」においては成立しえないと考えるのが妥当ではなかろうか。そもそも軽石ではこうした「容器」にはまずなりえないからである。そしてこのことは軽石製石鉢を用いた「埋甕」のみに限定された例外とは考えにくいため、私はこうした「容器」にはなりがたい軽石製石鉢の存在を、土器を用いた「埋甕」についても小児埋葬説や胎盤収納容器説は成り立たないことを示す論拠になるものと理解したいのである。なお群馬県では柄鏡形敷石住居跡の連結部に箱状石囲施設の認められる事例が少なからずみられ、「埋甕」に相当するものではないかと考えられているが(註3)、これなどもこの私見を首肯する論拠になるかもしれない。

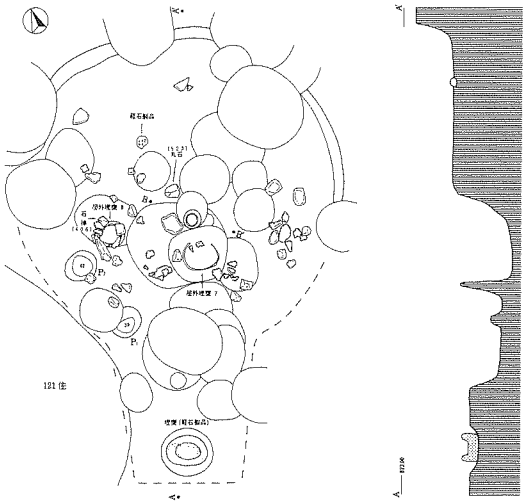
今回私が知り得た事例は6例であるが、いずれも浅間山南麓の標高約760～850m付近に位置している。この地域は浅間第2軽石流が地山となっており、軽石を入手することは非常に容易である。このような軽石を入手しやすい環境が、軽石製石鉢を「埋甕」として用いるという他地域ではあまり例をみない現象を生む要因となったのであろうが、それによって「埋甕は容器ではない」という埋甕のもつ本質的な属性が如実に明らかになったのではないかと私は考える。しかしながら称名寺式期の敷石住居跡にのみ認められる現象であることもたしかであり、一概には断言できないこともたしかである。山本暉久氏は「住居内埋甕風習は、中期終末期から後期初頭期にかけて、柄鏡形（敷石）住居の成立を期に、その性格を大きく変えていったと理解すべき」だと論じている(註4)。この視点からの検討も必要となろう。事例のさらなる収集とともに今後の課題である。

註1 拙稿「埋甕の用途・機能をめぐる素描」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』1996年

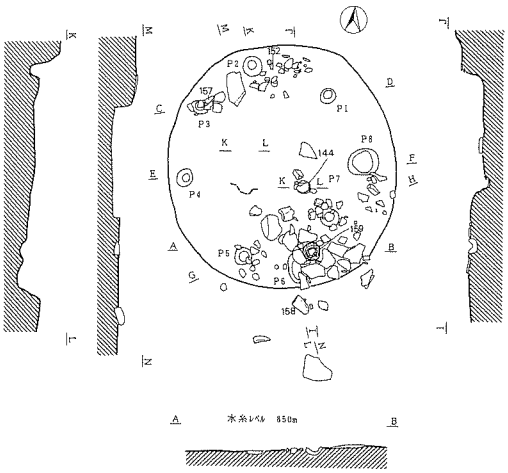
註2 三田原遺跡群・岩下遺跡・郷土遺跡については『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』県埋蔵文化財センター、2000年、滝沢遺跡については『滝沢遺跡』御代田町教育委員会1997年による。

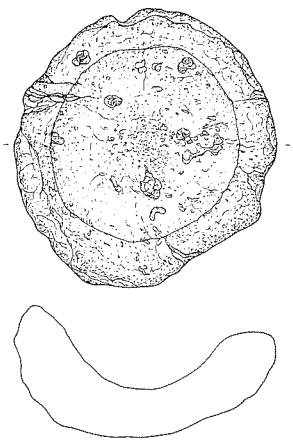
註3 鈴木徳雄「敷石住居址の連結部石囲施設」『群馬考古学手帳Vol4』1994年

註4 山本暉久「柄鏡形（敷石）住居と埋甕祭祀（下）」『神奈川考古33号』1997年



事例5（郷土遺跡　124号住）





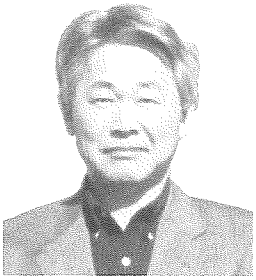
縮尺は、
住居址は1/120、
軽石製石鉢は1/8

事例6（滝沢遺跡　J－9号住）

第2図　事例5・6

新副会長・新事務局長あいさつ

新副会長　臼田武正



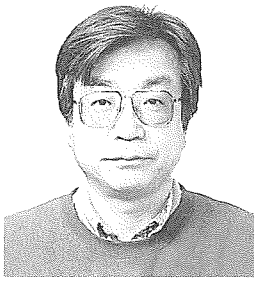
久しぶりに事務局幹事会に出かけていったら、いつの間にか話が進んでいて、このような大役を仰せつかることになってしまいました。

ここ数年間、幹事の一員でありながら佐久考古学会の活動とは疎遠になっていたことを反省しつつ、もとより力はありませんが、会長を補佐し、少しでもお役に立てばと思い直していますので、よろしくお願いいたします。

今年度は、ホームページの開設やボランティア活動の立ち上げなど、新たな取り組みが計画されています。時代に即応した積極的な活動を推進するとともに、地域に密着した地道な調査や研究、保護活動などもおろそかにはできません。

会員はもとより、だれでも気軽に参加できるような魅力ある学会活動を造り出していきたいものです。

新副会長　林　幸彦



二期４年間の事務局長在任中は、大変お世話になりました。この４年間自身の微力さから、佐久考古学会の活動が、大きく停滞をせざるをえなかったこと、改めて会員の皆様方にお詫び申し上げます。

2002年度総会において図らずも、副会長をおおせつかり大きな戸惑いをおぼえました。故白倉先生、故黒岩先生のおふたりが副会長として会員の皆様が会に結集する大きなよりどころとなられていたことが、いま思い出されます。

今総会では、地域の学会が「地域に根ざした活動」に取り組もうと確認されました。新しい事務局体制で新たな佐久考古学会の歩みが展開されていかれるかと思います。そんな活動に少しでもお役に立てるよう努力してまいります。よろしくお願いします。

新事務局長　小山岳夫

大人になった鉄腕アトム

「僕はアトムだから泣かないぞ」幼年時代にそういった男は、43歳になりました。

今年の春先からお盆にかけてＢＳ放送で38年ぶりに手塚アニメ鉄腕アトムを見ました。

劇中でアトムはどんなに危険なことや嫌なことを頼まれても「ハイ！ハイ！」と答えて、危険の中へ飛び込み、悪者をやっつけ、難題を解決してきます。アトムは他人のために働く、本当に力のある素直な良い子であることを再認識しました。

このたび、きわめて力不足ではありますが、佐久考古学会の事務局長の重責を引き受けることになりました。私は幼年時代に憧れていたアトムを目指してこの任に当たっていきたいと考えています。

現代社会は、自分さえ良ければよいという、ミーイズムに支配されつつあり、公のために粉骨砕身働くことがかっこ悪いと考える若者が多くなっていると聞きます。不惑を過ぎた私はそんな今だからこそ敢えて公のためにモメごとやトラブルなど厄介な場面や難しい場面を踏ん張って解決することができる人格の確立を目指して生きていきたし、考古学会の役に立ちたいと考えます。

カッコ良いことを書きすぎましたが、私はいい年をしているにもかかわらず、まだまだ未熟者ですし、能力もありません。諸先輩の皆様の築かれた佐久考古学会の名を汚さぬように努力いたします。

会員の皆様にはこれからますますのご協力をお願いいたします。

事務局住所

〒389-0206　御代田町大字御代田4108－1880
小山　岳夫　方　☎0267－32－8676

その他の役員人事は本号10ページをご覧下さい。

2002年度　佐久考古学会総会報告

去る６月29日、佐久市浅間会館で、2002年度佐久考古学会総会が開かれました。羽毛田伸博会員が議長に選出され、第１号議案である2001年度会務・決算・会計監査及び第２，第３号議案も無事承認されました。特に第２，３号議案については、役員の改選や新しい事業などがありますので、以下に詳しく記します。

また当日は須藤隆司会員による佐久市上の城遺跡、冨沢一明会員による佐久市後家山遺跡の発掘の様子がスライドを交えて発表されました。さらに堤隆会員の学位論文の要旨が「氷河時代末期の自然と人類―捏造事件以降の旧石器研究の可能性―」として発表されました。総会終了後には佐久市岩村田の三河屋で懇親会がもたれました。今回お出でになれなかった方も、この次はぜひ。

第２号議案　役員改選

顧　　問	由井　茂也
	井出　正義
会　　長	藤沢　平治
副 会 長	臼田　武正
	林　　幸彦

地区委員

軽井沢・御代田	原田　政信
小諸	星野　保彦
北御牧・浅科	倉見　　渡
立科・望月	佐藤純一郎
佐久市	木内　　捷
	羽毛田伸博
	武者　泰雄
臼田・佐久町	佐々木廣雄
八千穂・小海	島田　幹子
南相木・北相木	長崎　　治
南牧・川上	中島　芳榮
会計監査員	由井　　明
	井上　行雄
	池田勝吉郎

事務局

事務局長	小山　岳夫
事務局幹事	
会計担当	上原　　学
	森泉かよ子
	出澤　　力
	冨沢　一明
見学会	佐々木宗昭
	三石　宗一
	羽毛田卓也
	森泉かよ子
講演会・研究発表	福島　邦男
	花岡　　弘
	小林　真寿
	須藤　隆司
	堤　　隆
	桜井　秀雄
通信・広報	堤　　隆
	藤森　英二
保護・保存	冨沢　一明

第３号議案　2002年度佐久考古学会活動計画

１．総　会
　2002年６月29日　浅間会館

２．例　会
　発表会
　　2002年６月29日　浅間会館
　　氷河時代末期の自然と人類
　　調査速報　佐久市後家山遺跡・上の城遺跡
　見学会
　　2002年６月29日　ＪＡ平賀支所・後家山遺跡
　　2002年秋頃　小諸市野火付遺跡（中部横断道）
　報告会兼忘年会
　　2002年12月

３．講演会
　2002年秋頃「矢出川遺跡発見50周年を記念して」
　由井茂也顧問・戸沢充則先生

４．会　議
　役員会・事務局会議　随時

５．保護・保存運動
　遺跡保護保存活動・埋蔵文化財パトロール　随時

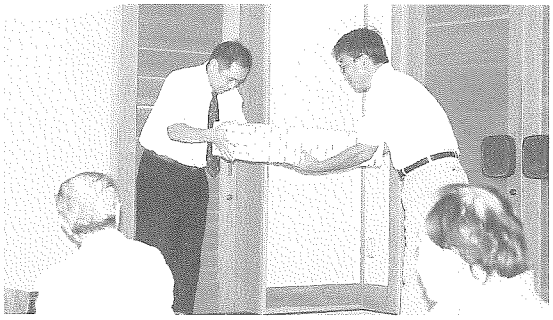
６．通信・広報活動
　『佐久考古通信』85・86・87号の発行
　ホームページの立ち上げ
　ボランティア活動（講座・体験学習など）

堤隆会員　歴史学博士号取得！

佐久で生まれ育ち、現在も佐久に住みながら、全国的に注目される堤隆会員の研究活動は、今更言うまでもありません。その堤会員が今年の３月、國學院大学博士課程において論文審査に合格され、歴史学博士号を取得されました。社会人として日々の業務をこなしながらの偉業と言えます。本会ではこの業績をたたえ、８月10日佐久市岩村田の佐久ホテルで「堤隆さんの博士号取得を祝う会」を催しました。当日は奥様の淳子さんや、３月に誕生したばかりの長男耀君もいっしょで、記念品や花束の贈呈も行われました。

堤会員の活動は私たち地域研究者の誇りであり財産です。これからも、がんばって下さい。

（でもモー娘。の話しもして下さい。：藤森）



記念品の贈呈。中身はすてきな時計でした。

堤会員を囲んで。右端が堤さん、お隣が奥様。

佐久の原始・古代

佐久考古学会のホームページ紹介

前号でもお知らせしましたように、佐久考古学会のホームページ『佐久の原始・古代』がオープンしました。今のところまだ掲載されている内容は多くはありませんが、今後どんどん充実させていきます。

また、新しい情報やアイディアなどぜひお寄せ下さい。メールでも掲示板への書き込みでもＯＫ。私たちの手で楽しいページにしていきましょう。めざせアクセス数、まずは1000件突破!

★電子メール
sakukoko@mx2.avis.ne.jp
★ホームページ
http://w2.avis.ne.jp/~sakukoko

インターネットに接続されたパソコンなどからどなたでもご覧になれます。さぁ、今すぐクリック!

焼町土器（重要文化財）

目指せ！999999人！！（言い過ぎ！）

佐久の原始・古代
佐久考古学会

2002年7月1日　OPEN！

あなたは 000380 人目の訪問者です。

訃報・佐原　眞先生ご逝去

佐原　眞先生逝く

考古学を志す者すべての憧れ、佐原　眞先生の７月10日の訃報に接し、地方の一学会から哀悼の意を表わさせていただきます。

今から10年前の平成４年、佐原先生が御代田町へ講演に訪れてくれました。当時先生は誰にもやさしくわかり易い考古学を標榜され、日本列島各地の講演行脚をしておられたため、私の依頼も簡単に引き受けていただくことが出来ました。

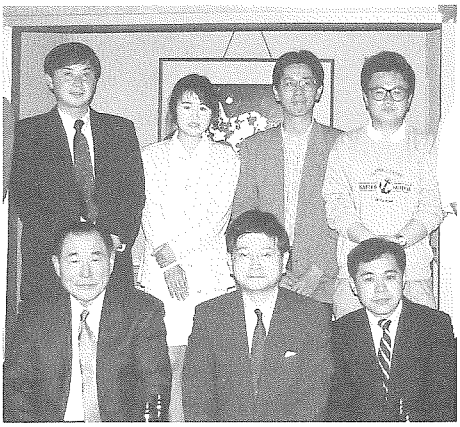
講演会に先立ち、御代田を知っていただこうとできたての発掘調査概要報告書をお送りしました。その報告書は当時としては派手なカラー刷り表紙の体裁で、一部では考古学をオモチャにしているとの不評にさらされていた代物でした。

講演会当日、先生からの手紙が届きました。「報告書見ました。行くのが楽しみです。」短文でしたが、内心ホッとしました。そして、先生にお会いして開口一番「これだけわかり易い書き方ができるのなら、僕がお墨付きをあげます。」この一言が末端の研究者にはどれほど嬉しかったことか。

講演会はもちろん大盛況でした。講演終了後、先生が私たちとひざを交えて縄文原体を作ってくれました。原体を作る材料として用意された赤色と白色の紙ひもをみて「いやあ、懐かしい。よくこんなものが残っていましたね。これが（原体の絡み方を見るのに）一番良い素材ですよ。」なにげない一言が緊張気味で周りを取り囲んでいた私たちの心を和ませてくれました。

憧れの存在、遠い存在であった大考古学者との邂逅。私にとってはもっとも心に残る思い出のひとつです。

先生は亡くなる一ヶ月前に「もっと時間が欲しい。もっと勉強がしたい。」とおっしゃられたと聞きます。これからいくつもの大きな仕事を成し遂げたれたであろう尊敬して止まない先生のあまりにも早い旅立ちは悔しくてなりませんが、先生の目指されたやさしい考古学の普及について少しでもお役に立つよう、これからも地域の学会として取り組んで参りたいと思います。



御代田の講演会で佐原先生を囲んで

縄文原体を撚る佐原先生

♪　編集後記　♪

実父が癌再発の疑いがあるとし入院したが、腫瘍の場所が特定出来ずにいた。最終的に十万円を超す検査を受け悪性腫瘍は無いという診断を受けた。なんでもその検査を行う装置は日本にもわずかしかないらしく、特定の病院で順番待ちだそうである。もし癌があればその間に進行していく可能性も当然ある。その装置がいくらするか知らないが、戦闘機の値段と一度比べてみたい。それとも人の命を救う装置は各病院が自己努力で調達するものなのか。父の結果が出た日、それは57年前に長崎に原子爆弾が投下された日であった。

（藤森）

佐久考古通信　No.85

発行所　佐久考古学会

〒389-0206 北佐久郡御代田町大字御代田4108-1880
小山岳夫　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (32) 8676

発行者　藤沢平治

編集者　藤森英二

印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2003.4.15. No. 86

★ 目 次 ★

特集号：野辺山地域における旧石器研究50年

馬場平・矢出川から半世紀の時が過ぎて……由井茂也……1
野辺山シンポジウム2002……事務局……2
野辺山地域における旧石器研究50年 ―略年表― ……事務局……3
野辺山の昔語り ―由井茂也さんの日記を通して― ……戸沢充則……4
野辺山に惹かれて……鈴木忠司……6
京都女子大考古学研究会の野辺山原分布調査 ……鈴木千里・保坂典子・西村直子・林 浩世・藤田有利子……7
矢出川第Ⅰ遺跡遺跡の細石刃・細石刃石核……桜井洋倫……10
お知らせなど……事務局……12

馬場平・矢出川から半世紀の時が過ぎて

由井茂也

1953年の8月半ば、芹沢長介と戸沢充則という人物が川上村の私の自宅にやってきた。八幡一郎先生の『南佐久郡の考古学的調査』をみて、そこに掲載された馬場平の石槍が、岩宿の発見によって注目されはじめたプレ縄文のものではないかとの確信をもったという。保管先の川上小学校を訪ねたのだがすでに石器はなく、私のことを聞きつけて石器を見にきたのだった。私が石器を見せるなり「すばらしい、すばらしい」の言葉が二人から連発された。そして早々に馬場平の発掘調査計画が決まった。

馬場平の発掘は、東京大学の山内清男先生を責任者に、芹沢さんを担当者とし、戸沢さんをはじめ、麻生優・吉崎昌一・岩崎卓也・高橋護・松島透・神沢勇一・相沢忠洋などそうそうたる面々が集まった。果たして馬場平のトレンチからは、見事赤土の中から石槍が発見され、その文化がプレ縄文の所産であることが実証された。

そして暮れも押し詰まったその年の12月、吹雪の矢出川遺跡での細石器の発見となった。これについてはすでに幾度も述べているので多くを語るまい。

馬場平や矢出川の最初の調査から10年ほど後のこと、杉原荘介教授の命を受けて、戸沢充則さんと大塚初重さんが川上に懇願にきた。明治大学が、矢出川の第三次調査をぜひとも実施したいというのである。杉原教授は、私に承諾をもらうまでは二人に帰ってくるなとまで言っているという。だが私は、矢出川でそれまで二度の調査を行ってきた芹沢さんの事を考えると、けして調査を承諾することはできなかった。突き放したような言い方になったが、実施したいのなら南牧村の教育委員会に話を通して、そちらの承諾を得て行ったらどうかということになった。困難な選択を迫られた局面だった。

80年代初頭、考古学ばかりでなく、火山学や植物学など自然科学のさまざまな学者を集めた野辺山シンポジウムと矢出川遺跡群の総合調査がなされた。植生調査や狩猟民俗の調査など、さまざまな分野の学問の調査ができたのも私たちには得がたい経験となった。

昨年の秋、久しぶりに野辺山で戸沢充則さんとお会いすることができた。鈴木忠司さんや宮下健司さん、京都女子大考古学研究会の皆さんなど懐かしい顔ぶれも大勢そろい、当時の調査の思い出に花が咲いた。みなさんの学問への情熱がまったく変わりないことを感じ、ほんとうにうれしい思いだった。

八ヶ岳と野辺山原、矢出川遺跡群の遠望

野辺山シンポジウム2002
野辺山高原の旧石器研究の半世紀を振り返る
―これが本当の旧石器だ―

秋晴れ野辺山高原、10月６日、1953年に野辺山において初めて旧石器が発見されてから、2003年で50年を向かえることから野辺山シンポジウム2002「野辺山高原の旧石器研究の半世紀を振り返る」が、佐久考古学会を主催として野辺山基幹集落センターにおいて開催された。

野辺山高原の調査にかかわった由井茂也・戸沢充則・鈴木忠司・由井明・土屋忠芳氏ほか明治大学や京都女子大学、八ヶ岳旧石器研究グループなど調査関係者のほか一般参加を含め約60名が集まった。

シンポジウムでは、矢出川遺跡の発見のなされた1950年代、明治大学の矢出川遺跡第３次調査のなされた1960年代、京都女子大による野辺山原の分布調査1970年代、明治大学による矢出川遺跡群の総合調査のなされた1980年代、八ヶ岳旧石器研究グループによって中ッ原遺跡群が調査された1990年代と、1953年におよそ半世紀にわたる調査の歴史が振り返られ、21世紀の野辺山の旧石器研究が論じられた。

吹雪の矢出川遺跡での細石刃の発見は、よく知られたエピソードであるが、その発見の様子が、97歳をむかえた由井茂也氏の口から昨日のことのように生き生きと語られた。

そして1960年代明治大学による矢出川遺跡第３次調査へと結びつくのであった。

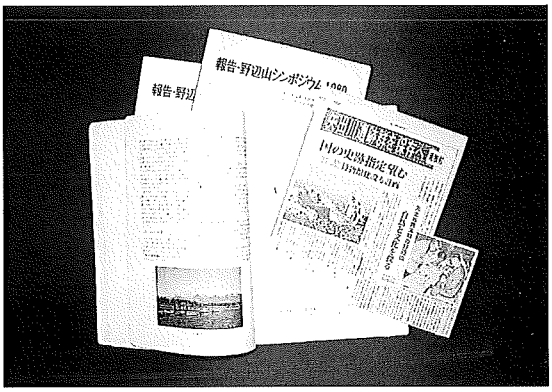
70年代京都女子大による分布調査によって、広大な野辺山原の遺跡分布が明らかにされた。その成果は『川上村誌先土器時代編』として結実した。

80年代の明治大学による矢出川遺跡群の総合調査では、考古学的成果のみならず、現植生・古環境・火山灰・狩猟民俗などの総合的な調査がなされたことに意義があった。また、大学のみならず佐久考古学会の地域研究者とともに研究がなされた点において意味深かったものと再確認された。

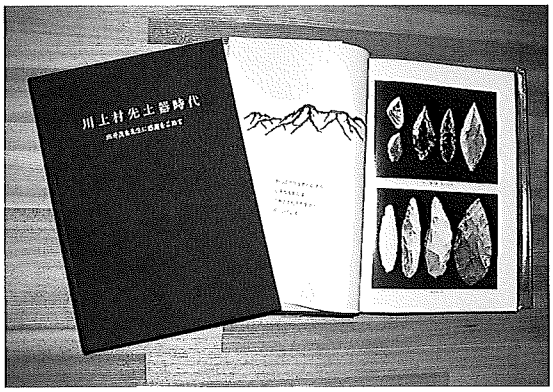
90年代の八ヶ岳旧石器研究グループによる中ッ原遺跡群の調査では、矢出川の細石刃文化とは異なる北方系の細石刃文化の存在が野辺山において明らかにされたことが大きな意味をもっていた。

そして、捏造事件を越えて21世紀の旧石器時代研究であるが、半世紀の野辺山の調査に振り返るように、地味とも思える継続的な地域研究が礎になることが再確認された。

野辺山シンポジウム2002の様子



80年代、野辺山シンポジウムの成果



京都女子大考古研の分布調査成果

中ッ原１Ｇ地点の二次調査

野辺山地域における旧石器研究50年

—略 年 表—

★　1950年代

1953年　11月、馬場平遺跡発掘調査。芹沢長介氏らによりローム層中に石槍の文化が確認される。

1953年　12月、矢出川遺跡発掘調査。吹雪の中、芹沢・岡本・由井によって日本ではじめて細石刃文化の存在が確認される。

1954年　9月、矢出川遺跡第一次調査。11月、矢出川遺跡第二次調査。

★　1960年代

1963年　11月、明治大学考古学研究室による矢出川遺跡第三次調査。

1964年　4月、戸沢充則による矢出川遺跡調査報告（『考古学集刊』2－3）。

★　1970年代

1972年　川上村・東北大学考古学研究室による柏垂遺跡の発掘調査。

1974～1981年　京都女子大学考古学研究会による野辺山原の分布調査。

★　1980年代

1979～1981年　明治大学考古学研究室による矢出川遺跡群の総合調査および野辺山シンポジウム。

1981年　矢出川遺跡村指定史跡になる。

1983年　矢出川遺跡保存対策特別委員会設置。国指定に向けての保存運動高まる。

★　1990年代

1990年　3月、八ヶ岳旧石器研究グループ（以下八研究グループと略）による中ッ原5B遺跡発掘調査。

1992年　3月、八研究グループによる中ッ原1G遺跡第一次発掘調査。

1993年　八研究グループによるシンポジウム「細石刃文化研究の新たなる展開」。

1995年　2月、矢出川遺跡に国指定史跡になる。

1995年　3月、中ッ原1G遺跡第二次発掘調査。

1995年　10月、明大考古学研究室、八研究グループによるフォーラム「細石器って、な～んだ」開催

★　2000年代

2000年　10月、八研究グループによる野辺山シンポジウム2000「人類の認知構造と適応行動」開催。

2002年　佐久考古学会・八研究グループによる野辺山シンポジウム2002「標高1500m野辺山高原の旧石器と研究の半世紀を振り返る」開催。

1954年　矢出川遺跡二次調査

1963年　矢出川遺跡三次調査

京都女子大による分布調査（70～80年代）

明治大学による矢出川総合調査（80年代）

野辺山の昔語り

―由井茂也さんの日記を通して―

戸沢充則

10月6日、佐久考古学会が用意してくれた「野辺山シンポジウム2002―野辺山高原の旧石器研究の半世紀を振り返る」は、参加者の温かい気持ちが通い合う、とてもいい集りでした。

とくに、私にとって刺激的だったことは、97歳の由井茂也さんを始め、90歳の由井明さんと渡辺重義さん、さらに85歳の土屋忠芳さん等々、懐しい皆様がお元気で参加されていて、あたかも旬日後に70歳になろうとしていた私など、まだ「小僧っ子」だと自覚させられ、皆さんのお元気さに驚いたことが一つ。

そして皆さんが、永い年月にわたる野辺山での学問と人のこころの触れ合いを語る中で、私自身の50年余の研究者生涯を通じて、断続はあったけれども、野辺山はいつも自分の心中に生き続けていたのだということを、改めて実感したというのがもう一つ。

堤さんから『佐久考古学通信』の原稿を書くようにすすめられて、古い記録とおぼろ気な記憶をとりまぜて、"古希の記念"に私にとって野辺山の50年は何だったのか、すこしづつでも掘り返してみようと思い立ちました。まずその第1頁です。

*

私が川上村の由井茂也さんのお宅を始めて訪れたのは、1953年8月19日のことでした。その時のことを由井さんの日記は次のように書いています（『草原の狩人』由井茂也日記抄より）。

> 「8月19日　……昨日、臼田で岩崎さん達が待っていた芹沢長介さんが尋ねて来る。戸沢さんも来る。馬場平の石器が縄文以前の石器ではないかと注目されてわざわざ調査に来たのだが、現場ではもう見つからず自分の持っている2，30片を丹念に測定、写真などを撮る。二人とも泊る……」

この時は夏休みで諏訪に帰省中だった私に芹沢さんが連絡をくれたのでかけつけたのだと思います。上の由井さんの日記によると、芹沢さんは昨日（18日）に「臼田で岩崎さん達」（その中には当日、八幡一郎さんの講演を聞きに行った由井さんも含まれる）と落ち合ち合うことになっていたのに、その時はすでに私と一緒に川上村に入り、馬場平の表面採集をおこなっていたのです。

その日のことを記録した私のメモも日記もありませんが、藤森栄一さんが『旧石器の狩人』の中で、おそらく私の話しなどをもとにこんな記述を残しています。

> 「上ノ平に前後して、芹沢さんと戸沢さんが千曲川の最上流川上村に現れた。例の石槍ばかり出ている馬場平を調べにである。
>
> まず小学校へ行ったが、かつての八幡さんの資料は見当らない。芹沢さんは当惑したが、現場らしい丘に立った。馬場平はどこだと聞くと、農婦はしばらく考えていて、そんなところはないという。だめかな、芹沢さんはあきらめかけたが、じゃここはなんてところ？と聞くと、バッパァデエラちゅうずらよ、という。思わずほっとする。そんななかで、だれにも知られずに、コツコツと研究をつづけていた、内省的で信州人の代表のような由井さんを捜し当てたということは、芹沢さんの大変な幸運であったといってよい」

由井茂也さんのことは、その夜泊った旅館の主人に教わったと芹沢さんは書いていますが、ともかく二人は夕方近く川上駅陸運かお宅のどちらかを訪れました。しかしその日は前記のような事情で由井さんは欠勤・不在。二人は近くの宿をとって明朝を期すことにしたのです。その夜、芹沢さんは明日への期待と不安を心に押し込めながらと思いますが、岩宿以来いまや全国に燃えあがろうとしている「無土器文化」研究への意欲を、まだ大学2年生の私を相手に一生懸命語っていたことを、おぼろ気な記憶の中に懐かしく私の印象に残っています。

*

こうして翌19日、私たちはお出掛け前の由井さんを訪ね、そして念願の馬場平の石槍と石器群を心ゆくまで観察し、フィールド・ノートにその全貌を記録することができたのです。その作業は由井さん宅の2階の部屋で、馬場平以外の所蔵資料も含めて深夜にまで及びました。

途中、由井さんの案内で改めて遺跡に行った記憶もあるのですが……。

この日由井さんは八幡さんの講演の二日目に参加する予定を立て、昨日に続いて勤めは休みにしていました。

> 「私は今日の予定を説明してから簡単に見せるつ

1953年 馬場平遺跡の調査（右端由井さん、左より2人目筆者）

もりで、昨日持ち出した馬場平遺跡の石器を広げて見せた。わたしにとってなんの変哲もない石器であった。ところが、芹沢さんと戸沢さんにとっては、驚きだったらしく、感激の声をはずませて話していた。私の予定とか当惑などお構いなしだった」
（『草原の狩人』「馬場平遺跡の発掘調査」より）

由井さんはその後、その日のことをこのように回想しておられます。こんなご迷惑を由井さんばかりでなくご家族の皆さんにおかけしたのは、この時ばかりでなく、ずっとそれからも私達はいつも繰り返してきてしまいました。50年前のこの日も芹沢さんと私は迷惑をかえりみず由井さんの家に宿をとることになってしまったのです。しかし由井さんもやがて熱中するように身をのり出して私たちの作業を見守り、お茶や食事の用意に足を運びながら、芹沢さんの石器の説明などを、一言ももらすまいと、ただだまって聞き入っておられたようです。

いま思えば、こうした由井さんのような地域にあって、考古学を愛する人とこころに支えられたればこそ、学史的な業績や研究者の仕事が進められるということを、50年前の回想の中で私達は改めて感謝して見直さなくてはいけないのだと思います。

＊

芹沢さんが由井さんの集めた石器群の重要性を確認してから２ヶ月後、11月２日から馬場平遺跡の発掘調査が行われることになります。調査期間中の由井さんの日記はたんたんとした事実経過が主ですが、初日と３日目の日記にこんな歌が詠まれています。

○　この手もて掘りこの眼もて確と見し
　　赤土層より出でし石槍
○　日本にプレ縄文の有りしこと
　　疑わざる日の近きを信ず
○　わが生れ育ちし家を真向いに
　　見る丘に来て今日石器掘る

こうした由井さんの短歌の中には、当時の由井さんの喜びや、また研究史の初期の学界の状況などが行間に垣間見えます。ともあれ馬場平の発掘にいたるまでには由井さんの周辺でもいろいろな研究者の動きがありました（「由井茂也日記抄」参照）、また発見・研究史の上では、杉原荘介さんを中心とした諏訪市上ノ平遺跡（石槍を主体とする石器文化）の発掘が、馬場平に先立つその年の５月と７月に行われたことなども大きな話題でした。どれもこれも「無土器文化研究創生期」の、学界と研究者の熱気をおびた雰囲気の中の学史の一頁です。

その馬場平の発掘に参加した50年前に書いた私の日記が見つかりました。

「11月５日　僕は４日間、何と充実した時間を過ごしたろうか。Ｓさんをはじめ若い世代の考古学徒が、腹の底から湧きあがる意欲と情熱と、そして学問に対する冷静な態度のうちに行われた調査は、私にとってはじめてといえるほど、学界での考古学に対するはげしい喜びを与えてくれた。こうした強い力でかたまった美事な学問の世界を、僕は自分自身の力でも作りたい。Ｙさんに最大の敬意をはらう。

そして考古学への情熱を自分のうちにも感ずるのです。Ｆよ、元気だろうか。僕は一ヶ月のブランクを埋めるに充分な勉強をして調査から帰りました」

（註Ｓは芹沢さん、Ｙは由井さんのこと）。

50年前、馬場平の発掘ではみんながそれぞれの想いを胸に秘めながらこんな風に燃えていたのだろうと思います。それ以来野辺山は「旧石器研究のメッカ」の地になりました。由井さんはそれこそ休むいとまもなく、次々に訪れる研究者たちの支えととなって、努力しつづけてきたのです。（「由井茂也日記抄」「同、年譜」参照）そして私たちはみんなその誠実さの中から多くのことを学んだのです。

由井茂也さんと筆者、川上村大深山遺跡で

野辺山に惹かれて

京都文化博物館
鈴木忠司

小淵沢を発った列車が、落葉松林を抜けてミズナラの林にかかるころ、野辺山駅に近づきつつあることが実感される。昨秋ハシバミ摘みに訪れているから１年振りということになるが、ここ数年の私は八ヶ岳の裾野にひろがるこの地を思い描くような状況から遠ざかっていたから、本当に久し振りの野辺山という印象が深い。

10月７日、由井茂也、土屋忠芳、由井明さんなどの懐かしいお顔に会えるのを楽しみに、「野辺山シンポジウム2002　―標高1,500㍍野辺山高原の旧石器と研究の半世紀を振り返る―」に参加した。

シンポジウムは矢出川遺跡の発見と調査のころを白寿目前の由井茂也さんが起立したまま矍鑠として語りはじめ、土屋さん、明さんが言葉を添え、戸沢先生が学史的な解説をまじえながらなごやかに進んでいく。50年間のトピックスがスライド映像を背景にしながら展開していくという主催者の粋な演出のもとで、参会者はいつの間にかタイムトンネルのなかに誘い込まれていく。

矢出川の調査の後、70年代の京都女子大の分布調査、80年代の明大の総合調査、90年代の中ッ原の調査と野辺山では絶えることなく調査が繰り広げられてきたわけだが、この土地ほどにその時々の問題意識が尖鋭に現れて調査がなされ、人々が集い、議論が交される土地柄は、日本広しといえども他にないのではないだろうか。そして、私自身は学生時代からかぞえると30年以上もかかわってきたせいか、どうしてこの土地がこれほどまでに人々の心を惹きつけるのだろうかと思う。

野辺山が日本有数の魅力的な遺跡密集地であることはいうまでもないことであるが、この土地に暮らす人々がもう一つの決定的な要因であることに思い至る。由井さんに縁の深い明大・京都女子大学の関係者、堤さんにつらなる若い考古学研究者を核として、長野県下から日本各地からこの土地に魅せられた人々の輪が広がり、50年以上にわたる研究史が形成されことになったのであろう。

これに加えて、春、夏、秋、冬、八ヶ岳山麓に展開する美しい森とたおやかな峰々の描くスカイライン、遠望すれば遮るものもなくどこまでもつづくかのように思われる高原の緩やかな起伏が、私にとってはなにものにも代えがたい、折にふれ回帰すべき場所となっている。八ヶ岳連峰から、男山から、矢出川遺跡の対岸から、幾度も眺め渡し、歩き回り、なんとかこの土地を身の内に取り込もうとした。この風景に接するたびに、岩宿時代人の暮らした遥かな遠い過去の光景が、時をこえて眼前に広がってくるような錯覚に陥る。野辺山に足を踏み入れると、私にとっての岩宿時代の原風景が蘇ってくる。

かくのごとく、今回の催しは私にとって魅力いっぱいの心安らぐ楽しいものでした。野辺山高原での研究の半世紀を丹念にたどり、詳しく記録にとどめ、自らも近年の研究を主導しつつ若い研究者の糾合の場を設け、コーディネイターを務められた堤さんと佐久考古学会の皆さんのご尽力にお礼申し上げたい。そして、今後もこの土地が先端的な研究の発源地であり続けてくれることを祈ってやまない。

矢出川遺跡で由井茂也さんを囲んで（95年10月15日）

京都女子大学考古学研究会野辺山原分布調査を始めた頃

鈴木千里

平成14年10月、あれから30年近く時の経たことさえ忘れ、私は観光地図に記載された山梨の樹を見るために自転車のペダルを踏んでいました。昭和49年より京都女子大学考古学研究会野辺山原分布調査を始めた私たちは、幾つもの畑や原野を歩き、山梨の樹陰で由井茂也先生を囲んで、昼食のおにぎりを頬ばりました。朝、八時頃より板橋の宿舎を出立し、先生といっしょに野辺山原を歩き、石器の採集をするのです。私たちが採集をした石器の一つ一つに先生は丁寧な説明をされ、野辺山原を流れる川、林の中に湧く泉や湿原、棲息する動植物の話しをされました。

昭和47年、夏の合宿に私たちは縄文時代の遺跡見学を計画し、井戸尻、尖石、大深山遺跡を訪れ、川上村の由井先生のお宅を訪ねました。

先生は奥の部屋から、遺物ケースを一つまた一つと出してこられました。

奥様は台所より野沢菜漬けやお菓子を次々と出して下さいました。目の前には山のように遺物ケースが積まれ、その中には私たちが初めて目にする黒曜石の旧石器が納められていました。

12月の凍土の中から芹沢長介先生と発見された細石器が今、私たちが手に触れている石器であることに大きな感動を覚えました。

先生はおっしゃいました。「今でも野辺山のレタス畑や農家の庭には石器が見つかっているが、耕作や開墾、収穫に皆、忙しくて石器は採集されずに紛失されることが多い。」ということを。

私たちも旧石器を採集し遺物の保存に参加する事ができると単純な発想を抱いて、昭和49年夏より分布調査に取組みました。

畑や私有地の中へ、無造作に侵入する女性の集団に何事かと警戒された地元の方も由井茂也先生の名前と分布調査の目的を伝えるとお茶を出して下さり、拾った石器を渡して下さいました。

とりわけ、広い原野でトイレもなく「申し訳ありませんが」と声をかけると、私たちの土の付いた靴を厭わず家の中へ入れてくださいました。

私たちは宿舎へ帰ると、採集した遺物を取り囲み、○○さんの家でご馳走になったお菓子の話し、○○家で出合った好青年の話しなど、夜遅くまで大賑わいで語り合いました。

やがて、調査の回を重ねるごと、遺物も増え、採集された地点が地図を黒くして行きました。

採集遺物を正しく整理し、分布地図を形あるものとして報告すること。

採集遺物が地元の歴史に貢献され、遺跡の保存につながること。

考古学と言う学問に真摯に取り組まれていた由井茂也先生に巡りあったにもかかわらず、私は遺物の採集に夢中になるばかりで、大切な資料の報告書を作成すると言うことを後輩に委ねてしまいました。

山梨の樹の下で由井先生を囲み、採集した遺物の、今も残る確かな感触。

野辺山原を先生といっしょに歩いたあの時の歓びを今も思います。

野辺山原の分布調査を振り返って

保坂典子

私が京都女子大学考古学研究会の一員として野辺山原の遺跡分布調査に参加したのは、1974年から４年間でした。この分布調査で思い出す事は、常に由井茂也先生と一緒に野辺山の畑や道路をぞろぞろと歩いている部員の姿です。そのキャラバンシューズの靴音が今も耳の奥に残っています。

この分布調査は手探りの状態で始まり、まず遺跡に行き、表面採集をするだけでした。考古学に全くの素人の私にとって、畑の中から縄文時代の土器片や黒曜石の石器を見つける先輩が羨ましく、宝探し気分で畑を見つめて歩いていました。調査が進むにつれ、現地での聞き取り調査、畑の地図作り、遺物の分布図作り（歩測によって畑の図を作り、遺物採集地点も歩測によって地図に落とす）、より正確な地図を求め地籍図を手に入れるなど考えられる事は毎年実行に移されました。苦労して作った地図も翌年に行ってみると、畑の形が変わっている・広くなっている・林が開墾され、畑になっている等半年ほどで変貌し、急遽、歩測して地図を作り変えなければならなくなったのには困りました。調査が進むと、矢出川遺跡・中ッ原遺跡周辺だ

けでなく、野辺山原全域、どこを歩いても土器片または石器が、量の多少はあるにせよ採集されたこと、歩測であっても遺物の集中地点が明瞭に観察できる事には驚きを覚え、野辺山原を闊歩していた人々を想像せずにはいられませんでした。常に調査に参加し、一緒に 歩いてくださった由井先生の言葉からも、先土器時代の人々の暮らしを想像したものです。分布調査の途中、南向きの日当たりの良い斜面の草原に座りお昼のお弁当を食べていた時でしょうか、由井先生が、私たちにこんな質問をされました。(記憶違いが有るかもしれませんが)

「こんなふうな南向きの所には暮らせないでしょう、虫が多すぎて。どう思いますか。」先土器時代人の暮らしぶりを考えた事もなかった私には、「はい」と首を傾げるしかありませんでした。こんな事がしばしばあり、私は、由井先生には、野辺山原に暮らす先土器時代の人々の姿が、見えるのではないかしらと思ったこともありました。現在も先生が、先土器時代の人々の暮らしを探求する情熱に変わりないことを、今回のシンポジウムに参加して知ることができました。

考古学との関わりが少なくなった私は、由井先生のような情熱は失せていますが、野辺山は学生時代の情熱が蘇る特別の地になりました。

野辺山の思い出

西村直子

私が野辺山を思い出すとき最初に頭に浮かぶことは地図から受ける印象と、実際の地形の違いの大きさです。

当時の私たちの調査は三年生が中心になって行いました。三年生になる春休みに調査予定地の畑の地籍図をもって、道路から畑と地図の異同の確認を行って、それで何となく地形を頭にいれておいたつもりでした。その時、分布調査をするときには地籍図には書かれていない畑の傾斜の方向も記録していきたいね、と話し合っておりました。上の学年のした調査とはちょっとちがった視点での調査を目指してはいたのです。

春の連休に行う分布調査では、きちんと確認していたはずなのに、いざ畑に入ってみれば畑の大きさがちがったり、何もない荒れ地と思っていたところが畑になっていたりでうろたえました。

何より困ったのは傾斜の方向をカードに記録することです。大まかにみたら出来たかもしれませんが、石器を探しながら、細かく地面を見ていたら、ここは、下り、あれ、もう上っている、そして、全体をみたら?? 何がなんだか分からなくなってしまい、半日もしないうちに傾斜の方向の記入は頓挫してしまいました。本当に地面があんなにうねっているとは思いませんでした。

私たちの調査した梨の木平では縄文の石鏃があちらこちらで採集できましたが、それほどすごい石器は採集できませんでした。ただただ、地面を細かく見たという気がします。

畑の地面のまだ、私たちの足跡のついていないところにウサギやキツネの足跡をよく見つけ、由井先生に、犬や猫とはこうちがうのだ、と教えていただきました。石鏃を拾いながら足跡を見ると、自分まで古代の狩人になったような気がしました。キツネはまずそうだから、古代人はウサギを食べたのかしら、今でもこんなにいるのだから、と思ってしまいました。なにせ、鹿の足跡は一度も見たことはありませんので。五年前にハンターさんから鹿肉をもらって食べるまで、鹿のことはあまりピンときませんでした。

独りよがりにせよ、私が具体的に古代人のことを想像したいと思ったのはなぜだろうと考えてしまいました。由井先生は道を歩きながら、今回の野辺山シンポジウムで、川を遡る鮭のことをしきりに話そうとなさったあの調子で、木を見てはその木の一年中の様子を、梨の木の実りについて、クロモジで箸をつくること、川を見ては浸食される前の野辺山の地形について、カジカを捕まえたこと、それは具体的に、そして、ありとあらゆることを話してくださいました。話を聞いてすぐに理解出来たこともありますし、年月を経て理解できたこともあります。

由井先生と歩きながら、野辺山、川上村での古代と現代の暮らしについていろいろ思い巡らしたあの一時があったから、私の知らなかった豊かなくらしがあることに気づき、それから私はなんだか心楽しく暮らせるようになった気がします。

今でも目に浮かぶ表面採集で見続けた畑の地面とあの野辺山での語らいを忘れることはありません。

京都女子大学による分布調査でのひとこま

野辺山を訪れて

林　浩世

考古少女だったわけでもなく、なんとなく入部した考古学研究会。「小海線に乗って日本一の標高の野辺山駅に行ける」が入部した一番の理由だったかもしれません。

その野辺山とここまで関わるようになるとは、不思議なものです。

京都女子大学考古学研究会はＳ48年に見学旅行で行った野辺山高原で由井茂也先生と出会い、翌年から野辺山原の分布調査をすることになりました。入部した折、先輩方に「分布調査は３年の予定だから、私達も協力するのであなた方に報告書を書いて欲しい」と言われ、分布調査がどのようなものか知らないままに、調査に入ったのです。５月の連休時の調査では、残雪の残る八ヶ岳を背景に光る風を受けながらただ黙々と畑の中を歩きました。夜は電気の通じていない合宿所「牧人小舎」のランプの明かりの下で、調査結果をまとめたものです。夏は畑に入っての調査が出来ないので、フウロソウなどの高原の花咲き乱れる道を歩き、各家を回って聞き取り調査をしました。野辺山原の皆様には本当にお世話になりました。リュックサック一杯の野菜を頂いたり、御宅にお邪魔してお茶やお漬物、お菓子をご馳走になった事も良い想い出です。

私達が３回生の時、調査範囲をどうするかということになり、すでに、矢出川、柏垂、などは調査してあったので、板橋川の北の地域「ハケ」を調査範囲に選びました。まず、採集地点を落す畑の地図作りから始まりました。あるとき、牧場を歩測しないといけなくなって、おそるおそる牧場の柵の内側を歩き始めました。しばらくすると遠くにいたはずの牛たちが少しずつ近寄ってくるではありませんか。段々と早足になり漸く歩測を終えましたが、きっとあの牧場は本当の広さよりかなり広い牧場になったのではないかと思います。

採集に当たっては、研究会に採集者の名前のついたきれいな石器がいくつかありました。「石井先輩のナイフ」などのように。羨ましくて、私も自分の名前を冠した石器が欲しくて一生懸命に採集をしましたが、破片ばかりで、たいしたものが採集できませんでした。

京都女子大ＯＢによる分布調査のひとこま

仕方が無いので、遺跡がないという調査も大事だと思いつつ歩いたものです。そんななかでも由井先生は石器を採集されるので、ある日先生に「畑のどこの畝を歩かれるおつもりですか」と聞いて、場所を変わっていただきました。結果、先生は石器を採集され、私は何も採集できませんでした。先生は石器と引き合うものがあるのだと思ったものです。

野辺山との出会いが、尊敬する恩師、大切な友人達との出会いに繋がり、今の私があるのだと思います。今回のシンポジウムに参加しまして、たくさんの方々が野辺山という地で結びついているのだとの感を深くしました。シンポジウムに呼んで頂きまして、本当にありがとうございました。

奥様のおいしい“おやき”

藤田有利子

私の大学時代の想い出は、考古研＝野辺山が大部分を占めます。

広い野辺山の分布調査のことで思い出されるのは由井先生がナップサック一杯に入れてきていただいた奥様の手作りのおやきです。休憩のときみんなでおいしくいただいたことが昨日のように思い出されます。また、お宅にお邪魔するとおそばやお漬物などいろいろと奥様が出してくださいました。

今思えば、考古学の知識などほとんどなかった私たちを由井先生が暖かく受け止めてくださり、“仲間”のように親しくお付き合いさせていただいたことは、私の一生の宝となりました。

矢出川第Ⅰ遺跡の細石刃・細石刃石核

桜井洋倫

1　はじめに

ここに紹介する資料は矢出川第Ⅰ遺跡の細石刃３点、細石刃石核１点で、石材はすべて黒曜石である。この石器は、2002年、矢出川遺跡発見50周年記念シンポジウムの際、明治大学名誉教授戸沢充則先生により表面採集されたものである。御代田町教育委員会学芸員堤隆氏を通して今回実測させて頂く機会に至った。

本資料が出土した矢出川第Ⅰ遺跡は長野県南佐久郡南牧村に所在する後期旧石器時代末の遺跡である。八ケ岳南麓に位置し、標高1340mの野辺山高原にある。

1953年、芹沢長介・由井茂也氏らにより最初の調査がおこなわれ、日本列島にも細石刃文化が存在することが確認された学史的に重要なのが本遺跡であり、現在は国指定遺跡に指定されている。

本遺跡は1954・63年にも発掘調査がおこなわれ、細石刃と細石刃石核で構成されている細石刃石器群がローム層の最上面から出土することが確認され、縄文時代以前の旧石器時代末期に属することが判明した。また、周辺には多数の細石刃文化の遺跡が密集する。

以下、個々の資料について紹介してみたい。

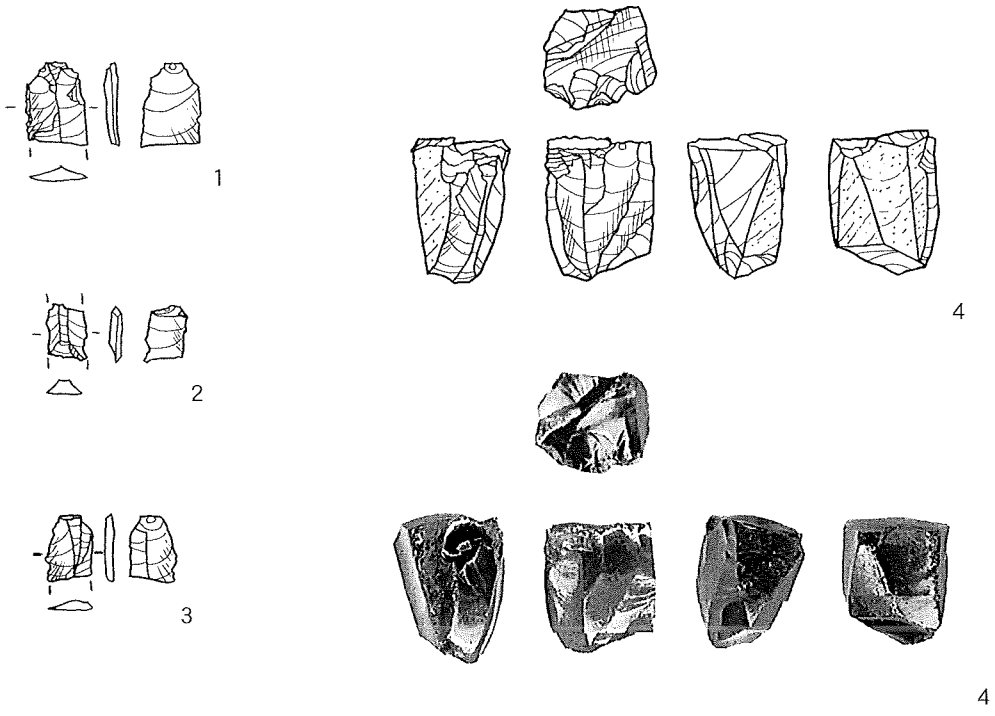
2　細 石 刃

１は細石刃頭部である。長さ10㎜、幅7.4㎜厚さ1.4㎜を測る。先端部の小剥離は頭部調整とも見られる。末端部が折断あるいは折損を受けており、折れ面のリングの方向は腹面から背面に向かっている。

２は細石刃中間部にあたる。長さ6.3㎜幅4.9㎜厚さ1.7㎜。先端部および末端部が折断あるいは折損を受けており、折れ面のリングの方向は両端部とも背面から腹面に向かって広がっている。

３は細石刃頭部にあたる。長さ8.5㎜幅5.7㎜厚さ1.1㎜。実測をおこなった３点のなかでは最も透明度が高い良質な黒曜石が素材。末端部が折断あるいは折損を受けており、折れ面のリングの方向は背面から腹面に向かって広がっている。

一般に細石刃は植刃器に装着しやすいよう長さの調節や不要部位の除去を施して使用されたものと説明さ



矢出川第Ⅰ遺跡の細石刃と細石刃石核（１：１）

れるが、これらの３点については、意図的に折断されたものなのか、あるいは偶然の折損であるのか、３点の折れ面から判断するのは難しい。

3　細石刃石核

４は、高さ18.5㎜幅13.6㎜厚さ11.9㎜の角錐状の細石刃石核である。細石刃剥離は実測図正面と左側面の一部になされている。正面には下方からの剥離も見られ、石核原形形成時の剥離痕と思われる。右側面は分割もしくは石核原形形成時の剥離と思われる。裏面および左側面の一部はローリングを受け、一面が鈍い光沢をしており、細石刃剥離より一段階古い、原石あるいは分割の段階のものと考えられる。打面は段状になっており打面再生がなされた可能性がある。また、打面緑調整が若干見られる。

細石刃剥離工程は、原石あるいは分割の段階でローリングを受けた素材に石核形成および打面設定がなされ、打面調整の後細石刃剥離がおこなわれたものと考えられる。

4　まとめ

以上、矢出川遺跡とその細石器について説明したが、矢出川遺跡とその周辺の遺跡の関連性もふまえて、もう少し詳しく野辺山原の細石刃文化について述べておきたい。

1953年の矢出川遺跡発見以来、その後の学術的な発掘調査などにより、野辺山原の細石刃文化の様相は次第に明らかにされていった。

矢出川石器群を構成している主要な石器は細石刃であるが細石刃を剥がす母体となる細石刃石核にまず形態的な特徴が見られる。５または６つの構成面からなり、構成面の数により角錐状や角柱状のような立方体的な形状をもつことで共通し、稜柱型細石刃石核とよばれる。このような形状を持つ石核の整形方法は安蒜政雄先生により矢出川技法と命名され、さらに石核形成の過程により野岳型細石核・矢出川型細石核・門型細石核に３分類された(安蒜1979)。またその細石器核から剥がされる細石刃も幅広寸づまりという特徴を持ち、これらの形態的特徴は西南日本の細石刃文化を代表するものとされてきた。したがって野辺山原の細石刃文化全体も当初は西南日本の細石刃文化の流れをくむものだと考えられてきた。

しかし、同地に所在する中ッ原遺跡群第５遺跡Ｂ地点の発掘調査において野辺山原の細石刃文化のとらえ方が改められる。出土した石器群のなかに新潟県荒屋遺跡を示標とする荒屋型彫刻刀形石器や湧別技法の流れをくむ楔形細石刃石核・細形細石刃（織笠1983）が含まれていたのである（八ヶ岳旧石器研究グループ1991)。これらの石器は東北日本の細石刃文化に特徴的にみられるものである。また、その他を組成する石器群も矢出川石器群と多くの違いを見せる。矢出川石器群は削器を安定的に組成し、一部に礫器を含むがその他の石器は組成していない。

一方、第５Ｂ地点では彫刻刀形石器を特徴的に持つとともに、大小の削器・掻器・錐状石器・折断剥片と多様な器種がみられる。

矢出川石器群とは明らかに性格の異なる石器群が出土したこと、またそれが矢出川石器群とは対照的な北方系の細石刃文化であったことから、野辺山原において南北の細石刃文化が前後して存在したことが証明されたのである。いずれにせよ矢出川遺跡群およびその周辺の遺跡群の研究成果は、単に野辺山原の細石刃文化の様相を明らかにするだけでなく、日本列島における細石刃文化研究の進展に大きく貢献したと評価できるのではなかろうか。

また、この成果のかげには由井茂也氏をはじめとする地元研究者の地道な活動が大きな功績を残していることでも注目される。由井氏らは表面採集した石器の出土地点を正確に把握し、遺跡ごとに分類していた。そのため石器は考古学的な資料価値を失うことなく、後の野辺山原の旧石器研究に貢献する貴重なものとなった。そして現地での遺跡発掘の際には地域で培った知識や情報を惜しみなく提供し、それをもとに調査計画が立てられていったのである。野辺山原の旧石器研究は学術的な成果だけでなく地元研究者の役割の重要性を明らかにしたことも大きな成果だったのではなかろうか。

5　おわりに

本稿をまとめるにあたり実測図の面では奈良大学院生山内基樹氏に基礎からご指導頂き心から感謝いたします。また、本稿をまとめる機会を与えてくださった堤隆氏には多忙な中、貴重な時間を割いて多くの面においてご助言をただきました。深く御礼申し上げます。

（奈良大学生）

引用・参考文献

安蒜政雄　1979　「日本の細石核」『駿台史学』第47号
織笠　昭　1983　「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物』
堤　　隆　1993　『遠き狩人たちの八ヶ岳』
八ヶ岳旧石器研究グループ　1991　「中ッ原５Ｂ地点をめぐる研究」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』
八ケ岳旧石器研究グループ　2002　「東矢出川遺跡の旧石器」『マイクロブレイド』第２号

新刊紹介
「考古学のこころ」
戸沢充則著

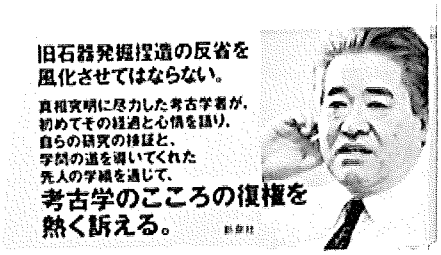
「旧石器発掘捏造の反省を風化させてはならない」、「考古学のこころの復権」を熱く訴えた戸沢充則先生の著書が刊行された。

本書できわめて驚かされるのは、旧石器発掘捏造問題の検証委員長として、傍観者ではありえず、あえて火中の栗を自ら拾われた先生の、赤裸々な手記が掲載されていることである。このような仕事は、戸沢先生をおいてほかできまい。

また、自らと藤森栄一・宮坂英弐・八幡一郎・杉原荘介ら考古学者との出会い、それらフロンティアとの想いを語るなかで、今こころを失いつつある日本考古学に大きな問題を提起している。

ぜひともご一読を薦めたい一冊である。

（新泉社刊　237頁　本体：1,700円）



由井芳江さん、ご逝去

当学会顧問由井茂也さんの考古学研究を影となり日なたとなり支えてきた奥様の由井芳江さんが、今年３月30日、88歳で逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

芹沢先生・戸沢先生をはじめ、明大生や京都女子大学考古学研究会のみなさんなど、由井家にお邪魔するたびに芳江さんにお世話になった方は多いのではないでしょうか。

いまもあの川上の家の茶の間で、芳江さんが茂也さん横に座って、微笑んでいるような気がします。芳江さん、どうか安らかにお眠りください。合掌。

馬場平調査の頃の芳江さん（後列右）

♪　編集後記　♪

佐久考古通信86号をお届けします。編集子の力不足により刊行が４ヶ月もずれ込んでしまいましたこと、皆様に深くお詫びいたします。

今、新幹線佐久平駅周辺はめまぐるしい勢いで変貌をとげています。昨日の風景ですら、今日には変わって、新しい建物ができています。東京までは新幹線で約１時間、不便はなくなりました。が、都市化が進むにつれて、隣近所のような親しさは薄れ、人の心もクールになってゆくのでしょうか。

（つつみ）

佐久考古通信　No.86

発行所　佐久考古学会

〒389-0206 北佐久郡御代田町大字御代田4108-1880
小山岳夫方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (32) 8676

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2003.8.20. No. 87

★ 目 次 ★

シリーズ　日本の遺跡・世界の遺跡13　長者ヶ原遺跡―新潟県― …… 1
考古逸品　5500年前のイノシシ……藤森英二…… 2
大石棒幻視行……川崎　保…… 4
抽象文はオオサンショウウオなのか……中沢道彦…… 6
小諸で見つけたある縄文中期の土器から……藤森英二……10

世界の遺跡・日本の遺跡

長者ヶ原遺跡

―新 潟 県―

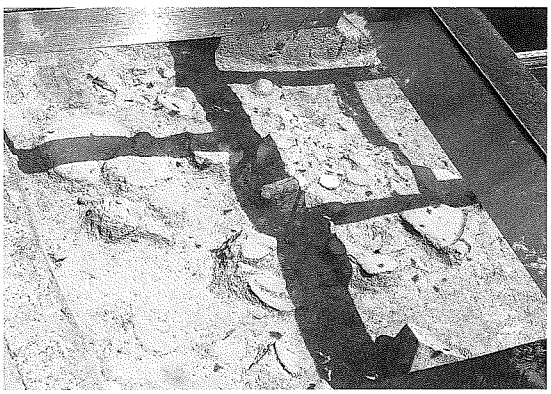
新潟県糸魚川市。翡翠を産することで有名な、姫川河口から約3km、標高90m前後の丘の上に、この縄文遺跡はある。1900年頃には既にその存在が知られており、1937年には「長者ヶ原式」という縄文時代中期の土器型式も設定されたことがあった。しかしこの遺跡が何よりも有名になった理由は、1954年からの調査で、翡翠製の装身具を製作していた可能性が高まったことであった。1971年には国史跡に指定されている。さらに1980年代からの調査では、中期中頃から後半に、大規模な環状集落が営まれたことや、蛇紋岩製の磨製石斧が多量に製作されていたことも明らかにされた。

縄文時代に、このような翡翠の玉や蛇紋岩製の磨製石斧が広く求められていたのは言うまでもないが、この姫川下流域を中心とした、富山県の北西部から新潟県西南部が主な生産地であったらしく、その製作跡が多数見つかっている。長者ヶ原遺跡は、そのなかでも秀でた集落だったのかもしれない。また縄文時代以降も、日本海に面する越の国一帯は、玉作（造）集団の根拠地の一つだったという意見もある。様々な歴史の営みに想いが巡る土地である。

ところでこの翡翠という石の発見、いや再発見にまつわる話は、実に興味深い。大正から昭和初期、まだ考古学者や地質学者が国内産の翡翠原石を確認するよりも前、相馬御風という詩人が、『古事記』に書かれた、出雲の大国主から求婚される越の国の姫の名「ヌノカワヒメ」を、「翡翠の勾玉の川の姫」という意味だととらえ、そのことが翡翠の原産地発見の端を開いたという。

現在、遺跡は公園化され、住居や土器捨場、さらには縄文の森の復元なども行われている。また、豊富な出土品は、隣接する長者ヶ原考古館で見学することが出来る。

復元住居が並ぶ。茂みの向こうには日本海が臨める。



土器捨場。石斧の未成品や、翡翠原石、土偶なども混ざる。

考古逸品

5500年前の

猪の顔を表現したと思われる４つの把手を持つ巨大な土器。1987～1993年の発掘調査で確認された集落の、１号住居址から出土した。高さは60cm、口縁の径は45cmに達する。また文様では、粘土の紐を、直線的にあるいは渦巻き状に貼り付け、その上に刻み目を入れた浮線文など、諸磯ｂ式と呼ばれる土器の特徴をよく示している。大きさも含め、他で見れない逸品である。

縄文時代前期後半。諸磯式期と呼ばれる時代。縄文時代の温暖化もピークを過ぎたが、各地で規模の大きい集落や縄文的な道具が出そろう時期である。

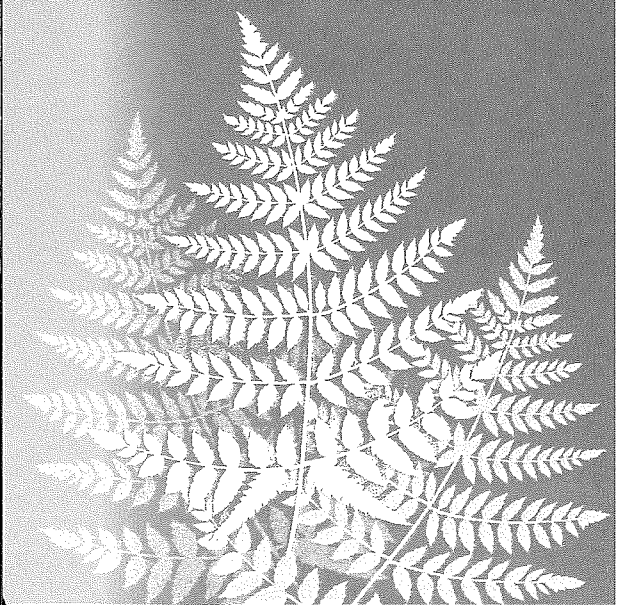
この型式の土器には、猪をあしらった文様が増加する。実際中原遺跡では、やや抽象的ではあるものも含め、猪と思われる150もの獣把手が出土している。彼らと猪の関係とはどのようなものだったのだろう。一番の狩猟対象だったのか、あるいは彼らのなかに神を見たのか？発掘にあたった調査員は、この集落での猪飼育の可能性をあげている。

現在この土器は小海町総合センターで見ることが出来る。また中原遺跡の報告書作成作業が進行中である。

Data

獣面把手付深鉢

- 時　代：縄文時代前期後半
- 遺　跡：中原遺跡
- 所在地：南佐久郡小海町本間川
- 機　能：煮炊き？
- 器　高：60cm・底径12cm
- 特　徴：巨大な容器に４つの猪の把手



Archaeological Journal
佐久考古通信

イノシシ

藤森英二

大石棒幻視行

川崎　保

佐久町佐久西小学校の北側を流れる北沢川のほとりに、人の背丈ほどはあろうかという大石棒が立っている(写真１)。私も南佐久に調査があるとだいたい立ち寄っている。

この大石棒、田んぼの水路の橋代わりにされていたのを、南佐久郡の考古学的調査を委嘱されていた八幡一郎先生が発見し、貴重なものだからということで、現在の位置に立てられたものという。

その後、周辺の発掘調査で縄文時代中期の土器が出土したことから、この大石棒はいちおう中期のものと推定されている。

これは本当に縄文時代の大石棒なのか。もともとの発見が学術的な発掘調査によらないだけに心配がよぎる。

三つのケースが考えられる。

①近代における捏造の類。

佐久町北沢の大石棒。

②やはり縄文時代の石棒。

③縄文時代以降近代以前のなんらかの造形。

①のケースだが、水路の橋にしていたくらいで、とくに祀られていたわけではないことを考えると売名行為的な捏造の可能性は低いだろう。また、先端の亀頭状の造形や石棒の横断面が真円でなく、少し扁平な楕円形であるのは、縄文時代の石棒の特徴なので、私も②の可能性が高いとは思う。

縄文時代の石棒を多く出土する遺跡が、後世なんらかの信仰の対象になっていることがある。岐阜県宮川村塩屋金清神社遺跡例はその良い例と思われる。塩屋金清神社遺跡は、縄文人が溶結凝灰岩の柱状節理の露頭を利用した石棒製作遺跡で、遺跡の名前が示すように現在も当地には石棒を「ご神体」とする塩竈金清神社がある。前述の晩期の石棒が出土した山梨県の遺跡も「金生」である。ここもおそらく「金精」といった陽根信仰にちなんだ地名だろう。小諸市の石神遺跡などもあるいは遺跡から出土する石棒とかかわりがあるのかもしれない。

つまり、縄文時代以降にも、縄文人と同じようなものを神聖なものとして崇め奉ったことがあり、それが現在にまで続いている例としてみることができる。

話は変わって一昨年まで私も調査していた大町市山の神遺跡であるが、時代は縄文時代早期中葉細久保式の集落遺跡である。41点の異形部分磨製石器（トロトロ石器・写真２）や10mを越える長方形の石列が出土したことが注目されている。異形部分磨製石器や石列は祭祀にかかわる遺物や遺構ではないかと推測されてはいるが、考古学的には決め手はない。

この山の神遺跡に隣接して山の神をお祭りする祠がかつてあった。今はアルプスあづみの公園建設のため、公園敷地外に移設されてはいるが、今もそこで山の神の祭祀は行われている。

なるほど現代人が神聖だと思うところを縄文人も神聖だと思ったのか。そういう環境的なものから来る偶然の一致はあるのかなと思っていた。

その後、異形部分磨製石器を調べていくうちに、山の神遺跡に次いで異形部分磨製石器が出土しているのが、熊本県大津町瀬田裏遺跡であることを知った。早速、瀬田裏遺跡に行ってみた。異形部分磨製石器が20点出土しているばかりか、やはりここにも10mを超える長方形の配石遺構が検出されている。また、瀬田裏というのは比較的大きな地字で、遺跡の字名は「山の神」というとのことであった。これは偶然なのだろうか。

さらに、３番目に異形部分磨製石器が出土している

のが、三重県宮川村の神滝遺跡である（16点出土）。神滝遺跡は学術的な調査で出土したわけではないので、出土状況や遺跡の様相はわからない。しかし、驚いたことにこの神滝遺跡も山の神をお祀りしている山の麓にある。

無論、こうした山の中にいけば、どこかに山の神をお祀りしたような場所があるわけだから、これだけで異形部分磨製石器と山の神信仰に特別のつながりがあるとするわけにはいかないだろう。

しかし、それにしても「山の神信仰」とはいったいどのような信仰なのだろうか。

また、それが原初の時代に遡ることがありうるのか。そうした資料が比較的充実しているのが東北地方であると教えていただき、出羽三山と並んで東北地方の山の神、山岳信仰の一大拠点である会津磐梯山へ行ってみた。

すると磐梯山の麓の磐梯町には、磐梯山を祀る磐梯神社、徳一菩薩が開基したと伝える慧日寺（えにちじ・恵日寺とも）、慧日寺や山の神信仰資料集めた慧日寺資料館が隣接している。

慧日寺資料館によると、今は春から秋にかけて里に恵をもたらすのが田の神であり、秋から春にかけて山の幸をもたらすのが山の神で両者は同じもので循環している。その入れ替わるときが田の神あるいは山の神の祭りの日であるという。田の神が農耕の神であるのに対し、山の神は狩猟の神でもある。

山の神は人間に幸をもたらすとともに嫉妬深い恐ろしい神でもある。（だからヨメさんを山の神という…）山の神を崇め奉り、山の幸に感謝するとともに山の神を威嚇することも必要とされる。

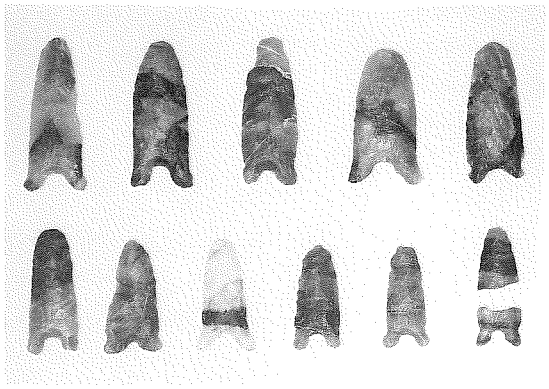
なるほど、大町市の山の神では剣形が奉納されていたが、これは感謝の意もあるが、山内安全を祈って山の神を威嚇する意味が込められているのだろう。剣形は実際には使えない。大きさは様々で形状が重要なのである。

では、山の神のこうした信仰はどこまで遡るのだろうか。興味深い説を唱えている考古学者がいる（兼康保明『考古学推理帖』大巧社）。

ヤマトタケルが伊吹山の山祇を侮って病を得た。その伊吹山の山頂には縄文時代の石鏃が埋められていた。伊吹山の山頂でとても狩猟ができたとは思われない。ヤマトタケルの伝説は８世紀頃にはあったのだろう。

しかしそれだけではない伊吹山の「山の神信仰」は遥か縄文時代に遡る可能性があると。

異形部分磨製石器も武器（一見石鏃）の形をしているが、実際は先端が丸くなっていて使えない（威嚇用である）。大きさが２㎝弱から９㎝近くまで様々であり、青白いチャートにこだわる。（特定の材質と形状が重要な証拠である）。



大町市山の神遺跡のトロトロ石器。

異形部分磨製石器も現代に伝わる山の神に奉納する剣形と共通した特徴をもっている。とはいうものの今に伝わる山の神信仰と縄文時代早期の信仰をつなぐ線はあまりに遠い。

それをつなぐものがほかにないのだろうか。

その一つの可能性がこの大石棒ではないかと思っている。女性である「山の神」は男性のシンボルである陽根を好むことはよく知られているが、私はそれだけではないと思う。なぜ天を向いて聳え立っているのか。

そのヒントが前述の磐梯山にあった。磐梯山の山の神信仰には山の幸を願うだけでなく、もう一つの側面があった。それは霊魂の架け橋としての信仰である。我々が死んだ後に、魂がまず近くの山の山頂に宿っていき、次第に遠くの高い山へ移っていく、最後に磐梯山の頂上に集まって、天へ登っていく。つまり磐梯山とは魂が天上に登っていく時の岩の梯子なのである。天にかける梯子である。磐梯山は本来「いわはしやま」と読んだ。

天にかける梯子といえば、こうした発想は何も日本特有のものではない。旧約聖書にヤコブの梯子（Jacob's Ladder）という話がある。

「ヤコブある処にいたれる時日暮たれば即ちそこに宿り其の処の石をとり枕となしてその処に臥して寝たり。時に彼夢見て梯の地にたちいてその頂の天に至れるを見、又神の使者のそれにのぼりくだりするを見たり。（中略）ヤコブ目を覚まして言けるは誠にエホバこの処にいますに我しらざりきと。即ち畏れて言けるは畏るべきかなこの処即ち神の殿の外ならず是天の門なり。かくてヤコブ朝つとに起きその枕となしたる石を取りこれを立て柱となし膏をその上に注ぎ、そこの名をベテル（神殿）と名づけたり（旧約聖書創世記第28章第

11～19節を筆者一部改変）

私は大学の時、学生課の手違いでとった神学部の授業で、野本真也先生から、このヤコブが枕にしていた石の柱は「石棒」、「陽根」のようなものであり、夢でみた天にかかる梯子の象徴がこの石の柱だと教えていただいた。

つまり天に向かって聳えるということは、男性の象徴であり（これ自体が山の神とのつながりを示唆するが）、さらに天にかかる梯子としての意味を有している。

日本列島では、阿久遺跡の方形柱穴列も三内丸山遺跡の巨木建築もはては諏訪大社の御柱も善光寺の回向柱、そして佐久の大石棒も陽根であり天にかける梯子の意義をもってはいないか。

天に向いそびえる磐梯山（写真提供「福島の山々」 http://www.asahi-net.or.jp/~QY5S-SOZK/）。

抽象文はオオサンショウウオなのか？

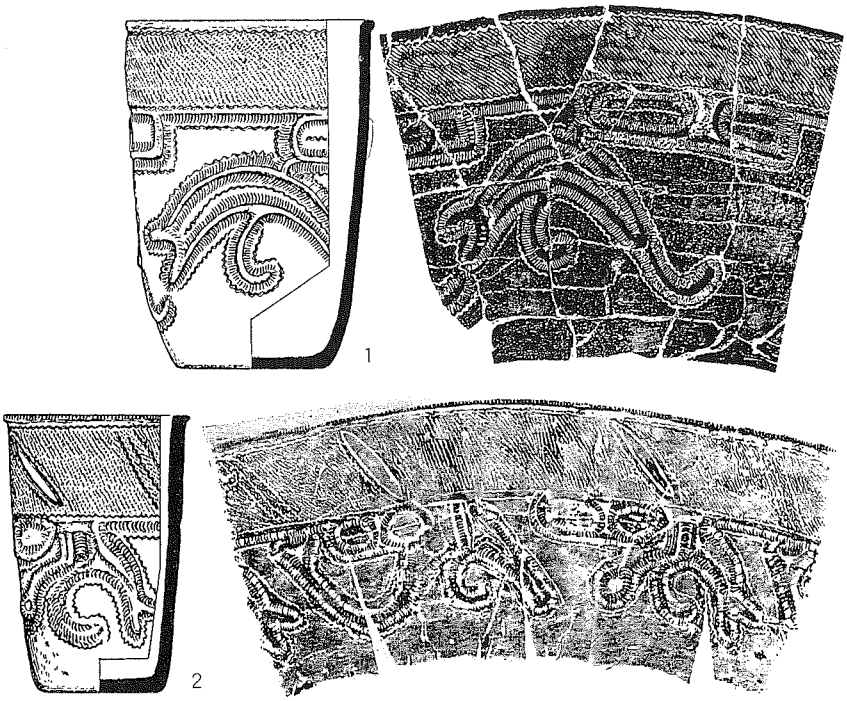
中沢道彦

抽象文とは藤森栄一が井戸尻編年を組み立てる過程で、かつて「藤内Ⅰ式」の特徴とした文様である（藤森1965）。「藤内Ⅰ式」の基準である狢沢遺跡第５号住居出土の第１図２をもって、「胴部一杯にくねる幅広くくぼんだ爪形連続文で構成された文様が、まるで山椒魚のように不気味にうねっている。この形の土器に、施文特徴からつけるべき名称を、長い間われわれは考えてきたが、いまだに適切な考えが浮かばない。（中略）何とも奇怪な施文で、必ずしも山椒魚に似ていると限ったわけでなく、要するに、思いのままの抽象なのであろう。これを仮に抽象文土器と仮称した」（藤森他1965）。抽象文の概念を広義には藤内式のゲジゲジ状文、ワラジ状文なども含まれるが、本稿では議論の都合上、狭義に「サンショウウオ状文」に限定する。

三上徹也の研究によると、抽象文は新道式期に出現し、藤内式前半（三上編年第Ⅱ段階）に盛行する。そしてその系統は藤内式後半（三上編年第Ⅲ段階）以降は簡略なものとなる。新道式期、藤内式前半期で抽象文は楕円を２つ並べる意匠の「２窓状隆帯文」と密接に結びつく点、新道式、藤内式前半で抽象文は平縁大型円筒型深鉢と密接に結びつく点、２単位がほとんどの点、文様表出が粘土板貼付から隆帯での表現へ変化する点、藤内式後半以降で中部と西関東での抽象文の系統の変遷が異なる点などが指摘されている（三上1986）。

また最近では山梨県方面の抽象文土器の資料が充実し、分析、研究が活発で、その分布域も八ヶ岳南麓になる見通しがなされている（猪俣2001、櫛原2001など）。

抽象文を具象のものにみなす試みはこれまでになさ



第１図　長野県富士見町狢沢遺跡第５号住居出土土器

れてきた。オオサンショウウオ説、蛇説、ミズチ説、「夔竜」（一足の竜）説など。稀にツチノコ説、イルカ説もある？

抽象文の具象性について、明確な根拠をもって論じたのが春成秀爾である。春成は第２図１の長野県駒ヶ根市丸山南遺跡第49号住居出土、藤内式後半に伴う有孔鍔付土器での文様に着目した。丸山南遺跡例では抽象文が蛙らしきものを咥える構図をもつ。蛙文が抽象文に咥えられる対象ということになる。蛙文が蛙たる蓋然性はかなり高い。そして咥えている抽象文を春成秀爾はオオサンショウウオと考えた（佐原・春成1997）。オオサンショウウオは泳ぐ折に後脚が尻尾と一体化し、前脚しか見えなくなるが、それと抽象文の構図が類似する点、また体躯の太さなどを根拠とするのだろう。

これに対し、最近の小野正文の見解が興味深い。昨年12月の山梨県考古学会2002年度研究集会『土器から探る縄文社会』の発表で小野は縄文時代中期の長野・山梨方面にオオサンショウウオが生息した可能性が低い点、夜行性のオオサンショウウオが蛙を咥えるよりも、蛇が蛙を咥える姿の方が縄文人に一般的である点から蛇の一種でないかと考察された（小野2002）。結論的に言えば、筆者も小野による蛇の一種とする見解に与する立場である。ただオオサンショウウオ説も有力な説であることに間違いない。そこでまずは抽象文がオオサンショウウオとなる可能性を検討する。

まず抽象文の分布域とオオサンショウウオの生息域である。抽象文土器は八ヶ岳南麓を中心に中部高地、関東西部に分布する。一方、オオサンショウウオは一般に岐阜県以西の本州、四国、九州の各地の渓流に生息し、概ね一生を水の中で過ごすとされている。中部地方について岐阜県以西とする見解は微妙ではある。現在、須坂市立水族館には長野県下高井郡豊田村で発見されたオオサンショウウオが飼育されているが、これは人為的な用件での発見と考えられている。現在の長野県では確実に原生のままオオサンショウウオの生息が確認される可能性は低いようだ。

勿論、現在と縄文時代中期前半との環境は異なる。問題は縄文時代中期新道式、藤内式期の中部高地にオオサンショウウオが生息していたかである。これについて、筆者が確認できた縄文時代のオオサンショウウオの遺存体出土は広島県神石町帝釈観音堂洞窟遺跡例のみであり、動物遺存体からの接近は難しい。環境復元からの視点では、一般に縄文時代前中期は、ヒプシサマールの高温期に相当し、年平均気温は今より１～２℃高かったと推定されている。西日本的な常緑広葉樹林帯の植生が中部高地まで延びていた可能性は否定できないが、植生の復元が不十分、かつ植生とオオサンショウウオの生息域との相関関係が不明の現状では何とも言いようがない。縄文時代のオオサンショウウオの生息域についてはなんとも言えないのである。

ちなみに一般にオオサンショウウオの文献での登場は延喜18（918）年の「本草和名」か承平元（931）年

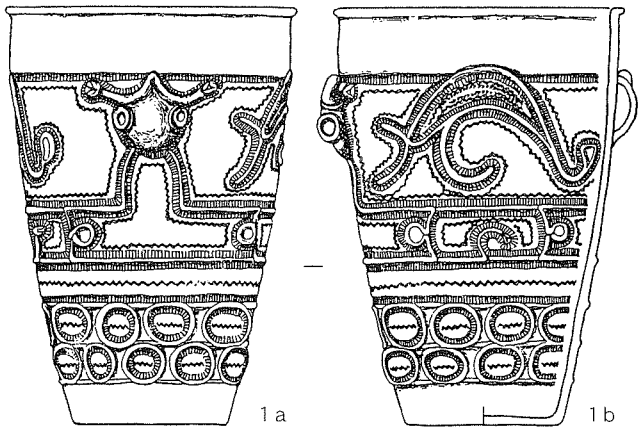
第２図　長野県駒ヶ根市丸山南遺跡第49号住居出土土器

の「和名類聚鈔」での「波之加美以乎（はじかみいお）」とされるが、それ以前の「日本書紀」「日本後紀「文徳実録」ではそれぞれ摂津、「宮殿」、近江でオオサンショウウオと推定される「魚」捕獲の記述がある。また近世以降ではオオサンショウウオに関する伝説は中国地方に多く確認され、岡山県湯原町ではオオサンショウウオを奉る「はんざき神社」が存在するなど、歴史や民俗学上のオオサンショウウオに関する痕跡は西日本、中でも中国地方多く分布するようだ。

次に抽象文がオオサンショウウオを表現し、その特徴をもつか否かという点についてである。一般に抽象文は２単位を基本とする。Ｙ状か○状などによる頭部、逆Ｕ字状に湾曲する胴部、尾部、そして弧もしくは渦巻の足状の表現をもつ。神や想像上も含めた何らかの動物を表現したものであることは間違いなかろう。ちなみに猪俣喜彦は２単位の組合せに着目し、「２匹とも足があり、尾が跳ね上がる」パターンＡ、「足がある方は尾が垂れ下がり、足のない方は尾が跳ね上がる」パターンＢ、「２匹とも足がない」パターンＣと３分類案を提示し、基本的にはＡが多いという（猪俣2001）。抽象文において足状の表現がそれなりに意味をもつということなのだろう。

ところで仮に中部高地の縄文時代中期人がオオサンショウウオを見て抽象文を表現したとしよう。その場合に縄文時代中期人は、川の中、岩場の陰などでオオサンショウウオを見て、それを図像的に表現するとすれば、上からの目線で平面図的に表現することが自然である。例えば前述の丸山南遺跡例や後述する第３図１ａの曽利遺跡例の蛙、もしくは蛙状の表現はまさしく上からの目線で平面図的に表現をしている。これは蛙を人間が普通、どの目の位置から見つめるかという点と深く関わろう。丸山南遺跡例の蛙を咥える表現を参考にすれば、抽象文の頭部Ｙ字状表現は口を側面的に表現したものかもしれないが、胴部は上からの目線で平面図的に表現したものと理解できよう。少なくともオオサンショウウオを側面から見つめても、胴部逆Ｕ字状の湾曲表現には至るまい。とすれば、抽象文は頭部が側面から、胴部は上からの視点で表現した多視点画ということもできる。しかしどうしても筆者が抽象文をオオサンショウウオと理解する上で引っかかるのが足の問題である。抽象文では弧状や渦巻状に１本の足状表現をする。だがオオサンショウウオの足は４本、かつ関節を使って動く。抽象文の１本の足状表現をオオサンショウウオの４本足を記号表現したとするには、第２図１の丸山南遺跡例や第３図１の曽利遺跡例など、蛙の手足の関節での屈曲を見事に表現する藤内式土器の作り手が弧状や渦巻状の簡略表現を選択するのかと素朴な疑問が湧く。

なおオオサンショウウオは足を体につけ、尾だけ使って、水の中で泳ぐことがある。これなら１本の足



第３図　長野県富士見町曽利遺跡出土土器

状表現の説明がつく可能性はあるが、関節の表現の課題は相変わらずのままである。よって現状で考える限り、抽象文がオオサンショウウオである可能性は低い。問題点がこのように指摘できる限り、オオサンショウウオ説は一旦おくべきであり、そこに小野説のような抽象文を蛇の一種と考えるべきとする仮説が私には魅力に思えるのである。

ただ仮に蛇の一種とした場合、問題は蛇は蛇で同時期にかなり写実的に装飾もしくは文様で採用されている点と足状の表現をどう理解するかという点になろう。前者についてはあくまで蛇の一種だから写実的な蛇と異なる、場合によれば想像上の蛇の一種でもよかろう。後者についてはむしろ弧状や渦巻状の足状の表現を、蛇を側面、上面、更にはとぐろを巻くを尻尾まで多方向から見た構図、つまり多視点画と考えればよいのではないか。とすれば蛇の一種説の可能性が高まると考える。

なお小野によると、この蛙文、抽象文が灯明具とされる釣手土器には用いられず、これら文様は「火」との関係が疎である指摘をされている。ちなみに釣手土器はイノシシの装飾が付くことが多く、イノシシは「火」と親和的であるといえる。

一方、抽象文については蛙そして「水」と親和的であるといえるのである。第２図１の丸山南遺跡例は言うに及ばず、第３図１の長野県富士見町曽利遺跡例では抽象文と蛙が交互に２単位ずつ配列される。抽象文と蛙、そして蛙が棲む環境との関係の深さを示す例である。これは抽象文が何を表現したものであれ、それを考える前提と言えるのである。ただしこれならオオサンショウウオも蛇も水との近さは同じということなのだろう。櫛原功一によると、抽象文の深鉢は大型が主体で、煮沸用とは考えにくい特大サイズもあり、貯蔵的な機能を予想している。何か液体状のものを貯蔵した可能性の検討を含め、今後分析する必要があるのだろうし、そこに抽象文を読み解く手掛かりが何かあるのかもしれない。

（稿了　平成15（2003）年７月８日）

【主要参考文献】

猪俣喜彦　2001 『抽象文土器の世界』 釈迦堂遺跡博物館

小野正文　2002 「物語性文様について」『土器から探る縄文社会』 山梨県考古学協会　ｐｐ．56～70

小原二郎　1986 『大山椒魚』 どうぶつ社

気賀沢進　1977 『丸山南遺跡』 駒ヶ根市教育委員会

櫛原功一　2001 「抽象文（山椒魚文）土器の分布と消長」『石原田北遺跡Ｊマート地点』 石原田北遺跡発掘調査団

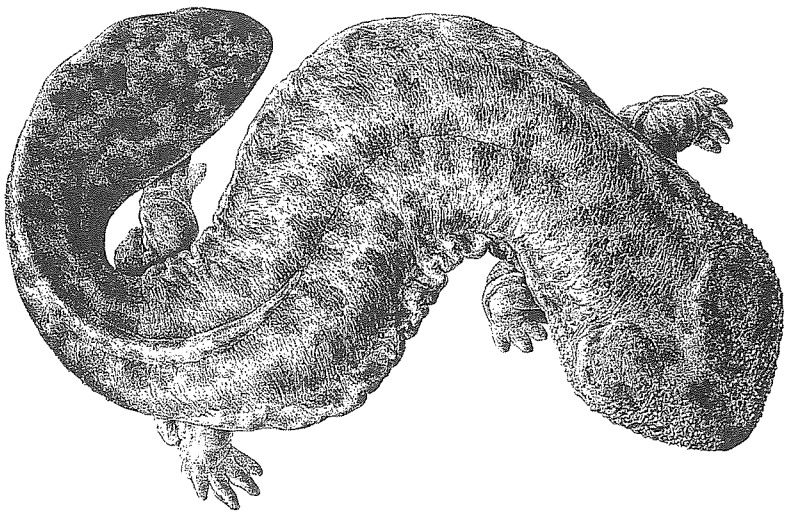
小林公明他　1991 『富士見町史』上巻　長野県富士見町

佐原真・春成秀爾　1997 『原始絵画』 講談社

藤森栄一他　1965 『井戸尻』 中央公論美術出版

松井正文監修　2003 『週刊日本の天然記念物動物編　オオサンショウウオ』 小学館

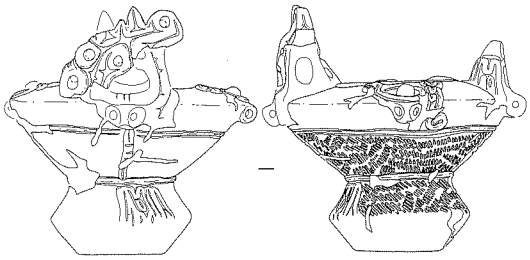
三上徹也　1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51　長野県考古学会　ｐｐ．1～48



第４図　オオサンショウウオ（『日本動物誌』より）

小諸で見つけた ある縄文中期の土器から

藤森英二



第１図　小諸市郷戸遺跡出土縄文中期土器（１：10）

１　土器、小諸にも現る

数年前、富士見町の井戸尻考古館を訪れた折り、たまたまお出でだった田中基氏に、私が個人的に興味を持っていた、ある縄文中期の土器のことを話すと、よく似たものが県の調査で出ていたはずだと、ご教授いただいた。だが、その後は私の怠慢で、特に探すこともなく、時間が過ぎていった。

しかし、その後実際にそれに該当する土器を目の当たりにした時、思わず声が出た。長野県埋蔵文化財センターが、1992年から上信越道の工事に際し調査を行った、小諸市郷戸遺跡出土の土器がそれであり、胴が極度にくびれた器形と、一つの大きな把手が特徴的である（第１図）。個人的に、これとよく似た土器を集めていたのであるが、それまでは甲府盆地周辺や中南信地方の例が中心で、佐久での確認は初めてであった。

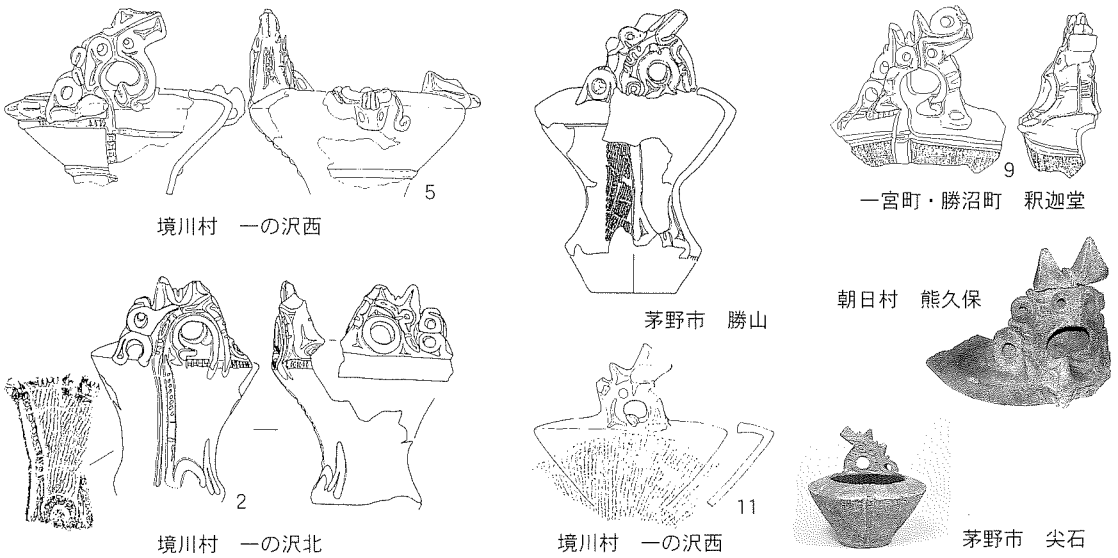
２　出会い

そもそもこれらの土器に魅せられた最初は、やはり1992年の冬、大学の先輩に連れられて、東筑摩群朝日村の歴史民俗資料館を訪れた時だった。この資料館は縄文中期を中心とする大集落、熊久保遺跡の上に建つが、ここから出土した土器を見て以来である。その後、釈迦堂遺跡でよく似た資料を目にしたのをきっかけに、中南信地方から甲府盆地で類例を集めることが出来た（第２図）。また今回図示はしていないが、この他にも富士見町、茅野市、諏訪市、岡谷市などで同類の資料を確認している。

以来、ことあるごとに、この土器について考え、どこにも発表できない駄文を何通りも書いてきたが、長野県立歴史館にて、郷戸遺跡出土の資料を実見し得たのをきっかけに、今一度この土器をきちんと追ってみようという気が起こった。ここでは紙面を借りて、これらの土器の起源に関する仮説を提示したみたい。

３　そもそも、これは何なのか

これらの土器が属す縄文時代中期中葉、県内の土器型式で言えば井戸尻1，3式の土器は、言うまでもなく立体的な装飾が際立つ時期である。そんな中で小野正文氏は、今回取り上げた土器のいくつか（第２図５・９・11）を「鶏冠把手」「鶏冠把手付土器」として、「猪を抽象化」したもの、さらに「抽象化が進み、猪とは判断しがたい例も多く、何か竜のようである。この把手にも蛇が組み合わされている」と説明している



第２図　抽出した各地の土器（写真を除き１：10）（写真提供：朝日村教育委員会・諏訪市博物館）

（小野　1989）。言ってみればキメラのようなものか。

それでは、よりシンプルな形、つまりこれらのオリジナルを求められれば、いくらかでも縄文人の意図したものが見えはしないだろうか。ここから、土器のオリジナル探しが始まった。

4　土器の類似点

これらの土器のルーツを探るために、まず知りえた資料のうち最も残りの良い郷戸の例を基に、装飾の多寡から３ないし４つのグループを設定し、次に、共伴土器や型式学的な特徴から、その前後関係を求めた。結果的に、いくつかの段階を想定出来そうであるが、まだ流動的な要素もあり、その詳細はここでは割愛する。しかしこの過程の中で、装飾の多寡にかかわらず、どのグループにも共通する要素の存在に気付いた。一部破片資料からの憶測も入るが、以下に列挙してみる。

①「く」の字条に内曲した口縁と、くびれた胴部、そろばん型に張り出した底部

②縄文の地文

③中央に大きな空洞のリングを持つ一単位の把手

④把手上部にある２つの三角形の突起とその内部の三叉文

⑤把手右側に突き出た部位の存在

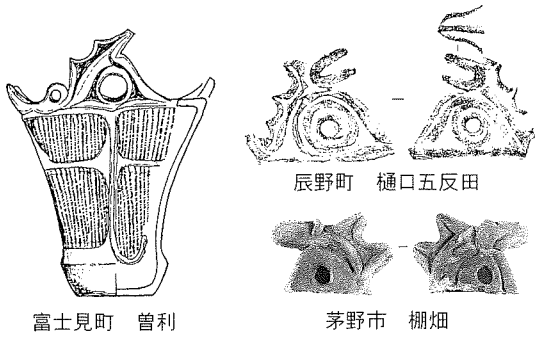
⑥把手から「し」の字状に延びる懸垂文

つまりこの基準を満たした上に、さらに装飾を加えることで、各々の土器が成立しているのである。

5　その起源

では、上記の①～⑥の基準を満たしてさえいれば、それはこの種の中でもシンプルな土器と言えはしないか。そのような視点で見てみると、ある有名な土器に行き着いた。

第３図　茅野市尖石遺跡出土蛇体把手土器（高さ19.5cm）（写真提供：尖石縄文考古館）



第４図　尖石例とよく似た把手を持つ土器（１：10）（写真提供：尖石縄文考古館）

第３図に示した尖石遺跡出土の土器は昭和８年に宮坂英弐氏によって発掘され、それ以来「蛇体把手付土器」として、現在も尖石遺跡のシンボル的存在といえる土器である。この土器をよく見ていくと、先に列挙した項目のうち②～⑥の要素は全て含んでいるということが出来る。また①の器型に関しても、底部は度合いは弱いものの屈曲し、さらに大きく「く」の字状に内曲する口縁は等しいものである。

つまり土器型式でやや先行するこの尖石遺跡出土の土器が、オリジナルに近いと考えるのが、現在の私の意見である。他にも曽利遺跡出土例や、さらには樋口五反田遺跡、棚畑遺跡の例も把手部のみではあるが、この範疇に入るだろうか（第４図）。

またこの時期（土器型式の区分では藤内２式期）には、屈折した口縁部にヘビを象ったと思われる把手が付く土器が、南信や甲府盆地周辺で多く見られる（第５図１、２）。つまりこの時期に、ヘビと思われる様々な表現が装飾把手として現れる中で、尖石の例やそれに類似する造形（第３・４図）に、より装飾が加わり、やがて今回抽出したグループ（第１・２図）に変遷していくというのが、私の仮説である。ただしこの間にはややヒアタスもあり、さらに類例を増やし資料を観察していきたい。

6　情報は如何にして伝わるのか

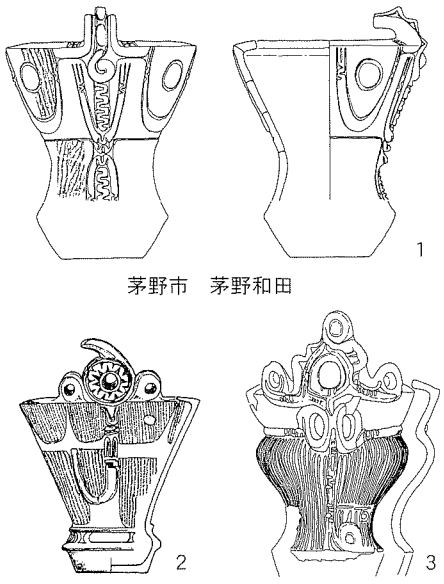
以上自分の考えのみを述べさせてもらった。もともとは文様の持つ意味を知りたくて始めた考察であったが、4000年以上前の造形物である土器文様に隠された意図を読み解くことは、現代を生きる私たちには不可能に近いし、またその必要性も無いかも知れない。私自身、現在はこれがイノシシであるかヘビであるかにこだわるよりも、この仮説に基づいて、縄文時代の情報の伝わり方に迫れないかと考えている（小杉　2000）。例えば大型で一際装飾が多く、且つ良く似ている郷戸、釈迦堂、熊久保の各例は、今のところ分布域の外郭に位置している（第６図）。これは土器そ

のものが運ばれた結果なのだろうか。あるいはそれぞれの土地に土器の情報が伝播していく中でも、強固な共通のイメージがあるがために、ここまで似た土器が生まれたのだろうか。とすれば一見イメージの違う佐久市寄山遺跡の土器（第５図３）も、実は情報の加不足により変質した姿と思えなくもないのだが。この辺りはもう少し腰を据えて考え、改めて発表したいと思っている。

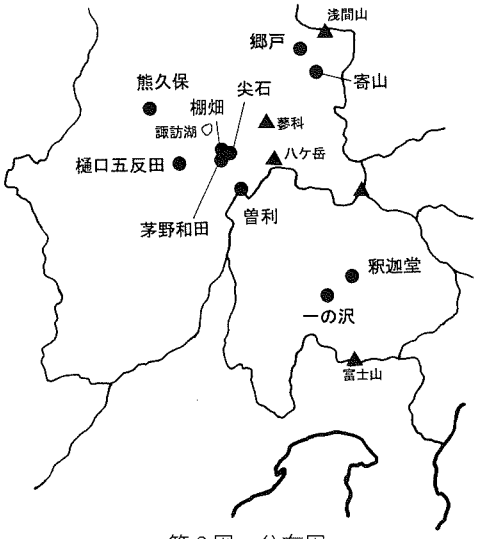
尚、本誌への掲載にあたり、多くの方々や関係機関にご協力をいただきました。功刀　司、佐野　隆、田中　基、中島　透、布施光敏、綿田弘実の各氏、長野県立歴史館、朝日村教育委員会、諏訪市博物館、尖石縄文考古館の方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。

参考文献

茅野市教育委員会　1970　『茅野和田遺跡』
長野県教育委員会　1972　『長野県埋蔵文化財包蔵知発掘調査報告書』―上伊那郡辰野町その１―
富士見町教育委員会　1978　『曽利』
茅野市　1986　『茅野市史』上巻
山梨県教育委員会　1986　『一の沢西』
山梨県教育委員会　1988　『一の沢北他』
山梨県教育委員会　1987　『釈迦堂Ⅱ』
小野正文　1989　「縄文土器の猪」『季刊　自然と文化』第25号
茅野市教育委員会　1990　『棚畑』
茅野市教育委員会　1994　『勝山遺跡』
佐久市教育委員会　1995　『寄山』１
小杉　康　2000　「ビビの物語―象徴的器物の型式論」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版
長野県埋蔵文化財センター　2000　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』―小諸市内３―



第５図　関連が想定される土器（１：10）



第６図　分布図

♪　編集後記　♪

実は全くの偶然ではあるが、今回掲載した川崎氏の論文は、縄文時代の石棒から論が展開され、中沢氏と藤森の論考も、縄文時代中期の象徴的な遺物を題材としている。さらに考古逸品で紹介した小海町の資料もこの要素を含み、ちょっとした特集号となった感がある。私などは、遺物を眺めながら勝手な想像をするのが大好きなので、編集作業も楽しいものであった。しかしイラクでは戦争の余波で文化財の破壊・盗難が続いている。これでは考古学もへったくれもない。過去の遺物を眺めているうちに、頭上をミサイルが飛び交わないよう注意したい。　（藤森）

佐久考古通信　No.87

発行所　佐久考古学会
〒389-0206 北佐久郡御代田町大字御代田4108-1880
小山岳夫　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (32) 8676

発行者　藤沢平治
編集者　藤森英二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL JOURNAL
2004. 1. 18. No. 88

★ 目 次 ★

シリーズ 世界の遺跡・日本の遺跡14 森将軍塚古墳 …… 1
考古逸品 墓に供えられた耳 …… 堤 隆 …… 2
臼田町月夜平遺跡の調査 —甦った配石墓— …… 藤森英二 …… 4
苅谷俊介さん、考古学を熱く語る …… 6
シンポジウム「日本の細石刃文化」開催される！ …… 8

世界の遺跡・日本の遺跡14

森将軍塚古墳

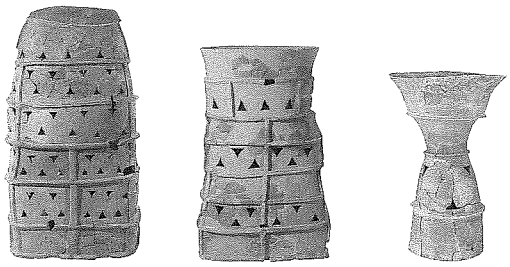
—長野県千曲市—

千曲川右岸、標高490mの尾根上に築かれた森将軍塚古墳は、善光寺平をみはるかす前方後円墳である。

古墳時代前期、四世紀後半に築造されたもので、全長100m、科野のクニ最大の前方後円墳である。その前方部から後円部にかけては尾根の地形に沿って、“く”の字状に折れ曲がるのが特徴である。

その竪穴式石室は、板状の石を積み重ね、長さ7,6m、幅２m、高さ2,2mで、日本最大級である。石室内からは、三角縁神獣鏡のほか、剣、刀、鏃、鎌などが出土している。

古墳の周囲には200にもおよぶ埴輪が並べられていた。壷形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪（写真右１点）、家形埴輪、合子形埴輪（写真左２点）などである。

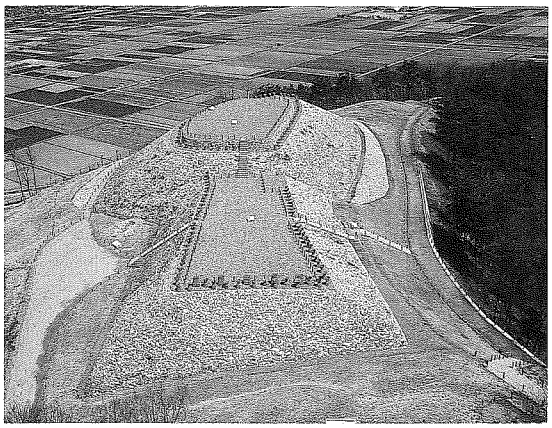


森将軍塚から出土した埴輪 （左：２点合子形、右：朝顔形）

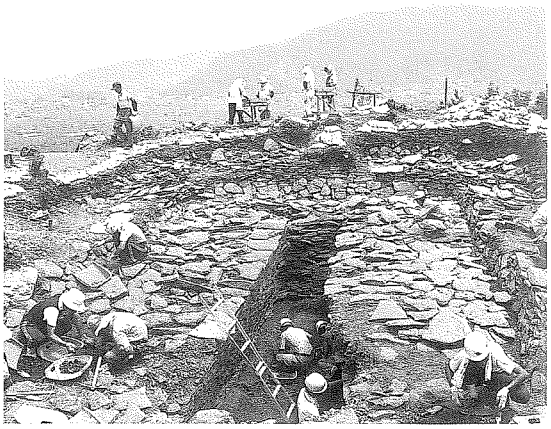
森将軍塚は、1960年代半ば頃より周辺で土砂採取がなされはじめ、その崩壊の危機に市民や研究者が一体となった保存運動が巻き起こり、ついには1971年に国史跡の指定を受けた。その後、1981年から1992年まで延べ12年、総事業費５億円を費やして復元整備がなされ、現在に至っている。

森将軍塚に葬られた人物は、おそらく科野のクニをつかさどるような王であったに違いない。

（写真提供：千曲市教育委員会）



墳丘と屋代の水田を見おろす



竪穴式石室の調査（Ｓ58年）

考古逸品

墓に供えられ

福耳ともおもえるこの耳形の土製品は、御代田町滝沢遺跡の縄文後期前半堀之内期の墓に副葬されていた。これは当初から耳形に粘土を整形して焼いたものではなく、中期の渦巻状把手で耳たぶ状の曲線をみせる一部を再加工して製作した珍品である。実際の耳とほぼ同じ大きさとなっている。被葬者は、生前耳に何らかの病や障害があった人物で、その再生を込めてこの遺物が副葬されたのだろうか。

滝沢遺跡は、縄文中期から後期にかけての遺跡で、国重文の焼町土器が出土した川原田遺跡とならんで浅間山麓を代表する縄文遺跡である。敷石住居や土坑墓などが検出されている。他の土坑墓からは、滑石製のペンダントやヒスイの垂飾なども出土している。

本遺物が出土した土坑は、180×110㎝の不整楕円形で、墓標とみられる柱状の礫があり、深鉢の底部その他若干の石器類が出土した。人骨は検出できなかったが、遺構の構造と副葬品から墓とみて相違あるまい。

この耳型土製品は現在浅間縄文ミュージアムで展示されている。

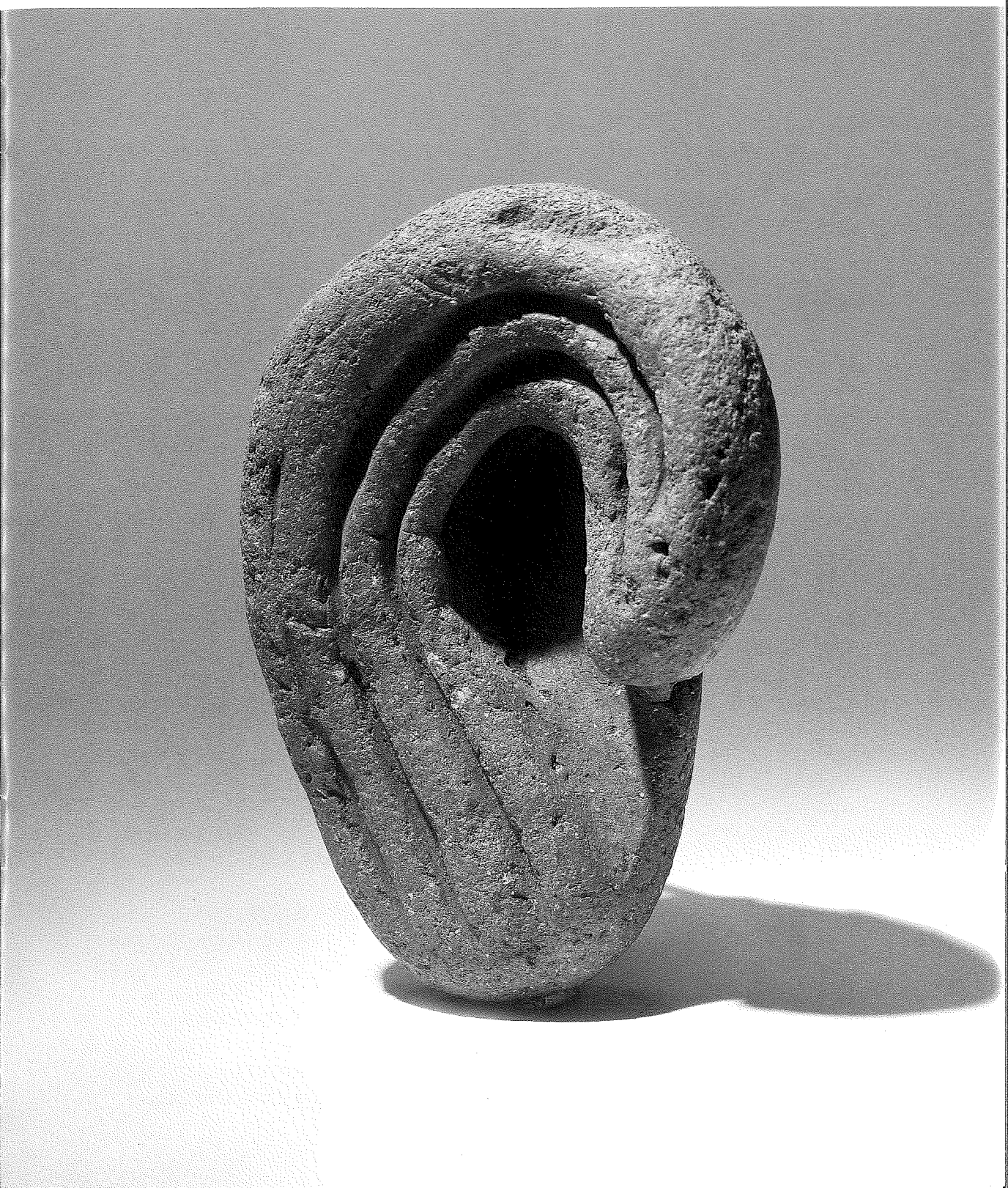
Data

耳形土製品

- 時　代：縄文時代後期前葉
- 遺　跡：滝沢遺跡
- 所在地：北佐久郡御代田町塩野
- 機　能：副葬品
- 大きさ：長さ7.7㎝　幅5.5㎝　厚さ2.9㎝
- 特　徴：土器の渦巻状の突起を再加工

た耳

堤　隆



臼田町月夜平遺跡の調査

―甦った配石墓―

藤森英二

1　はじめに

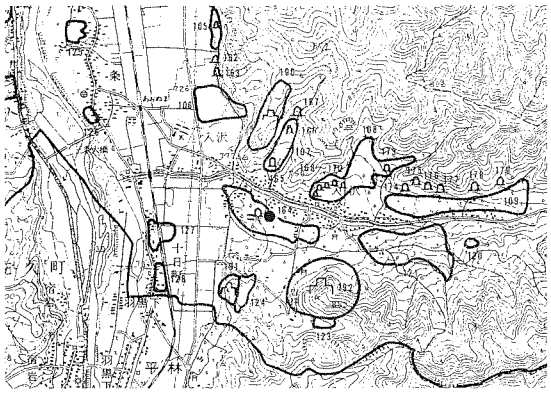
臼田町教育委員会では、現在町誌編纂事業を行っており、本会では臼田武正副会長とわたし藤森がこの事業に関わらせていただいている。平成15年２月、町内の月夜平遺跡範囲内で個人住宅建築の話が持ち上がった。これに対し町教育委員会は、上記町誌編纂委員の考古編担当者主体の調査体制をつくり、結果的に私たちがこれに関わらせていただく運びとなった。

月夜平遺跡は、臼田町入沢地区を西に流れる谷川の左岸、千曲川の沖積平野に突き出た舌状の台地に位置し、面積は30,000㎡に及ぶ（第１図）。標高は約750m、周辺の沖積地との比高は約10mである。

この月夜平遺跡といえば、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世の複合遺跡で、なかでも昭和８年に発見され、現在遺跡付近の大宮諏訪神社に納められている長さ152㎝を誇る縄文後期の磨製石棒や、佐久地方ではその黎明期とも言える弥生中期の土器が有名であり、遺跡内には古墳も存在している。

最近では平成７、９年に農道新設にともない町教育委員会による発掘調査が行われたが、本学会の方々が中心的役割をはたされている（1999『月夜平遺跡』臼田町教育委員会）。この時の調査は遺跡本体と考えられる台地より一段下がった地点であったが、それでも縄文中期末の住居址などが検出され、当遺跡の更なる広がりが予想された。

さて、今回の調査地点は遺跡の本体と思われる台地上であるが、昭和32年３月31日付けの『田口青沼村公民館報』によれば、当時この台地上で発掘調査が行われ、縄文後期の遺物とともに、同時期の住居址も検出されたという。さらに昭和48年刊行の『青沼の自然と歴史』によると「環状列石」が検出されたとされているが、これはこの時の調査のことと思われる。



第１図　月夜平遺跡位置図

私たちが行う今回の調査は、この環状列石が発見されたという地点に近い。否応無しにも期待が高まる。

かくして平成15年３月15日、都合で臼田氏は来られなかったが、町教育委員会事務局や文化財保護委員の方々に、考古編担当の上田町誌編纂室の川上　元氏、上田国分寺史料館の倉沢正幸氏、そして川上氏の義理の息子さんであられる和根崎剛氏、それに私藤森も加えさせていただき現地に向った。天気予報は「雪」である。

2　発掘現場

当日、薄曇りのなか発掘をはじめたが、天気予報通り午後には冷たい雨と雪がちらついた。

調査予定地は舌状台地の北の縁に近く台地の中心からは外れているが、かつて環状列石を発見した位置に近いというのは前述の通り。そこを軸に調査範囲を定め表土剥ぎに入った。ちなみに今回の調査は、全て手掘りであるが、なぜか私自身は重機を使った調査に参加した経験がごく少ない。

さて、以前この遺跡を事務局の方に案内していただいた折り、表面採集で縄文中期～後期の土器を見つけていたので、すぐに大量の遺物に当たるかと思っていたが、実際はそうでもなく、わずかに土器片が黒土の中に認められる程度であった。

しかしたまたま私の掘った箇所では、黒色土の下、黄色いローム層の中に長軸150㎝短軸70㎝の黒色土のプランが見え、その周辺ではついに大量の縄文後期の土器が出始めた。土坑であった。さらに川上氏らが入っていたグリッドでは、累々と人頭大程の礫が出始め、それはいくつかのかたまりとなっていた。周辺からは沢山の土器も出ている。どうやら集石遺構にあたったようである（写真１）。しかも単なる集石遺構のみではなく、明らかに方形に並べた状態の礫群が確認された。配石遺構である。

翌16日は快晴。遺跡から西側には、澄み切った空の下に八ケ岳連峰がきれいに見渡せ、昨日降った雪が輝いている。

引き続き発掘を続けると、集石、配石はさらに広がりを見せた。特に配石遺構はっきりその姿を現し、長軸1.2m、短軸0.8mの長方形で、あたかも川原石で囲った墓穴のように、個人的には思えた（写真２）。

結局この２日間の調査では、約63㎡の調査区から、

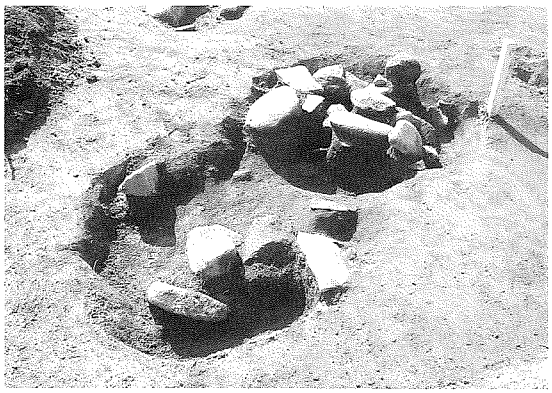


写真１　姿を見せた集石群。

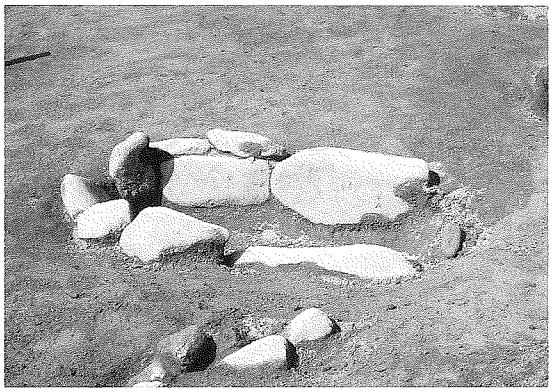


写真２　配石遺構。きれいな長方形となった。

３基の土坑と２基の集石遺構、そして配石遺構１基が確認された。

また２日目の途中、昭和32年の発掘に際し土地を提供された日向賢一氏が現地を訪れた。日向氏はご高齢であるがしっかりとした口調で当時発掘された辺りを指示された。先に事務局に聞いた通り、私たちの調査区はちょうどこれに隣接していたが、もしこのご記憶が正確であれば、それが環状列石であったかどうかはともかく、この付近には配石を伴う遺構がごろごろしていることとなる。縄文時代後期の墓域だったのだろうか（写真３）。

３　縄文後期のイメージの先に

現時点では、この発掘で得られた資料を全て把握できたわけではないが、後期初頭の称名寺式期から堀之内式期、さらに加曽利Ｂ式期の土器が中心と思われる。さらに分析を進めたい。

またこの調査に前後して、月夜平遺跡付近で採集された遺物を見せていただく機会に幾度か恵まれた。縄文中期から後期の土器が主なもので、中には完形に近いものもあり、さらに後期のものと思われる土偶の優品も目にすることが出来た（写真４）。他にも打製石斧の類いや、後期のものと思われる石剣や石棒、あるいは漁労に使われであろう石錘なども見られた。

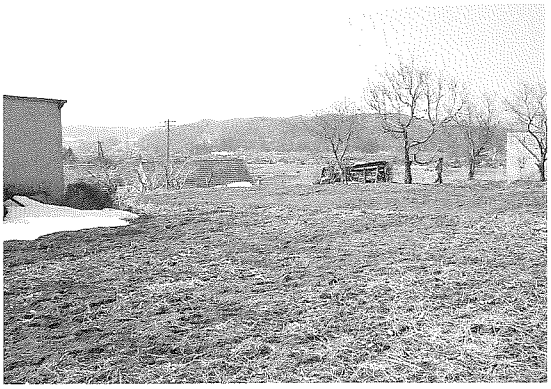


写真３　月夜平台地。遠方には八ケ岳連峰が望める。墓域をもった集落だったのだろうか？

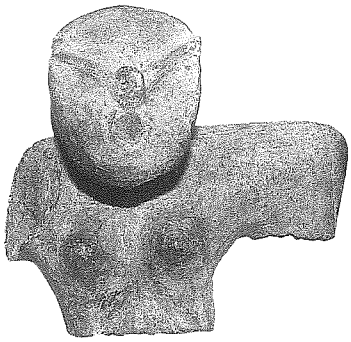


写真４　月夜平遺跡で採集された後期の仮面土偶。

これらは発掘調査で得られたものではないが、今後の編纂作業の中で資料化し、出来るだけ公表出来ればと思っている。

ところで特に県内では、中期後半をピークとし、後期での遺跡数の減少があまりにも激しいため、後期については文化的にも衰退に向うというイメージで語られることもあった。しかしこの月夜平遺跡を始め、佐久地域には内容の濃い後期の遺跡が多いような印象を受けている。無論、遺跡数では中期が最も多いのであるが、このあたりはいずれデータ化し、細かな地域ごとの遺跡の増減や立地の変化などをみていく必要を感じている。

最後に、調査参加の機会を与えて下さり、さらに本誌への掲載にあたりご理解とご協力をいただいた臼田町教育委員会・町史編纂室事務局の方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

俳優・考古学者　二つの顔をもつ男

苅谷俊介さん、熱く考古学を語る！

—佐久考古学会共催・後援　講演会事業—

2003年11月23日・24日の両日、俳優かつ考古学者という二つの顔を持つ苅谷俊介さんの講演会が佐久で開催された。

苅谷さんは、テレビドラマ「大都会」「西部警察」での刑事役や、最近ではＮＨＫ大河ドラマ「利家とまつ」などでもおなじみの個性派俳優である。かつては、石原プロに所属し、現在は自ら「土舞台」という劇団を主宰している。劇団の名となった土舞台は、奈良県桜井市にある史跡の名で、聖徳太子が日本で初めて歌舞を教えるために学校を開いた場所、つまり芸能発祥の地であるという。

1946年大分県生まれの苅谷さんは、高校時代に、大分市早水台遺跡の発掘調査に参加し、トレンチから山形文土器を発掘、以来考古学に興味をもったという。「手のひらの中にある土器片、この土器を作った縄文人と自分は８千年の時を越えてつながっている」といいしれぬ感動をおぼえた。また、そこでは生涯の考古学の師と仰ぐ故賀川光夫先生との邂逅もあった。1980年、世田谷にある石原裕次郎邸新築にあたっての上神明遺跡の発掘現場では、裕次郎とともに古墳時代住居に立った。

現在は、日本考古学協会員。富山県小矢部市桜町遺跡検討委員会委員として、縄文遺跡の保護にもかかわっている。『まほろばの歌が聞こえる—現れた邪馬台国の都—』（1999年Ｈ＆Ｉ社刊）、『土と役者と考古学』（2003年、山と渓谷社刊）などの著書がある。

南牧村での公演のようす

93年からは神奈川県を拠点に、関東の古代史ファンを対象にした「考古見聞会」を主宰、「現れた邪馬台国の中枢」・「21世紀と縄文文化」などのシンポジウムを実施するなど精力的な研究活動を行っている。また、縄文土器の実験製作も回数を重ね、30点以上もの作品がある。

苅谷さんのお嬢さんもまた、苅谷さんの血を引き、大分で発掘調査にたずさわっているのだという。

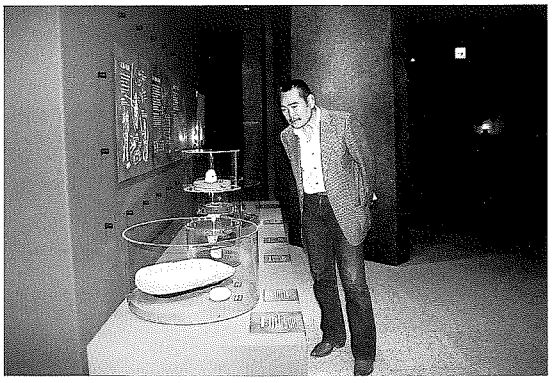
「大昔の暮らしをさぐる」

11月23日は、南牧村の中央公民館で矢出川遺跡発見50周年記念の講演会として、南牧村教育委員会主催、佐久考古学会後援として開催され、村民を中心に佐久考古学会員などが会場に訪れた。南牧村長も講演に聞き入っていた。

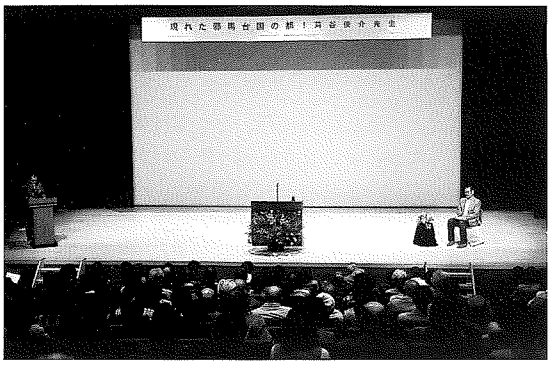
「大昔の暮らしをさぐる」と題した講演会では、旧石器時代から縄文時代にかけての話題であった。ジェスチャーを交えた猿人から新人に至る人類進化の話は、大うけだった。また、地元矢出川や中ッ原の旧石器時代遺跡にも話がおよび、八ケ岳の旧石器時代に想いがおよんだ。興味深かったのは、苅谷さんが取材と撮影に訪れたインドネシアの先住民集落の民族例で、縄文時代の集落形態や墓制に話がおよぶなど、豊富な民族学の知識にも学ぶところが大きかった。

講演会終了後、北相木村の栃原岩陰遺跡を訪ねられ、考古博物館では藤森学芸員の案内で、北相木人などと対面した。骨製釣り針などの資料に興味深く見入られていたのが印象的だった。

当日の晩は、考古学会が主催する佐久ホテルの懇親会にも出席いただき、藤沢会長・小山事務局長などとともに考古学談義に花が咲いた。苅谷さんは実際には召し上がらないのだが、ご本人いわく「オレは顔で酒を飲む」そうで、酔っ払い研究者の珍説にお付き合いいただくハメになった。飲み物はともかく、料理は「鯉の甘露煮」をいたく気に入られて食した様子、佐久鯉発祥の地佐久ホテルだけに鯉づくしの料理で、い



浅間縄文ミュージアムで縄文石器を見る



講演会「現れた邪馬台国の都」

「卑弥呼は２人いたんです」と苅谷さん

かがなものかと心配したが、喜んでいただけ光栄だった。

「現れた邪馬台国の都」

翌11月24日は、御代田町浅間縄文ミュージアムにおいての講演会で、浅間縄文ミュージアム主催、佐久考古学会共催で開催された。160名の拝聴者がホールに集まった。

「現れた邪馬台国の都」と題し、苅谷さんの持論でもある邪馬台国畿内説や、謎の女王卑弥呼に関する考察が豊富な考古学的知識と綿密な畿内でのフィールドワークに基づいて展開された。まさしく苅谷考古学の真骨頂である。

苅谷説では、纒向遺跡こそが邪馬台国の宮都であり、近畿・吉備連立勢力に東海が参入したことによって、２度の宮都大造営がなされているのだという。また、邪馬台国の女王卑弥呼とは個人名ではなく、霊力に長け太陽を司る特定巫女を指す尊号、すなわち日妻巫女（ひめみこ）の訛化であり、初代日妻巫女と二代目日妻巫女の二人がいたと推測する。

初代日妻巫女（卑弥呼）は『魏志倭人伝』に記された「年已長大」な人物すなわち高齢者であり、二代目日妻巫女（卑弥呼）は魏に使者を遣わし、「親魏倭王」の称号を得た人物だという。

一般に卑弥呼の墓ともいわれることのある著墓古墳は、２代目日妻巫女の死後円墳として築造され、その後初期大和政権の国家統一の動きとも連動して前方後円形に整えられたのだと、著墓古墳の現地踏査に基づいて苅谷説が展開される。

役者100％、考古学100％とご本人が言い切るだけあって、壮大な苅谷考古学ワールドにいざなわれた２日間だった。

新刊紹介
『土と役者と考古学』
苅谷俊介 著

本体：1500円　山と渓谷社　2003年９月刊

俳優と考古学者、二つの顔をもつ男苅谷俊介さんの新刊で、昨年秋に刊行された出来立ての書籍である。以下の章立てからなっている。

■そのとき、私の歴史が動いた！
■映画と役者にかけた若き日々
■わが考古学放浪記
■古代の旅の空へ
■縄文に魅せられて
■袖で触れ合えば、みんな考古学仲間！
■土と役者と考古学

考古学との出会いから、助監督時代、俳優としてのスタートと超貧窮生活、石原裕次郎さんとの出会いや渡哲也さんとのエピソード、恩師故賀川光夫先生への想いなどが、苅谷さんの考古学への情熱とともに記されている。各地での発掘調査で出会った考古学徒は、実に風変わりで無骨、しかも心優しき人々である。例えば古墳時代研究で名をはせるイシノハクシン（石野博信）氏などの人物像も「なるほど」と描かれている。

「考古学は未来学」苅谷さんはいう。苅谷さんのイメージはとかくハードボイルドだが、考古学へのきめ細かな愛情もこの本から伝わってくる。とにかくオモシロイ、そして私たちが日々忘れかけていた考古学への情熱をかきたててくれる。手にとってご一読をお奨めしたい本である。

姉妹本、『まほろばの歌が聞こえる―現れた邪馬台国の都―』（1999年Ｈ＆Ｉ社刊）もどうぞ。

矢出川遺跡発見50周年シンポジウム

「日本の細石刃文化」開催される！

1953年、矢出川遺跡において、由井茂也さんや芹沢長介さんらの踏査によって日本ではじめて細石刃文化の存在が確認されてから、2003年でちょうど50周年という節目の年を迎えることになった。そこで、半世紀におよぶ日本の細石刃文化の研究成果を確認し、今後の研究の課題を模索すべく、シンポジウム「日本の細石刃文化」が八ケ岳旧石器研究グループの主催、浅間縄文ミュージアムの共催で、03年10月18・19日の両日同ミュージアムで開催された。参加者は、北海道から九州の全国におよび130名を数えた。

初日は、「日本列島における細石刃文化の様相」と題し、その研究史、石器群、遺跡群、組成、編年などが地域ごとに検討され、半世紀を経て明らかになったその様相をとらえられた。諸地域の発表者（紙上発表も含む）は、北海道（山原敏朗、寺崎康史、宮本雅通）、東北（太田原潤・大場正善）、関東（萩谷千明、永塚俊司）、中部・北陸（立木宏明、吉井雅勇）、東海（富樫孝志）、近畿（松浦五輪美）、中国（光石鳴巳）、四国（多田仁）、九州（杉原敏之、松本茂）の各氏であった。

２日目は、周辺地域の様相、研究の現状と課題、年代と環境、その終末に関する問題、遺構、遺跡構造、移動、居住形態、遺跡形成、荒屋型彫刻刀の形態と機能、細石刃の機能、石材利用、黒曜石利用の動態、その他細石刃文化をめぐる諸問題が論議された。発表者は（紙上発表も含む）、加藤真二、小畑弘己、加藤博文、橋本勝雄、工藤雄一郎、谷口康浩、加藤学、佐野勝宏、高倉純、野口淳、鹿又喜孝、米田寛、長沼正樹、佐藤宏之、仲田大人、栗島義明の各氏であった。

発見から半世紀をへて、北海道から九州まで1792遺跡の存在がシンポジウムにおいて確認された。近年の年代測定の進歩などから細石刃文化の較正年代は、本州では1．5万～２万年前頃にあたり、北海道では2．5万年前ころまでさかのぼることも明らかになってきた。

50年の研究成果は、700頁におよぶレジュメ「日本の細石刃文化」Ⅰ・Ⅱとしてまとめられた（希望の方は浅間縄文ミュージアムにて7000円で購入できる）。

シンポジウムにあわせて浅間縄文ミュージアムでは、企画展「氷河時代を越えて」が開催され、国内の細石器や草創期の重要資料が展示された。

シンポジウム風景

企画展「氷河時代を超えて」

♪　編集後記　♪

市町村合併の話が具体的に進んでいる。私たちの暮らしや社会に直接的に影響してくるだけに無関心ではおれない。

これまで埋蔵文化財担当者の不在だった町村に、合併によってより精緻な埋文保護の網がかけられることには期待したいところだ。半面、各町村がおこなっていた独自性のある一般文化財の補助事業などは、財政難の理由からカットされてしまう可能性がある。

佐久市・臼田町・浅科村の合併協議会からは御代田町が離脱し、望月町が参入した。

合併も自立も、共に苦難な道に他ならない。　（堤）

佐久考古通信　No.88

発行所　佐久考古学会

〒389-0206 北佐久郡御代田町大字御代田4108-1880
小山岳夫　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267 (32) 8676

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2004.6.26.　No.89
JOURNAL

★　弥生時代特集号　★

シリーズ　世界の遺跡・日本の遺跡15　五里田遺跡 …… 1
考古逸品　土偶形容器……堤　隆…… 2
佐久地方の大開発時代……小山岳夫…… 4
丘陵上に営まれた弥生時代中期・後期の集落遺跡 ―後家山・東久保遺跡の発掘調査から― ……冨沢一明…… 6
佐久地方の弥生時代希少遺物……編 集 部……10
佐久考古　ＨＯＴニュース……12

世界の遺跡・日本の遺跡15

五里田（ごりた）遺跡

― 長野県佐久市　弥生時代 ―

五里田遺跡は、長野県佐久市の蛇行する湯川右岸に立地し、標高は681～685mを測る。警察官宿舎の建設に伴って1997年に発掘調査が実施された。隣接地には著名な中期弥生集落、北西ノ久保遺跡がある。

検出された弥生時代の遺構は次のとおりである。

竪穴住居址　　43軒（弥生中期後半）
円形周溝墓　　４基（弥生後期）
方形周溝墓　　１基（弥生後期）
壷棺墓　　２基（弥生後期）

弥生中期栗林期の竪穴住居２軒からは、２点の鉄剣が出土した(写真１)。１点は基部を欠損する鉄剣で残存長18.2㎝（写真１左上)、布状の繊維が螺旋状に巻きつけてあった。もう１点は残存長14.3㎝で先端部を欠損、基部に２つの目釘穴があった。

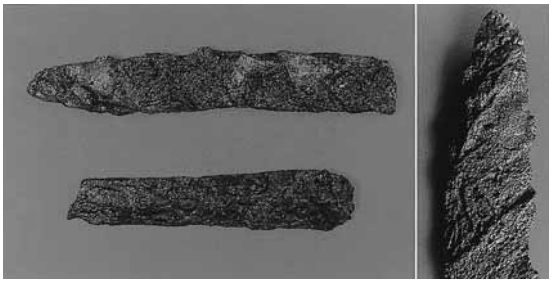


写真１　出土した鉄剣

弥生後期の円形周溝墓４基のうち第２号円形周溝墓（写真２）東西2.6m、南北1.3mを測るもので、その主体部からは僅かな人骨とともに７点の銅釧が出土した(写真３)。このうち５点の銅釧について鉛同位体比法によって産地推定を行ったところ、中国華北産の銅を用いていることが判明した。

また、弥生中期後半の竪穴住居１軒からは、５点の鉄釧が出土している。成分分析の結果、超軟鋼を利用していることが判明した。

なお、鉄剣２点と鉄釧は中期の遺構から出土しているものの、後期に位置付けられる可能性がある。

引用参考文献　佐久市教育委員会1999『第74集五里田遺跡』（写真３点も同書より引用した）

写真２　第２号円形周溝墓（後期）

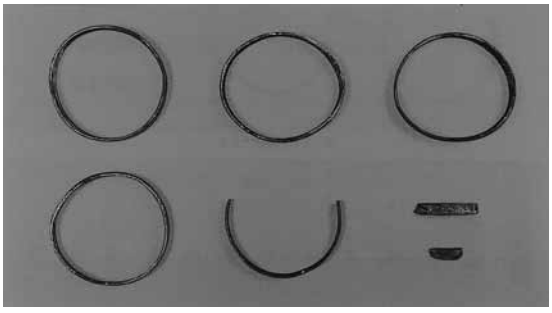


写真３　第２号円形周溝墓出土銅釧

考古逸品

土偶形容器

きりっとつり上がったマユ、耳たぶに２個の穿孔、頭部に縄文を施した隆帯、口の周囲にはヒゲ状の沈線。

弥生時代中期中葉の土偶形容器は、佐久地方では西一本柳遺跡の事例（本誌11頁で紹介）と、本遺跡の事例の二者が知られている。

こうした土偶形容器の内部には、人骨がみられた事例があることなどから再葬・洗骨葬などとの関連が指摘されている。

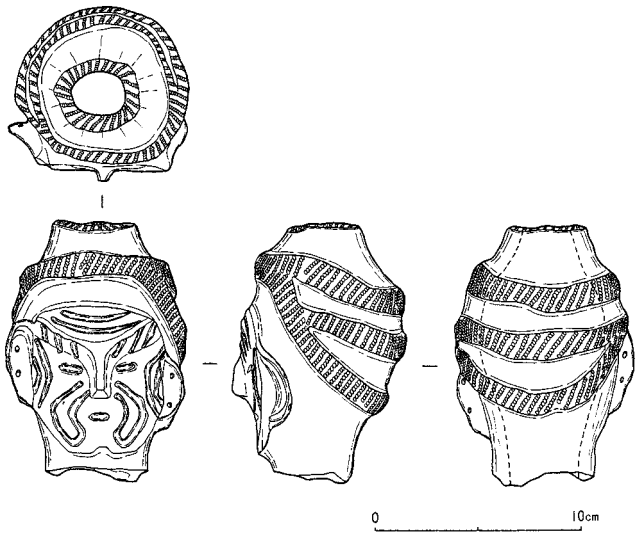
南佐久郡佐久町館遺跡は、千曲川に合流する抜井川の標高830mの段丘上に立地している。

遺跡はリンゴ畑にあたっており、その耕作の際に本資料が出土した。所蔵者の草間氏によれば、周囲の土を注意深く観察したが顔より下の部分はみられなかったということである。

Data

土偶形容器

- 時　代：弥生時代中期中葉
- 遺　跡：館（たて）遺跡
- 所在地：南佐久郡佐久町
- 大きさ：残存長　約13㎝
- 所　蔵：草間和幸氏



佐久町館遺跡出土土偶形容器（草間和幸氏所蔵）

堤　　隆

※ 写真はほぼ実物大

佐久地方の大開発時代

小山岳夫

1　紀元前にはじまる開発

北に浅間山、西南に八ヶ岳を望む佐久盆地に広がる豊かな水田面（写真１）、その嚆矢ともいえる耕地開拓を行ったのは、今から2100年以上の昔紀元前１～２世紀、弥生時代中期の中部高地において櫛描文･沈線文･縄文が混在する特有の弥生土器「栗林式土器」をつくった人々であった。

彼らは、佐久盆地の標高700m前後の水源に恵まれた低地に接する低台地上に集落をかまえて水田開発を行い、佐久盆地の原野を耕土に変えていった。

具体例をあげれば、千曲川右岸佐久市岩村田・長土呂周辺では北西ノ久保遺跡から西一本柳遺跡の一帯、千曲川左岸佐久市野沢周辺では西裏遺跡群一帯が弥生時代中期後半において大規模集落を造営したうえで耕地開発が行われた地域である。

2　紀元後の開発

⑴　平地の開発

時代が下って紀元前後～紀元３世紀前半、赤い土器に象徴される箱清水式土器の時代にいたると耕地開発の動きはさらに活発化する。先の中期後半の耕地開発重点地域に加え、佐久盆地の開田可能な低地を嘗め尽くすように集落が拡大する。

中期が水田を中心とする耕地開発に最も適する地域をピンポイント的に開発したにとどまったのに対し、後期は中期の開発地域を足がかりにして開田可能な低地があればどこでも出向いて開発をしたフロンティアスピリットに富んだ時代で、この傾向は後期でも後半部分に顕著である。例えば御代田町の細田・下荒田遺跡では標高800mを超えるような冷涼の地（佐久地方では標高750mを超えると弥生集落が稀薄になる傾向がある。また、現代でも冷害を被る限界ラインでもある。）でも、開田が可能な温度変化の少ない谷地を見つけ出し、その近くの低台地に４～５軒単位の小規模集落を営んでいる。こうして、弥生時代後期において現代の佐久地方の水田耕地の基礎はおおよそこの形作られたものと推測される。

⑵　山間部の開発

弥生時代後期後半になると佐久地方の山間部への進出も顕著である。

佐久地方南部八ヶ岳山麓の北相木村・小海町・川上村や南牧村などの諸洞穴･岩陰（特に栃原岩陰は有名）や平原（旧石器時代で著名な馬場平遺跡や細石刃文化で著名な矢出川遺跡群周辺など）、また、佐久地方北部の御代田町でも浅間山麓の中腹の山犬穴洞穴などから点々と後期弥生土器片や磨製石鏃などが発見され、縄文時代からの伝統を引き継いだ山の幸などの食糧の獲得を生業にする人々の動きが活発化していたことが想像される。

また、小海町天狗岩洞穴では、後期弥生土器片と共にイモガイの加工品も発見されており、山間部の弥生遺跡が海産物交易の峠路の中継点としての役割も果たしていたことを暗示した。

3　簡単なまとめ

以上のように弥生時代後期（特に後半）の佐久地方は、平地、山間部両面にわたり食糧の獲得を目指した。人々の進出が活発化している。

こういった意味で弥生時代後期は佐久地方の大開発時代というに相応しい。

なお、古墳発生の時期に至ると、不思議なことに図１に示したような佐久盆地中央部での濃密な遺跡分布が解消され、薄い遺跡分布を示すようになる。また、標高1,000mにもおよぶ軽井沢町県遺跡で北陸系土器を伴う住居が発見されるなど、それまで弥生の未開拓地域であった地域の開発が行われるようになる。

弥生集落解体後、人々がいずこへ移動したのかが最大の関心事であるが、今回は検討の余地がなく今後検討を行いたい。ちなみに佐久地方は前方後円墳の築造を見ずに終っている。

文献は、佐久考古学会1990『赤い土器を追う』、御代田町教育委員会1993『細田遺跡』を参照した。

写真１　浅間山より佐久平を臨む

写真２　細田遺跡弥生集落発掘風景

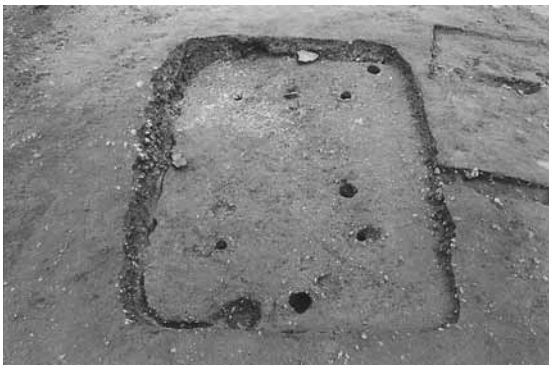


写真３　細田遺跡の弥生住居

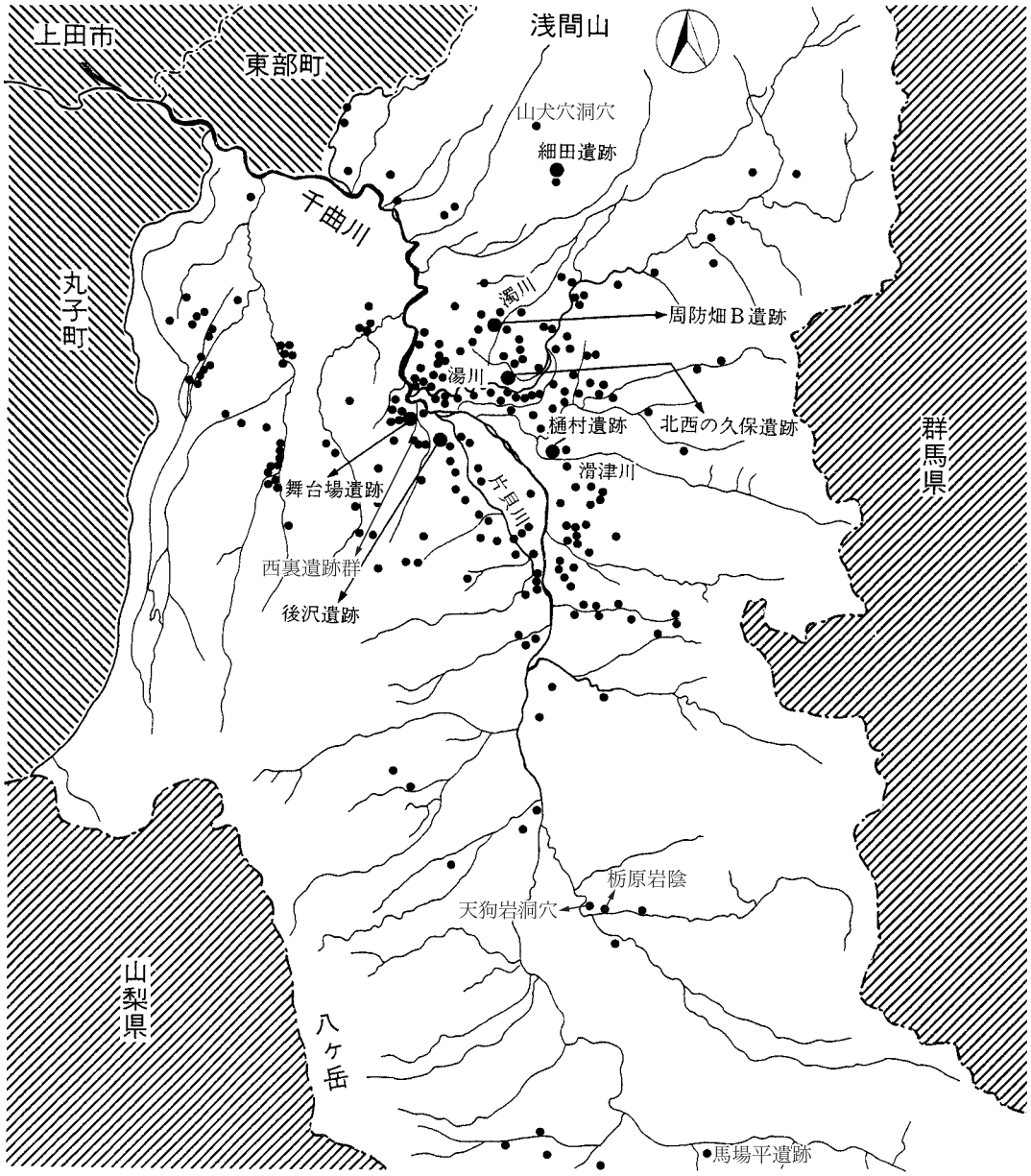


図１　佐久平の弥生遺跡分布（1：300,000）

丘陵上に営まれた弥生時代中期・後期の集落遺跡

―後家山・東久保遺跡の発掘調査から―

佐久市教育委員会　冨沢一明

後家山・東久保遺跡は佐久平の東端、佐久市瀬戸・平賀に所在する。遺跡は群馬県境に連なる東部山地の一つである物見山（標高1,375.4m）から東に延びる山麓が佐久平に飛び出した丘陵先端に位置する。この丘陵は千曲川の支流である志賀川と滑津川に挟まれた海抜900～700mの低丘陵で、浸食が進み東西に延びる細い尾根と南北には小さな谷地形を形成している。遺跡はこの尾根上に広がっている。遺跡内の最高標高は海抜736mで、水田地帯との標高差は約51mを測る。今回の調査は佐久総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。

開発対象地内で両遺跡の範囲は、後家山遺跡が西にのびる主丘陵尾根と小さな谷を挟み南面する山麓斜面に広がる範囲で、調査面積は22,010㎡である。確認された主な遺構としては弥生時代中期（栗林期）住居址２軒、同時代後期（箱清水期）住居址約68軒、環濠１本、木棺墓２基、平安時代住居址１軒、古墳（５世紀後半～６世紀前半）１基、溝状遺構、土坑、塚である。東久保遺跡は後家山遺跡が立地する同一丘陵のやや奥まった所に位置し、調査面積は2,270㎡である。確認された遺構は弥生時代後期の住居址３軒、溝状遺構、掘建柱建物址と終末期の横穴式石室を主体部とする古墳址や中世の積石墓である。なお、当遺跡の東側隣接地において東久保遺跡Ⅱが調査されており同じく弥生時代後期の住居址９軒が調査されており、東久保遺跡全体では未調査部分の尾根も含めると20軒近い弥生後期集落の存在が予想できる。今回は調査成果の内、後家山遺跡で検出された「弥生中期の集落や環濠」や「弥生後期の集落」などの調査成果と今後の研究課題を示すと共に、「螺旋型鉄釧」「曲柄装着平鍬」といった出土遺物についても若干の紹介をしたい。

なお、記載した内容については今秋刊行される予定の「遺跡調査報告書」をもって正式とし、数値等の変更があり得ることをご容赦願いたい。

まず、「弥生中期の集落」と「環濠」を取り上げたい。住居址の検出は２軒のみであったが、現況から判断すると既に自然地形の傾斜等で削平された住居も存在したと考えられる。ただ、未調査部分を含めても５～６軒程度の集落と考えられる。この集落を囲むように環濠が検出された。検出状況は東側尾根を切断し北側斜面を直進し、丘陵先端で尾根を切断するように巡っていた。平面形は南側部分が調査区域外となるが、検出部分から推定すると尾根に沿う歪な楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸92m・短軸が推定で50mを測る。溝に囲まれた面積は検出部分で1,757㎡で、全体では推定約3,000㎡を測ると考えられる。溝断面形態は底面が平坦なU字形で壁立ち上がりは緩やかであったが、深さがあるため梯子等を使用しないと上り下りは不可能であった。溝の規模は最大幅が東側の尾根中央部で幅3.05m、深さ1.16mを測る。溝幅は東側と南側斜面部が比較的広く平均２m以上の幅が確認された。しかし、深さについては南側斜面部が自然地形の傾斜による削平か深さ25～30㎝という部分も存在した北側斜面の溝幅は東・南部と比べると狭く1.6～2.15m、深さが29～90㎝とばらつきがあった。また北側斜面部分

写真１　後家山・東久保遺跡を内山峠方面より望む。中央に滑津川、丘陵先端が後家山

の底面は平坦ではなく、長い楕円形土坑が連続していくような状況で、一部掘り残したようなテラス部分が多く存在した。環濠からの出土遺物は覆土上層から弥生後期の箱清水式土器が破棄されたような状態で出土し、環濠中層から底面にかけて弥生中期の栗林式土器と黒曜石剥片が出土した。また弥生中期栗林式成立前段階の土器が少量であるが出土した。これら土器群は群馬県北西部に広がる所謂「神保富士塚式」と酷似する物があり、当地域の出土としては希な出土例となった。このように、佐久地域において丘陵上の弥生中期集落はあまり検出例がなく、また明白な環濠を伴う事例も初めてである。今回の後家山遺跡の中期集落が湯川周辺に展開する中期集落とどのような関係にあるのか、また後家山遺跡の西に広がる沖積地に展開する樋村遺跡の同時期住居との関係も含め今後の研究課題となった。

次に、後家山遺跡からは丘陵尾根に沿って弥生時代後期として68軒の住居址が調査された。また丘陵奥に所在する東久保遺跡では後期住居址12軒が調査され、先にも述べたが地形の状況から20軒近い集落の存在が想定できた。よって、後家山には弥生後期の住居が累計で100軒近く築かれていた事となる。住居址からの出土遺物としては弥生後期（箱清水式）などの土器類を中心に磨石や敲石といった石器類が多く出土した。特に特筆すべき出土遺物としては弥生後期の竪穴住居址から翡翠の勾玉や碧玉製管玉・ガラス小玉等の玉類、鉄鏃を含む鉄製品等がやや大きめの住居址から出土し、特殊遺物の出土傾向を示唆した。そして、最も注目すべき事はこれら両遺跡の集落が沖積地水田面から離れた所に立地し、特に東久保遺跡は50mもの標高差を持つ高所に集落を営んでおり、弥生時代集落の分類では『高地性集落』と呼ばれる可能性が指摘できた。しかし、今回の集落について、その遺構配置や出土遺物等の検討をした結果、佐久地域の他の弥生後期集落址との差異を明らかにし難く、結論としては佐久平における弥生時代後期の集落としては普遍的な在処と考えられたが、これも今後の検討課題である。

最後に「螺旋型鉄釧」と「曲柄装着平鍬」について紹介したい。螺旋型鉄釧は弥生時代後期の所産と考えられる木棺墓から検出された。遺跡内では２基の木棺墓が検出されている。この内の１号木棺墓から鉄釧とガラス小玉55点が出土した。木棺墓の形態は長方形で

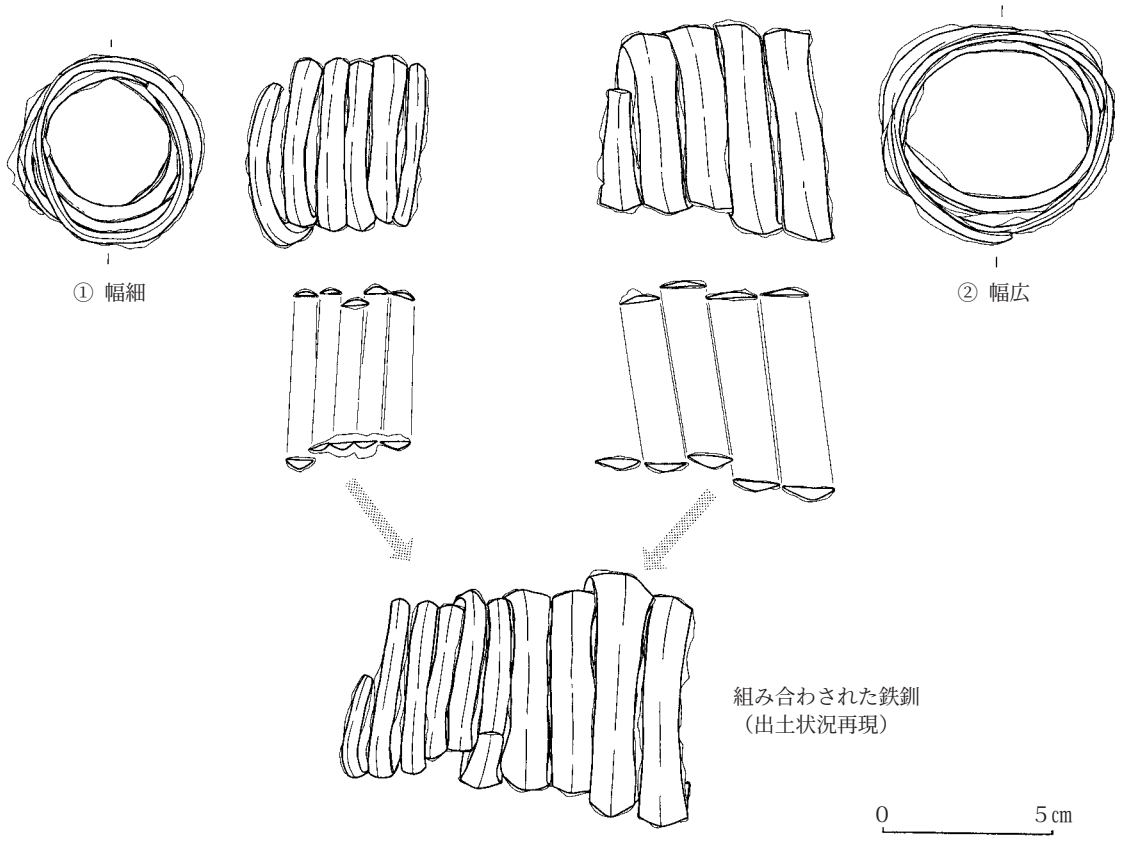


図１　螺旋型鉄釧実測図

両側に小穴があり、所謂「小口式の組合わせ木棺墓」と考えられる。規模は長軸1.9m・短軸80cmで東西方向に長軸を持つ。鉄釧はこの土壙内中央部北よりから発見された。埋葬頭位はガラス小玉が土壙東側から纏まって出土していることから、これを胸飾りの一部と推定すると頭位は東であり、長野県内の多くの出土事例と同じく鉄釧は右腕の装着が考えられた。形状はほぼ円形を保っており、出土時の観察では８～９本の鉄輪が確認できた。形態は保存処理の結果、５本一組と６本一組の螺旋状の鉄釧２つが連結していると判明した。法量は図示した１が鉄幅６～８㎜・径４～4.5cm・延伸長88.2cmで、２は鉄幅1.4cm・径５～6.3cm・延伸長84.6cmであった。断面形状は錆の為不明瞭な部分もあるが三角形で外側に稜を持つ。１と２いずれも端部はやや細く丸く終わっている。また、釧内の土からは植物性の繊維で織られた布小片が同時に出土している。今回の出土資料は、同種異形の鉄釧を同時に使用しているという全国唯一の資料で、今後注目される。

次に「曲柄装着平鍬」は弥生時代後期後半の焼失した竪穴式住居址の床面から炭化した状態で出土した。本址は遺跡内でも規模の大きな家であり、この他にガラス小玉の出土があった。平鍬は住居址の東側の壁際から表を上にした状態で出土し、全長は49cmを測り刃部先端が一部欠損していたがほぼ完形であった。樹種はアサダであることが判明している。本製品の出土意義は、まず第一に住居址から出土したことにより出土木製品の帰属時期がはっきりと確定できる事。第二に今回出土の平鍬は東海地方と共通する形態を持っており、その分布域の問題解明の糸口となる事。そして第三に出土地点が希少な例であるという事である。現在までの研究成果では弥生時代中期から古墳時代前期初頭まで農具はその出土事例から水田などの生産域近くに共同保管し、集落や特定所有者へ移行するのは前方後円墳が出現する古墳時代前期前半からであると考えられている。しかし、今回の出土場所は遺跡内でも大型の竪穴式住居からであり、この農具保管体制の定説に一石を投じる事になると考えられる。

以上が弥生時代を中心とした後家山・東久保遺跡の調査概要である。そして、上述した調査成果にもまし最も重要な事は、当遺跡が佐久地域において弥生集落のほぼ全域を発掘調査し得た希少な事例であり、後家山・東久保遺跡が佐久地域のみならず東日本の弥生時代集落址研究に資する意義は非常に大きいと考えられる。

註１．弥生中期前半の土器については明治大学教授石川日出志氏にご教示いただいた。

註２．写真・挿図の内、鉄釧関係は「文化財発掘出土情報2003．10」より転載

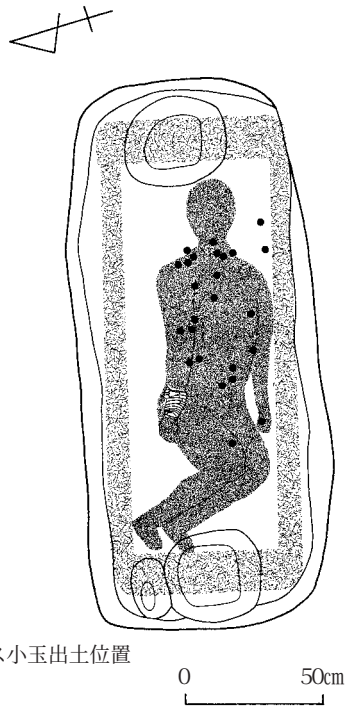


図２　１号木棺墓埋葬推定図

写真２　「螺旋型鉄釧」保存処理後

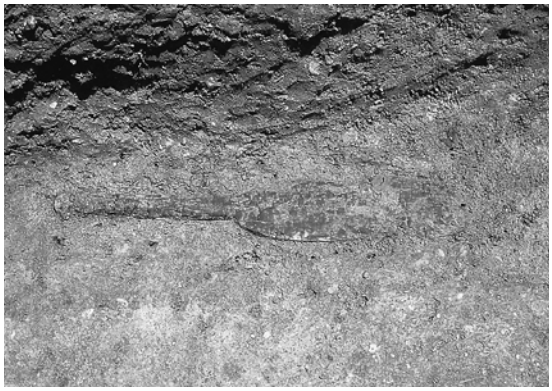
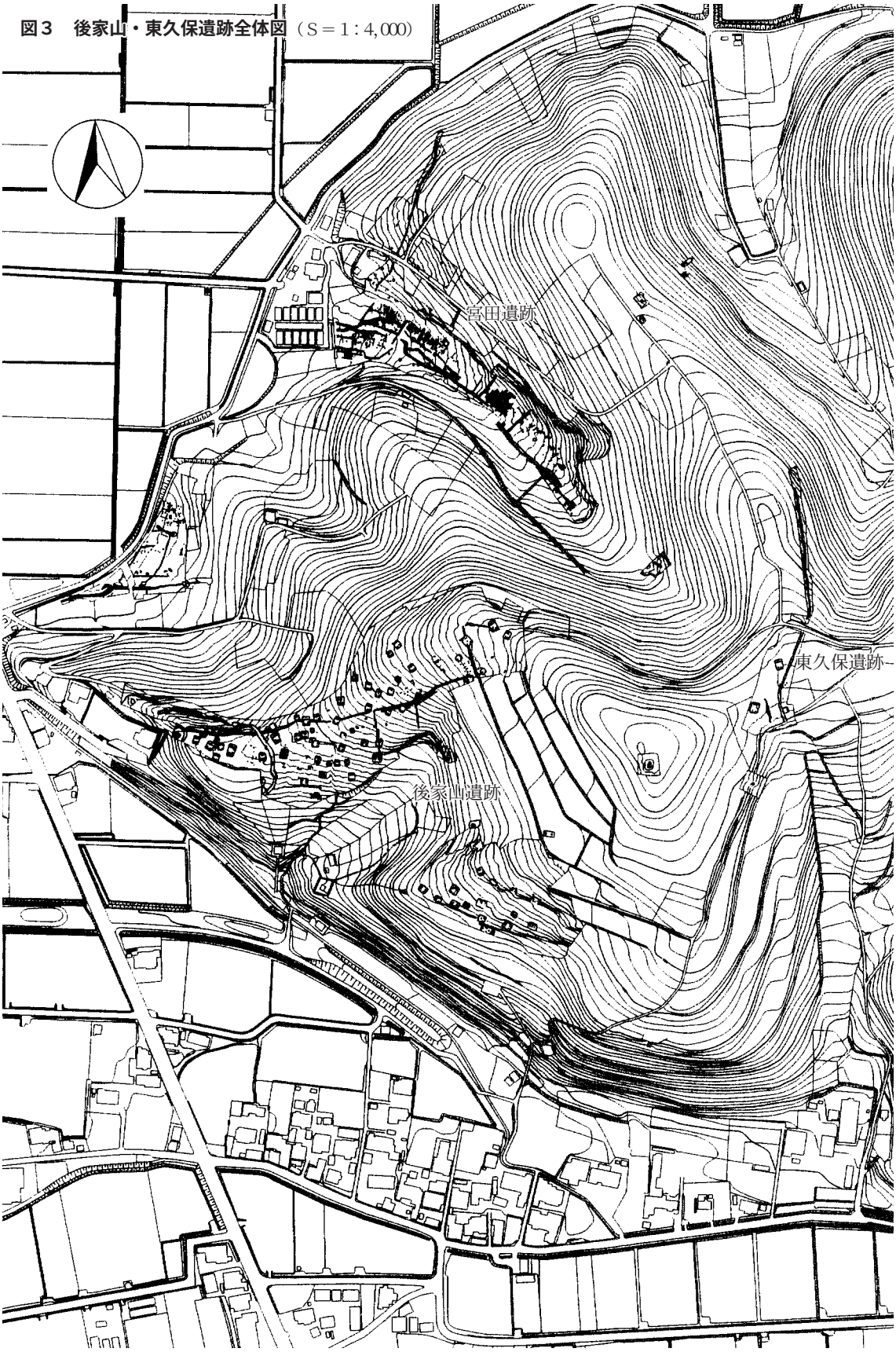


写真３　「曲柄装着平鍬」出土状況

図３　後家山・東久保遺跡全体図（S＝1：4,000）



佐久地方の
弥生時代希少遺物

1　釧

佐久地方では、本誌の最初に紹介した五里田遺跡のほか、いくつかの遺跡で釧の発見事例がある。

古い事例では、八幡一郎によって『南佐久郡の考古学的調査』に掲載された銅釧４点がある（図１）。これは、昭和２年、臼田町大奈良離山の道路改修工事の際に出土したといわれるが、現在は所在不明である。

上直路（かみすぐじ）遺跡は昭和60年に発掘調査がなされ、南北10m東西７mの佐久地方最大級の住居から、弥生後期箱清水式土器とともに（写真１）銅釧15点が発見された（写真２）。

住居内にはベッド状遺構があり、それに接した推定1.6m×1.3mの土坑内から人骨が検出された。埋葬された遺体は、右腕に10点、左腕に５点の銅釧を装着し、埋葬後火をかける儀式がなされたものと考えられる。写真１の土器は、棺の上もしくは脇に供えられたものらしい。屋内祭祀の１例として、興味深い事例といえよう。

写真１　上直路の棺の脇あるいは上に供えられた土器
（1998『佐久市埋蔵文化財年報６』より）

写真２　上直路の銅釧・人骨の出土状況
（1998『佐久市埋蔵文化財年報６』より）

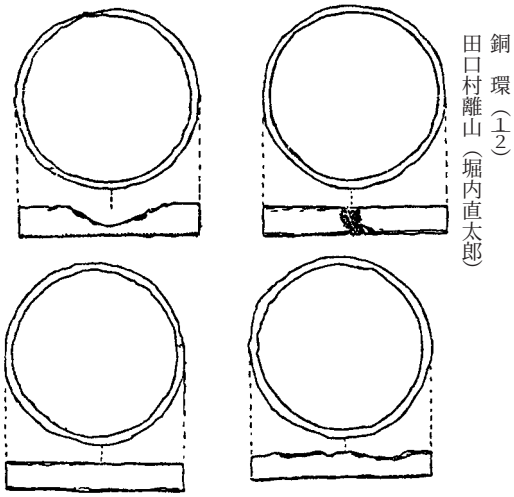


図１　離山遺跡出土銅釧
（『南佐久郡の考古学的調査』より転載）

図２　上直路での埋葬風景の復元（さかいひろこ画）

写真３　土偶形容器（西一本柳遺跡）

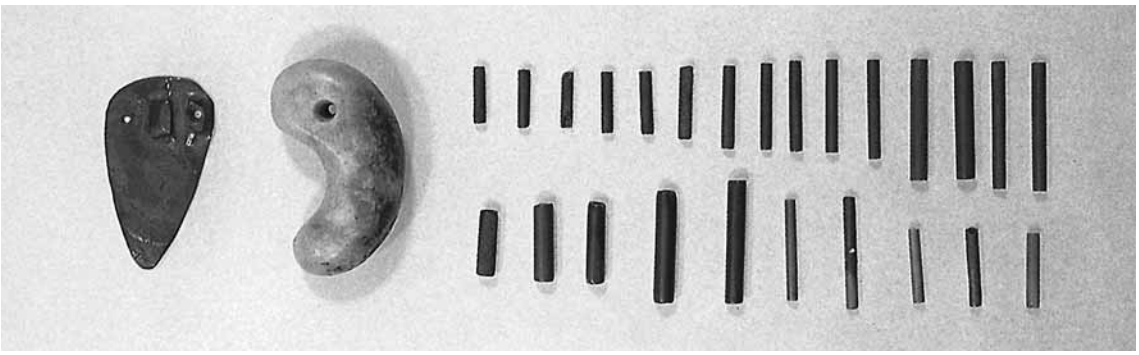


写真４　社宮寺遺跡出土遺物（伴野稀一郎氏蔵）

２　土偶形容器

写真３は、佐久市岩村田の西一本柳遺跡から出土した土偶形容器で、弥生時代中期後半に位置付けられるものである。現存長さが12㎝、頭部には３㎝の開口部があり、頬には赤彩がなされる。

本誌３頁の佐久町館遺跡の土偶形容器と比較すると興味深いが、双方とも耳たぶに二か所の穿孔がある点は共通する。館の事例では、隆帯部に縄文が施される点、口の周囲が沈線でヒゲ状に囲われる点などが本例と異なるようである。

３　白銅製ペンダント

写真４は、佐久市社宮司（しゃぐうじ）遺跡から発見された遺物である。昭和27年畑の耕作中に、弥生土器底部破片１、ヒスイ製勾玉１、碧玉製管玉10、鉄石英製管玉15、鉄斧１、白銅製ペンダント１点が偶然発見された。

弥生土器は底部のみで中期か後期か時期を決定し難い。白銅製ペンダントは、朝鮮半島製の多紐細文鏡を再加工したものである。

この遺跡は、その後昭和60年に追調査がなされたが、関連遺構の発見はなかった。

佐久考古　ＨＯＴニュース

■

「弥生稲作論の再検討」をテーマにした中部弥生時代研究会長野例会が開催されます。弥生稲作論の課題（安藤弘道氏）、日本列島における稲作の波及と定着について（中山誠二氏）、木製農具について（楠正勝氏）、石製農具について（原田幹）などの発表があります。

日時：2004年７月３日㈯・４日㈰
場所：浅間縄文ミュージアム
話題：弥生稲作論の再検討

■

浅間縄文ミュージアムでは、企画展「浅間山大焼」を９月12日までおこなっています。

天明三年（1783）年の噴火で埋もれた鎌原の出土品や、渋川市中村遺跡の出土品、当時の噴火絵図、天明泥流で埋もれた江戸時代の畑から発掘されたサトイモの痕跡など貴重な資料が展示されています。

佐久地方に暮らす私たちを日々みつめる浅間山、その過去の噴火災害の考古学にふれてみませんか。

♪　編集後記　♪

佐久考古通信89号は、弥生特集としました。

弥生時代の開始年代は近年のＣ^{14}年代の較正によって500年ほどさかのぼるといわれています。縄文時代の開始も3,000年ほど古くなり、15,000年前を超える年代に換算されて、草創期が氷河時代にすっぽりと入ってしまうようです。

これらの年代は、しばしば「実年代」・「暦年代」と記されますが、これはあくまでＣ^{14}年代の「較正年代」なのであって、真の年代とイコールではありません。そのことを注意深くふまえて使用すべき「数値年代」がこうした年代なのではないでしょうか。　（つつみ）

佐久考古通信　№89

発行所　佐久考古学会
〒389-0206 北佐久郡御代田町大字御代田4108-1880
小山岳夫　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8676

発行者　藤沢平治
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
2004.11.20.　No.90
JOURNAL

★　特集　佐久の考古学を支えた人々　★

由井茂也さん100歳！　おめでとうございます …… 1
傑出した地域史研究者　―与良清先生を想う― ……井出正義…… 2
栃原岩陰遺跡の発見者　―畏友輿水利雄氏をしのぶ― ……井出正義…… 3
佐久考古学会設立に尽力　―竹内恒先生― ……藤沢平治…… 4
石の事なら先生に聞け　―白倉盛男先生のこと― ……小山岳夫…… 5
ベレー帽で発掘調査　―黒岩忠男先生のこと― ……小山岳夫…… 6
前向きなんて甘い、前のめりに生きろ　―森嶋稔先生のこと― ……臼田武正…… 7
「孤掌鳴らし難し 後閉山」　―武藤金さんの思い出― ……林　幸彦…… 8
地道な研究の積み重ね　―三石延雄さんのこと― ……島田恵子…… 9
一本気な親父（ひと）　―森泉定勝さんのこと― ……堤　　隆……10
軽トラに機材満載　―大井今朝太さんのこと― ……堤　　隆……10
バイクで現場にかけつけたビンさん　―佐藤敏さんの思い出― ……臼田武正……11
由井明さんご逝去……事 務 局……12
新刊　『氷河期を生抜いた狩人 矢出川遺跡』堤隆著……12

由井茂也さん100歳！

おめでとうございます

馬場平遺跡の調査で（1953年、右端が由井さん）

矢出川遺跡で（1980年代初頭、前列中央が由井さん）

由井茂也さんは、明治38（1905）年１月23日生まれ。来る2005年新春の誕生日をもってめでたく100歳を迎えられます。

由井さんのお仕事の中では、なんといっても、昭和28（1953）年秋の馬場平遺跡の石槍の調査と、その年の暮れの矢出川細石器遺跡の発見が、日本考古学史上に燦然と輝く成果として特筆されます。

由井さんはこうした日本の考古学の発展とともに、佐久考古学会会長を長らく努められ、現在は顧問、佐久地方の考古学の発展にも大きく寄与してこられました。

由井茂也さんのますますのご健康を会員一同よりお祈りいたします。

傑出した地域史研究者

― 与良 清先生を想う ―

井出正義

与良清先生は明治40年に小諸市与良町に生まれた。蛇掘川を渡って北国脇往還ぞいに旧与良村を中心に、荒町・相生・本町・大手と続く城下町は小諸の政治・経済・文化の中心であった。先生は大正９年長野県野沢中学校に入学したが、父上が病没され、大正14年３月に卒業されると、大里尋常高等小学校（現小諸市滝原）の代用教員となった。

昭和２年（1927）北佐久郡教育会は歴史教育に科学的手法をとり入れるため、東京帝国大学の八幡一郎氏を招いて考古学の講話を聞き、その調査研究の臨地指導をうけて、郷土研究部を作り、その研究部委員の指導を八幡一郎先生に依頼した。この郷土研究部委員は、八幡先生の指示計画に従って郡内各所に散在し、散失、破壊の恐れある遺跡、遺物の調査をくまなく記録して昭和７年８月完了した。八幡先生がこれに補筆改稿して、昭和８年９月、八幡一郎先生の名著「北佐久郡の考古学的調査」となって出版された。

その間八幡先生の指導のもと「郷土研究部委員」として昭和２年から７年まで、その調査の中心として活動したのが与良清先生であった。与良先生は八幡先生の指導をうけて、各方面の講話を聞き、その調査研究の臨地指導をうけて、先生指導のもとに「郷土研究部委員会」を結成し、委員は八幡先生の指導計画によって郡内所々に散在し、散失・破壊の恐れある遺跡・遺物の調査をくまな記録し、委員会で検討して指導をうけ、八幡先生在京の場合は与良清委員が中心になって活動した。昭和２年から７年まで、５年間郷土研究部委員の中枢として活動した与良先生にとっては東京帝国大学考古学教室八幡一郎先生の内地留学生にもまさる考古学上の実際経験を積むことができたものと思われる。八幡一郎先生はその著書「北佐久郡の考古的調査」の序文に「この間（昭和２年以降）郷土研究会委員諸氏は各方面にわたり、或は下調査に或は再調査に務めて私を助けられた…」と記されている。昭和24年～31年には与良先生は北佐久郡第二巻歴史編の大作を独力で執筆しているが、考古編は八幡一郎、仏像等は倉田文作、建築部は藤島亥郎等諸大家の協力指導をうけながら独力で執筆し、完成して佐久地方史家の地位を確立した。

小諸市誌考古篇

小諸市誌考古篇は、昭和29年小諸市が誕生し、小諸市史篇纂会が発足、委員長与良清執筆・写真・分布図等上原政雄・小渕武一の担当で発足した。

34年与良平古墳発掘調査、36・40年郷土（ごうど）地籍縄文時代遺跡調査、郷土（ごうど）の鉄平石の敷石住居跡は縄文時代後期の堀の内式土器の時代であることが確認された。著者与良清氏から示された小諸市誌考古篇の原稿を一読した八幡一郎先生は、「行文平易ながら格調高く、事実を敍して余すところはないが、推断をさけて解釈を後日に委（ゆだ）ねるという態度に貫かれていることを知った。……中略…このような質実な本書を篇纂し刊行する小諸市ならびに市誌編纂委員会に対して敬意を表す所以である」と書かれている。学書八幡一郎先生が愛弟子に贈る最高の賛辞であろう。

小諸市誌　歴史篇

小諸市誌考古篇の出版を完成された与良先生は、すぐれた歴史家としての立場から、かねてより小諸市史の出版を志し、はやくからその史料を集め、篇集の構想を練ってこられたが、考古篇の出版がすむとすぐに小諸市誌歴史篇の執筆にとりかかった。当時信濃史学会の与良先生に対する期待はますます高く、先生は長野県史刊行会の参与、長野県文化財保護指導委員等を兼ね多忙をきわめられていたが、昭和53年１月衆望をよそに、71歳で惜しくも他界されてしまった。

小諸市誌歴史篇は故与良清先生の構想に基づき長原秀山氏に引き継がれ、図表、写真は小渕武一氏が担当して通史は古代から小諸地方の武士の興起までを記述している。

小諸市誌の歴史部門は長原秀山、小渕武一、上原政雄氏らによって継承され、考古学部門は愛弟子花岡弘氏によって継承発展され、文化財の指定保存も進み、小諸市民の重要な歴史・文化の根本資料となっている。

ありし日の与良清先生

栃原岩陰遺跡の発見者

― 畏友輿水利雄氏をしのぶ ―

井出正義

利雄さんは穂積小学校６年のとき、校内の青年団設置の図書館で、古代人の生活を書いた本を読んで、自家の畑から出土する土器・石器に興味をもった。私より４年の上級生で、体格が大きくスポーツ抜群、下級生の面倒見もよかったが、父親の方針で中学校進学を断念して農業に従事した。

昭和３年（1914）当時南佐久郡教育会は東京帝国大学の新進考古学者八幡一郎先生に依頼して名著「南佐久郡の考古学的調査」のための現地調査を進めていた。一日、輿水は付近の畑から集めた土器・石器を直接手にとって八幡先生から指導をうけた。これが考古学者輿水利雄の将来をきめる出会となった。

昭和８年、輿水は現役兵として浜松高射砲隊に入隊、満州事変・支那事変と引続き召集。その間に父忠一郎氏が死去し、ノモンハン事件後一時帰国。昭和15年３月除隊。15日入沢の岩松りんさんと結婚。同月25日ハルピン（新京）に渡って新居を持った。休日にはハルピン博物館に通って「青銅器」の研究に熱中した。昭和19年８月23日、妻りんさん肋膜炎のため子供二人をつれて帰国。

同年秋、満州人と合同で軍事工場を設立。20年８月15日ハルピンで終戦を迎えた。それから２年間、家族とは音信普通という苦境の中で引揚者援護に協力し、輿水さんの助力で無事帰宅できたと多数が感謝している。彼はこうして昭和22年10月、リュックサック一つを持って、引揚者300人の隊長として帰国した。そして休むまもなく翌23年には自宅の二階に引揚者婦人の穂積村営授産所を設置することに奔走した。

※

昭和27年10月、南佐久郡畑八村青年会が同村の認可協力を得て、現八千穂高原中松井遺跡で八幡一郎先生の指導のもと、南佐久教育会幹事竹内恒、上小教育会五十嵐幹雄氏を中心とした南佐久地方初の考古学的発掘調査に参加し、八幡氏門下生や川上村の由井茂也氏等を知った。

翌昭和28年11月、明治大学の芹沢長介氏が第１回馬場平遺跡の発掘調査をすることを知り、由井茂也氏を訪ねて参加し、芹沢氏を始め、戸沢充則、麻生優等の諸氏を知り、以後川上村をたびたび訪ねて旧石器に深い興味を持つようになり、地元の池の平牧場に注目した。

昭和29年10月末、輿水利雄は由井、芹沢、戸沢、麻生の旧石器研究の権威者を池の平牧場（現八千穂高原）に案内して、番小屋の斜面で片面ポイントを発見した。これが池の平の旧石器発見の最初である。

昭和31年彼は池の平牧場塩くれば付近に黒曜石の散布地を発見し、後年これを自力で発掘調査することになる。

36年、努力の事業家輿水利雄は小海線臼田駅前に弱電気の新工場咲電気合資会社を造り、更に鉄工場２棟を増設して、従業員50人の合名会社としている。

※

昭和40年、数年前に、北相木村栃原岩陰で縄文早期押形文土器を発見した輿水は、職業関係の知人新村薫を誘って、同岩陰の表面調査をして遂に待望の人骨を発見した。11月23日、輿水はこれを信大医学部第２解剖学教室の鈴木誠教授に連絡した。これが栃原岩陰遺跡、縄文早期北相木人の発見となったのである。

昭和41年輿水は忙しい日程の中を、竹内恒の主宰する佐久考古学会の発掘調査にもよく出ていた。８月突然五十嵐氏を訪ねた輿水氏は、「栃原岩陰で人骨を発

栃原で娘さんと輿水さん

見して竹内氏に話したが、はっきりした方針をきけなかったので信大医学部の鈴木誠氏に報告したら、氏はすぐ信州ローム研究会に発掘調査計画を立てさせた。輿水がこれを竹内氏に報告すると、それは困るといわれた。どうしたらよいものであろうか」と輿水は窮状を五十嵐氏に訴えた。

戦後新しい原始・古代の学習には考古学等による実証的な歴史学習が必要とされた。北佐久郡教育会では与良清先生らが中心となって、先人の資料に検討を加え、八幡先生の「北佐久郡の考古学的調査」に精密な現地調査を加え、新しい部分的な発掘調査等も加えて昭和31年には早くも北佐久郡志第二巻歴史編を完成していた。南佐久郡教育会はまず主要遺跡の発掘調査を早急に進めその成果の上にたって、新しい歴史学習を進めようとした。竹内恒氏は郡内考古学会員の出動作業を督励し、発掘資料の流出をきびしく監視したのだろう。

当初佐久から栃原岩陰発掘への参加者は、輿水氏と新村薫、由井茂也氏の３人だけであった。発掘調査の回を重ねる毎に、そのつど裏方を勤めるのは輿水氏だけで、その心労は大変なもので、鈴木誠・小松虔氏も深い感謝を捧げていた。

※

昭和46年６月、八千穂村池の平牧場塩くれ場方面の林道開発に当たり、永年の表面調査によって旧石器時代遺跡の存在を確認していた輿水氏は、八千穂村教育委員を説いて発掘調査にふみきった。自ら調査団長となって、発掘資材・調査者の宿泊等一切の設営に当たり、私財を投じて、森嶋稔氏を指導者に佐久考古学会有志等によって、塩くれば、トリデロック、湧水地点の３地籍を調査し佐久地方旧石器文化の解明に貴重な資料を提供している。

平成15年発行八千穂村誌の旧石器時代の項に松沢亜生氏の詳細な解説が記されている。輿水氏は昭和47年２月佐久市長土呂の北近津遺跡同３月には岩村田一本柳遺跡の発掘調査に参加し、同年10月には同教委の根々井餅田遺跡では調査団長に推されている。

昭和48年１月肝臓病治療のため東京都豊島病院に入院、四月退院。同年12月臼田町三分井上遺跡の発掘調査に病をおして副団長としてその推進にあたった。

昭和49年１月、再度豊島病院に入院、６月小康を得て退院。

８月９日、奥様と次女と二人のお孫さんを伴ない、自身運転して、かつて団長として発掘調査にあたった池の平塩くれば遺跡の見分に向かい、思い出残る落葉松林の中で、心臓発作におそわれ眠るが如く逝かれた。60才６ケ月の惜しみても余りある死であったが、それはりっぱな最後であった。

佐久考古学会設立に尽力

― 竹内 恒（ゆずる）先生 ―

藤沢平治

竹内先生は、明治36年佐久市取出に生まれ、野沢中学、日本大学と進まれ、戦前から臼田・中佐都・青沼小など、小学校教諭としての道を歩まれた。大沢小学校の校長などを最後に退職され、その後も近隣の小中学校の講師などを務められた。先生は青年時代から禅の研究にもかかわり、参禅もなされていたという。惜しくも昭和51年１月25日に72歳で帰らぬ人となった。

先生は昭和初年には小栗擦治先生などとともに郷土史研究に没頭、退職後は佐久市の文化財調査委員などもされ、旧中込学校の保存にもかかわられた。

考古学の分野では、長野県考古学会の設立や佐久考古学会の設立に尽力され、初代佐久考古学会会長を勤められるなどした。黒岩忠男、三石延雄、渡辺重義氏など竹内先生に誘われて、考古学会や発掘調査に加わった人々も多い。日本考古学協会の会員、信濃史料刊行会参与でもあった。

先生は、西一本柳遺跡の団長なども務められたが、非常に厳格な方で、むやみに遺構に入ったりすると怒鳴られるようなこともしばしばだった。中道遺跡では勝手にテントに入ってきた新聞記者が怒鳴りつけられたという。

先生の代表的論文には「蕨手刀を出した南佐久郡臼田町英田地畑古墳」『信濃』18-4があり、報告書では岩村田の東一本柳古墳なども手がけられている。

竹内先生（中央に立つ人）

石の事なら先生に聞け

― 白倉盛男先生のこと ―

小山岳夫

先日、小諸市の美南ケ丘小学校へ伺った。校長室で仕事のやり取りをしている際に、ふと壁に目をやると歴代校長のプレートがかけてあり、懐かしい名前を発見した。『初代校長　白倉　盛男』(在職Ｓ41. 4. 1～Ｓ44. 3. 31)

この瞬間、11年前にお別れした先生の思い出がよみがえり、甚だ不謹慎だがしばし仕事のことなど忘れてしまった。

大の石好き、大の子ども好き、大の発掘好きであった。1980年佐久市岩村田北西ノ久保遺跡第２次発掘調査の調査団長を務められた際の少年考古学教室において、話などそっちのけで騒いでいる子どもたちに対し、声を裏返して必死で「ナウマンゾウの骨はネ……フォッサマグナはネ……」と説明を続けられた姿は今も心に焼き付いている。

大の酒好きであり、専ら燗をした日本酒を好まれた。発掘現場の納会では、先頭にたってはしゃぎまくり「ツーツーレロレロ……」などの艶歌を披露されていた。

《見ゆるものすべてをつくす発掘も　たどるすべなき心の影は》　この短歌は前述の発掘調査報告書刊行の際に後書きと共に贈っていただいた。当時25歳地域の弥生社会解明という大それた野望を抱いてこの発掘調査に対峙した私への熱いメッセージでもあったと思っている。

先生は中込尋常小学校の代用教員になられたのを皮切りに長年教職にあり、前述の美南ケ丘小学校が最後の任地であった。在職中に東京文理科大学校に内地留学し、藤本治義教授の薫陶を受けて地学の見識を深められた。退職後は佐久考古学会副会長を昭和57年から、このほか、小諸市火山博物館長、佐久市の多くの発掘調査団長、文化財保護審議委員、市志編纂副委員長などを歴任され、地域の歴史文化の高揚に貢献された。平成３年１月７日ご逝去　享年80歳であった。

白倉先生と奥様

昭和62年佐久考古学会総会で

岩崎卓也先生と　瀧の峯古墳群で

木内寛、由井茂也、高村博文氏らと

ベレー帽で発掘調査

― 黒岩忠男先生のこと ―

小山岳夫

昭和54年４月22日、私は初めて佐久の発掘に参加しようしていた矢先父を亡くしてしまった。黒岩忠男先生に出会ったのは、まだ失意から立ち直れずにいたその年の暮れ12月下旬頃だった。

場所は、佐久市岩村田の浅麓水道企業団の木造建物を間借りした当時の文化財整理室、黒岩先生は清水田遺跡から出土した６世紀代の坩を実測していた。その時は、恰幅の良い体にトレードマークのベレー帽姿を拝見して「考古学はやっぱり雰囲気のある人がやっている」と妙に感心してしまったことを覚えている。

当時、黒岩先生は臼田町のご自宅からバスで岩村田まで通って来られた。整理作業が終わってからは、バス停の近くにある飲み屋で親交の深かった武藤金さんと杯を酌み交わしてから帰路に着かれることが多かったようだ。今、分刻みの生活を強いられている自分を思うと、当時のゆっくりとした生活の流れこそ人間的な生き方なのだと思う。

年が明けて昭和55年、私は佐久考古学会に入会させていただき、しばしば東京から帰省しては佐久の発掘調査に参加するようになった。羽毛田伸博さん、林幸彦さん、堤隆君という先輩・友達ができ、お金がないにもかかわらず、しょっちゅう飲み歩いていた。ある時は黒岩先生行きつけの店に寄り込み、「オレは先生の息子だ」と嘘をつき、借金までして飲んでしまった。若気の至りとはいえ、天国に向かってお詫びしたい。

先生は24歳から教鞭をとり、昭和48年小諸市坂之上小学校で教員生活を終えられた。退職後は、考古学、発掘調査に全力投球で佐久埋蔵文化財センターのほとんどの発掘調査団長を務められた。また、長年佐久考古学会副会長として会の重石となられた。当時は例会を毎月行い活発な活動を展開していたが、黒岩先生が欠席することはほとんどなかった。会の顔であった。やさしい人柄でその存在が私たちを安心させた。平成３年６月13日ご逝去。享年77歳。

下の写真は昭和62年の総会である。先生がいた当時はこんなに盛況だったのだ。いつの日かこの活気を取り戻さなければならない。それが先生へのご恩返しと思っている。

女衆と肩を組んで（後沢遺跡）

後沢遺跡のトレンチ調査

大深山遺跡で（昭和53年）

昭和62年佐久考古学会総会

前向きなんて甘い、前のめりに生きろ

― 森嶋 稔先生のこと ―

臼田武正

森嶋先生は、埴科郡戸倉町（現千曲市）にお住まいで、小諸市坂の上小学校に在職されたことがあり、昭和45年の佐久考古学会設立当初から本学会の諸活動に深く関与されてきた。

設立当時は研究担当幹事を務め、農閑期の月例会には自ら講師となっての学習会が開催された。臼田町の咲電気株式会社（故輿水利雄会員経営）の一室で、土器の型式や石器の種類などについて教えをいただいたのが、先生との初めての出会いである。

先生とはその後、私の学生時代はもちろんのこと、社会人となり教職に就きながらも埋蔵文化財に携わる中で、公私にわたりご指導ご助言をいただいてきた。

佐久における先生の功績は、会員の考古学研究の向上に寄与されたほか、儘田遺跡（佐久市野沢）・池の平遺跡（八千穂村池の平）・西近津遺跡（佐久市長土呂）・山犬穴洞穴（御代田町塩野）・県遺跡（軽井沢町長倉）・下吹上遺跡（望月町協和）・丸山遺跡（北御牧村、現東御市下の城）・犬飼遺跡（望月町茂田井）など、昭和45年から53年頃にかけて行われた数多くの発掘調査で調査担当者や調査団長を務め、陣頭指揮を執られたことである。その後、市町村の教育委員会が発掘調査を担当できる専門職員を採用するようになってからも、指導者として佐久の考古学研究や遺跡の保存運動の推進、埋蔵文化財行政の充実に貢献されてきた。

後に長野県考古学会会長に就任されてからも全県的な視野に立ち、阿久遺跡（原村）や矢出川遺跡（南牧村）などの保存と史跡指定に尽力されたことは、多くの会員が知るところである。

森嶋先生は、戸倉のご自宅を「千曲川水系古代文化研究所」として解放し、考古学を志す多くの若手研究者を育成されてきた。私も友人たちと何度もお邪魔しては、学問や教育の話を情熱的に語る先生に導いていただいた。

先生はいつも私たちを温かく迎え入れてくださり、奥様の心のこもった挽きたてのコーヒーとニラせんべいの味は今でも忘れられない。先生は、その存在感あふれるお姿からも印象付けられるように、既成の枠にはめようとしない独特の「森嶋哲学」ともいうべき見方・考え方をされていたように思う。数多い「森嶋語録」を紐解くと、「研究人、職業人、家庭人として完たるべし。」と悟らされることが多々あったが、先生はまさにその実践者だった。「前向きなんてなまぬるい。前のめりに生きろ。」は、困難に出会った時の私を今でも力強く励ましてくれている。

先生が酒席の閉めには必ずといっていいほど披露されていた、♪花も嵐も踏み越えて行くが男の生きる途、泣いてくれるなほろほろ鳥よ、月の比叡を独り行く……「旅の夜風」のメロディーが、心懐かしい。

（1996年６月16日逝去　享年66歳）

野辺山中ッ原５Ｂ地点で石器を観察する森嶋先生（右は森山公一氏）

「孤掌鳴らし難し　後閉山」

― 武藤　金さんの思い出 ―

林　幸彦

上桜井北遺跡での金さん

後沢遺跡の昼寝

私は自分の不甲斐なさを多くの人たちに助けられ支えられて生きている。武藤さんには数え切れないほど救われている。つくづく私は幸せ者だと思う。

「林君、今夜いいか？　中込へ飲みに行かねえかい？」ついて行った行きつけの蕎麦屋で、先ず第一声「林君、其処へ座れ」正座した私に「皆の思いを伝える。」と言って、遺跡調査団の人々の様々な現場での思いを話してくれた。その間10分間。そして、「さあ、飲まざあ。」自分では、周りの意見や気持ちを理解していたつもりだし、調査の進め方なども全体の理解が得られていたと思っていたので、動揺した。その晩は例によって、私はしとどに飲んだ。

次の日から調査の方法を具体的にし、作業の手順、人の配置、声のかけ方、立ちのタイミング等できるところから改善を試みた。直接私や仲間に言えない希望や不満が、武藤さんというクッションを経由して伝わった。不満やトラブルが大きな膿とならずに、遺跡の調査が進められた大きな要因であった。

遺跡の調査が始まるとどの現場にも真っ先自転車で駆けつけてくれ、薪を燃やし薬缶にお湯を沸かしながら、作業協力者の皆さんにあちこちの遺跡の話しやら発掘用語などを聞かせていてくれた。驚いたのは、どこの地区の現場に行っても、付近の農家のおじさんおばさんと顔見知りの様子で会話をしていることである。おかげで調査団の無礼や粗相が重大事とならずに済んだんだことが多々ある。

「博物館が欲しい」が口癖だった。武藤さんは、埋蔵文化財が市民権を得るために、多くの角度から実践をされた。「戯言」という一文にその思いがこもっている。展示会をやらざあ。と、現場の調査が終わるや否や展示会を催促された。浅間会館や旧中込学校で「佐久の郷土を知ろう」が実現し、訪れた人々ににこやかに嬉しそうに説明されていた。子供たちに文化財に接する機会をと「少年考古学教室」、今年で25回を数えた。武藤さんの思いを継続していきたい。

岸野の石附遺跡、昭和54年武藤さんにお願いし国道254号バイパス予定地内の事前踏査にご同行いただいた。小金平遺跡で縄文前期の土器片を表採し、この遺跡だけかなと話しながら、石附川越しに相浜田んぼが見渡せる急斜面で一服した。斜面の桑畑から武藤さんが須恵器を見つけた。私も数片見つけた。須恵器だけだった。こんな斜面に住居址ではあるまいに。と思った。武藤さんが言った。窯じゃあねえか。昭和56年の早春、佐久地方で最古の須恵器窯址と未だに次なる遺構の検出がない木炭窯址が発見された。

武藤さんが、「このくに拾えた。集落でもあるじゃねえか。」といって、家の離れから弥生の土器片を持ち出した。「あんな斜面にありっこうねえ。」私は思った。」平賀の後家山遺跡、武藤さんが眠る上方で、平成14年70軒の弥生時代後期集落と中期の環濠集落、曲柄装着平鍬と鉄釧と多量のガラス小玉が見つかった。冬季後沢遺跡の調査が一時中断し、腰の痛みやいく末の不安で部屋で悶々としていた時一通の封書が届いた。「林君、孤掌鳴らし難し。後閉山」とだけ書いてあった。山ほどの教えをいただきながら、今の自分を見ると、ネズミ色のコートに黒いナップザックをしょって、胸を張って頭にやっとこ手拭いを引っ掛けた武藤さんに「何やってるんだ。独りよがりじゃ何もできっこねえぞ」と叱咤されるような気がする。

地道な研究の積み重ね

― 三石延雄さんのこと ―

島田恵子

文学青年だった三石延雄氏は、書物や耕作時の畑から出土する土器片や石器を見て考古学に興味をもった。昭和初年のころは考古学に関する書物も少なく、まして発掘調査の情報などは極めて少ない時代でもあった。

その後、青年時代からの夢であった考古学の世界に足を踏み入れることができたのは、59歳になってからである。チャンスというものは、ふとしたきっかけから訪れるものである。

昭和46年１月24日、佐久史談会が野沢会館で開かれた折、たまたま竹内恒氏の隣の席に座り、考古学の話をしたのである。その４ケ月後、思いがけず竹内氏から一本柳古墳の発掘調査への誘いの手紙が届いた。この発掘調査で出会ったのが、武藤金・白倉盛雄・佐藤敏氏、さらに、井上行雄・渡辺重義・土屋長久氏であり、以後、佐久考古学会の仲間としてともに歩んでいくことになったのである。

初めて発掘調査に参加した昭和46年は、八千穂村の池の平遺跡・佐久市西近津遺跡などの調査に加わり、翌年は、北近津遺跡・北一本柳遺跡の調査に積極的に参加した。それ以後は、佐久市をはじめとする町村の発掘調査には常連として参加し、貢献している。また、膝を痛め歩行困難になるまで、地元臼田町の発掘調査では、10を数える遺跡の調査団長を勤められた。

三石延雄氏のお人柄は、後沢遺跡の発掘調査でともに調査をしていた國學院の学生たちが、「噛めば噛むほど味のあるスルメのような人」と表現したがまさに人柄をよくとらえている。いつも一歩さがって静かに全体を見回すという謙虚な態度を持ち合わせていた。また、研究心が強く、発掘調査では土の色の変化や覆土の固さなどを注意深く観察しながら掘り、常に自己に問いかけながら作業をすすめていた。家では弥生時代の赤い土器の実験をしたり、竪穴住居の柱が何年位腐らないでもつかなどの実験もナラの木を土に埋めて試していた。さらに、自分の生まれ育った入沢の地を丹念にくまなく歩いて表面採集を行い、数多くの遺跡・山城などを発見している。

お酒が入ると言葉数も多くなり、おはこの黒田節の踊りが始まるのである。表情豊かにまるで歌舞伎役者のごとく踊るのが特徴でもあった。

肩をくみ皆で歌いしパーティの
　　あの楽しさは今も忘れず
汗にまみれ土にまみれて遺跡掘る
　　若き人らのすがた尊し
（昭和48年、上の城遺跡の調査の思い出から）

70歳を過ぎてから始めた俳句は、文学青年だったころの素地もあって、めきめきとその頭角を現し、たちまちのうちに俳句誌『麦草』の同人となった。主宰者の佐々木春蔵氏は、「飾ったりしない素直な詠みが良い」と評している。

なでしこや縄文の人ら住みし丘
土器片は何を語るか赤のまま
遺跡掘るかたへに零余子ころげをり
掘り終えし遺跡の台地秋深む

下の写真は、『八ヶ岳縄文時代再現』でひげをのばして縄文人に扮装したときのものである。若きころは役者志望でもあったというだけに、豊穣の祈りを捧げる様子は、縄文人そのものになり切っていた。

家族の理解もあり、自分の好きなことを思う存分学べた60代から70代までの生き方は、三石延雄氏にとっては幸せな時であったと思う。

小さなことでもコツコツと実験を通して研究を続けた三石延雄氏の精神は尊い。

井戸尻遺跡収穫祭での三石延雄さん

一本気な親父（ひと）

― 森泉定勝さんのこと ―

堤　　隆

浅間病院の窓から西南を眺めるとそこは北西ノ久保遺跡、お元気になられたらまた発掘現場でお会いしましょうと、私は森泉さんに声をかけ、病室を出た。定勝さんとの会話はこれで最後になってしまった。

森泉さんは「下前田原古墳の発掘に参加してみないかと誘われ、60の手習いとは思ったが以前から考古学に興味があったので」発掘調査にかかわることにしたという。いつか定勝さんに聞いてみたことがあるが、「やはり古墳の調査がいちばん面白い」といっていた。確かに狭い石室内でもいきいきと精査をされていた。

武藤金・三石延雄・井上行雄さんとともに、佐久の発掘現場は森泉さんのお力によって支えられていた。武藤金さんが遠山の金さんならば、さしずめ定勝さんはひげの似合うご老公、発言には威厳があった。一本気で気風（きっぷ）がよく、曲がったことは大嫌いだった。

「和」という意味で、当時の発掘現場をみるとき、そこには家父長制の構図が働いていた。武藤さんや森泉さんといった長老層―木内さんや藤沢先生などの中堅層―林さんたち現場担当の青年層―小山さんや私などの学生層、また実作業に携わるおばさん達がいて、それぞれ悩みや不満、そして希望を抱えていた。森泉さんや武藤さんなど長老がそのさまざまな思いをうまく受けとめて下さっていた。今の発掘現場は、そうした家父長がいなくなり、寂しい限りだ。

私も岩村田に住んでいるので、今でも時々定勝さんの旧宅の前を通り過ぎることがある。クミアイの帽子をかぶり、スーパーカブに乗って現場に駆けつけてきた気風のよい定勝さんを懐かしく思い出したりもする。

（昭和60年７月22日逝去　享年79歳）

周防畑Ｂ遺跡で（左から、森泉、井上、林、大井）

軽トラに機材満載

― 大井今朝太さんのこと ―

堤　　隆

いつも発掘機材に細かな手入れをほどこし、現場には自分の軽トラにその機材を満載して駆けつける。どんなときもニコニコ。そんなことを懐かしく思い出す。

大井今朝太さんが、87歳でご逝去されたのは98年12月、だからもう６年も前のことになる。

私が大井今朝太さんとはじめてあったのは、確か大学１年の時、佐久市周防畑Ｂ遺跡の発掘現場であった。もう四半世紀も前のことだ。現在、この場所は新幹線佐久平駅の北側にあたり、かつての水田風景など想像できないような新興地になってしまった。

今、佐久市の発掘調査がどのように行われているかはまったく知らないが、あの頃はキツイ現場が多かった。周防畑Ｂ遺跡も圃場整備事業の期限に追われ、大井さんも私も泥だらけになって発掘した。それが終わると今度は舞台場遺跡の発掘が待っていた。

昭和57（1982）年１月、寒風吹きすさぶ御代田町宮平の発掘現場では、かじかむ手、凍てついた土を大井さんらしい慎重さで掘り進める様子が印象的だった。

大井さんは、昭和59年、私が就職してはじめて担当し、右も左もわからなかった現場、御代田町野火付遺跡の調査も強力にバックアップしてくださった。大井さんは少し耳が遠かったらしく、いつも話しかけると大きな耳に右手をあて、聞こえやすくして、「ハぁ、そうでヤスか」というのが口癖だった。

おそらく今の発掘は作業員さんを使いビジネスライクに進行しているのだろうが、あの頃は佐久考古学会のおじさんたちというか、元老が現場をまとめていて、考古学会にも活気があった。開発側が少々寝言をいっても、一喝してしまうような威厳を、元老の方々はお持ちだった。

これも今ではありえないのだが、現場のお昼には茶わん酒をよく飲んだ。そして発掘の期限が迫っていたが、酔ったため２時まで昼寝をすることもあった。思えばのんびりともした良き時代であった。そんな中でも大井今朝太さんはまったく酒は飲まない。新聞紙でくるんだアルマイトの弁当箱をとりだし、だまってたべていた。

裏の機材テントには、大井さんによってピカピカに整備された発掘用具がその出番を待っていた。

バイクで現場に かけつけたビンさん

― 佐藤 敏さんの思い出 ―

臼田武正

紺のジャンバーに白ヘルメット姿でバイクを飛ばし、電報配達の傍ら時々発掘現場に立ち寄っては「ご苦労さん。どうだい、出ているかい。」と気軽に声をかけ、発掘に従事している私たちを励ましてくれた佐藤さん。本名「さとし」さんであるが、「ビン」さんの愛称で親しまれていた。

佐藤さんは、佐久考古学会が設立されてまもなく、昭和48年に一時期、自宅に事務局を置いて連絡・会計担当幹事として活躍したことがある。また、長野県考古学会の東信地区幹事を歴任し、県の学会活動との連携役も担っていた。お忙しい仕事の合間をぬって、佐久市を中心とした発掘調査に参加することも多く、当時は小学生だった息子さんを連れ立っては度々発掘現場に顔を出されていたことが思い出される。

創刊してまもなくの『佐久考古通信』冒頭に、佐藤さん執筆による「上州路への紀行」と題する一文が寄せられていたので、改めて拝読してみた。内容は、当時佐久市教育委員会社会教育課に勤め発掘調査を担当していた高村博文会員からの連絡要請により、常田地籍の家地頭古墳から発掘出土した埴輪の比較鑑定のため、群馬県立博物館へ関係者と同行した時の様子が記されている。それによると、出発前日の急な連絡であったが群馬行きの趣旨を聞くや風邪気味の頭痛も吹っ飛んでしまい参加をお願いしたとあり、佐藤さんの研究心の旺盛さを知ることができる。また、記述の大半を吉井町で見学した「多胡碑」の形状や銘文の解釈に当ててあり、文字資料・文献資料の類にも強い関心を持っていたことがうかがえる。

そう言えば、佐藤さんのご自宅に何度も寄せていただいたことがあるが、話題は考古学に関したことから歴史全般と広がり、中でも地元岩村田の吉沢孝謙が著した『四隣譚草』や三塚の瀬下敬忠が著した『千曲之真砂』など江戸時代の歴史書について解説をお聞きすることが多かった。ある時、「臼田君、君の家のご先祖様の中に蘭学を学んで香川周伯と名乗り、今の臼田町で開業していたという医者がいたことを知ってるかい。」と尋ねられ、心当たりがまったくないでいると、「お墓にその人の石塔があるはずだから探してみるといい。」と言われ、早速墓地に出向いて見たら確かにあって、大きな驚きを覚えたことがある。

佐藤さんは、病で長らく自宅療養することになったが、それまでは、野辺山の矢出川遺跡群総合調査や臼田町・佐久町など主に南佐久郡内の発掘調査に精力的に参加され、報告書では歴史的環境に関しての分担執筆もされてきた。歴史研究を通して郷土を愛し続けた博識の佐藤さんから学んだことを大切にし、広い視野から地域の歴史を見直してみたいと思う。

（1997年10月19日逝去　享年69歳）

家地頭１号墳で（後列右端が敏さん）

細田遺跡の調査で

静岡への考古学会研修旅行で

由井 明さん ご逝去

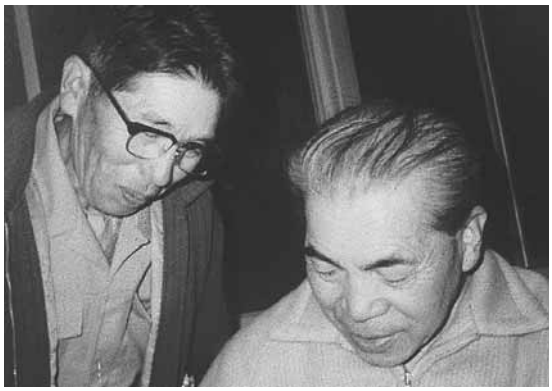
佐久考古学会を長年支えてこられた由井明さんが本年８月16日、92歳でご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

佐久考古学会例会にも小海線に乗って駆けつけられ、佐久の発掘現場でも頼もしい由井さんの姿がみられました。

由井さんは、日本で旧石器時代の遺跡が確認されるはるか昔、大正年間から石器を拾い続けてこられました。小学校の帰り道、同級生から、バッパ（馬場平）に変わった格好をした石がある、細長い石で杣人が削ったような形のものだということを聞いて、拾い始めたということです。そのころは１時間もすると20個程度は拾えたといいます。石器類は学校にもってゆき、学校には石油缶７個分ほども石器があったそうです。

また、由井さんは矢出川南遺跡の細石器なども数多く保管してこられ、佐久地方を代表する石器群として、重要な資料となっています。

佐久地方の旧石器研究に貢献されてきた由井明さん、どうぞ安らかにお眠りください。合掌。



由井明さん（右）と茂也さん（1980年初頭）

静岡清水平で（右端明さん）

新刊『氷河期を生抜いた狩人 矢出川遺跡』堤隆著

『氷河期を生抜いた狩人　矢出川遺跡』が刊行となりました。氷河期の末、細石刃を用いて人々が暮らしていた１万数千年前の矢出川遺跡の物語です。

矢出川の人々が使った細石刃の機能、仕留めた獲物、当時の古環境、移動生活の実態、黒曜石資源やその他石材資源の利用などを、豊富なカラー図版をもとにわかりやすく語っています。

ごらんいただけると嬉しいです。　　（著者より）

新泉社刊　94頁　税抜き価格1,500円

六一書房に電話すると送ってくれます。送料実費。

☎ 03－5281－6161

♪　編集後記　♪

佐久の考古学を支えた先達の皆さんの特集となった。懐かしい方々の現場での顔が浮かぶ。また、訃報をお知らせした由井明さんも佐久の考古学を担ってきたお一人であった。その皆さんが現役の頃は、会の活動にも活気があった。多くの人々が例会に集った。いまでは会の活動も寂しい限りである。

そんな中、由井茂也さんが100歳を迎えられることはまことに喜ばしい。日本でも最高齢の考古学者のお一人だろう。捏造事件など暗い話題が多かったなかで、真の地域研究、考古学研究の何たるかを身をもって教えてくれている。　　（耀石）

佐久考古通信　№90

発行所　佐 久 考 古 学 会

〒384-0091 小諸市御影新田1945－6
桜 井 秀 雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（22）8536

発行者　藤 沢 平 治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク